

## 要旨

本論では、湖州市・磐安县・杭州市・嘉興市・景寧シエ族自治県を中心に、浙江省における茶文化の伝承と変遷を論じてきた。五ヵ所の調査地の中で、湖州市の杼山と長興県の陸羽における茶文化の歴史がもっとも古く、唐代に遡る。これに次ぐのは磐安の茶文化で、磐安古茶場は宋代に建立された。杭州龍井茶の茶文化は、明代から清代中期までの期間に本格的に形成された。嘉興章氏古茶園の歴史は清代中期頃から始まり、景寧シエ族自治県の恵明茶が有名になったのは、中華民国になってからのことである。

筆者は5つの調査地における茶文化の研究を通じて、浙江省各地における茶文化伝承の性格を明らかにした。本論で取り上げる5ヵ所の調査事例は、浙江地域における茶と歴史文化、茶と民間信仰、茶と国家権力、茶と家族社会や茶と民族という5つの方面の茶文化伝承の性格を明白に反映している。

湖州の茶文化伝承は、陸羽と唐王朝と緊密に繋がる。陸羽の推薦で、顧渚山の紫笋茶が唐王朝の「貢茶」に入選された。唐王朝政府はさらに湖州長興で貢茶院を建てた。唐代以降、湖州の茶文化はだんだんと衰退した。しかし改革開放以来、地域民衆の努力を通じて、陸羽文化の復興が実現した。そして、現代湖州で行われる陸羽文化の活用は、湖州の「郷村振興」運動（中国の地方で行われる地域創生運動）に大きな役割を果たした。特に「茶聖」としての陸羽形象が、国の主導によって強化されてきたことが分かった。

磐安における茶文化伝承の歴史が長い。宋代に玉山で古茶場ができてから、茶神許遜信仰と結び現代まで続いた。長い間に、玉山古茶場は様々な変遷があったが、磐安の茶神信仰における茶神許遜祭祀の中心地位が変わらなかった。これこそが磐安の茶文化が復興できる根本的な力である。しかし、地方政府と商社の観光開発や非物質文化遺産に登録された影響を受け、磐安の茶神信仰も変わりつつある。特に「趕茶場」などの茶神祭祀活動は、次々と商品化・観光資源化されてきたことが分かった。

清代の乾隆皇帝によって、龍井茶の名を天下に広めた。現代では、杭州地方政府などの権力者が中央政府の「権力」を利用して、龍井茶文化の影響力をさらに拡大させた。現在、龍井茶は既に中国・杭州の文化象徴となった。地方政府が「権力」を通じて、杭州を「茶都」として構築させた。そして、各種の「権力」の優位性が龍井茶を製造・販売する民衆に利用されてきた。結果として、茶農・茶商の収入が確実に増えた。乾隆皇帝と龍井茶の伝説なども龍井村の龍井茶販売者に、販促対策として利用されている。

嘉興の茶文化は章氏一族と緊密な関係がある。嘉興市は伝統的な茶産地ではない地域、いわゆる「非茶産地」に属する。しかし、章氏一族という地域の名門は嘉興で章氏茶園をつくって、それを300年以上経営してきた。章氏茶園の茶文化研究を通じて、「非茶産地」における庶民の茶栽培・摘採・製作・販売の歴史を明確に呈した。章氏茶園のほか、嘉興徐王廟も嘉興茶文化の重要部分である。嘉興徐王廟の所在地が変わって、徐王廟会も1950年代から断絶した。一方、章氏茶園では2014年から毎年「章氏古茶園茶文化祭」を開催している。都市化の進展に

つれて、章氏茶園が「民俗主義」の素材として政府に利用され、地域文化のシンボルとなっている。

茶は景寧シエ族の歌、婚姻儀礼、祖先祭祀、民間行事などの日常生活に滲んだ。そして、「パナマ万博」で金賞を受賞したことを契機に、景寧シエ族の恵明茶は国際的な名茶となった。現在、政府主導による商業化は、シエ族と恵明茶文化の変革を後押しする主な力となっている。一方、景寧県の茶文化伝承には、畚族の民族アイデンティティーが強く感じる。シエ族における茶文化伝承の性格は、いわゆるブランド化や商品化を通じて、漢民族との共存共栄を実現するということである。

現代社会において、浙江の茶文化伝承には多くの変化と変遷がおきている。浙江省の茶のブランド化と茶文化の資源化も確実に進められている。浙江の茶文化伝承に、政治「権力」の影響は古来からあった。現代浙江の茶文化伝承にも、政治「権力」の影響がある。浙江地域は中国における最も代表的な茶産地である。浙江地域の茶文化研究を通じて、中国における茶文化伝承の状況を把握することができる。中国では、90年代から現在まで、茶文化ブームが盛んでいる。また、政府は「非物質文化遺産」推進運動にも積極的に参入した。政府や商業者はもちろん、民衆も自分の生活レベルを高めるために、国の政策、地方政府的な権力や地域の茶文化の歴史資源などをうまく利用してきた。民衆の参与こそは、中国の茶文化発展にある最も大切な力である。確かに経済利益の他、民衆は茶文化発展に「草木」的なものを反省すべきだと思う。

## 目次

序章 課題と研究方法	1
第1節 研究背景と研究目的	1
第1項 研究背景	1
第2項 「茶文化学」と「民俗学」を結ぶ立場	2
第3項 研究目的	2
第2節 先行研究と問題の所在	2
第1項 先行研究	2
1 中国方面	2
2 日本方面	3
第2項 問題の所在	4
第3節 研究対象と研究方法	5
第1項 調査地選定	5
第2項 研究対象	7
1 茶文化の定義	7
2 浙江地域の茶文化	8
第3項 研究方法	8
1 文献史料による歴史的考察	8
2 口頭伝承や儀礼などから考察	9
3 茶の類別から考察	9
第4節 本論文の構成	9
第1章 陸羽と浙江との関連—杼山、顧渚山の事例から—	11
はじめに	11
第1節 調査対象と調査地選定	11
第1項 調査対象：陸羽	11
第2項 調査地選定	12
1 陸羽墓の所在地：呉興区妙西鎮の杼山	12
2 大唐貢茶院の所在地：長興県水口郷の顧渚山	12
第2節 陸羽と杼山	13
第1項 杼山の発見	13
第2項 「陸羽墓」の真偽と民間祭祀	18
第3項 杼山に居住した陸羽および儒教、仏教、道教との関わり	20
第3節 陸羽と顧渚山	22
第1項 陸羽と顧渚山の貢茶院	22
1 陸羽と顧渚山の貢茶	22
2 貢茶院の構造	22
第2項 大唐貢茶院の復興	26
第3項 大唐貢茶院で行われる年中行事	27
1 唐代顧渚山貢茶院で行われる年中行事	27
2 現代の大唐貢茶院で行われる年中行事	28
第4項 顧渚山における唐代製茶法の復活	30

小結	31
第1項 陸羽の民間信仰について	31
第2項 国の「茶聖」と民間の「茶神」としての陸羽	31
第3項 観光資源化された陸羽の形象	32
第2章 磐安の茶神信仰—玉山古茶場廟の事例から—	33
はじめに	33
第1節 調査対象と調査地選定	33
第1項 調査対象：磐安県の茶神信仰	33
第2項 調査地概況	34
1 磐安県と県内の玉山古茶場廟	34
2 磐安県の茶産業概況	35
第2節 玉山古茶場の紹介	36
第1項 玉山古茶場の建築構造	36
1 茶場廟	36
2 管理用部屋（観音禅院）	36
3 茶場	37
第2項 玉山古茶場の歴史	37
第3項 現代における玉山古茶場の復興	41
第4項 玉山古茶場の機能	41
第3節 玉山古茶場廟で行われる祭事	43
第1項 玉山古茶場廟の祭神許遜	43
第2項 玉山古茶場廟で行われる「春社」と「秋社」	44
第3項 茶神祭祀の様子	44
1 茶神祭祀活動の流れ	44
2 祭文について	46
3 「拝懺」儀式	47
第4節 磐安の茶神信仰の変遷	47
第1項 伝統的な茶神信仰の伝承	47
1 物質の伝承	48
2 口頭の伝承	49
3 儀礼の伝承	50
第2項 現代における茶神信仰の変遷	51
1 茶神信仰主体の変遷	51
2 非物質文化遺産登録以後の茶神信仰の変遷	51
3 商業開発によってもたらされた茶神信仰の変遷	52
小結	53
第3章 茶文化伝承に及ぼす政治的影響—杭州西湖龍井茶の伝承事例から—	54
はじめに	54
第1節 杭州地域における龍井茶の歴史	54
第1項 唐宋時代の龍井茶	54
第2項 元明清時代の龍井茶	55
第3項 近現代の龍井茶	56
第2節 龍井茶の茶具と龍井茶製作法の伝承	58
第1項 龍井茶の特徴	58

第2項	龍井茶の茶具の伝承	59
1	龍井茶を摘採する時に使う茶具	59
2	龍井茶茶葉を干す時に使う茶具	60
3	茶を炒る時に使う茶具	61
4	補助用の茶具	62
5	茶製品を保存する茶具	64
第3項	龍井茶製造の伝承	66
第3節	龍井茶の伝承から見る茶文化と権力との関わり	67
第1項	龍井茶と古代中国の貢茶文化	67
第2項	乾隆皇帝と龍井茶	69
第3項	中央政府によって確立された龍井茶の「優位性」	71
1	「国礼茶」	74
2	「中国十大名茶」	75
第4項	地方政府による杭州を「茶都」とする茶文化の構築	76
1	「杭為茶都」の確立	76
2	「全民飲茶日」から「世界飲茶日」へ	77
第4節	龍井茶の市場価値と龍井茶伝承にあった変化	78
第1項	龍井茶産地の範囲と「経済・権力圏」	78
第2項	茶商・茶農による龍井茶のブランド化とその市場価値	80
1	「廬正浩」：伝統的な中央権力の利用	81
2	「龍冠」：外来資本による新しい権力づくり	82
3	来氏：龍井茶の商法から見る茶農・茶商の政策利用	82
第3項	龍井茶の現代伝承にあった表現	84
1	世界文化遺産に登録された西湖龍井茶産地	84
2	西湖龍井茶と観光産業の結び付き	84
小結		85
第4章	嘉興章氏古茶園をめぐる茶文化伝承の性格	86
はじめに		86
第1節	章氏古茶園の伝統と現状	86
第1項	茶園村の現状	86
第2項	「茶園村」から「茶香坊社区」	88
第3項	章氏古茶園の伝統	89
1	地方文献に見る章氏古茶園	89
2	章氏古茶園の誕生と発展	90
3	章氏家族	92
4	塘匯の「喝早茶（朝茶を飲む）」習俗	94
第2節	章氏古茶園の生産について	95
第1項	「家園茗茶」の栽培、採取、製造、販売、飲用	95
第2項	南洋勸業会の受賞	100
第3節	章氏古茶園をめぐる茶文化祭の役割	102
第1項	徐王廟とその廟会	102
第2項	現代章氏古茶園の茶文化祭	103
第3項	茶文化祭の役割	104
1	地域シンボルとしての章氏古茶園	104

2 非茶産地における茶園民俗の希少性	105
3 茶文化の「飛地」	105
4 血縁から地縁へ	106
5 茶文化の民俗主義	106
小結	107
第5章 シェ族における茶文化伝承の性格と変容—景寧シェ族自治県の「金賞恵明茶」を 中心に—	108
はじめに	108
第1節 景寧シェ族自治県の概況	108
第1項 景寧地域の概況	108
第2項 景寧のシェ族	109
第2節 景寧シェ族の茶俗	111
第1項 茶歌	111
1 茶摘歌	111
2 敬茶歌	113
3 茶女歌	113
第2項 婚姻儀礼における茶俗	114
1 浮屠茶	114
2 茶を飲む時の対歌	115
3 出入りの茶	116
4 新郎の両親に捧げる「糖茶」	116
5 妯娌茶	116
第3項 先祖祭りにおける茶俗	117
第4項 民間行事における茶俗	119
第5項 年中行事「三月三」と茶	120
第3節 金賞恵明茶のブランド化と変化	123
第1項 恵明茶の発展について	123
1 恵明茶の三つの発展段階	123
2 菜園茶：シェ族の伝統的な茶栽培方法	123
3 恵明茶樹王	124
第2項 恵明茶の製造方法	125
1 生葉摘採	125
2 加工技術	125
第3項 恵明茶という名称と金賞獲得の理由	127
1 金賞獲得の恵明茶の出どころについて	127
2 パナマ金賞受賞の実証	127
3 「大褒章」と「金賞」	129
4 名称の決定	129
第4節 景寧シェ族茶文化の性格と変容	130
第1項 景寧シェ族と恵明茶の由来・発展との関係	130
第2項 シェ族における自己価値への認識と帰属意識	131
第3項 恵明茶の発展と漢・シェ族の共存共栄	132
第4項 政府権力と商業開発の影響	133
小結	134

終章 結論と今後の課題	135
第1節 浙江省における茶文化伝承の性格	135
第2節 浙江省における茶のブランド化と茶文化の観光資源化	136
第1項 浙江省における茶のブランド化	136
第2項 浙江省における茶文化の観光資源化	137
第3節 浙江省の茶文化伝承にある政治「権力」の影響	138
第4節 浙江省の茶文化伝承にあった変化と変遷	139
第5節 今後の課題	140
謝辞	141
参考文献	142
日本語文献	142
中国語文献	143
古籍	146
地方誌	147
古文書・宗譜	147
政府内部資料	147
各章の初出及び発表状況	148

## 序章 課題と研究方法

### 第1節 研究背景と研究目的

#### 第1項 研究背景

中国は世界最大の茶生産国であり、インド、スリランカ、ケニア、日本なども中国に次ぐ重要な茶生産国である。International Tea Committee が2018年に行った統計データによると、世界中にある60以上の国及び地域で茶が栽培されている。全世界の茶栽培面積は約490万ヘクタールあり、茶の産出量は585万トンに達する。2020年になると、茶のグローバル消費量は600万トンを超えた。中国は世界で最初に茶を作って飲むようになった国である。16世紀に世界航路が開拓されてから、茶は「海のシルクロード」の重要な貿易品として全世界に伝わり、各国・地域の飲食習慣を大きく変容させた。アジア諸国においては、飲茶や茶を賞味することは日常生活に限らず、個人修養、社交活動や文化鑑賞とも緊密に関わっている。

茶の木自体は、中国西南部の雲南省にあり、その雲南省でも更に南端の、ベトナム人民共和国、ラオス人民共和国、タイ国、さらにミャンマー等々の国々との国境を接する所の山地といわれている[松下 1998: 1]。この山地から長い年月をかけて、茶の木は北上し、湖北省、湖南省西部山地、武陵山から巴蜀（現在の四川省と重慶市）までの山間地に広めた。これらの地域においては、南進する漢文化と接触し、さらに仙薬思想、本草学を含む道教思想を吸収し、茶の木からその葉を利用することに着目することになったと推察する。武陵山を中心とする茶文化が四川省（蜀の国）へ伝えられ、中国茶を代表する蜀の茶に発展したものである。蜀の地の西部はヒマラヤの山地と接するため、そこに住む人達との茶貿易が昔から続いて、現在に至っている[陳 2004: 56]。一方、茶の木は武陵山から湖北省東部、江西省北部、安徽省、江蘇省など長江沿いの山地に伝わり、次第に浙江地域に伝来した。これらの山間地には、早くから茶業の開発があった。とりわけ浙江省にあっては、天目山、天台山などの仏教名山に、茶文化が盛んだった。現在では、浙江地域に中国国立の茶葉研究所（杭州市）が設置され、中国茶文化をリードしている。

浙江地域は地理的に日本との交流が早い。仏教伝来や日中交流の出入口として、浙江「寧波」港は大きな役割を果たした。日本茶の基となった「栄西禪師」も、寧波の港から出入りしており、国清寺天台宗や寧波の天童寺にて臨濟禪を学び、1192年帰朝時に浙江天台山の茶種を招来し、九州の背振山に下種したというのが、日本茶史の始まりとされている[松下 1996: 3-4]。日本茶文化が中国浙江地域と緊密な関係を持っていることは、本論を執筆する重要な動機である。

浙江地域における茶文化の歴史が非常に長い。しかし、現在の中国社会は激しい勢いで変わっている。その中では、茶文化も変化していく。小熊誠は「自省の学としての中国人類学-費孝通と柳田国男の学問的方法」[小熊 2005: 61-76]で、郷土研究は中国農村発展を阻害する問題を解決する方法であると指摘している。筆者は現代中国の現状に応じて、郷土としての浙江省における茶文化を研究することを選んだ。本論では、特定する時代と地域の茶文化を比較して、茶の木、茶商品、政府、民衆と茶文化システムの関連を探って、現代社会における茶文化の伝承と変遷を究明したい。



## 第2項 「茶文化学」と「民俗学」を結ぶ立場

中国茶研究界で、「茶文化学」という概念の提出と展開はこの数十年間のことである。1991年に、余悦は「中国茶文化学」を創る発想を提出した。同年に、王玲も同じ観点を出した。2004年に、江西省社会科学院で「茶文化学」が最初に重点的学科として設立され、陳文華は学科リーダーであった。同年12月に、「中国国際茶文化研究会」が成立した。2006年に、浙江農林大学で「茶文化学院」が最初に設置され、王旭烽は学院長であった。当時筆者は「茶文化学院」の教師として務めていた。2012年4月に、「世界茶文化學術研究会」が日本で設立され、熊倉功夫は初代会長であった。2019年に、姚国坤の『中国茶文化学』が出版された。これで「茶文化学」の地位が確立された。

唐代文人である陸羽の『茶経』から現在の茶研究成果まで、中国茶文化研究にある主体は概ね帝王、官僚、僧侶、文人などの上流階級の人物であって、「民の茶」が注目されていなかった。本論では、筆者は「茶文化学」と「民俗学」を結ぶ立場で、「常民」の茶文化研究を展開していく。

## 第3項 研究目的

本論の研究目的は、以下の五点である。

1 浙江省における茶文化伝承の性格を明らかにする。各調査地の茶文化が形成された唐代、宋代、明清時代、中華民国時代から、現代に至るまで、浙江省各地の民衆における茶文化伝承の性格を明らかにしたい。

2 唐代から現代に至るまで、浙江の茶文化や茶産業が中国において非常に影響力を持つ理由を明らかにしたい。そして、浙江省各地域の茶文化と茶の産業化との関連を探る。

3 最近の中国では、政府が主導する郷村振興事業化促進政策と、非物質文化遺産保護運動が実施されてきた。このような状況の中で、浙江地域の茶文化にはどのような変化と変遷があったのかを明らかにしたい。

4 浙江省各地域の政府は如何に茶文化の歴史資源を利用して、地元の影響力を強めたのかを明らかにしたい。

5 現代社会では、新しい茶文化を構築するために、政府、茶農、茶商、商業者などは何をやったかを調べる。これらの要素分析を通じて、茶文化ブームが中国で続く根本的な理由を明らかにしたい。

## 第2節 先行研究と問題の所在

### 第1項 先行研究

#### 1 中国方面

1981年に陳祖槩と朱自振が編纂した『中国茶葉歴史資料選輯』、1982年に陳椽が編纂した『茶葉通史』、1984年に呉覚民が編纂した『茶葉述評』が出版された。姚国坤らが1992年に著した『中国茶文化』[姚国坤ら 1992]は、中国で最初に「茶文化」という概念を書名に入れた著作である。William F・Ukrsが1935年に『All about tea』を書いた。この本は2012年

に中国語に翻訳され、『茶葉全書』というタイトルを付して中国で出版された。これらの先行研究資料は、中国茶文化史の基本的な概況をまとめた重要な文献である。

茶樹のラテン語名は *Camellia sinensis* である。中国は茶の故郷であると認められる。最初の茶樹は雲南、貴州、四川などの中国西南地域で成長していた。その後は浙江地域に普及した。最初の飲茶法は新鮮な茶葉を煎じて飲む方式であった。漢代から唐代の間に、加工した茶葉を煎じて飲むようになった。そして、唐代（618-907）には加工した茶葉を「餅茶」にするようになった。唐代の飲茶法は「餅茶」から茶葉を取って焙して引き砕いたら煎じて飲む方式であった。明代から茶葉を餅形にしないようになった。それ以降の飲茶法は加工した茶葉を道具に入れて、湯で煎じて飲む方式であった。

21世紀以来、茶に関する文献資料、発掘された古い茶具などの茶文化研究の成果が多く出た。しかし、これらは概ね歴史学や考古学の研究著作であった。また、周星は嘗て「中国茶文化に関する研究資料の多くは、文人式な描写や感性的な体験である」と言った。文学作品であるか、学術研究であるか、それを区分することが難しい。その他、茶文化誌、或いはそれと類似する研究資料も多く出た。例えば、『中国地方誌茶葉歴史資料選輯』[呉 1990]、『浙江省茶葉誌』[阮 2005]、『浙江通誌・茶葉專誌』[阮 2020]。これらの著作には、浙江省における茶文化研究に必要な資料が多くある。

最近では人類学、民俗学、社会学の立場から茶文化研究の著作も幾つかあった。王笛は四川省成都市のコミュニティーに集中して、『街頭文化—成都公共空間、下層民衆与地方政治（1870-1930）』[王 2003]や『茶館—成都的公共生活和微觀世界（1900-1950）』[王 2010]を著した。張静紅は雲南省普洱茶産地における人類学研究に従事して、「本真性的多元化視角：普洱茶在雲南和其他地方的消費研究」[張 2013]や「重構的「正宗性」：雲南普洱茶跨時空的「風土」」[張 2016]を書いた。特に彼女はフランスワイン特有の地理標識概念である「風土」と比較して、雲南普洱茶の「風土」標準の形成を分析した。彼女は台湾地域の茶芸にも注目して、「流動、聚合与区隔：台湾茶芸發展中的矛盾和動力」[張 2016]を書いた。肖坤冰は福建武夷山地域を中心として調査を行って、『茶葉的流動：閩北山区的物質、空間与歴史叙事（1644-1949）』[肖 2013]や「帝国、晋商与茶葉—十九世紀中葉前武夷茶葉在俄伝播過程」[肖 2009]を書いた。肖坤冰の武夷茶研究は海外市場、茶に関する儀礼、国家権力やグループ間の利益などの多重的な要素について触れている。

## 2 日本方面

日本においては、茶文化の先行研究資料として、柴西の『喫茶養生記』が最も知られている。岡倉天心が1906年に書いた『茶の本』[岡倉 1988]では、茶の審美に関する日中比較を行った。柳宗悦は民芸の立場で日本茶を鑑賞して、『茶と美』[柳 1942]を著した。中国文学者の青木正児は、多くの茶に関する中国古典を日本に紹介した。東洋史学者の布目潮瀨は日本で中国茶文化史研究を行う第一人者である。彼は『中国喫茶文化史』[布目 1998]や『「茶経」詳解』[布目 2001]などの著作を書いて、中国茶書の注解や中国飲茶文化の起源と発展を解明した。他には、高橋忠彦は『茶具図贊』[高橋 1998]などを通じて、中国茶書の研究を進めた。

熊倉功夫も茶文化研究の代表的な人物である。彼は日本文化史の視角から茶道研究を行って、

日本茶道の整理や反省をして、『近代茶道史の研究』[熊倉 1980]を書いた。熊倉功夫を代表する日本茶研究界は、姚国坤を代表する中国茶研究界とも頻りに共同研究を行って、『陸羽「茶経」研究』[関・中村 2014]や『栄西「喫茶養生記」研究』[関・中村 2020]など共同で著作を出版した。これらの日本方面の茶文化研究を通じて、日本学者の考えを理解することができる。これこそ本論の参考になるものである。

松下智は日本の茶研究はもちろん、中国、インドなど異国の茶研究の成果も多くある。例えば「北部インドの茶業技術について」[松下 1971]、『中国の茶：その種類と特性』[松下 1986]、『茶の民族誌：製茶文化の源流』[松下 1998]など。特に『茶の民族誌：製茶文化の源流』に浙江省景寧シエ族自治県の茶文化が紹介され、本論に重要な参考資料となる。

中村羊一郎は人類学や民俗学の視点で茶文化研究を行って、『茶の民俗学』[中村 1992]、『番茶と日本人』[中村 1998]、「東南アジアにおける庶民の茶文化—番茶・食茶文化論」[中村 2006]、『番茶と庶民喫茶史』[中村 2015]などの成果を出した。彼は「抹茶」「煎茶」などの茶道文化を避けて、日本民衆の茶、いわゆる「番茶」に注目して庶民生活にある茶文化をまとめた。特に中村は日本、中国、東南アジア諸国及び各民族の比較研究を行って、「番茶」文化の伝承と変遷を論じた。中国においては、「番茶」文化の先行研究はない。本論は中村羊一郎の番茶研究を踏まえて、中国民衆の茶文化研究を進めて行きたい。

他には、西村昌也が編集した『東アジアの飲茶文化と茶業』[西村 2011]に、沖縄、ベトナムにおける茶文化に関する研究論文がある。東アジアの茶文化研究について、元比較民俗研究会会長である佐野賢治は「日本学者の「照葉樹林文化論」を注意すべき」と指摘している。佐々木高明の『照葉樹林文化とは何か—東アジアの森が生み出した文明』[佐々木 1921]を参照すると、日本や中国南方の浙江地域、雲南地域、四川地域はまさに照葉樹林文化地帯にある。本論では、これらの茶文化の地域研究と比較・分析して、照葉樹林文化地帯にある浙江地域における茶文化の伝承と変遷を解明する。

## 第2項 問題の所在

前述した先行研究のように、中国の茶文化研究は茶に関する中国古典に依存しすぎる。これらの古典に書かれる内容は概ね権力者、文人、僧侶、商人などのエリートの趣味の反映であって、民衆の茶文化とは言えない。最近では社会学や人類学の方法で、浙江地域における茶文化の民俗学研究はまだない。そして、中国における従来の茶文化民俗研究は、概ね茶の歴史の真实性を証明するように使われてきた。現代民衆が茶の栽培・摘採・製作・販売に従事する日常生活、茶産業に使われる民具、茶神祭祀活動や茶と関連する年中行事などがあまり注目されていない。

簡潔にまとめるならば、中国の茶文化研究は現地調査が足りない。茶の歴史に関する研究が圧倒的に多く、現代における茶文化の研究が少ない。そして、庶民の日常生活にある茶文化の研究も欠けている。中国と海外との茶文化の比較研究もまだまだ足りない。筆者は浙江省における茶文化を日本などの海外地域と比較して、浙江民衆の日常生活にある茶民俗文化の実態を究明していきたい。

浙江省は中国における経済が最前線の地域の1つである。そこでは、茶のブランド化と茶文化の資源化も確実に進められている。浙江地域における茶のブランド化と茶文化の資源化が如

何に実現されてきたのか。その過程を経て、地域民衆が何を得たか。そして、何を失ったのかを明らかにしたい。

### 第3節 研究対象と研究方法

#### 第1項 調査地選定

本論文の研究対象は浙江省の茶文化である（図0-1）。浙江省にある湖州市の杼山と長興県の水口、磐安県の玉山、杭州市の西湖龍井茶産区、嘉興市の塘匯、景寧シエ族自治県の五ヶ所の調査地を選定している。五ヶ所の調査地の中で、湖州市の杼山と長興県の陸羽における茶文化の歴史がもっとも古く、唐代に遡る。これに次ぐのは磐安の茶文化で、磐安古茶場は宋代に建立された。杭州龍井茶の茶文化は、明代から清代中期までの期間に本格的に形成された。嘉興章氏古茶園の歴史は清代中期頃から始まり、景寧シエ族自治県の恵明茶が有名になったのは、中華民国になってからのことである。この五ヶ所の調査地は茶文化の歴史がそれぞれ異なり、まさに浙江省における茶文化の伝承と変遷を研究する最適な地点である。

調査地の範囲は以下の通りである。

- 1 湖州呉興区、長興県水口郷：杼山陸羽墓、水口にある大唐貢茶院及び周辺の茶産地。
- 2 磐安県玉山鎮：磐安県内にある馬塘村古茶場及び茶場山。
- 3 杭州西湖龍井茶産区：梅家塢村、龍井村、龍塢鎮を含む西湖区龍井茶産地。
- 4 嘉興塘匯街道：南湖区塘匯街道にある章氏古茶園及び周辺のコミュニティ。
- 5 景寧畬族自治県：県内にある恵明寺村、勅木山村、金丘村、坑頭村、滌頭村。

（図0-2）のように、本論で取り上げる五ヶ所の調査地は浙江省の各地にある。



図0-1 調査範囲：中国浙江省  
(筆者作成)

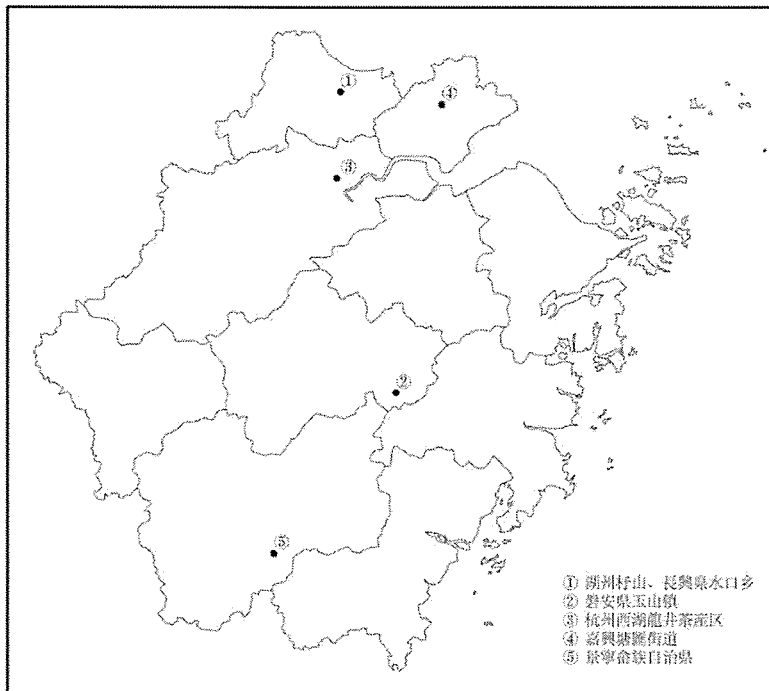


図0-2 浙江省にある調査地の分布  
(筆者作成)



## 2 浙江地域の茶文化

中国においては、浙江地域は非常に重要な茶の産地である。気候、地理などの有利な条件があるため、浙江の茶産業が昔から盛んでいる。唐代から宋代、明清時代、中華民国時代を経て、現代に至るまで形成された浙江茶文化は、民衆の日常生活に大きな影響を与えた。近代以来、千年以上伝承続いた浙江茶文化は一時衰退したが、改革開放から復興することが出来た。現代において、浙江省の商業が急速に進んで、浙江の茶文化や茶産業の影響力もより一層大きくなった[阮 2020: 15]。

現代浙江地域では、茶は物質としての茶製品、非物質としての茶文化や「郷村振興」運動などに使われる。本論では、五ヵ所の調査地域の民衆は如何に伝統的な製茶技術、製茶道具、祭祀儀礼などを守りながら、新しいものを創り出したのかを論ずる。また、各調査地の茶文化伝承にある政府の力の影響や、観光開発事業の推進や非物質文化遺産に登録された事件によってもたされた茶文化伝承の変化と変遷も総合的に分析する。

表 0-1 各調査地の研究対象および研究のポイント

目次	調査地	調査地にある研究対象の代表	各調査地の研究対象が始まった時期	研究のポイント
第1章	湖州杼山 長興県水口郷	陸羽墓 大唐貢茶院	唐代	歴史文化
第2章	磐安県玉山鎮	玉山古茶場	宋代	民間信仰
第3章	杭州西湖	西湖龍井茶	明清時代	国家権力
第4章	嘉興塘匯	章氏古茶園	清代中、末期	家族社会
第5章	景寧畬族自治县	金賞恵明茶	中華民国時代	民族

(筆者作成)

表 0-1 のように、本論で取り上げる五ヵ所の調査事例の研究対象は、茶と歴史文化、茶と民間信仰、茶と国家権力、茶と家族社会や茶と民族である。これらの対象分析を通じて、浙江地域における茶文化伝承の特徴や、浙江省各地における茶文化伝承の性格を全面的に解明していく。

## 第3項 研究方法

### 1 文献史料による歴史的考察

浙江の地方誌及び族譜などに、茶に関する内容が多くある。それらの収集・整理する作業を

行う。資料分析を通じて、浙江における茶文化伝承の歴史的な流れを明らかにする。

## 2 口頭伝承や儀礼などから考察

浙江省各地での現地調査とフィールドワークを実施する。インタビューを通じて、住民たちから口頭伝承されてきた茶の伝説や昔の茶製作方法などを記録する。地域住民の日常生活の中で形成された茶に関する経験、考え方、価値観などを詳しく調べる。茶の栽培、摘採、製造、販売、飲用などを行うときに行われる行事の内容を記録する。このような口頭伝承の資料を利用して、浙江における茶文化伝承にあった変化と変遷を判明していく。

## 3 茶の類別から考察

本論に取り上げる五ヶ所の調査事例では、茶を紫笋茶、磐安云峰茶、西湖龍井茶、家園茗茶、惠明茶などに分類されている。それぞれの茶文化が形成された歴史・文化の整理によって、各種類の茶伝承の特徴を把握する。そして、各地域・各種類の茶文化の比較を通じて、浙江各地における茶文化伝承の性格を明らかにする。

## 第4節 本論文の構成

本論は「序章」から「終章」まで、7章で構成されている。

### 第1章 陸羽と浙江の関連—杼山、顧渚山の事例から—

第1章は陸羽と浙江のつながりを検討している。陸羽は中国茶文化発展の歴史において非常に重要な人物である。彼が書いた『茶経』は世界最古の茶についての著作である。彼が文人からは「茶仙」、国からは「茶聖」、民間からは「茶神」と呼ばれる。浙江の杼山や顧渚山は、陸羽が長期間にわたって活動していた要所である。筆者は杼山にある陸羽墓や顧渚山の大唐貢茶院を中心に、調査を行った。その結果、断絶していた陸羽祭祀や陸羽信仰が、杼山および顧渚山両地域共に復活したことが分かった。『茶経』に書かれる「煎茶法」や「団茶」の製造技術も両地域で再現された。現代では、昔と全く異なる新しい陸羽形象が構築された。

### 第2章 磐安の茶神信仰—玉山古茶場廟の事例から—

第2章は玉山古茶場廟を中心に、磐安の茶神信仰を研究している。浙江省においては、幾つかの茶神信仰がある。湖州地域では、陸羽が茶神として祀られている。天台地域では、道教の人物である葛玄が茶神として祀られている。浙江省金華市磐安县においては、道教の人物である許遜が茶神として祀られている。特に磐安县の茶神許遜信仰は千年以上の伝統承があり、中国における最も長い茶神信仰と言える。南宋時期に、玉山古茶場は王朝政府により、茶貿易の専用場所（「榷茶」と呼ぶ）に指定され、玉山古茶場廟もこの時期にできた。それからは茶神許遜の祭祀活動も始まった。宋代から現代まで、磐安の茶神信仰伝承に様々な変化と変遷があった。現代では、玉山古茶場廟で「春社」「秋社」などの茶神祭祀活動が定期的に行われている。それは史料や老人の話を参考にして復元したものである。そして2008年に、玉山古茶場廟の茶神信仰中の廟会「趕茶場」祭祀活動が中国非物質文化遺産に登録された。この影響を受け、磐安の茶神信仰が大きく変わった。



### 第3章 茶文化伝承に及ぼす政治的影響—杭州西湖龍井茶の伝承事例から—

第3章は中国で最も有名な杭州西湖龍井茶の伝承事例から、茶文化伝承における政府の影響を検討している。具体的な調査地は梅家塢村、龍井村である。筆者は龍井茶の歴史、龍井茶の茶具、龍井茶の製造方法、龍井茶についての伝説、龍井茶を栽培・製造・販売する茶農・茶商の状況や政府の龍井茶政策などを通じて、杭州西湖龍井茶伝承にある「権力」的な要素の影響を分析した。

中央権力方面、杭州西湖龍井茶は清代の乾隆皇帝と大切な関係がある。中華人民共和国の歴代指導者も龍井茶を重視している。地方権力方面、杭州地方政府が中央政府の「権力」を利用して、龍井茶文化の構築や龍井茶産業の発展を積極的に推進して、龍井茶文化の影響力をさらに拡大させた。「権力」の影響を受け、龍井茶の茶文化伝承には多くの変化がおきている。龍井茶を製造・販売する民衆は各種の「権力」の優位性を利用して、出来る限り多くの利益を得た。しかし、その過程で新しい問題も多く出た。

### 第4章 嘉興章氏古茶園をめぐる茶文化伝承の性格

第4章は嘉興章氏古茶園をめぐる、茶文化伝承の性格を探っている。嘉興市は浙江地域にある唯一のほほ茶を産出しない地域である。しかし、嘉興市の南湖区にある「塘匯」という町には、300年余りの歴史を持つ章氏古茶園がある。茶園はその面積と生産量があまりにも少ないため、等閑視されるが、「非茶産地」の特別な事例として、その歴史と民俗的、社会的意義が非常に豊かで興味深いものである。本章では、歴史文献と聞き取り調査で得られたデータを利用して、章氏古茶園の歴史と現状を明らかにした。章氏古茶園の起源と興廃は茶園村の村民、特に章氏家族にとって、重要な生活の記憶と一族の歴史である。現在、政府の介入により、地域文化のシンボルとなり、農村振興、観光資源及び地域社会の文化構築に新たな意味を与えている。農村社会が激変している今、この古茶園の変化を通じて、人間の最も基本的な生活共同体である村落の変遷を改めて観察・考察することができたのである。

### 第5章 シェ族における茶文化伝承の性格と変容—景寧シェ族自治県の「金賞恵明茶」を中心に—

第5章は「金賞恵明茶」を中心に、景寧シェ族自治県における茶文化伝承の性格と変容を研究している。景寧県は、中国における唯一のシェ族（畚族）自治県や浙江省にある唯一の少数民族自治県である。茶葉は景寧の名産品の中で重要な位置を占めている。1915年のパナマ万国博覧会において、景寧地域産出の恵明茶が最高位の金賞を受賞した。それ以降、恵明茶は「金賞恵明茶」と呼ばれるようになった。恵明茶の由来・発展は景寧シェ族と重要な関係を持っている。景寧シェ族の歌、婚姻儀礼、祖先祭祀、民間行事などに、様々な茶の習俗が包含されている。調査を通じて、景寧シェ族の恵明茶金賞に対する思いは漢民族とは異なることが分かった。現在、政府主導による商業化は、シェ族と恵明茶文化の変革を後押しする主な力となっている。これはまた景寧シェ族の茶文化伝承に新たな一面を加えている。

本論は以上に示された方法によって、浙江民衆と関わる茶文化について検討する。

## 第1章 陸羽と浙江との関連—杼山、顧渚山の事例から—

### はじめに

陸羽は中国茶文化発展史において、非常に重要な人物である。彼が書いた『茶経』は世界最古の茶についての著作である。陸羽は生涯に中国江南地域の多くの場所を訪れた。この中で浙江の杼山や顧渚山は、陸羽が長期間にわたって活動していた大切な地である。杼山は陸羽の居住地や死後に埋葬された場所である。顧渚山は茶研究を行う上で、重要な調査地である。陸羽と浙江との関連を研究することにおいて、この二つの地域を避けることはできない。

陸羽及び『茶経』については、日中の茶文化研究者たちが多くの成果を発表している。筆者は従来の研究において、湖州長興県水口郷、呉興区の妙峰山や杼山に、三つの陸羽の「道場」があることについて、未だに解明されていない点があることに気づいた。近年から、三つの陸羽の「道場」で、陸羽祭祀が行われるようになった。それは何故なのか。

陸羽は文人からは「茶仙」、国からは「茶聖」、民間からは「茶神」と呼ばれるようになった。現代に行われる陸羽祭祀において、陸羽はどのような存在として祀られ、また地元住民にどれほどの影響を与えているのか。それらの点を明確にすべく、筆者は杼山にある陸羽墓や、顧渚山の大唐貢茶院を中心に調査を行った。

### 第1節 調査対象と調査地選定

#### 第1項 調査対象：陸羽

陸羽（733-804）、字は鴻漸（季疵とも言う）、号は「桑苧翁」と称した。出身地は復州竟陵<sup>1</sup>である。陸羽については、『新唐書』巻百九十六「列伝」・百二十一「隱逸」の節に「陸羽伝」がある。また、唐代の学者李肇の『唐国史補』と趙璘の『因話録』、宋代の『太平広記』にも陸羽について書かれている。元代の文人である辛文房が撰した『唐才子伝』（唐代と五代の詩人たちの評伝）に、詩人としての陸羽の伝記がある。他にも『茶経』に関する研究を上梓した学者は多い。日本においては、中国文学者の青木正児や、『茶経』博士と呼ばれた東洋史学者の布目潮風などが、茶文化や歴史研究の代表的人物である。

陸羽の自伝である『陸文学自伝』によれば、陸羽は捨児であり、竜蓋寺の僧侶に拾われ、子供時代を寺院で過ごしたとされる。その後、彼はある劇団に入ったが、陸羽十四歳のとき竟陵太守である李齊物が、彼の才能を認め資金援助し、学問の道に進ませた。二十歳になると竟陵司馬である崔国輔からも、多くの支援を受けた。そのため、成年後の陸羽は詩文や茶道にも精通している。天宝十四（755）年に起きた「安史の乱」を避け、当時二十四歳の陸羽は長江を渡り湖州に着いた。湖州では、陸羽は高齢の僧侶である皎然と忘年の交わりとなり、大暦十年（775）から湖州に建てた「青塘別業」で定住した。彼はよく山の奥に入り泉水を訪ね、茶について思索した。また、知り合いの僧侶、詩人、芸術家などとも常に集まり、作詩、飲茶をした。

<sup>1</sup> 現在の湖北省天門市である。

湖州に移住してから、陸羽は浙江の紹興、杭州、江蘇の蘇州、無錫、宜興、丹陽、南京、江西の上饒、湖南の長沙、広東の広州などの地を訪ね、茶についての調査・研究を行った。これらの場所は、概ね長江の中・下流地域の茶の産地である。陸羽は湖州で過ごした時期が最も長く、湖州の茶の産地に関して最も詳しい。彼は湖州にある弁山、西塞山、杼山、長興顧渚山及び安吉、武康の山地で悉皆調査を行った。上元二年（761）に、当時二十九歳の陸羽は『陸文学自伝』を著した。その中には「茶経三卷」について書かれ、『茶経』のできた時期はその前頃のことは必ずである。『茶経』が世に広がると、すぐに大人気の書物となり、その後、陸羽は『茶経』の修正・補足作業を行った。2013年に行われた茶研究界の討論会で、湖州は『茶経』誕生の地であるとされた[李 2013: 38]。

## 第2項 調査地選定

具体的な調査地は二つある。一つは呉興区妙西鎮の杼山にある陸羽墓である。もう一つは長興県水口郷にある大唐貢茶院である。この二つの場所は、陸羽と深く関連する。

### 1 陸羽墓の所在地：呉興区妙西鎮の杼山

妙西鎮は浙江省湖州市呉興区の西部にあり、2019年の住民数は16372人である。2011年のデータでは、妙西鎮の農業総生産額は2.3億元、工業総生産額は12.2億元、商業貿易総生産額は13億元である。茶産業を含めた農業の妙西鎮経済に占める割合は少ない。

杼山は妙西鎮の西南部にある。陸羽が最初に湖州に来た頃は、杼山の妙喜寺に住んでいた。大暦八年（773）に、当時湖州刺史を務めていた顔真卿（709-785）は、陸羽、皎然などの文士を集めて、『韻海鏡源』の編纂作業を始めた。顔真卿は陸羽のために、同年（癸の年）の癸の月、癸の日に杼山に「三癸亭」を建てた。これらの文人たちは杼山で頻りに飲茶、飲酒の会を行い、交流を深めた。貞元二十年（804）に71歳のとき、陸羽は湖州で亡くなった。彼の遺体は杼山に埋葬されたが、それ以降、杼山の地名が次第に忘れられ、ついに所在不明となった。しかし1990年代に、杼山の所在地が判明してから、「杼山」の地名が復活し、現在は杼山公園があって、その中に新しく造った「三癸亭」、「陸羽墓」や「皎然塔」がある。

### 2 大唐貢茶院の所在地：長興県水口郷の顧渚山

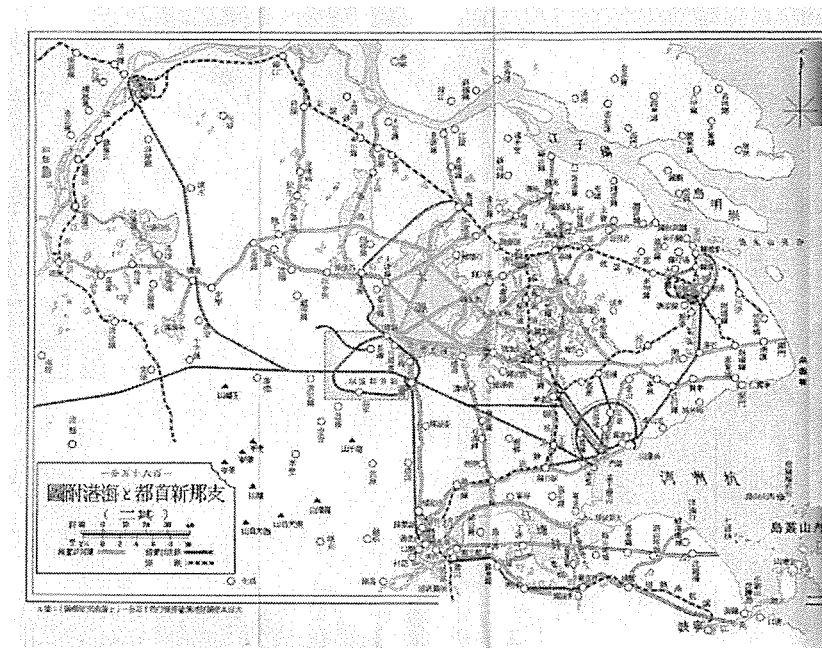
中国名山の一つである顧渚山は湖州市長興県水口郷に位置して、東は太湖に面し、西北は江蘇省無錫の宜興市と接している。顧渚山は湿潤な気候で、土壌の質が良いため、茶樹栽培の理想的な地となっている。その他には、1939年代に大谷光瑞の『中華民国新首都と海港』が作った地図に、長興県水口地域が「支那新首都」と明記されている（地図 1-1）。

陸羽はかつて顧渚山で茶園を造り、『顧渚山記』を書いた。唐王朝の大唐貢茶院も顧渚山に設置されていた。そして顧渚山には、唐代の石刻が八つ残っている。現在の顧渚山は観光地化され、「大唐貢茶院」「霸王潭」「寿聖寺」「虎頭岩」「斫射」の、五つの部分に分けられる。

水口地域には7世紀に、既に「草市」（茶貿易の市場）があった。長興の紫笋茶が進貢する貢茶となってから、水口は重要な港となった。唐代の詩人である杜牧が、湖州刺史を務めていた時期に、水口の景色を見て、「入茶山下題水口草市絶句」という詩を書いた。その中には「溪

流の傍に高い樹が多くあって、酒店の小楼に掛けた旗に、酒の美味しさを誇る字が書かれている」<sup>2</sup>の句がある。大唐貢茶院の所在地は、顧渚山の麓にある水口郷の顧渚村である。

茶産業は水口郷の伝統的な産業である。2011年の水口郷の農業総生産額は2.2億元、工業総生産額は14.4億元、商業貿易総生産額は10億元である。妙西鎮と同じく、茶産業を含めて、農業の水口郷経済に占める割合は少ない。観光開発によって、「農家楽」<sup>3</sup>人気になった。2017年から新型コロナウイルス感染症流行が始まった2019年まで、水口郷を訪れる観光客数は毎年315万人を超えた。2019年の水口郷住民数は19294人であるが、水口郷内の「農家楽」は500軒を超えている。



地図 1-1 支那新首都と海港附図

(出典：大谷光瑞 1939『中華民国新首都と海港』大乗社 に所収)

## 第2節 陸羽と杼山

### 第1項 杼山の発見

1984年4月、静岡県島田市中国訪問団の一員であった温湯紹幸氏は湖州を訪れ、陸羽が居住していた杼山を見るつもりであったが、当時「杼山」の地名は既に消えており、その所在地を知る湖州住民はいなかった。1988年6月に、日本の小川煎茶第六代目家元である小川後楽氏は、陸羽の足跡を辿るために湖州を訪れ、妙西郷(現妙西鎮)宝積山などの場所を訪ねた。しかし、彼は「杼山」の所在地を見つけることができなかった。同年9月に、千家の執事を務める多田光里は宝積山に登り、杼山を発見したと報告し、その後の『読売新聞』にも、杼山が発見されたニュースが掲載され、日本の茶道界を騒がせた。

杼山の発見は妙西郷住民にも大きな影響をもたらした。徐根法氏をはじめ、郷土の歴史に感

<sup>2</sup> 原文は「倚溪旁嶺多高樹，誇酒書旗有小樓」である。

<sup>3</sup> 農村地域の家族で経営する飲食店。

心を持つ村民たちは、杼山の歴史研究に力を尽くした。筆者は徐根法氏に聞き取り調査を行ったが、彼は杼山の歴史について、「唐代の杼山にかつては妙喜寺があって、皎然は寺の住持であった。宋代になると、「妙喜寺」は「宝積禅院」に改称された。「宝積禅院」の「宝積」は、いわゆる『宝積経』のことである。寺名改称の影響を受け、杼山も「宝積山」と呼ばれるようになった。そして、「杼山」の地名は次第に忘れられた存在となっていった。湖州の方言では、宝積山は「宝金山」<sup>4</sup>と呼ばれる」と述べた。

杼山が宝積山であることはただの推測ではなく、それを証明する史料がある。徐根法氏は湖州市博物館で、顔真卿が撰した「杼山妙喜寺碑銘」の拓本を見つけた[劉・嵇 2020: 74]。「湖州城の西南にある杼山の陽面に妙喜寺があり、(中略)杼山の高さは三百尺で、周の長さは一十二百歩である。」<sup>5</sup>杼山の高さや周囲の長さの記述は、現在の宝積山と一致する。杼山は宝積山であると考えて間違いないだろう。杼山の自然環境は清らかで、交通の便も比較的よい。陸羽は杼山で隠遁しながら、親友たちとは頻りに交流していた。そして、杼山で『茶経』を書いたのではないだろうか。

1990年に、地域住民集会を通じて、「杼山」の地名を復活させることになった。1992年10月に、杼山の東南面に「三癸亭」が建設され(写真1-1)、傍には「三癸亭捐款名(募金明細)碑」(写真1-2)が建てられている。同碑の献金者名リスト(表1-1)には、700人を超える妙西村民の名が刻まれている。個人単位で献金する金額は100元から1000元まで、グループ単位で献金する金額は100元から2000元までと様々である。妙西郷文化センターがこの募金活動を始めると、妙西村にあるほとんどの家庭や会社が、自発的に献金を行った。その結果、総額35500元が集まった。当時の湖州では、この金額で高級マンションを買うことができた。



写真1-1 三癸亭完成の際の記念  
(1992年10月 徐根法氏撮影)

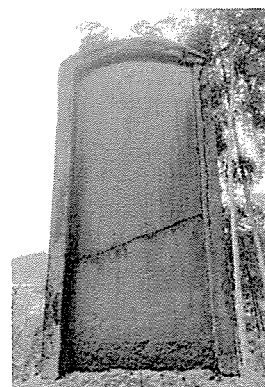


写真1-2 三癸亭建設事業募金明細の碑  
(2022年5月15日 筆者撮影)

<sup>4</sup> 中国語の「積」と「金」の発音が近い。

<sup>5</sup> 原文:州西南杼山之陽有妙喜寺者,(中略)山高三百尺,周回一千二百歩。

表 1-1 三癸亭建設事業献金者明細リスト

個人献金		グループ献金		総金額 (元)	募金先	募金担当者
金額 (元)	人数	金額 (元)	グループ名			
100	119	100	電影(映画)隊	35500	妙西郷 文化セ ンター	瀋虎卿 瀋玉泉 施連華 潘柏寿 楊安如 徐根法 施永華
200	15	200	妙西口社、農機械工場、黄沙 場、康復(療養)院			
300	5	300	商業管理会			
400	1	400	供銷社			
500	1	500	中学石鋳、紡織場、信用社(金 庫)、農電場			
600	3	1000	衛生院(病院)、渡善石鋳、 新生石鋳、建築会社、ガラス 工場、白雲鋳			
700	3	2000	塔山石料工場			
1000	2					

備考: 募金を三癸亭、「杼山」碑及び道路整備に使用する。建築デザイナーは袁金夫である。

(筆者作成)

三癸亭の建設が始まる前に、徐根法氏は歴史地理学研究の大家である陳橋驛氏に依頼して、「杼山」の二文字を揮毫してもらった。1990年10月に「杼山」の地名使用の許可が、潮州市地名委員会に承認された後に、徐根法氏らは「杼山」の碑(写真1-3)を建てた。そして、顔真卿が三癸亭を建てた1200年後の、癸の年の癸の月の癸の日、1993年11月18日に、杼山の住民たちは新しくできた三癸亭の前で記念祭を行った。その際に、毎年11月18日を杼山の「陸羽記念日」にすることが決定された。この記念日は現在まで続いている。



写真 1-3 陳橋驛氏(左2)が揮毫した「杼山」の碑

(1990年10月14日 徐根法撮影)

杼山復興のために、徐根法氏らはその後も妙西郷で数回の募金活動を行って、多くの資金を集めた。その資金を用いて、1995年に「陸羽墓」（写真1-4）と「皎然塔」（写真1-5）を建て、同年10月には「陸羽墓」の隣に「陸羽茶文化陳列室」が完成した。さらに1996年1月8日に杭州市文物局で、「‘96陸羽『茶経』故里—湖州杼山旅游（観光）文化検討会」を開いた。翌日に陳橋驛氏などのシンポジウム参加者たちは、杼山を訪れ現地調査を行った（写真1-6）。杼山の住民は獅子舞や「走花船」などの民俗芸能を披露して、参加者たちを歓迎した（写真1-7）。この活動は、社会に良い反響をもたらした。

（表1-2）のように、杼山復興事業が一九九〇年代から始まった。その中枢には杼山民衆がいた。これと同時に、湖州市政府は杼山近くの妙峰山に、陸羽茶文化テーマパークを建設した。このテーマパークにも、「三癸亭」「陸羽墓」「皎然塔」が建てられた。2021年になってから、地方政府は杼山の観光開発にも多く関与し、「陸羽墓」以外の建築物が概ね再建された。妙喜寺遺跡地では、妙喜寺を建てる計画も検討されている。翌年に新しい妙喜寺が完成した。



写真1-4 1995年「陸羽墓」が完成  
（1995年6月 徐根法氏撮影）



写真1-5 1995年「皎然塔」が完成  
（1995年6月 徐根法氏撮影）



写真1-6 「‘96陸羽『茶経』故里—湖州杼山旅游（観光）文化検討会」の参加者たちと杼山住民たち  
（1996年1月9日 徐根法氏撮影）



写真1-7 「走花船」  
（1996年1月8日 徐根法氏撮影）

表 1-2 杼山の発見と杼山復興の経緯

	現代杼山陸羽文化事件記	関係者
1984年4月	温湯紹幸は湖州に来て杼山を探したが発見できず。	温湯紹幸
1988年6月	小川後楽は妙西郷（現妙西鎮）宝積山に来たが発見できず。	小川後楽
1988年9月	多田光里は、宝積山が「杼山」であると断定した。	多田光里
1989年	妙西郷住民らは「杼山」復興計画を立案。	徐根法ら
1990年10月	「杼山」地名を復活させる討論会が行われ、陳橋驛が「杼山」の文字を揮毫した。	陳橋驛ら
1992年10月	杼山の住民が募金活動を行い、その資金で三癸亭が完成した。	徐根法ら
1993年3月	「杼山」の地名使用の許可が湖州市地名委員会に承認され、「杼山」の碑が完成した。	徐根法ら
1993年3月	三癸亭建設事業募金明細の碑が建てられた。	徐根法ら
1993年11月18日 （癸年癸月癸日）	三癸亭の前で記念祭を行った。その後、毎年11月18日を杼山の「陸羽記念日」にすることが決定された。	徐根法ら
1995年6月	「陸羽墓」と「皎然塔」が完成した。	徐根法ら
1995年10月	「陸羽茶文化陳列室」が完成した。	徐根法ら
1996年1月	「96陸羽『茶経』故里—湖州杼山旅游（観光）文化検討会」が開催されて、陳橋驛などの検討会参加者たちは、杼山を来訪し、現地調査を行った。	陳橋驛ら
2021年	地方政府による開発が始まる。「陸羽墓」以外の建築物が概ね建て直された。	地方政府
2022年	学校と一部の民居が移動させられ、妙喜寺が再建された。	地方政府

（筆者作成）



## 第2項「陸羽墓」の真偽と民間祭祀

杼山の「陸羽墓」と比べて、湖州市呉興区妙西鎮妙峰山陽面にある「陸羽墓」は、より多くの人に知られている。2013年の陸羽誕生1280周年の際には、妙峰山の「陸羽墓」の前では、政府主導の祭祀が行われた。杼山の陸羽墓の墓碑表（写真1-8）と同様に、妙峰山の墓碑表（写真1-9）にも「唐翁陸羽之墓」、裏面に「茶聖陸羽墓誌銘」と書かれている。墓碑左右の石柱に「陸羽が生まれてから、人間たちは互いに製茶のことを学ぶようになった」<sup>6</sup>と刻まれている。これは宋代詩人である梅堯臣の「次韻和叔嘗新茶雜言」詩にある、陸羽を評する詩句である。妙峰山の陸羽墓の墓碑中央に「大唐太子文学陸羽之墓」、その右側に「一九九五年冬建」、左側に「湖州陸羽茶文化研究会立」と書かれている。



写真1-8 杼山の陸羽墓

（2022年5月13日 筆者撮影）

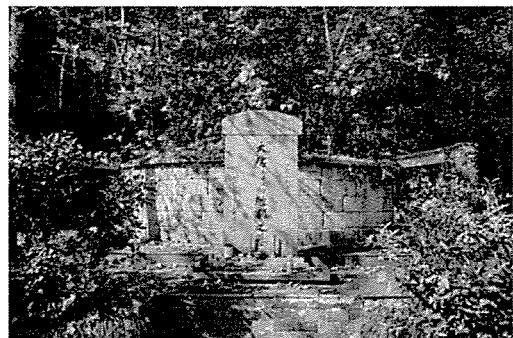


写真1-9 妙峰山の陸羽墓

（2013年10月 筆者撮影）



写真1-10 徐根法宅の「杼山茶文化資料展示室」

（2022年5月15日 筆者撮影）

<sup>6</sup> 原文は「自從陸羽生人間，人間相學事新茶」である。

二つの陸羽墓の墓碑の形は似ているが、妙峰山の陸羽墓の規模は遥かに大きい。筆者の調査によると、二つの「陸羽墓」は全て1995年に新しく造ったものである。杼山出身のFさんは「90年代のある年、妙峰山の陸羽墓で政府主導の祭祀が行われる間、少数の妙西鎮の住民は、妙峰山につながる道路に障害物を設置して、自動車の通過を阻止した。参加者の車輛はやむを得ず、遠回りして妙峰山の陸羽墓に到着した。この事件の影響を受け、杼山の陸羽墓は政府に承認されなかった。このような政府との確執により、徐根法氏は長年にわたり妙西村書記を担当していたが、正式幹部としての公務員になれなかった」と語った。しかし、徐根法氏の郷土愛は変わらず、彼は自宅の二階に「杼山茶文化資料展示室」（写真1-10）を造って、収集した様々な資料を陳列している。

妙峰山の陸羽墓の墓碑に書かれる陸羽の身分は「大唐太子文学」である。しかし、『新唐書』には、陸羽は「唐朝廷に太子文学兼太常寺太祝に任命されたが、就職しなかった」<sup>7</sup>となっている。妙峰山の陸羽墓を建立した「湖州陸羽茶文化研究会」は、湖州市政府によって運営される団体である。この点からも、「湖州陸羽茶文化研究会」は、陸羽の官位にこだわっていることが分かる。妙峰山の陸羽墓の墓碑の前には、階段や広場が設置されており、大規模な祭祀を行うことが可能である。政府開発によって、妙峰山が茶文化観光地として建設され、陸羽墓はその中心地であったのである。

「陸羽墓」の真偽とは、陸羽埋葬地の真偽である。陸羽の友人である唐代の詩人孟郊(751-814)書いた「陸暢を湖州に送って、亡くなった友人の皎然塔、陸羽墓の前で詩を書く」<sup>8</sup>の詩の一節に、「杼山の皎然塔と陸羽墳」<sup>9</sup>があり、そのことから陸羽埋葬地は杼山（現在の宝積山）であると考えられる。徐根法は「杼山の陸羽墓を建設する前に、その所在地に一つの古い墓があった。盗難にあったため、墓の中は何もなかった。陸羽埋葬地はこの辺にあるので、墓の中に「陸羽之位」が刻まれた石碑を置いた」と述べている。その古い墓が、真の陸羽墓であるかは定かではない。しかし、妙峰山の陸羽墓と比較して、杼山の陸羽墓は陸羽埋葬地により近いことは確かである。

陸羽墓の所在地については、学界では長期間の論争があった。杼山を推す学者たちは、「杼山は現在の宝積山である」「唐代の妙喜寺、皎然塔、陸羽墓の遺跡地は宝積山である」「妙峰山は湖州茶文化の重要な地域である」等の主張をしている。現在、杼山の陸羽墓は、杼山の住民が陸羽を祭祀する場所となっている。

一方、妙峰山の陸羽墓は、湖州政府が陸羽祭祀を行い、また観光客が訪れる観光地となった。筆者は2018年に妙峰山の陸羽墓で、陸羽誕生1280周年祭に参加した。中国各地及び日本、韓国、東南アジア諸国から、数百の茶人が集まった。茶人たちは黄色のリボンをつけて階段に立つと、地方政府官員のリードで祭文を読誦する。それが終わると、全員妙峰山の陸羽墓に向いてお辞儀をするのである。

一方、杼山の陸羽墓で行われる陸羽祭祀は、政府の関与がなく地元住民が自発的に参加する。杼山の住民は協力して杼山の陸羽墓を守り、祭祀の前には墓に通じる道を掃除し、草刈りを行う。最近では湖州市環境衛生局が人員配置し、定期清掃作業を行うことになった。陸羽祭祀が行

<sup>7</sup> 原文は「招拜羽太子文学，従太常寺太祝，不就職」である。

<sup>8</sup> 詩名は「送陸暢歸湖州，因凭題故人皎然塔、陸羽墳」である。

<sup>9</sup> 原文は「杼山磚塔禪，竟陵広宵翁」である。

われる毎年11月18日に、杼山に居住する人々は、爆竹を陸羽墓で鳴らす。その雰囲気はまるで正月のようで、非常に賑やかである。2013年から、杼山住民と妙西郷政府の共催で、杼山の陸羽祭祀を行うことになった。陸羽祭祀が行われる際に、妙西郷政府は有名な茶人を招いて、陸羽墓の前で敬茶（茶を奉納する）、敬香（線香を奉納する）、献花（花を奉納する）などの儀式を行う。2022年5月13日に、筆者は妙西郷政府に誘われて、杼山の陸羽祭に参加し、陸羽墓の前で花を奉納した（写真1-11）。



（写真1-11） 杼山の陸羽祭

（2022年5月13日 筆者は杼山の陸羽祭に参加し、陸羽墓の前で花を奉納した）

### 第3項 杼山に居住した陸羽および儒教、仏教、道教との関わり

陸羽の人生は宗教と深く関連する。孤児である陸羽が過ごした仏教寺院の生活は、彼自身に多大な影響を与えた。陸羽は江南地域に移住してから、知り合った最初の友人は僧侶の皎然であった。その後、陸羽は妙喜寺で皎然の弟子である靈徹（746-816）とも友人となった。貞元十五年（799）、他所で茶の調査を行っていた陸羽は、皎然の死を感じて杼山に帰り、翌年皎然は他界した。貞元二十年（804）には、陸羽も世を去った。元代の僧侶念常が撰した『仏祖歴代通載』に、陸羽の事績がある[『大正藏』第49冊第2036部]。

仏教の僧侶のほか、道教出身の張志和や李冶も陸羽の仲間であった。李冶とは、唐代の詩人李季蘭のことである。陸羽と彼より年長の李季蘭とは、恋人同士であったとの説があるが、陸羽は生涯独身であった。道教出身の仲間も、陸羽の思想形成に深く関与する。陸羽の茶文化思想には、道教の自然主義思想が多く流入している。陸羽は道教の占術が上手で、彼の名や字も自らが占術を通して付けたものであった。『茶経』に記される、陸羽が発明した「風炉」<sup>10</sup>の脚に「坎上巽下離于中」<sup>11</sup>という八卦の言葉を刻んだ。この道教八卦の思想が応用されている。

大暦七年（772）に、陸羽は顔真卿と知り合った。顔真卿は唐代を代表する著名な書・政治家であり、『顔氏家訓』を著した顔之推の末裔でもある。また、顔氏一族は孔子の弟子顔回が先祖であると自称している。顔真卿は陸羽の才能を認め、彼を誘って『韻海鏡源』の編纂作業を

<sup>10</sup> 「風炉」とは、茶をゆでる際に使うストーブのことである。

<sup>11</sup> 「坎」は水、「巽」は風、「離」は火を象徴する。水は風炉上の鍋にあって、風炉のしたから風が入って、風炉中の火をさらに燃焼する。

行った。この収入により、陸羽の生活の問題も解決された[陳 2012: 122]。顔真卿が陸羽のために建てた「三癸亭」はただの亭ではなく、居室や書斎などを備える建築物だったと推測されている。道、仏、儒三教のエリートたちは「三癸亭」に集まって、飲茶をしながら「文化サロン」を形成した。このことから、彼らは「湖州飲茶グループ」と呼ばれる。

高橋忠彦は「同時代の詩人グループに、茶人より、陸羽は隠居者にされた場合が多い」[高橋 2000: 117]と述べ、隠居者としての陸羽を強調している。関剣平は仏教や道教より、陸羽の隠居者としての出発点を儒教に求めた。彼の人生には、出仕と隠居の選択や迷いがあったと指摘している[関 2014: 135 - 142]。陸羽は儒家の隠逸思想で茶道を解釈し、茶の隠逸思想に国家と民族の意識を入れて、『茶経』を完成した。

地方政府の主導で、杼山に陸羽の遺跡公園が建設され、新しい建築物が多くできたのである(写真1-12)(写真1-13)。



写真1-12 杼山の入口に設置された陸羽と4人の友人達の像

(左から李冶、皎然、陸羽、顔真卿、張志和 2022年5月13日 筆者撮影)

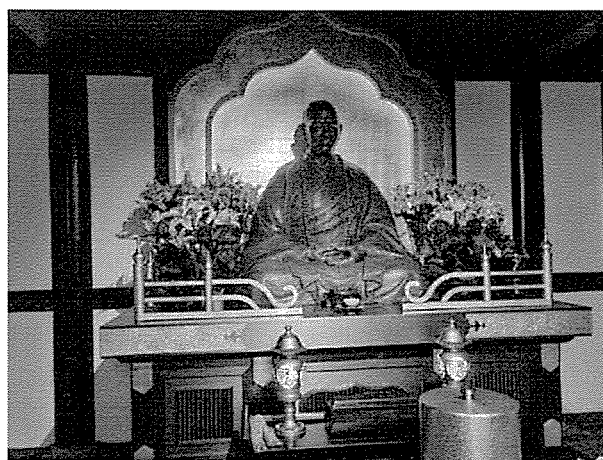


写真1-13 杼山の陸羽墓の近くにある皎然記念堂に祀られる皎然像

(2022年5月13日 筆者撮影)

### 第3節 陸羽と顧渚山

#### 第1項 陸羽と顧渚山の貢茶院

##### 1 陸羽と顧渚山の貢茶

陸羽は湖州において、貢茶と結びついた。唐代には、浙江地域の茶生産は既に相当の規模があり、浙江地域の湖州や紹興などに、茶貿易の市場ができた。特に湖州は江西地域の浮梁と並び、全国的に有名な茶貿易市場となった[兪・王・唐 1985: 89]。陸羽は大暦元年から五年(776-770)まで、湖州長興顧渚山の「置茶園」に滞在している時に、当時常州刺史を務めていた李栖筠に誘われて、常州へ茶の調査に行った。その際に、顧渚山産の茶を持って行った[謝 2007: 25]。

『湖州府誌』には、大暦五年から貞元十六年(770-800)の間に、湖州長興顧渚山虎頭岩の後ろ側に、貢茶院が設置されたことが記される。それ以降、顧渚山貢茶院が産出する貢茶の量が増大し、全国第一位となった。会昌年間(841-846)に、顧渚山貢茶院が提供する貢茶の量は、18400斤(現在の10981kgに相当する)に達した。顧渚山の他、江蘇地域の宜興にも唐代の貢茶院があった。嘉泰年間の『呉興誌』に「顧渚山が宜興と接する。貢茶の要量が多いため、唐代宗は長興で貢茶院を設置する命令を出した。770年に、貢茶を提供し始まった。顧渚山産の茶を売ることが禁じられ、諸郷産の茶を顧渚山貢茶院に集めて焙煎した。刺使が貢茶製造の事業を主宰し、觀察使が総管理した」<sup>12</sup>とある。陸羽が撰した『顧渚山記』にも、茶に関連する内容が多く出ている[姚 2014: 12]。

陸羽は顧渚山産の茶を「紫笋茶」と命名して、唐朝廷への貢茶に推薦したと顧渚山の住民たちは考えてたが、実際は「紫笋茶」は当初、唐代上等茶<sup>13</sup>の総称であった。唐代後期から、「紫笋茶」の意味はだんだん変わり、顧渚山産茶専用の名称となった[張 1990: 73]。現在において、陸羽、顧渚山と紫笋茶は切っても切れない存在となっている。

##### 2 貢茶院の構造

顧渚山の大唐貢茶院は盛衰を経て大部分が荒廃したが、現代ではその遺構跡に新しい大唐貢茶院ができ、構造は昔とあまり変わらない(図1-1)。しかし、現在では茶の生産はしておらず、文化体験の観光地となっている(写真1-14)。以下、大唐貢茶院の各部分の構造と、その隆盛と衰退、復興について述べる。

<sup>12</sup> 原文は「顧渚与宜興接，唐代宗以其歲造數多，遂命長興均貢，自大曆五年(770)始分山析造。歲有客額，鬻有禁令，諸郷茶芽，置焙于顧渚，以刺使主之，觀察使總之」である。

<sup>13</sup> 色と形がともに上レベルの茶芽を指す。

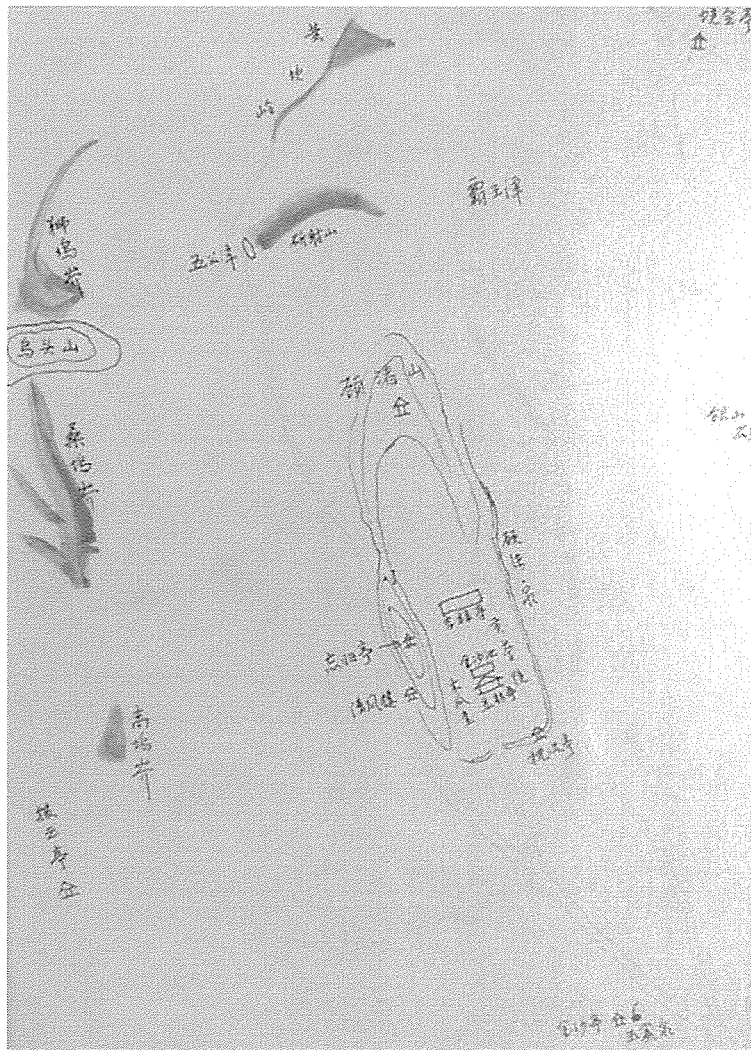


図 1 - 1 昔の顧渚山の貢茶院構造図

(再建された大唐貢茶院の初代担当者張松林氏 2004 年作成)

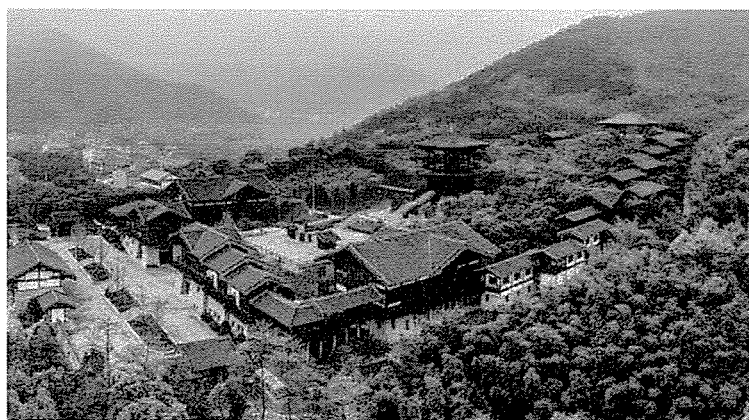


写真 1 - 14 大唐貢茶院の外観

(中心部にある楼は陸羽閣 2022 年 2 月 28 日 筆者撮影)

### ① 吉祥寺

大暦五年から貞元十六年（770-800）までの大唐貢茶院に寺院はなかった。貞元十七年（801）に、湖州刺使を務めていた李詞は寺を建立して、「武康吉祥寺」の扁額をそこに掲げた。以降、この場所は貢茶院の他、吉祥寺とも呼ばれ、寺院の僧侶たちは普段は仏教修行をするが、春の「上貢」時期だけは、主に貢茶生産に集中する。吉祥寺の貢茶生産は、盛衰を経て唐代から清代初期まで続いた。洪武六年（1373）に、当時の長興知県（県長）を務めていた籬洵が書いた、『顧渚採茶記』に「寺院を看守する僧侶養中は頭を下げて泣きながら、「吉祥寺が全部倒れた」と言った」<sup>14</sup>とある。1949年春に、吉祥寺は火災に遭って消失し、完全に廃墟となった。顧渚山の大唐貢茶院遺跡は、1984年に長興県文化財、1997年には浙江省文化財に登録された。2006年に顧渚山の大唐貢茶院遺跡は、山中にある三組の唐代磨崖石刻と共に、国文化財に登録された（写真1-15）。大唐貢茶院を再建した際に、吉祥寺も建て直された（写真1-16）。



写真1-15 国文化財に登録された記念碑

（2022年2月28日 筆者撮影）

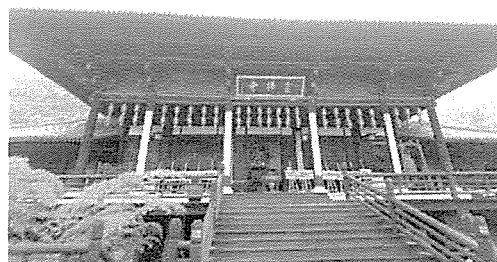


写真1-16 吉祥寺

（2022年2月28日 筆者撮影）



写真1-17 陸羽閣にある陸羽像

（2022年2月28日 筆者撮影）

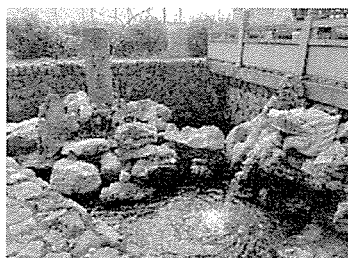


写真1-18 金沙泉

（2022年2月28日 筆者撮影）



写真1-19 禁止廟潭淘花生碑

（2022年2月28日 筆者撮影）

<sup>14</sup> 原文は「寺悉傾圮，守僧養中來見，垂首衣結、眊眊焉言即淚下」である。

## ② 陸羽閣

陸羽閣は大唐貢茶院の中心にある建築物である。その中には青銅製の陸羽像が祀られている。陸羽閣の両側に、吉祥寺に繋がる長い回廊が配置されている（写真1-17）。

## ③ 金沙泉

唐代において、顧渚山の紫笋茶と一緒に上貢したのは金沙泉の泉水であった。しかし金沙泉は、大昔に既に消えていた。元々の金沙泉は顧渚山東南側の麓にあったが、具体的な所在地は不明である。1984年に地方政府が「忘帰亭」<sup>15</sup>を再建した際に、その隣に新しい金沙泉を造り出した（写真1-18）。1987年に水口鎮政府が廟潭を浚う際に、1815年の年記がある「禁止廟潭淘花生碑」（写真1-19）を発見した。その碑文には、紫笋茶や金沙泉と関連する地名が刻まれている。

## ④ 清風楼

顧渚山の貢茶院に関連する数多くの唐詩に、「清風楼」という名が度々出てくる。清風楼は貢茶院に設置された政府の招待所であったが、いつの間になくなってしまった。顧渚村民である王月琴氏（80歳）は、「貢茶院の西側に一つの「石土地廟」がある。昔はその中に、土地神の石像が祀られていたため、「石土地廟」と呼ばれるようになったという。石土地廟にかつては舞台があったが、改革解放（1949年）の後に潰され、廟や小学校も老人ホームに改造された。経済体制の改革開放（1980年）の後に、施設は石土地廟に戻され、私が廟管理人となった。しかし、村のある老人から、その名称は「石土地廟」ではなく、「清風楼」だと聞いた。ビックリして長興県へ調べに行くと、顧渚村の資料に、「石土地廟」（写真1-20）という名はなかった。そして、湖州市宗教関係の資料に、石土地廟は改革解放（1949年）前に、「清風楼」と記されていることを発見した」と語った。

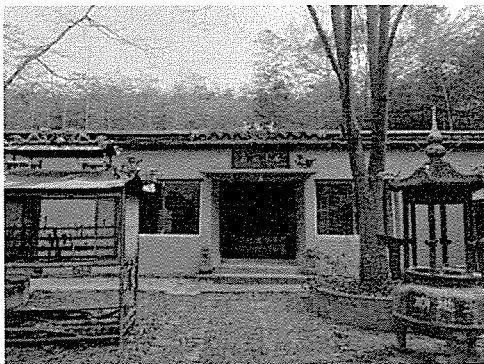


写真1-20 石土地廟

（「清風楼」跡地 2022年2月28日 筆者撮影）



写真1-21 「唐潮十二坊」

（2022年2月28日 筆者撮影）

<sup>15</sup> 官員たちが大唐貢茶院の貢茶生産を監視する期間に休む場所である。



表 1-3 大唐貢茶院の復元に関する事例表

年月日	復元に関する事例	備考
1984年	顧渚山の大唐貢茶院遺跡が長興県文化財に登録され、新たに「忘帰亭」と「金沙泉」を建設した。	張松林は金沙泉の近くに酒工場を建設した。
1987年	1815年と刻まれた「禁止廟潭淘花生碑」が発見される。	
1993年	「陸羽山荘」が建設された。	外国人も顧渚山に来るようになってきた。
1997年	顧渚山の大唐貢茶院遺跡が浙江省文化財に登録された。	
2004年	長興県政府が大唐貢茶院再建の計画を立てる。	
2005年	大唐貢茶院の再建が始まる。	唐代の「餅茶」を再現する試みが始まった。
2006年	顧渚山の大唐貢茶院遺跡や唐代磨崖石刻が国文化財に登録された。	
2008年5月28日	大唐貢茶院が再建された。	大唐貢茶院は陸羽祭祀の道場となった。
2017年4月4日	大唐貢茶院で「茶聖陸羽清明祭典」が行われた。	中国中央テレビ局はこの祭典を生放送した。
2021年	「唐潮十二坊」が完成。	
2022年5月12日	大唐貢茶院で「海峡兩岸禅茶大会」が行われ、貢茶院は陸羽・皎然祭祀の「双聖道場」となる。	台湾国民党元主席の洪秀柱が大会に参加した。

(筆者作成)

## 第2項 大唐貢茶院の復興

再建された大唐貢茶院の、初代総経理を務めていた張松林氏(78歳)は、顧渚村民であり、大唐貢茶院復興の歴史を良く知っている。筆者は彼にインタビューを行った。彼は「大唐貢茶院跡地に、昔は大きな玉石が大量にあった。村人が家を建てる場合はいつもそこに行って、建築用の材料を取る。その中に、古い物を掘り出したケースもあった。1984年に、政府の主導で新しい金沙泉ができてから、私はその近くに酒工場を建設した。1993年に、私はそれを「陸羽山荘」に改造し、その中には、宿泊、飲食や運動施設などを備えた。それ以降、水口郷に民宿の数が急速に増えた。顧渚山の周辺には、特に上海から来る観光客の数が多かった。陸羽墓を参詣するために来た茶人のほかに、日本、韓国、シンガポール、マレーシアなどの人も多くいた。その後、顧渚山と陸羽の施設を、観光地としてさらに拡大したい長興県水口郷政府は、出資し大唐貢茶院を再建した。再建事業は中国国際茶文化研究会からの支援を受けた。大唐貢茶院の建設は2005年に始まり、2008年に完成した。貢茶院の内部構造は、関連する史料を参

考しながら建てた。僕は2005年から総経理を務めて、2015年に定年退職した」と張松林氏は語った（表1-3）。

長興県水口郷政府が大唐貢茶院を再建する目的は、「龍頭」として、県内の観光産業を発展させることだ[杜・謝2005: 69]。現在、その目標は実現された。2000年以前、水口郷の住民たちは、主に毛竹の栽培で生計を立てていた。しかし2000年以降になると、「農家楽」などの観光産業が重要な収入源となった。2019年現在、顧渚村内には500軒以上の「農家楽」があって、年間300万人以上の観光客を収容することができる。その半分以上は上海からの人であり、25パーセント程が周辺都市の人であった。そして2021年に、水口郷政府が融資して、貢茶院の前に唐風建築の「唐潮十二坊」（写真1-21）が完成した。

### 第3項 大唐貢茶院で行われる年中行事

唐代の顧渚山貢茶院では、貢茶生産や進貢を中心としていた。一方、新しい大唐貢茶院の場合は、陸羽祭祀などの年中行事を中心として展開されている。

#### 1 唐代顧渚山貢茶院で行われる年中行事

唐重興は貢茶院に関する地方誌や唐詩の内容を分析して、唐代の顧渚山貢茶院で行われる年中行事をまとめた[唐2005: 12]。具体的には以下のようである。

##### ①啓蟄喊山

毎年「啓蟄」の祭礼（3月5日頃）に、湖州太守と常州太守と一緒に顧渚山に入って<sup>16</sup>、随行する人たちと共に一斉に「芽生え!」と叫ぶ。この行事は「喊山」と呼ばれる。清代の『長興県誌』には、唐代では「喊山」を行う際に太鼓も打つ。「啓蟄喊山」を行う目的は、貢茶進貢に間に合うように、茶樹の芽生えを祈ることである。二州太守がこのように、貢茶の生産性を高めるための行事を行った。

##### ②金沙泉祭祀

五代十国時代の学者である毛文錫が撰した『茶譜』、宋代の『呉興誌』、『元史』などの史料に書かれるように、金沙泉は常に水が枯れた状態であった。唐代の太守が貢茶生産の時期に、金沙泉で祭祀を行うと、泉水が湧き出た。太守はその泉水を銀瓶に入れて、顧渚山の紫笋茶と一緒に進貢した。進貢が終わると、金沙泉は再び水の無い状態に戻った。金沙泉の傍に、唐代の時は「金沙亭」、宋代の時は「拜泉亭」が建てられていた。金沙泉祭祀の行事は元代まで続いた。

##### ③「境会亭」茶宴

「境会亭」は顧渚山啄木嶺の湖州と、常州の境に建てられた亭である。唐代では、年に一度の貢茶進貢が終わると、両州の進貢関係者たちは、「境会亭」に集まって祝福の宴会を行った。宴会では、両州の「闘茶」も行われた。唐代の大詩人で、当時蘇州刺使を務めていた白居易は、

<sup>16</sup> 顧渚山は湖州と常州の境にあるため、二州太守に共同管理されている。

かつて湖州刺史と常州刺史に、「境会亭」の茶宴に招かれたが、病気のため行けなかった。その後、彼は書「夜に湖州刺史と常州刺史が参加した「境会亭」茶宴のことを聞く」<sup>17</sup>という詩を残した。この詩に「青娥（舞妓）がたがいに踊って妙技を争っている。紫筍茶をともに味わいそれぞれ新しさを競うだろう。私は花が咲く時、北面の窓の下にいるのを嘆くしかない、病で伏せている者に蒲黄酒（薬酒）だけが相手なのを残念に思う」<sup>18</sup>とある。この「境会亭」での茶宴は、中国における茶宴と「闘茶」の始まりである[唐 2005: 13]。

## 2 現代の大唐貢茶院で行われる年中行事

新しい大唐貢茶院が完成すると、陸羽祭祀がそこで行われる最重要の行事となった。2017年4月4日に、大唐貢茶院で「茶聖陸羽清明祭典」が行われ、中国中央テレビ局はこの様子を生放送した。2022年5月12日には、大唐貢茶院で「海峡兩岸禪茶大会」（写真1-22）が行われ、台湾国民党元主席の洪秀柱氏をはじめ、中国大陸と台湾の多くの人々がこの大会に参加して、陸羽・皎然を祭祀した。筆者もこの二つのイベントに参加した。

以下に、「海峡兩岸禪茶大会」で行われた祭祀の内容を説明する。「茶道双聖（陸羽・皎然）奉祀大典」の流れ：

① 参加者たちが入場して、祭壇の前に立つ。鼓などの楽器を鳴らして、僧侶たちが『般若波羅蜜多心経』を唱える。

② 6人の貴賓が陸羽と皎然の像を披露する。

③ 大法師が祭壇を回りながら、水を撒く。僧侶たちが『大悲呪』を唱える。これにより祭壇が清浄になる。

④ 寿聖寺兼吉祥寺の住職である界隆法師が、線香を奉納してから祭文を読む。読んでいる間に、参加者たちは3回お辞儀をする。

⑤ 参加者たちが線香や茶を奉納する。僧侶たちが『紫筍茶供養偈賛』を唱える。

儀礼終了。

『紫筍茶供養偈賛』の内容は以下である。

虔誠な気持ちで花と線香を献ずる。知恵燈の赤い焰を加えて、楊柳の枝で浄瓶の聖水を撒く。橄欖、枇杷や顧渚紫筍茶を釈迦様に供養する。様々な財宝や明珠を菩薩に奉納する。法王の家に衣服を献ずる。南無普供養摩訶般若波羅蜜<sup>19</sup>。

「茶道双聖（陸羽・皎然）奉祀大典功德文疎」の内容は以下である。

香花燈塗果，茶食宝珠衣，十供献双聖，奉祀妙吉祥。

伏以，仏恩広博，宏開集福之門；法力圓融，大啓知恵之路；禅心慈悲，具得浄念之道；茶意和平，悟入解脱之源。

<sup>17</sup> 原文は「夜聞賈常州、崔湖州茶山境会飲宴」である。

<sup>18</sup> 原文は「青娥舞舞应争妙，紫筍齐营各斗新。自嘆花時北窓下，蒲黄酒对病眠人」である。

<sup>19</sup> 原文は「虔誠献香花，知恵燈紅焰交加，浄瓶楊柳洒勤夸，橄欖共枇杷，顧渚紫筍茶奉献，酥陀普供養釈迦，百宝明珠奉献仏菩薩，衣献法王家，南無普供養摩訶般若波羅蜜」である。

世尊祖師、聖賢善知，衆生導引、茶人良師。和尚皎然、處士陸羽，名茗鑑泉、談禪論道。仏蔵般若、茶経聖典，解脱根本、祛毒良方。顧渚紫笋、人間靈芽，吉祥茶道、伝承天下。

仰冀大慈，俯垂洞鑑：爰有一泗天下瞻部洲中華人民共和國浙江省湖州市長興縣水口郷顧渚山吉祥寺、秉教沙門、界隆衍壽，至誠敬拜。

今据，茶人浙江周国富先生、王建満先生，台湾洪秀柱女士，靈隠沙門光泉和尚，領大徳善信，奉仏修因，自浄其意，沐手焚香，親沏佳茗。上供諸仏，中奉聖僧，下及大衆，普敬十方。法施平等，大会無遮，所成尽力，円満随願。

茶道始祖皎然大師有雲：一飲滌昏寐，情思朗爽満天地；再飲清我神，忽如飛雨輕塵；三飲便得道，何須苦心破煩惱。茶聖陸羽『茶経』中記載：茶之為用，味至寒，為飲，最宜精行儉徳之人。……聊四五啜，与醍醐、甘露抗衡也。

窃以，随縁応物，無非回向菩提；指事伝心，総是行深般若。欲破人間之大夢，須凭劫外之先春；思解内心之苦毒，当品仏地之靈芽。借水澄心，即茶演法。採靈芽于鷲山頂上，造香茗于吉祥寺内，依菩提之妙方，悟拈花之意旨。焙之以三昧火，沏之以方便铛，貯之以功德杯，品之以般若心。今者法筵大啓，茶食共品，法即茶，茶即法，尽十方世界是個真誠清浄心。

拈一句，即此道得：茗香普遍浄域中，慈光晃耀双聖容，孰知茶道全尔真，菩提当下円成同。

中国浙江湖州長興顧渚山吉祥寺界隆衍壽  
暨 天下茶人 謹意上疎  
時維仏歴二五六六年 歲次壬寅孟夏清和

前述のように、2022年「茶道双聖（陸羽・皎然）奉祀大典」は仏教法事の流で行われたことが分かる。大唐貢茶院の近くに、「寿聖寺」という寺院がある。寺院の住職である界隆法師は、同時に吉祥寺の住職を務めている。吉祥寺や寿聖寺の復興に伴って、陸羽祭祀における皎然の存在も急速に拡大した。そして2022年に大唐貢茶院で行われた「海峡兩岸禪茶大会」に、皎然祭祀の行事も追加され、「茶道双聖（陸羽・皎然）奉祀」という祭典が催行された（写真1-23）。このように、顧渚山地域における陸羽信仰と仏教との関連がより一層深まったのである。



写真1-22 海峡兩岸禪茶大会  
(2022年5月12日 筆者撮影)

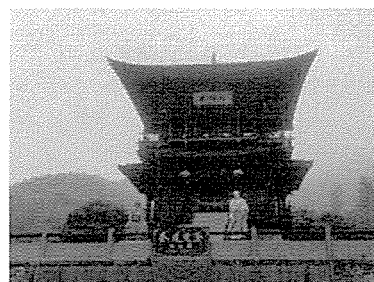


写真1-23 奉祀大典の祭壇  
(2022年5月12日 筆者撮影)

#### 第4項 顧渚山における唐代製茶法の復活

陸羽の『茶経・六之飲』に掬茶、散茶、末茶、餅茶という4種類の茶が記されているが、具体的な製法は書かれていない。布目潮風は「掬茶は粗茶と同じ、いわゆる枝と茶葉と一緒に摘採して焙じた茶のことである。散茶はつまり葉茶のことである。末茶は茶葉を焙じてから、粉にする物である。餅茶はいわゆる『茶経・三之造』に書かれる固形茶のことである」[布目 2001: 161-162]と説明している。

『日本後記』に永忠が、815年に嵯峨天皇に茶を献じたことが書かれている。これは日本の飲茶に関する最古の記録である。平安時代の朝廷や寺院は、唐文化を尊崇するため、永忠が献じた茶は餅茶<sup>20</sup>であったと推測している。栄西は13世紀に、宋代式の抹茶法を日本に伝え、その後日本の茶道は広がっていった。しかし、他の製茶法も日本で伝承されている。中村羊一郎は『茶経』に書かれる4種類の茶と、東アジア各地に現存する日常的な製茶法との比較研究を行った。中村は日本にある多くの日常的な茶を「番茶」と総称する[中村 2014: 122]。

唐代では、餅茶の生産基準が貢茶院と同じだったため、レベルも高かった。日本の「番茶」のようなものは中国にもあったが、「番茶」という呼称はなかった。洪武二十四年(1391)に、中国で製茶法が改革され散茶が主流となり、餅茶の生産や飲用は少なくなった。唐代以降、顧渚山の貢茶院は衰退し、1391年に餅茶の生産は終了した。

しかし、明代中期になると、湖州長興県産の「芥茶」が有名になった。「芥茶」は、「蒸青」(蒸す)という製法で作られた散茶の一種である。羅芥村はこの茶の生産地であるため、「羅芥茶」とも呼ばれる。現在、長興県煤山鎮羅芥村民の余梅芬氏は、家の中で羅芥茶を焙じる唯一の人である。彼女は先ず鍋を使って茶葉を蒸し、その後、炭火で茶葉を焙じる。余梅芬は「この村民は山中で居住できる土地を「芥」と呼ぶ。字で表すように、「芥」は上に山があって、下に水がある、その間は人が住む所である」と説明した。地理関係から見れば、羅芥茶は顧渚山茶に属する。しかし近代になると、羅芥茶も衰退した。

現代中国における各茶類について、それを加工する技術は1980年代に、各省の専門家が開発したものであった。長興県は1982年に、地産の茶を「紫笋茶」という唐代貢茶の名称にすることにした。その生産には散茶の製法が使われ、また「芥茶」の加工技術も取り入れられた。新しい大唐貢茶院ができてから、餅茶の復元も始まった。長興県出身の楊雅静などが2005年から、唐代の餅茶を再現する研究が始めた。紫笋茶製作技術非物質文化遺産伝承人である鄭福年氏は、主に紫笋茶の散茶をつくるが、紫笋茶の餅茶も生産する。彼は製作した紫笋茶の散茶と餅茶は唐代の餅茶のように、鮮度を保たなければならない(写真1-24)。

<sup>20</sup> 餅の形に加工された茶のことである。

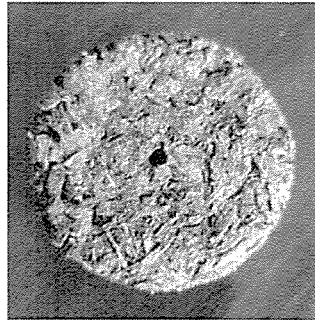


写真 1 - 24 紫笋茶の餅茶

(鄭福年氏が生産した 2022 年 5 月 12 日 筆者撮影)



写真 1 - 25 陸羽祭祀で奉納される紫笋茶餅

(2021 年 林瑞煬氏撮影)

大唐貢茶院經理の林瑞煬氏(41歳)は、「2005年から始まった紫笋茶の餅茶を再現する技術はほぼ完成した。この『茶経』製茶技術は「七経目製茶法」と呼ばれる。「七経目」とは、つまり『茶経・三之造』に書かれる「採之」「蒸之」「搗之」「拍之」「焙之」「穿之」「封之」という、餅茶を製産する七工程のことである。その他、我々は『茶経・四之器』『茶経・五之煮』『茶経・六之飲』を参照して、飲茶する方法や飲茶用の茶器を再現した」と語った。現代における紫笋茶産業の規模は小さい。このような餅茶の製茶技術や飲茶する方法は、主に観光用の宣伝に使われているが、陸羽文化が非常に大切な役割を果たしたのである(写真 1 - 25)。

## 小結

### 第 1 項 陸羽の民間信仰について

唐代後期には、既に陸羽を祀る信仰があった。唐代の学者李肇の『唐国史補』と趙璘の『因話録』に書かれるように、唐の茶販売者たちは常に「陸鴻漸」と称する陶製の陸羽人形を所持していた。茶商売が良くない時は「陸鴻漸」を熱い茶の中に入れるか、あるいはそれを煮る。そうすれば茶商売が良くなると彼らは信じていた[余 2005: 80]。しかし、その時期には、一般の民衆が陸羽を祀る信仰はなかった。

嘉靖年間(1522-1566)の『長興県誌』によって、「会昌二年(842)に、地方官を務めていた張文規は、顧渚山にあった「斫射神」を祀る廟を再建した。元々「斫射神」は地方の治安を守る神であったが、顧渚山では貢茶進貢が順調に進むように祈願する「茶神」となった」。現在は「斫射神」に代わり、陸羽が長興県の「茶神」となっている。現代中国で推進されている「茶産業復興」や「茶文化復興」運動を背景に、陸羽の地位がさらに高まってきた。陸羽の身分も民間の「茶神」から、国の「茶聖」へと転じた。

### 第 2 項 国の「茶聖」と民間の「茶神」としての陸羽

杼山の所在地が判明した 90 年代は、中国茶文化復興の最初の段階である。中国茶文化の中心人物としての、陸羽が生活した地の発見は当時の大事件であった。それをきっかけに、中国と日本、韓国、東南アジアとの茶文化交流も盛んになった。杼山の陸羽墓で行われる陸羽祭祀は、杼山住民の郷土愛を反映している。一方、妙峰山の陸羽墓は、湖州政府と深く関連する。妙峰山の陸羽墓は、情報発信や宣伝が行き届き、観光開発も推進している。陸羽が杼山で居住

する期間に、彼の思想が形成された。そして、彼の思想は茶文化の確立と発展に、大きな役割を果たした。

陸羽の推薦で、顧渚山の紫笋茶が貢茶となった。しかし、陸羽自身は貢茶制度に反対する。『茶経』で書かれるように、陸羽は「精行儉徳」の精神を主張し、つつましやかで徳のある飲茶文化を提唱した。陸羽はまた『毀茶論』を書き、貢茶制度が民衆たちに重い負担をかけたと批判した。貢茶制度に対しては、清代の学者、顧渚山出身の臧廷鑑も、陸羽と同じ主張をする。臧廷鑑が書いた「顧渚山採茶歌」の詩には「紫笋茶は顧渚山の名産物で、山峡中の上品である。唐朝廷は毎年無数の貢茶を徴収し、顧渚山北山の住民が全て殺された」<sup>21</sup>とある。

杼山の住民が、自発的に陸羽を祭祀することに対して、顧渚山では民間に陸羽を祭祀する信仰がなかった。顧渚山の茶農家たちは、地産の茶を「子孫茶」と呼ぶ。方言では、「子孫」と「紫笋」の発音が同じである。新しい大唐貢茶院ができてから、陸羽を「茶聖」として祀るようになった。その後は皎然の祭祀も始まり、「茶道双聖」が形成された。大唐貢茶院で行われた「海峡兩岸禅茶大会」のように、国の「茶聖」としての陸羽が強調されるようになってきたのである。

### 第3項 観光資源化された陸羽の形象

杼山の陸羽祭祀は、当地の住民により自発的に行われたのであって、金を儲ける目的ではなかった。しかし、地方政府の参入によって、杼山の観光開発が急速に進められた。このように、地方政府と住民との間に軋轢が生じるようになった。それは現在まで続いている。筆者の調査によると、杼山は現在観光開発の途上にある。

前述した紫笋茶製作技術非物質文化遺産伝承人、水口郷顧渚村民である鄭福年氏は「1984年以前の顧渚村民は、概ね茶の栽培・摘採・製作・販売などに従事していた。しかし1984年に観光開発が始まってから、民宿を經營する村民が急速に増えた。そして、特に若者たちが茶に関する農作業に従事しないため、顧渚山にある多くの茶園が荒廃した。茶の生産・販売と比べて、様々な観光産業がもたらした利益はもっと多い」と語った。

前述のように、陸羽は浙江地域と非常に緊密な関連がある。中国国内においては、陸羽は国の「茶聖」に据えられた。そして、浙江の陸羽が創出した茶の文化は、東アジア茶文化圏交流の重要な連結点となったのである。

<sup>21</sup> 原文は「顧渚名茶称紫笋，明月峡中夸上品。李唐歲權千万斤，北山鄙屋誅求尽」である。

## 第2章 磐安の茶神信仰—玉山古茶場廟の事例から—

### はじめに

中国における神への信仰体系の中で、「行業神」の信仰がある。「行業神」とは、様々な業界で祀られている神様のことである。例えば、酒関係の業界では「酒神」杜康、建築業界では魯班、農業界では神農、教育界では孔子、海事産業では媽祖、劇曲界では唐玄宗李隆基などである。

商業界では「財神」を信仰し、「文財神」と「武財神」に分かれる。「文財神」は範蠡や比干、「武財神」は関帝（関羽）や趙公明である。日本の商業界では恵比寿様が信仰の対象となる。このように各業界の従事者たちは対応した「行業神」を祀り、災害などの災いに遭わないように、そして、自分の仕事が良い実績を得られるように神々へ祈る。

中国には、茶に関する業界で「茶神」と呼ばれる「行業神」が祀られている。本章では、浙江省磐安县にある玉山古茶場廟に注目し、茶神信仰の研究を展開したい。筆者は2008年に1回玉山古茶場廟に行って簡単な調査を行ったが、2021年には2回にわたり、詳しい調査を行った。

玉山古茶場廟には、どのような茶神信仰の歴史があるのか。現代まで、その茶神信仰の変遷があったのか。2008年に、玉山古茶場廟の茶神信仰中の「廟会（趕茶場）」祭祀活動が中国非物質文化遺産に登録されたが、それは玉山古茶場廟の茶神信仰に影響をもたらしたのか。以上の問題を現地調査と文献資料調査を通じて解明したい。

### 第1節 調査対象と調査地選定

#### 第1項 調査対象：磐安县の茶神信仰

中国においては様々な茶神が存在する。その中で最も有名なのは陸羽である。陸羽は唐代では既に茶神として祀られていた。『旧唐書・隱逸・陸羽伝』には「陸羽が茶を嗜好し、三篇の『茶経』を著した。『茶経』は茶に関する豊富な知識をもとに書かれており、飲茶の知識が天下に知られた。当時の茶販売者は主に陶製の陸羽人形を台所に置いて、茶神として祀った。茶販売の売り上げが悪くなかった場合は、販売者が陸羽人形を熱い茶の湯に入れる状況もあったそうだ。」<sup>22</sup>とある[李肇『唐国史補』]。現代でも、浙江省の湖州、長興や湖北省の天門などの多くの所に、陸羽像が立っている。地方政府は毎年陸羽像の前で陸羽の祭祀を行う。

陸羽以外にも、多くの茶神が中国各地に祀られている。例えば、雲南省の普洱茶産区では、諸葛亮が茶神として祀られている。湖南省では、神農が茶神として祀られている。四川省雅安市蒙頂山地域の茶神は呉理真<sup>23</sup>である。福建省太姥山の白茶産区では、「太姥娘娘」（太姥山の女神）が茶神として祀られている。これらの茶神は全て地域の茶伝承史と緊密に関わっている。人間のイメージを持つ茶神のほかに、自然神のような目に見えない茶神もある。福建省武

<sup>22</sup> 原文は「羽嗜茶，著經三篇，言茶之原之法之具尤備，天下益知飲茶矣。時鬻茶者至陸羽形，置湯灶間，祀為茶神」である。

<sup>23</sup> 呉理真是前漢時代道家学派の人物である。民間伝説によって、彼は四川雅安の蒙頂山地域で生まれた。そして、彼は世界最初に茶樹を栽培した人間だと言われる。人々は常に彼を「茶祖」、「甘露道人」と呼ぶ。



夷山地域では、毎年3月上旬の「啓蟄の節」に茶神を祭祀する習俗がある。祭壇に置かれるのは「茶神」や「山神」と書かれた位牌である。祭祀儀式が終わると、祭祀する人々は一斉に「茶発芽！（茶樹よ、芽生え！）」と叫ぶ。

日本においてもこのような茶神信仰が存在する。茶の実や飲茶風習を最初に日本に伝えた人物は鎌倉時代の栄西である。彼は二回も中国に渡って仏教知識を学び、日本に戻ると臨済宗を開いた。その他、栄西は『喫茶養生記』を書き、日本の「茶の始祖」と呼ばれた[熊倉 2014: 2]。日本の静岡県では、栄西は茶神として祀られている。

浙江省においては、幾つかの茶神信仰がある。湖州地域では、陸羽が茶神として祀られている。天台地域では、道教の道士である葛玄が茶神として祀られている。浙江省金華市磐安县においては、道教の道士である許遜が茶神として祀られている。特に磐安县の茶神許遜信仰は千年以上伝承され続けていて、中国における伝承史が最も長い茶神信仰と言える。だからこそ、筆者は磐安县の茶神許遜信仰を調査対象にした。具体的な調査地は磐安县内の玉山古茶場廟である。



写真 2-1 玉山古茶場廟とその中に祀られている茶神

(2021年9月30日 筆者撮影)

## 第2項 調査地概況

### 1 磐安县と県内の玉山古茶場廟

磐安县は金華市の一部であって、浙江省の中心部に位置している。磐安县の面積が1195.68 km<sup>2</sup>である。亜熱帯にあるため、降雨量が多い。県内にある大盤山は有名な茶産地である。磐安县は1939年に中華民国政府によって、浙江省内にある永康県、東陽県、天台県、仙居県、縉雲県など5県の各一部をとって合併した場所である。磐安县は1949年に一度廃棄されたが、1983年に再設置された。1939年の県域のほか、元々東陽県の一部であった玉山鎮も磐安县に編入された。

磐安県内に6つの郷・鎮があって、玉山古茶場廟は玉山鎮にある茶場山の麓にある。玉山古茶場は宋代に造られてから、歴代地方政府によって茶貿易の専用場所に指定されていた。玉山古茶場は中国で古い文献にある茶場で、現在も存続していることが確認できる唯一の古茶場である。玉山古茶場には玉山古茶場廟があって、その中に茶神許遜が祀られている（写真2-1）。

明清時代では、茶神許遜は玉山古茶場廟周りの二十四都（現在の東陽県前田、三単地域）、二十五都（現在の嶺口地域）、二十六都（現在の張村、浮牌地域）、二十七都（現在の胡宅、前山地域）、二十八都（現在の雅荘、斐湖地域）、二十九都（現在の南坑、尚湖地域）、三十都（現在の下村、銅鈿地域）、三十一都（現在の尖山、楼下宅地域）など8つの都郷<sup>24</sup>共に「土地神」にされていた。

## 2 磐安県の茶産業概況

磐安県内の山がある地域は全て浙江省の重要な茶産区である。唐代時期、中国の茶産区が13の省・42の州に及んでいた。当時の磐安地域は婺州の一部であった。婺州産の「婺州東白」茶の品質が良いため、唐王朝政府に貢茶とされた。唐代の貢茶が14種あり、「婺州東白」がその中の10位であった。『東陽記』には「唐宋時期、政府の有司（官員）が常にここに来て茶を製作する。そして、政府がここで茶院を設置した」<sup>25</sup>とある。つまり、唐宋時代の磐安の茶産業には既に政府からの関与があった。

明清時期にも、東白茶が有名であった。明代の『浙江通誌』には「東白茶が古来から有名」<sup>26</sup>とある。茶文化に詳しい明人許次紆の『茶疎』にも「江南の茶（中略）最近有名なのは（中略）呉の虎丘茶、銭塘の龍井茶、黄山茶、天池茶、浙江の雁蕩茶、大盤茶、東陽茶（中略）これらの茶は有名である」<sup>27</sup>とある。大盤茶や東陽茶は磐安、東陽地域から産出するものである。清代の『東陽県誌』には「東陽県においては、大盤山や東陽山産の茶が最も良い。谷雨節の前に摘採した茶が「芽茶」と言う。そのもっと前に摘採した茶が「毛尖」と言う。「芽茶」や「毛尖」の販売価格が最も高いため、丁寧な手わざで製作しなければならない。このような工夫をしてつくった茶は「擲茶」と言う。葉が大きい粗末な茶は「湯茶」と言う。本地域の客は粗末な茶を嫌うため、「湯茶」があまり売れない。茶商は常に「擲茶」を少しずつ取って、「湯茶」に入れて混ぜてから、茶餅に加工する。これを「撒花」と言う。茶商は常に「撒花」を品質が良い茶として、西部の茶販売者に提供する。その値段は「湯茶」より何倍も高い」<sup>28</sup>とあるこのように、清代の茶販売者は様々な手段を利用して、利益を増加させた。

1949年以降、磐安産の茶葉は円形の「珠茶」に加工され、海外輸出に使われていた。その後は当地の製作者たちが加工技術を改良し、1983年に「磐安雲峰」という緑茶ブランドをつくり出した。1986年に、「磐安雲峰」は中国商業部から、「全国名茶」賞を受賞した。現在、

<sup>24</sup> 秦代から中国の王朝政府が郡県制度を実施していた。「県」の下に「郷」、「郷」の下に「亭」、「亭」の下に「里」がある。県政府所在地の「郷」が「都郷」と呼ばれる。

<sup>25</sup> 原文は「唐宋時可有司常治茶于此，設茶院」である。

<sup>26</sup> 原文は「東白茶素負盛名」である。

<sup>27</sup> 原文「江南之茶（中略）近日所尚者（中略）呉之虎丘，銭塘龍井，黄山，天池，浙之雁蕩，大盤，東陽（中略）此皆表表有名」である。

<sup>28</sup> 原文は「茶以大盤、東陽二山為最，谷雨前采者，謂之芽茶，更前者謂之毛尖。最貴皆擲做，謂之擲茶。茶客反取粗大，但少飲之，謂之湯茶，轉返西商，如法細做，用少許撒茶餅中，謂之撒花，價常數倍」である。

磐安産の茶葉は「磐安雲峰」茶に加工される量が少ない。大量の茶葉は「龍井」茶に製作されて販売されている。

## 第2節 玉山古茶場の紹介

### 第1項 玉山古茶場の建築構造

玉山古茶場は茶場廟、管理用部屋や茶場によって構成されている（写真2-2）。玉山古茶場の面積は1559.57㎡である。その中にある建築の前面は全て南に向いている。玉山古茶場は宋代につくられたが、現存する建築はほぼ乾隆辛丑年（1781）に建てられた物である。また、馬塘村『周氏宗譜』に「茶場廟は宋代につくられ、明代時期は大変盛んだった。清乾隆庚子年（1740）に、玉山出身の科挙進士である周拙齋がお金をだして建て直した」<sup>29</sup>とある。2006年に、浙江省政府が金を出して古茶場の修繕工事を行った。



写真2-2 外からみる玉山古茶場の様子

（2021年9月30日 筆者撮影）

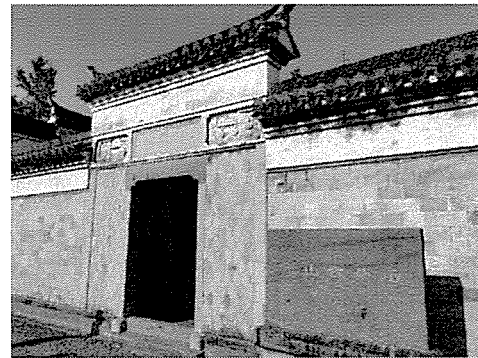


写真2-3 茶場廟の入口

（2021年9月30日 筆者撮影）

#### 1 茶場廟

茶場廟（写真2-3）の面積は169.2㎡で、その中には門楼、天井や神殿がある。茶場廟は玉山古茶場の核心である。廟の建造物にはきれいな彫刻が飾られて、壁には壁画が描かれている。入口の所に、周拙齋（昌霽）が書いた「茶場廟」の横書きの扁額がある（写真2-1）。茶場廟は茶神許遜の祭祀が行われる最も重要な場所である。

#### 2 管理用部屋（観音禅院）

茶場廟の隣にあるのは管理用部屋である。管理用部屋と茶場廟は繋がっている。茶場廟と比べ、管理用部屋の面積が少し小さい。管理用部屋は宋朝から明朝までの中国王朝政府の官員が務めていた場所である。彼らは主に茶産業の管理、茶関係税金の徴収などの仕事を担当していた。現在、管理用部屋は既に民間人によって「観音禅院」に改造された。部屋の真ん中に観音菩薩、その左側に地藏菩薩、右側に弥勒菩薩が祀られている（写真2-4）。

<sup>29</sup> 原文は「茶場廟建于宋，盛于明，清乾隆庚子年，玉峰歲進士周拙齋（昌霽）損資重建」である。



写真 2 - 4 管理用部屋・観音禅院

(2021年9月30日 筆者撮影)



写真 2 - 5 茶場内部の様子

(2021年9月30日 筆者撮影)

### 3 茶場

茶場廟と管理用部屋以外の広い場所は茶場である（写真 2 - 5）。形は長方形で、その中には門楼、中庭、庁堂、左側や右側 2 つの廂房がある。庁堂や廂房は 14 本の柱に支えられている。これらの柱に囲まれるスペースは中庭である。中庭には清乾隆年戊戌年（1778）に建てられた立派な舞台があったが、その後に壊された。廂房は 2 階があり、左側や右側の廂房が通路で繋がっている。2 階は茶商たちに提供する会議や相談用のスペースで、宿泊施設も設置されている。1 階は茶貿易を行う場所である。2006 年に、玉山古茶場は国の有形文化財に登録された。その後、玉山古茶場廟の傍に玉山古茶場博物館が建てられた。

### 第 2 項 玉山古茶場の歴史

玉山古茶場の発祥時期について、幾つかの説がある。茶神許遜は晋代の人物であるため、磐安玉山古茶場の歴史も 1800 年以前の晋代に遡る[趙・厲 2004:64]。磐安の民間伝説と当地住民の家譜によると、玉山古茶場は宋代に設立されたものである。また、清朝の地元の文人であ

る陳発書いた「茶峰暁翠」の詩に「南宋時期に、玉山古茶場は王朝政府に茶貿易の専用場所に指定され、その山も綺麗であり、茶も美味しい」<sup>30</sup>である。

明代時期に、政府がここで「巡検司」を設置し古茶場を管理していた。明正統8年（1443）に政府の政策によって、玉山古茶場で年の前半は茶貿易、年の後半は漢方薬貿易を行うようになった。年の前半と後半に行われる茶神許遜の祭祀「春社」「秋社」もこの時期に始まった。清代時期にも、玉山古茶場は政府に厳しく管理されていた。清代初期の『東陽県誌』に「茶は全て政府によって購入、販売する。茶葉を摘採する前に、政府は茶農に金を払う。後は政府が茶をもらう。民間での茶貿易は禁じられる」<sup>31</sup>とある[『東陽県誌』 1832]。清代末期に、玉山古茶場は太平天国の乱に壊された。その後、清王朝政府は玉山古茶場を修繕した。中華民国時期にも修繕工事が行われた。

中華民国38年（1949）に、玉山出身の周竹香氏は担当する慶元県県長の仕事を辞めて故郷に帰った。彼は人手を集め「茶場廟管理委員会」を設立した。当時の玉山古茶場経営が不況なので、管理用部屋を改装して観音禅院にした。1950年に、玉山古茶場は東陽県房管会に登録されて、公有財産となった。その後の一時期は、古茶場に酒工場や食料加工工場が設置されていた。一部の部屋が個人に配られ、村民の生活場所となった。文化大革命期（1966-1976）に、茶場廟内の茶神許遜像が壊され、中庭の舞台も無くなった。しかし大部の基礎施設は破壊を免れた（表2-1）。

表 2-1 各段階における玉山古茶場の状況

年代	玉山古茶場と関連する事件	出典
晋代	茶神許遜が玉山に遊びに来て、良い茶を作った。	民間伝説
唐代	「婺州東白」が有名になり、大盤山と東陽山の茶は唐王朝政府に貢茶とされた。	『茶経』
宋代	政府が「榷茶場」を設置し、茶貿易を管理していた。玉山古茶場は宋王朝政府貢茶提供の重要な場所となった。	馬塘村『周氏宗譜』
宋代末期元代初期	楊鎮龍が玉山で独立して皇帝となったが、元王朝に鎮圧された。その影響を受け、玉山古茶場は一時不況に落ち込んだ。	地方誌

<sup>30</sup> 原文は「宋之南有榷茶地，其山如綉如簪」である。

<sup>31</sup> 原文は「茶皆官収官売，官給本錢于民，而後取其茶，民間不得私市」である。

明代	明王朝政府が玉山で「巡検司」を設置し、玉山古茶場は再び繁盛期を迎えた。	地方誌
明 正 統 八 年 (1443)	年の前半は茶貿易、年の後半は漢方薬貿易を行うようになった。「春社」「秋社」の茶神祭祀活動が始まった。	地方誌
明代末年	玉山で清軍に反抗する戦争があった。その影響を受け、玉山古茶場は再び不況に落ち込んだ。	地方誌
清康熙年間	茶を販売する権利が政府に握られて、民間での茶貿易は禁じられた。	『東陽県誌』
清代中期	東陽県政府が玉山古茶場を管理するようになった。	奉諭禁茶葉洋価称頭碑、奉諭禁白術洋価称頭碑、奉諭禁粮価称頭碑碑文
清乾隆辛丑年 (1781)	周拙齋が出資し、古茶場を建て直した。	馬塘村『周氏宗譜』
清代末期	玉山古茶場は太平天国の乱によって壊された。その後、清王朝政府は資金を出して玉山古茶場を修繕した。	地方誌
中華民国 38 年	周竹香は「茶場廟管理委員会」を成立し、管理用部屋を観音禅院にした。	馬塘村『周氏宗譜』
1950 年	古茶場に酒工場や食料加工工場を設置され、一部の部屋が個人に配られた。	
文 化 大 革 命 (1966 - 1976)	茶場廟内の茶神許遜像が破壊され、中庭の舞台も無くなった。	

(筆者作成)

表 2-2 現代における玉山古茶場の復興に関する事件の一覧表

時間	玉山古茶場の復興に関する事件
1992 年	「茶場廟管理委員会」が個人に配られた古茶場の部屋を購入した。
1994 年	「茶場廟管理委員会」が茶場廟の修繕工事を行った。
2001 年 8 月	玉山古茶場は磐安県有形文化財に登録された。
2002 年 3 月	玉山鎮人民政府が「茶場廟文化財保護委員会」を設立し、茶場廟を修繕した。
2004 年 12 月	中国文物（古物）局古建築専門家チームリーダーである羅哲文が玉山古茶場を視察し、大変高い評価をした。
2005 年	玉山古茶場は浙江省有形文化財に登録された。
2006 年 5 月 25 日	玉山古茶場は中国有形文化財に登録された。
2006 年 6 月 13 日	浙江省省委書記を務めた習近平は玉山古茶場を視察し、財政庁から 500 万元（約 9000 万円）の修繕積立金を出した。
2006 年 10 月	浙江省地方政府が「玉山古茶場文化財保護所」を成立し、古茶場の修繕作業が始まった。
2007 年	古茶場の修繕工事が終わった。
2008 年	王旭烽が書いた『玉山古茶場』が出版された。
2009 年	浙江省政府が「浙江省玉山古茶場文化財保護計画」を策定した。
2013 年	玉山古茶場にある建築の修繕工事を行った。
2014 年	玉山古茶場博物館が開設された。
2016 年	浙江省地方政府がつくった「許遜茶文化小鎮」に建設する計画が「浙江省級特色小鎮培育名单（リスト）」に入選された。

（筆者作成）

### 第3項 現代における玉山古茶場の復興

1992年に、玉山出身の張路遥氏などが再び「茶場廟管理委員会」を設立した。彼らは資金を集めて、個人に配られた古茶場の部屋を購入した。そして、1994年に茶場廟の修繕工事を行った。2001年8月に、玉山古茶場は磐安県有形文化財に登録された。2002年3月に、玉山鎮人民政府が「茶場廟文化財保護委員会」を設立した。2004年12月に、中国文物（古物）局古建築専門家チームリーダーである羅哲文氏が玉山古茶場を視察した。彼は「このような市場の効能を持つ古代建築は、中国全国においてもめったに見えない珍しい物だ。中国茶産業発展史を記録する「生きる化石」と言えよう」と言った。2006年5月25日に、玉山古茶場は中国有形文化財に登録された。

同年6月13日に、当時浙江省省委書記を務めた習近平氏は玉山古茶場を視察し、浙江省财政厅から500万元（約9000万円）の修繕積立金を出した。この出来事は玉山古茶場が復興するきっかけとなった。同年10月に、浙江省地方政府が「玉山古茶場文化財保護所」を設立し、古茶場の修繕作業が始まった。そして、2007年に古茶場の修繕工事が終わった。2014年に、新しく建造した玉山古茶場博物館が開いて、古茶場の文化・観光事業の展開が始まった。古茶場入口の前に観覧用の「馬塘古道」が整備され、サービスエリアも多く設置された。2016年に、浙江省地方政府がつくった、玉山古茶場および周りの場所を「許遜茶文化小鎮」に建設する計画が「浙江省級特色小鎮培育名單（リスト）」に入った。古茶場の茶山にある古茶樹の数も急に増えた。雲南省や福建省など地域にある古茶樹を玉山古茶場に移植したためだ（表2-2）。

### 第4項 玉山古茶場の機能

李肇が著した『唐国史補』によれば、唐代の貢茶は14種ある。その中には浙江地域の茶が3つあった。それは湖州顧渚紫笋茶、婺州東白茶や陸州鳩坑茶である。こうした背景に、品質が良い茶を選別して唐王朝に進貢する機構部門が必要になった。唐代時期に、進貢を担当していたのは浙江の地方政府であった。唐代と宋代の間に、五代時期がある。五代時期に浙江地域を統治していたのは呉越国（907-978）であった。呉越国の統治期間に、茶貿易の商品化が急速に進んだ。こういう状況が宋代まで続いた。『宋史』にあるデータを推算すると、宋代初期における茶の売上高は1600万貫を超えた。唐代と比べてみると、倍増した[杜・周 2006:211]。

この影響を受け、宋代になると、王朝政府が「榷茶場」を設置し、「榷茶」制度が実施された。「榷茶」制度は政府によって茶を販売する制度でもあれば、茶産業の税金を徴収する制度でもあった。税金が直接茶の値段に加えられているため、税金を徴収する必要がなくなった。「榷茶」制度の規定によって、園戸（茶農）がまず近くにある「山場」に行って「本銭」を取る。その後、園戸が「本銭」あたりの茶製品を「山場」に提供する。余った分は園戸の私有物となるが、「山場」に売ることはできない。茶商が茶を購入する場合は、まず「榷務」に金を払って専用の券を取る。それからは専用の券を持って指定される「山場」で茶を取る。後は茶商の茶販売が自由になる。しかし、玉山産の茶は全て政府によって購入・販売することになり、民間の貿易が禁じられるようになった。

「榷茶」制度は宋太祖乾徳2年（904）から始まった。最初は汴京、建安、漢陽、薪口だけ



に榷茶場が設置された。太平興国3年(978)に13つの榷茶場に増えた。玉山古茶場はその中の1つであった。『磐安県誌』に「開宝7年(978)に、東陽県の瑞山(現在の安文山)と玉山に2つの巡検司が設置された。各巡検司には一名の巡検員と98人の兵士があった」<sup>32</sup>とある[磐安県誌編纂委員会 1993:357]。巡検司は地方を管理する国の政府機関である。宋代から設置しはじめ、県政府に管理されていた。巡検司の設置と榷茶制度の実施と緊密に繋がっている。南宋王朝の都は玉山の近くにある臨安(現在の杭州)である。貢茶を提供する重要な場所となった玉山古茶場は、榷茶制度の実施を支える機能が強かった。

宋代の榷茶について、清代の『東陽玉山周氏宗譜』に以下のように記している。

1 茶場山は宋代の榷茶場であった。榷茶場に集まった大量に発送する貢茶は「茶綱」と呼ばれる。宋王朝政府が官吏を遣わして、「茶綱」を見守っていた<sup>33</sup>。

2 僕はかつて玉山茶場の「社」施設をよくみた。その施設は昔の榷茶場に違いない。ただし、榷茶場はいつから使わなくなったか、正直分からない。史料記録によると、県内には茶場が2つあった。1つは玉山にあって、もう1つは永寧にあった。翰林学士である趙祖鵬は「永寧茶場に榷茶場があって、浙東転運使に管理されていた。「茶綱」発送用の物流センターは玉山だけにあった」と言った。現在では、皆が知っているのは、茶場廟にある疫病よけや豊穰祈願の茶神だけだ。榷茶場はいつ頃に誰かに廃棄されたか。誰も知らない。誰でも知りたくない<sup>34</sup>。

明清時期においても、王朝政府が玉山古茶場を中心に、茶貿易を管理していた。清咸豊2年(1852)に、東陽県政府が玉山古茶場に「奉諭禁茶葉洋価称頭碑」「奉諭禁白術洋価称頭碑」「奉諭禁粮価称頭碑」3つの石碑を建てた。碑文には「平等に貿易を行うべき」、「勝手に白術洋(草薬)や食糧の価格を上がってはいけない」など市場管理の政策が書かれている。つまり、清代中期以降、玉山古茶場では茶貿易以外、草薬(中国民間の薬)や食糧などの貿易も行われるようになった。玉山古茶場は単純な茶貿易管理機構から、農産品市場管理機構に変身した。

このように、宋代から清代末期まで、玉山古茶場は重要な経済管理機能を発揮した。その中には、政府関与の影響が大きかった。政府管理機構のほか、玉山古茶場は茶神許遜を祭祀する活動を行う最も重要な場所でもあった。このような祭祀の機能を持つからこそ、玉山古茶場中の茶場廟が民衆らによって繰り返し修繕されてきた。これが玉山古茶場が現在まで守られ残ってきた最も重要な理由である。

<sup>32</sup> 原文は「開宝七年，東陽県設瑞山玉山巡検司，各有巡検一員，兵額九十八」である。

<sup>33</sup> 原文は「茶場山者，故宋所榷茶地也，設官監之，以迎御命，曰茶綱」である。

<sup>34</sup> 原文は「又嘗事觀玉山茶場社，知社必古榷地，不知以何時獲罷。夫罷一弊政与興一善政，皆記載所急，県凡両茶場，一在玉山，一在永寧。在永寧者，翰林趙祖鵬雲有榷矣，領于浙東転運使；茶綱則在玉山者。可知今社自拙齋其神能風雨一郷不疫癘，而惜乎世知茶場之矣，自拙齋不复知茶場社之罷自誰也」である。

### 第3節 玉山古茶場廟で行われる祭事

#### 第1項 玉山古茶場廟の祭神許遜

玉山古茶場廟に祀られる最も重要な神様は茶神許遜である。茶場廟大殿の真ん中に、巨大な茶神許遜像が置かれている。茶神許遜像の上に、「真君大帝」という神号が書かれた扁額が設置されている。茶神許遜像の前に、祭祀用の机が備えられており、その上に幾つかの小型茶神許遜像が置かれている。茶場廟大殿の壁側に、茶神許遜像が祀られる神棚がある。これは廟会の際に、出回り用に使われる物である。

許遜（239-374?）は中国道教における重要な人物であって、「四大天師」の1人と呼ばれている。歴史上の人物として、彼は中国晋代時期の有名な治水専門家や道士であった。彼の字は敬之と言い、先祖の出身は河南汝南県であった。後漢末期戦乱の時に、彼の父である許肅は江西南昌に避難しに来た。そして、許遜も江西南昌で生まれた。中国道教の「正一」派には、「浄明道」（その全称は「浄明忠孝道」）派という大きな区分がある。許遜はこの「浄明道」派の創始者であって、「許真君」と呼ばれる。北宋の皇帝である宋徽宗が許遜に、「神功妙济真君」の神号を冊封した。

磐安地域においては、許遜と玉山茶についての民間伝説が伝承されている。筆者は2007年に玉山尖山鎮で調査を行った際、東里村村民である厲飛龍氏（当時75歳）、坑畝村村民である胡立培氏（当時73歳）や鐵店村村民である周邦伝氏（当時85歳）3人から、彼らが小さい頃から聴いた民間伝説記録した。この民間伝説の概要は以下の通りである。

中国晋代時期のある年に、玉山の人たちが大量の茶樹を栽培した。しかし、交通不便な山奥にあるため、彼らが作った茶製品を村外に売ることができず、大量に残った。茶農らは悲しみ、所有する茶樹を切った。その時に、旅をしている許遜がここに来た。その様子を見ると、許遜は茶農たちが茶樹を切ってしまった理由を聞いた。状況を把握すると、許遜は玉山で泊まることにした。彼は茶農たちに茶を摘採する方法や茶を炒める技術を教えた。終了すると、彼は少しの茶製品を受け取って玉山から離れて、旅を続けた。ある日、許遜は疫病が流行っているある場所に着いた。彼は玉山から持ってきた茶を煎じ出して、茶の湯を患者たちに飲ませた。しばらくすると、患者たちの病気が全て治った。これで、玉山茶の名が遠いところまで広がっていった。玉山に来て茶を購入する茶商もどんどん増え、玉山の茶農たちの生活も豊かになった。茶農らは許遜に感謝し、代々、彼を「茶神」として祀るようになった。

茶場廟大殿の真ん中には茶神許遜像のほか、巨大な許遜の妻像も設置されている。許遜夫婦像の前に立つのは、顔が真白な「文判官」と顔が真黒な「武判官」である。茶場廟大殿の右側には「土地公」や「土地婆」、左側には「葉相公」<sup>35</sup>や「朱相公」<sup>36</sup>が祀られている。茶場廟に祀られている神々の神像は1992年に新しくつくった物である。茶神許遜は民間祭祀の中心だ

<sup>35</sup> 「葉相公」とは、明代末期の王朝政府内閣首輔であった葉向高のことである。葉向高は庶民のために色々考えたので、民衆たちに愛されてきた。

<sup>36</sup> 「朱相公」は特に浙江省金華地域で多く祀られている。「朱相公」の名前は朱温と言われる。朱温は個人で塩を民衆たちにより安く販売して、政府に逮捕された。しかし、彼は道術を使って、自分の安全をまもった。

が、ほかの神々も大事に祀られている。

## 第2項 玉山古茶場廟で行われる「春社」と「秋社」

中国では、毎年行われる土地神を祀る節を「社日」と言う。「社日」は「春社」と「秋社」に分けられる。玉山古茶場廟においても、毎年2回大きな祭祀が行われ、春の祭祀は「春社」、秋のそれは「秋社」と呼ばれている。「春社」では豊作を祈り、「秋社」では収穫のことを「社神」に報告し、感謝の気持ちを申し上げる。玉山古茶場廟周りの地域においては、茶神許遜が「社神」として祀られている。

中国では、「立春」節から数えて、5つ目の「戊」の日が「春社」の日になる。しかし、清代中期以降、玉山地域で行われる「春社」の時間が陰暦正月14、15、16日に確定された。中国伝統節日の「元宵」節と重なるため、「元宵」節の活動や茶神祭祀の活動が共に行われる。

玉山出身の清代文人である周拙齋（昌霽）の『玉山竹枝詞』に「茶場山の春が来て、茶場廟の外にも草が緑に戻った。大勢の人たちが「春社」に参加し、線香販売の市場ができています。太鼓の音が絶えず、とても賑やかだ」<sup>37</sup>とある。民衆らが線香を茶神許遜に奉納し、良い春茶を収穫できるように祈願する。その後民衆から選ばれた人は茶神許遜像が祀られる神棚を担って、茶場廟から出て歩きまわる。その途中で、「迎花燈」（花燈を迎える）、「舞龍燈」（龍燈を操りながら演技する）などの活動が行われていた。清代時期、玉山古茶場には劇壇があって、「春社」祭祀が終わると、常にここで「社劇」が上演されていた。そして、「春社」イベントの際、商品の貿易も行われていた。

「評茶」イベントは「春社」祭祀にある重要な項目である（「秋社」祭祀にもある）。その参加者は概ね地方の管理者や知識人である。まず、みんなで茶葉を優等茶と劣等茶に選出する。優等茶に選ばれた茶農が、鮮やかな装飾品を飾られて賞品を受け取る。次に、優等茶や劣等茶を煎じて、茶の湯を茶亭に置く。最後に、民衆たちが花燈に書かれた「燈謎」を当てる活動に参加する。当たった人間に、一杯の優等茶の湯を与える。当たらなかった人間に、一杯の劣等茶の湯を飲ませる。清代末期や民国時代、茶販売が衰退したため、「評茶」イベントがあまり行われなくなった。民国時代前期に、「評茶」イベントが数回行われた。1937年以降は完全に「評茶」イベントが消えた[王旭烽 2008:102]。

「立秋」節から五つ目の「戊」の日が「秋社」の日になる。しかし、清代中期以降、玉山地域で行われる「秋社」の時間が陰暦10月14、15、16日に確定された。「秋社」の時は、茶農の収穫作業が既に終わっている。時間も金もあるため、玉山古茶場に来て買い物をする人が大勢いる。「秋社」の参加者に、玉山以外の新昌、天台、嵊県などの住民も多くいるため、その規模が「春社」と比べて遥かに大きい。「秋社」の際は茶神祭祀活動以外、「会場劇」「迎大旗」「興案」「大涼傘」などの活動も行われる。

## 第3項 茶神祭祀の様子

### 1 茶神祭祀活動の流れ

玉山出身の年長者たちに聞いた結果、民国時代では茶神祭祀活動に必要な「福礼」などの準

<sup>37</sup> 原文は「茶場山下春昼晴，茶場廟外春草生。游人雜選香成市，不住蓬蓬社鼓声」である。

備作業が各都郷によって、順番に担当されてきた。こういうやり方が「値年」と呼ばれる。茶神を祭祀する時に「三牲」、いわゆる豚、牛、羊が用意されている。道教の道士が祭祀儀礼の司会をやる。主祭者は民衆に選ばれた地方の管理者あるいは知識人である。

民国時代以降、こういう茶神祭祀活動が一時期消えた。現代では、昔の茶神祭祀活動の流れが復元されている。2020年の「秋社」イベントを例に、その流れは以下の通りである。

① 鐘や鼓を打つ。

② 浄水を撒いてから、茶神殿の門を開く。

③ 大きな銅鑼を13回打つ。

④ 入場する。道士が「天と地と人間が共に合い、日と時間も良いため、玉山古茶場廟が喜ぶの雰囲気に囲まれる」<sup>38</sup>と唱える。それからは香燈、大燈籠、旗燈頭牌、回字旗、号字旗、願字旗、蜈蚣旗、女護法、男護法、許字旗、黃羅傘、琴劍童、男武士、小龍旗、大龍旗などの器物を順番に並べる。その後は茶神祭祀の参加者たちが入場する。そして、道士が「儀仗と供物が全て備え、茶神祭祀の参加者も全員揃ったため、玉山の茶農よ、只今より茶神許遜真君などの神様を祭祀する大典が始まる」<sup>39</sup>と唱える。

⑤ 法師が神様の神霊を迎える。

⑥ 主祭者である周秉忠氏、陳威龍氏が神様たちに線香を奉納する。

⑦ ほかの参加者たちが線香を奉納する。

⑧ 参加者たちは神様たちに「三跪九叩」<sup>40</sup>の礼をする。道士が「先ずは天の神様に跪いて、3回の叩頭をする。1回目は日、月、星の光が永遠に照らすように、2回目は風や雨の災害がおきないように、3回目は多くの幸福をもらえるように祈願する。次に、地の神様に跪いて、3回の叩頭をする。1回目は天下太平のように、2回目は豊作になるように、3回目は長生きできるように祈願する。それからは茶場廟内の神々に跪いて、3回の叩頭をする。1回目は真君大帝の功德が日、月と共に永遠に輝くことができるように、2回目は茶場廟が永遠に存在するように、3回目は茶神許遜真君が民衆の祈願に応えるように祈願する。最後に、酒を茶場廟内の神々に奉納する。これで、礼儀が終了する」<sup>41</sup>と唱える。

⑨ 敬茶（茶を奉納する）。道士が「茶神許遜の道教修養が高く、徳も広い。彼は茶の世界を広げて、民衆たちに富をもたらした。民衆たちはその恩を感謝して、茶神許遜に茶を奉納する。1回目は茶場山からずっと良い茶葉が取れるように、2回目は茶産業の利益が川の流れのように、3回目は茶産業を含む各産業が繁盛できるように祈願する」<sup>42</sup>と唱える。

⑩ 敬酒（酒を奉納する）。道士が「茶神許遜が山に住んでいる民衆たちに良い生活をもたらした。民衆たちはその恩を感謝して、茶神許遜に酒を奉納する。1回目は茶場廟が永遠に存

<sup>38</sup> 原文は「天地人和，日吉時良，茶場古廟，喜氣洋洋」である。

<sup>39</sup> 原文は「儀仗已到，上供已畢，參祭人員，各已就位，庚子年玉山茶農，真君子民祭祀茶神大典現在開始」である。

<sup>40</sup> 「三跪九叩」は古代中国祭礼にある最敬礼である。いわゆる神様に三回跪いて、礼をする。跪く時は三回頭を地面に叩く。これを通じて、神様に対する尊敬の気持ちや真心を申し上げる。

<sup>41</sup> 原文は「首敬蒼天，跪，一叩首日月星辰三光永照，二叩首風調雨順四季分明，三叩首災隨電掃福如雲湧，起；把酒敬天，最敬大地厚土，跪，一叩首江山永固天下太平，二叩首五谷豐登百業興旺，三叩首壽比青山永不老福如万物連綿生，起；三敬茶場廟内一切諸仏，跪，一叩首真君大帝功德与日月同輝，二叩首茶場廟千年同秀与天地共存，三叩首許真君威風顯赫衆子民誠求得應，起；把酒敬茶場廟内一切諸仏，礼成」である。

<sup>42</sup> 原文は「茶神許遜，道高德広，撒世名茶，拓民財源，子民感恩，誠心敬茶。首敬茶，拜，茶山綿々，茶葉青青；再敬茶，拜，茶源滾滾，財源流長；三敬茶，拜，接福，茶興百興，百業興旺」である。

在するように、2回目は真君大帝の徳が永遠に輝き続けるように祈願する。3回目は福を迎える」<sup>43</sup>と唱える。

⑪ 茶神許遜真君に礼楽を献ずる。

⑫ 主祭者である周秉忠氏は祭文を読む。

⑬ 参加者たちが全員茶神許遜真君に3回のお辞儀をする。道士が「1回目は富がどんどん集まるように、2回目は茶神許遜真君の恩恵が永遠に続くように祈願する。3回目は喜びに溢れるように」<sup>44</sup>と唱える。

⑭ 茶神許遜真君を迎え、茶場山を見回る。音楽を演奏して、茶神許遜像が祀られる神棚を担って、茶場廟から出て歩き回る。

## 2 祭文について

周秉忠氏が読んだ祭文の内容は以下の通りである（写真2-6）。

震旦中華歳次庚子十月十六之吉旦

爰有玉山茶農真君子民祭祀茶神大典之

主祭 周秉忠

助祭 陳威龍などの24人

執事 韋茂華などの6人

法師 楼玉龍 躬率

玉山茶農 真君子民

沐身浄心 虔誠謹備

炉中清香 紅燈宝燭 茶谷米磔 雲霧仙茶

糯米新酒 水花豆腐 珍珠米飯 全豚全羊

刀頭全鷄 葷素菜肴 糖果糕点 金果鮮果

饅頭粽果 年糕五谷 宝斗白馬 絳卷龍砲

恭祭茶神真君大帝 懇請

光将領納 希垂印可 仰冀

神恩浩蕩 福澤子民

叢此

天地人和 国泰民安 風調雨順 万物興繁

社会和諧 歡樂共享 隣里相親 互帮互讓

家門吉慶 喜氣洋洋 合家和睦 称心如意

男勤女賢 老健少壯 財如潮涌 福似雲漲

居家安寧 外出順暢 五谷豐登 百業興旺

財丁兩旺 富貴榮華 笏子笏孫 百代榮昌

我等子民 感恩思源 今備豐齋 誠表心願

<sup>43</sup> 原文は「茶神許遜，澤被山陬，真君子民，万民感恩，首敬酒，拜，茶場廟天長地久与天地共存；再敬酒，拜，真君大帝德澤千秋光耀万代；三敬酒，拜，接福」である。

<sup>44</sup> 原文は「一鞠躬，財源滾滾；二鞠躬，福澤滔滔；三鞠躬，喜氣洋洋」である。

伏惟尚饗

歲次庚子十月十六日

祭文では先ず参加代表者を紹介している。次に書かれたのは茶神許遜に奉納する様々な供物である。最後に書かれたのは参加者からの多くの祈願である。祭文の主役は茶神許遜であって、祭祀者は主に茶農や茶商である。

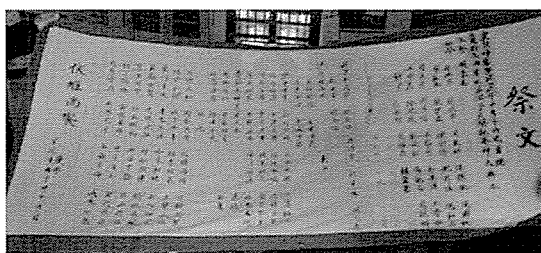


写真 2 - 6 茶神祭祀に使う祭文

(2021年11月20日 筆者撮影)



写真 2 - 7 「拝懺」儀式の様子

(2021年11月20日 筆者撮影)

### 3 「拝懺」儀式

2021年の秋に、筆者は玉山古茶場に行って「秋社」を調査する予定だったが、コロナの影響を受け、「秋社」の主活動である廟会が政府によって中止された。当地の民衆だけが陰暦10月15、16日に簡単な茶神祭祀の儀式を行った。15日の供物は豚の頭、豚肉、丸鶏、米、面、豆腐、厚揚げ、餅、もやしなどの3種の野菜、9種の果物や1袋の茶葉であった。茶葉は毎回の祭祀活動に欠かせない供物である。16日に「拝懺」儀式を行った(写真2-7)。儀式は朝9時に始まって、司会者は周姓の85才の道士であった。彼はまず7つの都郷の代表者が出した「拝懺文疏」を読んだ。それからは代表者が自分の「拝懺文疏」を取って、茶神奉納用の机に置いた香炉に入れて燃やした。その中の1つの「拝懺文疏」の内容は以下の通りである。

太歳宝懺延生文疏

伏以

仏恩広大宏開植福之門法力維深大啓延生之路

爰有 一泗天下 南瞻部洲

今据中華人民共和国浙江省磐安县玉山郷(鎮)

馬塘村地方界下居住奉仏設供礼懺祈福消災赦罪植福延生

信 人 趙某某

生于一九五七年六月十四日

## 第4節 磐安の茶神信仰の変遷

### 第1項 伝統的な茶神信仰の伝承

## 1 物質の伝承

長い歴史の中で、玉山古茶場および古茶場廟が壊されたことは何回もあった。そして、何回も修繕、あるいは建て直された。それにもかかわらず、玉山古茶場および古茶場廟の位置は変わりがなかった。このような歴史的な伝承は、玉山古茶場および古茶場廟が国の重要文化財にされた重要な理由であった。そして、玉山古茶場にある「奉諭禁茶葉洋価称頭碑」「奉諭禁白術洋価称頭碑」「奉諭禁粮価称頭碑」に書かれたように、そこはずっと貿易市場として使用されてきた。

茶神信仰方面において、大旗は昔から茶神祭祀活動の重要な道具として伝承されてきた。大旗の材料はシルクに限定されていた。清代時期に、1つの大旗をつくることは3年近くの時間が必要であった。文化大革命の際、昔つくった大旗が概ね破壊された。忠信荘にある大旗は現在唯一の古物である。大旗の布部分のサイズは縦17.6m・横16.1mで、旗面の面積は283.36㎡である。大旗に付けたのは、長さが33mの竿である。忠信荘の老人に聞くと、文化大革命以前の頃、この大旗は多くの大旗に最も小さな物であったという。最も大きな物は忠信荘の大旗の1.5倍の大きさだった。大旗全体は旗頭、旗面、縄、竿、棚がある。主竿は1本あって、主竿を支える撐竿は60本ある。大旗に使う縄が8つある。主竿は上と下の二段がある。下の段は長さが9mの大杉の木で、上の段は特大な竹竿である。竹竿は大杉の木の上部に、9つの鉄製の箍で固定されている。60本の撐竿も傘下の支えのように、鉄製の箍にしめ付ける。主竿の頂部に、高さが2.5m・直径1mの瓢箪形の旗頭を掛けられている。旗頭の下部に引く用の8つの縄をしめ付ける。龍と虎が描かれた旗面は、主竿上段の竹竿に掛けられている（写真2-8）。主竿の下部は「井」形の棚に置かれている。こうすると、「迎大旗」の際はすぐに主竿を出すことができる。



写真2-8 「迎大旗」の風景

（出典：磐安茶文化博物館）

「宝斗」も茶神祭祀活動に使われる非常に重要な道具である。茶場廟に祭祀される神々の傍に宝斗が置かれている。宝斗は普通の大人程度の高さで、下から上まで4層の宝塔がある。各宝塔は6面があって、全ての面に綺麗な切り紙が貼ってある。下の2層の切り紙は花と鳥の図案で、上の2層は「八仙」<sup>45</sup>伝説の図案である。各宝斗に4つの旗が挿してある。2つは龍紋の旗で、もう2つは鳳凰紋の旗である。宝斗は無数の人手で折った元宝（金）で組み立てた物である。元宝は経文が書かれた金箔紙を使って折った物である。金箔紙を使う際に、その上の経文を読まなければならない（写真2-9）。宝斗をつくる作業は大量の時間や人力が必要である。1つの「宝斗」をつくるには、1万元（20万円ほど）以上の金がかかる。この金はいわゆる茶神に奉納する礼金のことである。茶神祭祀活動の最後に、7つの都郷の7つの宝斗を茶場廟前の空地に運んで燃やす。こういう動きは「化斗」と呼ばれる。化斗の時はみんなが長い竹竿を使って、宝斗を炎の中心部に移動させる。筆者も参加者たちに誘われて、「化斗」活動をした。こうすると、茶神は「化斗」した人に好運をもたらすという（写真2-10）。7つの宝斗を奉納する伝統は現在でも伝承されている。



写真2-9 宝斗



写真2-10 「化斗」活動の様子

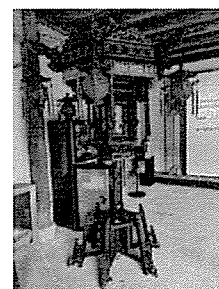


写真2-11 花燈

(2021年11月20日 筆者撮影) (2021年11月20日 周秉忠氏撮影) (2021年9月30日 筆者撮影)

## 2 口頭の伝承

現在磐安地域で流布している茶神許遜と玉山茶の伝説は、まさに玉山人の先祖が口頭で代々伝承してきたものである。筆者は調査の際に、あることに気がついた。当地の人間が茶場廟に来て茶神許遜像に拜む時、いつも口から何らかの話をつぶやいた。ある陳氏婦人（70歳）に聞くと、毎回つぶやいているのは「接仏経」というものであった。「接仏経」の内容は以下の通りである。

八月一日に線香を持ち、玉山古茶場廟に来た。茶神許遜夫婦を迎え、茶場廟の真ん中に座る。土地公、土地婆を迎え、茶場廟の両側に座る。文判官、武判官を迎え、茶神の前に立つ。神々が揃うと、綺麗な齋衣を奉納する。家族の人間がみんな幸福で、長生きよう祈願する。南無仏、南無阿弥陀仏。<sup>46</sup>

<sup>45</sup> 「八仙」は中国道教の仙人システムにある最も代表的な存在である。八仙とは何仙姑、韓湘子、藍采和、李鉄拐、呂洞賓、鐘離権、曹国舅、張果老八人のことである。

<sup>46</sup> 原文は「八月初一一柱香，香煙裊裊到茶場，接来真君大帝，夫人坐中堂，接来社公土地坐兩側，接来文武判官推前面，一壇神仏都接過，敬奉齋衣賽鳳凰，保得合家男男女女都福壽長，南無仏、南無阿弥陀仏」である。



この「接仏経」の内容は皆が暗記できる簡易なものである。しかし、「接仏経」の内容が書かれた史料が見つからない。「八月一日」については、茶神許遜の誕生日だと言われる。神々の名を順次と呼ぶことは、いわゆる「接仏」である。この「仏」は仏教の仏ではなく、全ての神霊を指している。「接仏経」を唱えながら祈願すると、願望が叶いやすいと言われる。グループ的な茶神祭祀と異なり、「接仏経」は個人的な茶神祭祀の一表現である。しかし、現在「接仏経」を唱えられる人間は概ね老年者であって、暗記できる若者が少ない。

### 3 儀礼の伝承

#### ①「迎花燈」

「春社」の際、各村落が「花燈」を製作して茶場廟に送る。そして、茶神祭祀が終わると、また「花燈」を迎えて自分の村落に戻る。「花燈」（写真2-11）は「龍燈」「人物燈」「台閣燈」3種類がある。その中で、嶺口村がつくった「台閣燈」が最も有名である。嶺口村には昔から「花燈」製作の組織「燈会」があって、そのメンバーたちが「会脚」と呼ばれる。嶺口村にある95%の村民は「燈会」の「会脚」である。「花燈」製作の費用は、専用地「会田」からの産出を販売してもらった分である。村全体は「上半村」と「下半村」に分けて、3年ごとに変わって「会田」の経営、「花燈」製作や「迎花燈」活動を担当する。毎回製作する「花燈」の数は50-70個である。「迎花燈」活動の参加者は100人を超えている。「迎花燈」活動は文化大革命期間に中断していたが、1980年代に復活した。

#### ②「迎大旗」

「迎大旗」イベントは民国時代に「大旗会」と呼ばれていた。清代文人である周昌霽の『玉山竹枝詞』に「十月中旬に行われる茶場廟会の「迎大旗」の報道が忙しい。茶場廟には大勢の人がいる。綺麗な図案が描かれた大旗を長い旗竿で掲げて、その幅が十丈を超えている」<sup>47</sup>とある。「迎大旗」の参加者は「旗脚」と呼ばれる。1つの大旗を挙げるには、120人程度の「旗脚」が必要である。大旗を挙げる際は「旗脚」たちが大きな声を出し、銅鑼と太鼓も一斉に鳴らす。大旗を挙げると、それを操りながら玉山古茶場を歩き回る。一回りすると、大旗を「井」形の棚に固定する。大旗が風に吹かれて舞い上がって、非常に綺麗である。年長の参加者に聞くと、最も多い時は36面の大旗があった。「迎大旗」については、2つの由来がある。1つは明代末期に当地にあった清軍に反抗する戦争に追求する。もう1つは明代人である戚継光が倭寇と対抗する戦争に求める。いずれにせよ、「迎大旗」イベントの中心は茶神許遜であることは間違いない。

#### ③「大涼傘」祈願

昔に雨が降らない時は、玉山周辺の村民たちが「大涼傘」を使って、茶神許遜に降雨を祈願していた。日が強いので、茶神許遜を迎えると送る際に「大涼傘」が使われていた。「大涼傘」が重くて、それを挙げるには4人の丈夫な男性が必要である。ある老年者が「民国時代に参加

<sup>47</sup> 原文は「十月中旬報賽忙，茶場人得看場旺，載羅百幅為旗幟，高掲旗竿十丈強」である。

した降雨祈願活動に、100個以上の「大涼傘」があった」と言った。しかし、現代では、「大涼傘」はほぼ使われていない。

#### ④「興案」のパフォーマンス

「興案」は茶神許遜の儀仗隊のことである。「興案」のパフォーマンスが賑やかなので、「迎好看」とも呼ばれる。茶場廟会の際、「興案」は1つの村落に着くと、必ずパフォーマンスを披露する。「興案」パフォーマンスの演目は「聖旨蔭祿」「天官賜福」「八仙」「台閣」「銅鈎鞭」「十二花名」「七朵花」「十字蓮花」「大蓮花」「大花鼓」「鑼手」「三十六行」「駱駝班」「暎羅漢」などがある。全ての村落でのパフォーマンスが終わると、最後に茶場廟に入る。

茶場廟で行われる祭祀活動とは異なり、こういう礼儀の伝承が多くの場所を歩き回る。よって、民衆たちが参加する情熱が高い。これらの伝承は民衆たちが自発的・自主的にできるもので、浙江省で唯一の「生きている」茶神信仰と言える。

## 第2項 現代における茶神信仰の変遷

### 1 茶神信仰主体の変遷

宋代から明代まで、玉山古茶場は政府に税金徴収や茶貿易の場に指定されていた。民間にも茶神許遜を祭祀する活動があったが、茶神祭祀の主体は政府であった。しかし、清代中期以降、民間における茶貿易が急速に進んできたため、茶神祭祀の主体は茶農・茶商と変わった。特に民国時代から、玉山古茶場を修繕、あるいは建て直したのは概ね玉山地域の民衆であった。その後、茶神許遜は茶産業に限らず、玉山地域の地方神となった。

2006年から、浙江省省委書記を務めた習近平氏は玉山古茶場の復興に大きな役割を果たした。数年後に、彼は中国国家主席となった。それで民間では、習近平は茶神許遜の恩恵を受けたため、国家主席となったという考えが急速に広がった。官員になりたい人ともっと高い官位に昇進したい人は、みんな玉山古茶場に来て茶神許遜に祈願する。茶神許遜は官運とも関わる神様となった。

### 2 非物質文化遺産登録以後の茶神信仰の変遷

茶神許遜祭祀を中心とする「春社」「秋社」などの民俗活動は通常は「趕茶場」と呼ばれる。2008年に、「廟会（趕茶場）」が中国非物質文化遺産に登録された。中国における多くの文化項目が中国非物質文化遺産に登録された理由は、それ自身が維持できなくなって、政府が関与しないとすぐに消滅するからである。しかし、玉山古茶場の「廟会（趕茶場）」は、それらとは全く異なる。

現在においても、玉山地域にある7つの都郷の民衆たちが自発的・自主的に各都郷の代表を選出して、祭祀代表委員会をつくる。委員会は民衆たちが自発的に出した経費を管理・使用などをして、明細公開なども行っている。茶神祭祀活動の主祭人は委員会の主任であって、その人は玉山地域の民衆から大変な尊敬を集めている。現在委員会の主任を務める周秉忠氏は「廟会（趕茶場）」非物質文化遺産の伝承人でもある。一方、彼は政府によって玉山古茶場文化財

保護所所長に任命された。これで、「廟会（趕茶場）」は民間組織のほか、政府の影響もあった。コロナの災害が始まってからの2年間、「廟会（趕茶場）」が中止となった。指示をしたのは政府であった。

政府関与の影響を受け、「廟会（趕茶場）」は磐安县政府の対外宣伝の手段ともなった。例えば、伝統的な「迎大旗」イベントは玉山古茶場で行うものである。大旗の旗面には普通龍と虎が描かれる。しかし、2021年11月に、磐安县政府は玉山古茶場以外の場所で行われる中薬材（草薬）博覧会に、「迎大旗」のパフォーマンスを演じさせた。大旗旗面の真ん中に「薬」が書かれ、その周りに描かれた内容は磐安県産の草薬ばかりであった（写真2-12）。このような活動は茶神祭祀と全く関係ない。磐安县政府が「廟会（趕茶場）」をこのように利用する動きは、決して良い事ではない。

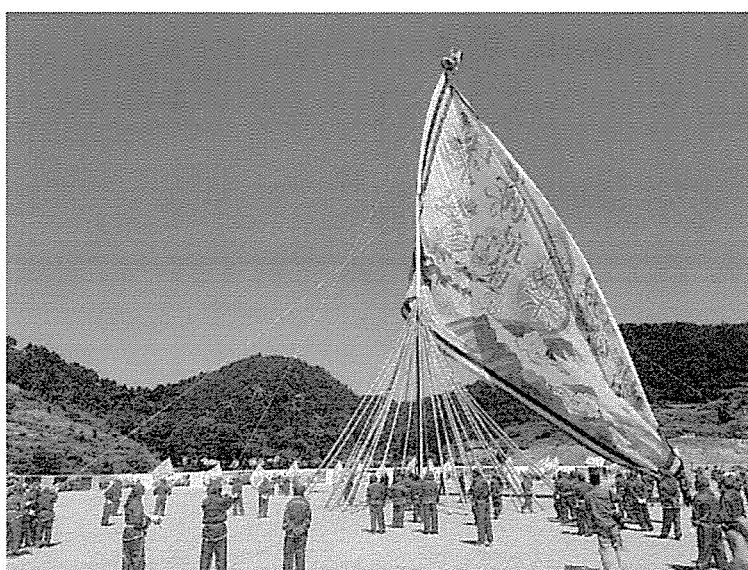


写真2-12 中薬材（草薬）博覧会に行われる「迎大旗」イベント

（2021年9月29日 筆者撮影）

### 3 商業開発によってもたらされた茶神信仰の変遷

玉山地域の茶神信仰は昔から、商業貿易と関わっていた。しかし、現代で行われる商業開発運動が昔の商業貿易とは全く異なる。元々玉山地域のブランドは「磐安雲峰」であった。商業開発によって、大量の「磐安雲峰」茶が「龍井茶」に加工され販売されるようになった。茶農・茶商の利益が大幅に増えたが、「磐安雲峰」の地域ブランドがピンチになった。「龍井茶」を生産する玉山地域になると、杭州地域の茶神を祭祀すべきか、茶神許遜を祭祀すべきかという問題も生じた。

政府と商社の観光開発によって、玉山地域を訪れる観光客は増加した。ほかの地域にある古い茶樹をここに移して、偽物の「古茶樹林」をつくった。商店、民宿、飲食店などの観光施設も多く建てられた。玉山古茶場は観光客のための場としても機能するようになり、地域住民が茶神許遜を祭祀する神聖な信仰の場としての機能は薄らぐことになった。昔の「廟会（趕茶場）」

の参加者は概ね玉山地域の住民であった。現在の「廟会（趕茶場）」には、むしろ観光客の人数の方が多い。その中には、茶神許遜を祭祀するために来た観光客がどれほどあるだろう。

## 小結

以上のように、玉山古茶場廟の歴史、茶場廟における祭神や茶神祭祀の流れを説明した。茶産業者の納税や茶貿易を管理するために、玉山古茶場ができた。それからは茶神許遜の祭祀活動も始まった。現代では、玉山古茶場廟に行われる茶神祭祀活動は史料や老人の話を参考にして復元したものである。しかし、政府と商社の観光開発や非物質文化遺産に登録された事情の影響を受け、磐安の茶神信仰も変わりつつある。特に「廟会（趕茶場）」などの茶神祭祀活動は次々と商品化・観光資源化されてきた。

明代以前の茶神祭祀は政府に主導されていたが、清代中期から地方民衆の影響が徐々に強くなり、そして、民国時代では地方民衆が茶神祭祀を主導する力となった。しかし、最近では玉山古茶場に来る観光客が急増してきて、茶神祭祀活動の重要な参加者となった。観光客の目を引くために、茶神祭祀活動の中でもパフォーマンスの割合が増えてきた。それにもかかわらず、昔も今も茶神許遜祭祀は磐安の茶神信仰の核心であることは変わりが無い。これこそが磐安の茶文化が復興できる根本的な力であった。

今後は中国における茶神信仰のシステムを把握するために、磐安の茶神許遜信仰と浙江省湖州の茶神陸羽信仰、浙江省天台地域の茶神葛玄信仰、雲南省普洱茶産区の茶神諸葛亮信仰や少数民族集住地域の茶神信仰との比較研究を行いたい。

## 第3章 茶文化伝承に及ぼす政治的影響

### — 杭州西湖龍井茶の伝承事例から —

#### はじめに

中国各地にある様々な種類の茶の中で、最も有名なものは「杭州西湖龍井茶」である。筆者の杭州西湖龍井茶研究は2009年から現在まで継続して行なっている。2020年からは「権力と茶」というテーマで、調査を始めた。具体的な調査地は梅家塢村、龍井村および他の龍塢鎮地域である。

現在では、龍井茶についての論文・著作は数多くあるが、政府的な権力の影響についての研究はほぼない。龍井茶の伝承・変遷の流れにおいては、中央政府は如何に「権力」を使って、龍井茶を中国における最も有名な茶に構築してきたのか。地方政府は如何に「権力」を運用し、龍井茶の権威をつくってきたのか。また、龍井茶を栽培・製作・販売する民衆たちは如何に「権力」的な要素を利用し、その商業化を進めてきたのか。これらの疑問はまだ解けていない。

本章では龍井茶の歴史、龍井茶の茶具、龍井茶の製作法、龍井茶についての伝説、龍井茶を栽培・製作・販売する茶農・茶商の状況や政府の龍井茶政策などを通じて、杭州西湖龍井茶伝承にある「権力」的な要素の影響を明らかにしたい。

#### 第1節 杭州地域における龍井茶の歴史

##### 第1項 唐宋時期の龍井茶

茶聖陸羽の『茶経』に「杭州の茶は天竺寺や靈隱寺にある」<sup>48</sup>がある[吳2005: 239]。杭州茶文化の歴史は唐代に遡る。そして、杭州の茶は仏教寺院と緊密な関わりがあったということである。北宋時代になると、有名な杭州茶が多く出てきた。「香林茶」は靈隱下天竺香林洞の名物であり、上天竺白雲峰産の「白雲茶」や葛嶺宝雲山産の「宝雲茶」も有名であった。これらは全て龍井茶の前身である[程・姚2008: 2]。

北宋時代の弁才和尚は、龍井茶の形成に大きな役割を果たしたと言われている。弁才和尚は杭州知府（現在の杭州市長に相当する）を担当していた蘇軾の仲間であった。現在の杭州市龍井村や獅峰山の辺りでは、2人と関係がある古跡や伝説がまだ多数残っている。文人や僧侶が寺院中の茶園で品茶（茶を味わい）ながら参禅する風景は早期龍井茶文化のイメージである。蘇軾が詠んだ詩に「谷雨節の前後に白雲峰にある茶樹の葉が芽生える。この時の茶葉は新鮮で、彩りも良いため、摘採する最も良い時期である。」<sup>49</sup>という名句がある。谷雨節の前後に龍井茶を摘採する風習は現代社会においても守られている。民間では、蘇軾が「老龍井」という扁額を書いたという言い伝えがあり、その扁額は獅峰山麓にある寿聖寺胡公廟に保存されている。

南宋時代に入ると、杭州は首都になったため、飲茶風習がより一層盛んになってきた。『夢梁録』、『都城紀勝』、『武林旧事』などには、飲茶風習の記載が多くある。南宋時代の文人

<sup>48</sup> 原文は「錢塘生天竺、靈隱二寺」である。

<sup>49</sup> 原文は「白雲峰下兩旗新，膩綠長鮮谷雨春」である。

である呉自牧の『夢梁録』に「杭州城の茶肆には季節の花が植えられて、名人の画が掛けられている。きちんと飾り立てられている店では一日中各種類の茶の湯が販売されている。」<sup>50</sup>のような高雅な茶館の記述もあれば、「町には茶の壺を持ち、家ごとに回って販売する人がいる。陰暦毎月の一或は十五日に、良いこと或は悪いことがあった際、常に茶を注文し、その人に依頼し伝言などを言い渡す。」<sup>51</sup>のような庶民的な飲茶風習も書かれている[呉 1984: 96]。つまり、文人や僧侶に限らず、南宋時代の杭州では飲茶風習は既に庶民化され、その産業化も進んでいた。

唐宋時代の中国人飲茶の主流方式は「末子茶」である。これは、餅型に加工された茶を茶粉にしてから飲用する方式であり、現代中国人の飲茶方式と全く異なっている。実際、普洱茶以外は、現代中国で販売される茶商品はほぼ餅型に加工されていない、干したままの状態の茶である。そして、普洱茶を含めて、現代中国人は飲茶の際、茶葉を茶粉にせず、直接飲茶道具に入れ、お湯を入れて茶葉を浸してから飲む。

## 第2項 元明清時代の龍井茶

干したままの状態の龍井茶を飲茶道具に入れて、茶葉を浸してから飲む方式の形成と完成は元明清時代のことである。

元代の文人である虞集の詠んだ詩に、「次鄧文原游龍井」[劉楓 2009: 89]がある。その中には「龍井という山地に沿って散歩すると、もともと晴れていた天気だんだんと曇りになって、知らず知らずのうちに霧の中に入った。」<sup>52</sup>という句がある。これは「龍井」という場所を明確に記載した最古の史料である。また、詩の中に「「龍井」本地の水を沸かしたお湯で、「谷雨」節の前に取った新茶を淹れる。」<sup>53</sup>という句がある。このような飲茶風習は現在でも残っている。ほかには、飲茶する時の風景を「一緒に来た二、三人の友達と飲茶する。茶の湯を口に入れて三回も味わっていたが、まだ飲み込みたくない。」<sup>54</sup>と表現している。龍井地産茶の旨味を想像させるが、その時点で「龍井」という茶の名称があったかは定かではない。

「龍井」という茶の名称が正式に使われるようになったのは、明代になってからのことである。萬歴年間(1573-1620)の『杭州県誌』に「西湖南北の両山地産の龍井茶は絶品である。」<sup>55</sup>とある[劉・陳 2005: 176]。『錢塘県誌』にも「龍井茶は豆花の香りを持ち、色が清らかで味が甘い、他の山出産の茶とは異なる。」<sup>56</sup>とある[錢塘丁氏 1893]。ほかには、田芸衡の『煮茶小品』、許次紆の『茶疎』、高濂の『遵生八箋』、馮夢禎の『快雪堂漫録』などの杭州出身の明人たちの著書にも、龍井茶の記述がある。

清代は龍井茶が有名になった最も重要な時期である。特に乾隆皇帝はその生涯に4回も龍井を訪れ、そして毎回、龍井茶を讃える詩を詠んでおり、その数は32首にも及んでいる。ほかにも彼は、龍井茶産地の8箇所を扁額を揮毫している。さらに胡公廟の前にあった18株の茶

<sup>50</sup> 原文は「今杭州城茶肆亦好之，種四時花，掛名人画，装点店面，四時壳奇異湯」である。

<sup>51</sup> 原文は「巷陌街坊，自有提茶壺沿門点茶，或朔望日，如遇凶吉一事，点水隣里茶水」である。

<sup>52</sup> 原文は「徘徊龍井上，雲氣起晴昼」である。

<sup>53</sup> 原文は「烹煎黄金芽，不取谷雨後」である。

<sup>54</sup> 原文は「同来二三子，三咽不忍漱」である。

<sup>55</sup> 原文は「老龍井，其地産茶，為兩山絶品」である。

<sup>56</sup> 原文は「茶出龍井者，作豆花香，色清味甘，与他山異」である。

樹を「御茶」として冊封した。このように、乾隆皇帝によって龍井茶の名は天下にとどろいた。それ以降、杭州西湖龍井茶は清朝皇族の重要な飲用品になった。杭州の民間にも、乾隆皇帝と龍井茶の伝説が数多く残っている。

龍井村にある、乾隆皇帝に「御茶」として冊封された 18 株の茶樹（写真 3-1）は有名な観光地となった。龍井村村民である仇氏（女性、72 歳）に聞くと、昔はこの 18 株の「御茶」は他の普通の茶樹と同様に取り扱われて、生産隊に管理されていた。改革開放以降、土地が家ごとに分担されてからは、龍井村のある民家の物となった。姚国坤氏（85 歳）の記憶によると、1998 年 4 月-7 月の間、彼は王家揚（中国国際茶文化研究会創会会長）、楊招棣、厲徳馨と一緒に広東省、福建省、江西省、山東省などへ茶文化の調査を行ったという。浙江省に戻ると、彼らは 18 株の「御茶」を保護し、観光地として建設する方を起草した。現在、18 株の「御茶」は大人気の観光地となっている。

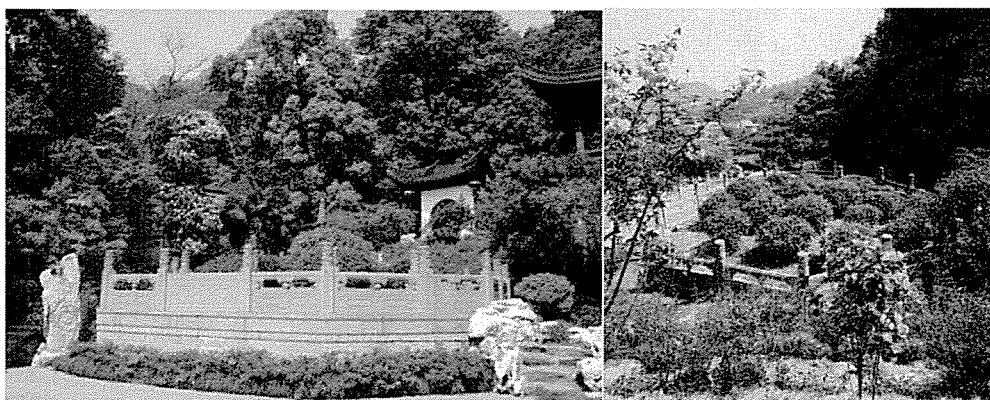


写真 3-1 18 株の「御茶」

（2022 年 5 月 23 日 筆者撮影）

### 第 3 項 近現代の龍井茶

明清時代、杭州は「徽商」が茶貿易を經營する重要な都市となった。清代末期と中華民国時代、龍井茶の貿易が行われた「四大茶屋」は、汪裕泰（1856 年創立）、翁隆盛（1687 年創立）、翁隆順や方正大（1917 年創立）によって經營された。

筆者は王卓再先生（92 歳）に聞き取り調査を行った時、貴重な話を聞かせてもらった。「民国時代（1911-1949）の杭州では、袁長洪という炒茶工（茶を製作する匠人）がいた。彼は特別な炒茶（茶を炒める）方法を發明した。簡単に言うと、まずは大量の茶葉について大まかな乾燥作業を行う。それから多回に分けて少量の茶葉を炒める。このように製作した茶葉の形は美しい。袁長洪は商家から大金で雇われ、その製作技術を外部に流さないように、ある部屋に閉じ込められた状態で茶をつくっていた。袁長洪は仕事を辞めて故郷に帰り、儲けたお金を使って多くの土地を買った。しかし、故郷で行われた「土地改革」運動により、彼は地主階級と定められ、厳しい管制を受けた。中華人民共和国が建国されてから、杭州で国营龍井茶場が創立された。当時の茶場長は袁長洪を誘って、龍井茶を製作する技術を教えた。それが現代龍井茶製作の始まりであった。」

国家主席である毛沢東は四十数回も杭州を訪れ、龍井茶に特別な関心を示した。彼は 1963

年4月28日に杭州の茶園に入り、自ら龍井茶の茶葉を摘採した。現在の龍井村には記念亭があり、その中には毛沢東が摘採した茶樹が保護されている。1957-1963年の間、国家総理であった周恩来は5回も杭州梅家塢を訪れて、外国の国家元首と一緒に龍井茶を飲用した。そして、彼は龍井茶の経済的にきちんとやらなければならないと話した。

1960年に、中国農業科学院茶葉研究所によって、龍井茶茶樹の改良種類「龍井43号」が育成され、1987年以降、「龍井43号」の栽培が普及した[俞 2006: 82]。これにより、龍井茶の産量が大幅に増え、その産業化も進んできた。

2011年に「杭州西湖文化景観」が世界文化遺産に登録された際、「龍井」「茶文化」もICOMOS報告書に記載されている[杭州日報 2011年6月30日B: 8]。

(表3-1)に出ている人物はほんの一部であり、明清時代には龍井茶の名が高まり、龍井茶に関わる詩を詠んだ詩人も数え切れないほどあった。現代でも、毛沢東、周恩来、リチャード・ニクソンのほか、龍井茶を好んだ国家指導者が多くいた。また、(表3-1)の通り、『茶経』には杭州茶のことが書かれているが、「龍井」という名称がまだ出ていなかった。明代になり「龍井茶」という名称が正式に使われるようになったが、それもただ一地域の名茶に限られていた。清代の乾隆皇帝以降および1949年以降の現代中国において、龍井茶は中国名茶となり、海外でも龍井茶が有名になってきた。表1に龍井茶と関連する国家指導者の名が多く出ているように、それは最高権力者と深く関わっている。

また、表3-1からは杭州の政治的な地位の変化と龍井茶との関わりを読み取ることができる。中国の茶産地の大部分が南方にある一方、中国の都は西安、北京などの北方地域に置かれている。南宋時代だけ、南方地域の杭州が中央王朝の都となった。このような杭州の政治的な地位は、龍井茶の地位にも大きな影響を与えている。長い歴史の中で、蘇州の「碧螺春」茶は清代の康熙皇帝に愛好されていた。安徽の「祁門紅茶」も現代中国の国家指導者であった鄧小平に認められている。しかし、蘇州も祁門も都となったことがなく、その政治的な地位は杭州より低い。

注意したいことは、清末民国時代と比べ、1949年以降の現代中国における龍井茶の状況が大きく変わったことである。清末民国時代は「茶屋」を經營する茶商が龍井茶經營を主導していたが、1949年以降、その主導権は茶商という個人から国家・政府に移された。この時期の龍井茶の栽培・製作・販売が全て国家・政府の権力によって管理・運営されていた。国家・政府は龍井茶を中国の外交活動や対外貿易に使い、重要な役割を担わせていたが、これについては後節で詳しく説明する。



表 3 - 1 龍井茶の歴史

時代	龍井茶の状況	杭州の地位	重要な人物
唐代、 五代十国	杭州天竺、靈隱の茶が『茶経』 に記載されている。	唐代は重要な州、五代十国時 期は呉越国の都であった。	陸羽
北宋	杭州の茶は地域名茶になっ た。	重要な府であった。	蘇軾、弁才
南宋	杭州市民の飲茶風習が盛んだ った。	国の都であった。	
元代	虞集は書いた詩に、「龍井」 が初めて出た。	江南地域における政治・経 済・文化の中心であった。	虞集
明代	「龍井茶」の名称が正式に使 われるようになった。	浙江省政府所在地であった。	田芸衡、許次 紓、高濂、馮 夢禎
清代	18 株の龍井茶茶樹が乾隆皇帝 に「御茶」と冊封された。	浙江省政府所在地や皇帝の 離宮所在地であった。	乾隆皇帝
清末民国時 期	「茶屋」経営が始まった。現 代龍井茶製作技術が発明され た。	浙江省政府所在地であった。	「茶屋」経営 者、袁長洪
1949 年以降 の現代中国	国指導者に重視され、「国礼 茶」や「中国十大名茶」ナン バーワンとなった。	浙江省政府所在地である。	毛沢東、周恩 来、リチャー ド・ニクソン

(筆者作成)

## 第 2 節 龍井茶の茶具と龍井茶製作法の伝承

### 第 1 項 龍井茶の特徴

「杭州西湖龍井茶」は緑茶類に属し、その最も大きな特徴は干した茶葉が平たい形を呈することである(写真 3 - 2)。龍井茶の茶樹は原生茶樹と「龍井 43 号」に分けられる。1960 年以前の杭州にあったのは全て原生茶樹である。18 株の「御茶」も原生茶樹である。西湖龍井茶一級保護区には、まだ原生茶樹が多くある。原生茶樹は雑交種に属するため、有性繁殖しなければならない。同じ茶園としても、その中にある茶樹や茶葉の形態が大きな差異がある。このような茶葉でつくった龍井茶は香りが良く、味も濃厚である。しかし、彩りや外観は良くない。

「龍井 43 号」は中国農業科学院茶葉研究所によって、人工的に育成された無性繁殖の茶樹種類である。「龍井 43 号」の茶葉でつくった龍井茶は彩りや外観が良いため、茶農や消費者

に好まれる。虞富連から聞いた「龍井43号」育成についての話によると、当時の龍井には、実験用の茶園が多くあり、育成された各種類の茶樹には小竹で作られた札が付され、一つ一つの茶樹にはそれぞれの番号がある。番号は育成の年号と選ばれた茶樹の番号の組み合わせである。番号「6043」は1960年に育成された43番に選ばれた茶樹のことである。いわゆる「龍井43号」である。現在、杭州西湖龍井茶産地にある多くの茶園に栽培されているのは「龍井43号」である（写真3-3）。その結果、杭州西湖龍井茶の産量が大幅に増えた。ただし、原生茶樹と比べ、「龍井43号」の茶葉を摘採する時間は10日程度遅い（写真3-4）。

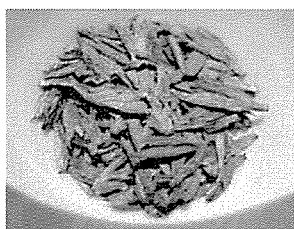


写真3-2 加工済みの龍井茶  
(2021年3月25日 筆者撮影)



写真3-3 「龍井43号」を  
栽培している茶園  
(2021年3月25日 筆者撮影)



写真3-4 新鮮な龍井茶葉  
(2021年3月25日 筆者撮影)

## 第2項 龍井茶の茶具の伝承

現代中国語の「茶具」と「茶器」の意味は同じであって、人間が飲茶する際に使う器具を指す。例えば、急須、茶碗などである。しかし、実際の「茶具」と「茶器」は同じではない。陸羽の『茶経』には「一之源」「二之具」「三之造」「四之器」「五之煮」「六之飲」「七之事」「八之出」「九之略」「十之図」の十章があり、その第二章「二之具」では、「茶之具」として茶を栽培・製作する時に使う道具について述べている。一方、第四章で述べている「茶之器」は飲茶する際に使う器物のことを言う。

「茶器」の「美」が「茶道」を支えると言われるため、従来中国文人や学者は「茶器」の研究と鑑賞を重視してきたが、茶農が茶を栽培・製作する時に使う「茶具」にはあまり注目してこなかった。そこで筆者は「茶具」について注目してみたい。なお、本稿で用いる「茶器」とは飲茶の時に使う道具のことであり、「茶具」とは栽培する時に使う道具のことである。

現在の龍井茶の製造工程には、手作りと機械作りがある。高級龍井茶の製造は全て人の手で行われ、その値段も高い。機械を使って製造した龍井茶の産量は多いが、値段もより低い。本稿の調査対象は、人の手で龍井茶を製造する時に使う茶具である。

### 1 龍井茶を摘採する時に使う茶具

#### ① 茶簍

竹で編んだ高さは35cm、口部分の直径25cmの籠である（写真3-5）。新鮮な茶葉を2kg入れることができる。一般的に茶農が半日をかけて摘採する茶葉が約1kgであり、毎日一つの茶簍を持って行けば十分である。茶簍の口部分に紐をつけて、腰にかけて使う（写真3-6）。

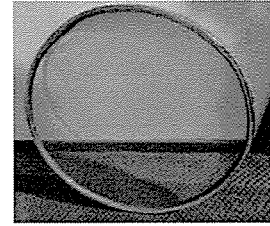
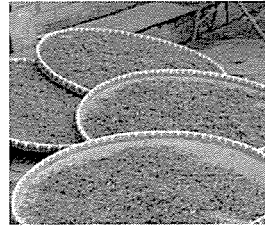
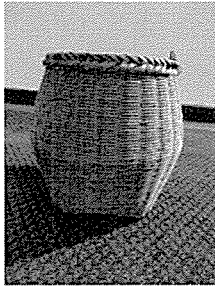


写真3-5 茶籠 写真3-6 茶籠の使用

(2021年1月22日 筆者撮影)

写真3-7 竹扁

写真3-8 鋼糸扁

(2021年3月25日 筆者撮影)

## 2 龍井茶茶葉を干す時に使う茶具

摘採した新鮮な茶葉は干さなければならない。この干す作業は「攤青」、あるいは「萎凋」と呼ぶ。若葉の場合は干す道具を使うが、若葉でなければ直接きれいなセメントの地面に広げる。こうすることで、茶葉にある水分を早めに吸収することができる。龍井茶茶葉を干す時に使う道具は以下の通りである。

### ① 竹扁

竹で編んだ円形の道具であり、直径は88 cmある(写真3-7)。摘採した新鮮な茶葉を竹扁に薄めに広げて干すために用いる。

### ② 鋼糸扁

竹と金属で出来ており、直径は88 cmある(写真3-8)。外圏は竹を使った輪であり、その底部はステンレス製のワイヤーで編んだ網になっている。竹扁と比べ、このような網は通気性が良く、茶葉を干すのに効率が良い。

### ③ 箆墊

箆とは薄く削った竹のことで、墊とは敷き物のことであり、薄く削った細長い竹を使って編んだ敷き物が箆墊である(写真3-9)。竹扁や鋼糸扁と異なり、箆墊の形は長方形である。サイズは縦幅500 cm、横幅250 cmと縦幅500 cm、横幅300 cmの二種類がある。

### ④ 攤青架

茶葉を干すスペースをより多く確保するためにつくった棚であり、高さは150 cmある(写真3-10)。棚には16層があり、上層と下層の幅は8 cmある。昔は竹を使っていたが、現在はほぼ鉄を使っており、折りたたむことができる。底部には、移動用の輪が設置されている。これで、茶葉を干す竹扁を多数置くことができる。

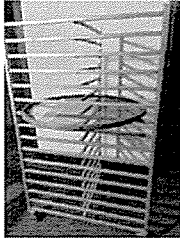


写真3-10 攤青架



写真3-9 上に龍井茶茶葉を干している簸墊

(2021年1月22日 筆者撮影) (梅家塢村茶農の家に「攤青」する風景 2021年3月25日 筆者撮影)

### 3 茶を炒る時に使う茶具

#### ① 土竈と鉄鍋

1960年代以前は、龍井茶を炒る時に使ったのは全て土竈と鉄鍋であった。老茶農である葛建国氏の話によると、彼の若い時は「生産隊」の土竈を使って茶を炒る技術を学んでいた。一つの土竈には4、5個の鉄鍋があり、1人は柴を焚き、ほかの4、5人は龍井茶を炒る作業を行う。

#### ② 電気フライパン

電気フライパンの上部分は鉄鍋であり、下部分は加熱する電気装置である(写真3-11)。鉄鍋の直径は64cmあり、深さは23cmである。電気フライパン全体の高さは65cmである。加熱する電気装置の外部は木で包まれており、大きな木造の桶のように見える。電気装置の下に木の足があり、それを使って電気フライパンの角度を調整する。一般的には、電気フライパンは茶を炒る人に対して15度傾いており、個人の身長と習慣によって、好みの角度に調整できる。



写真3-11 梅家塢村の茶農が電気フライパンを使って龍井茶を炒める様子

(2021年3月25日 筆者撮影)

### ③ 油雑巾

木綿の布を多層に重ね、糸で縫製した雑巾である（写真3-12）。その形は15cm角の正方形であり、茶農が自分で作る場合が多い。一般的には、一つの鉄鍋にワンシーズンで一つの油雑巾で十分である。龍井茶茶葉を炒める前に、まずは油雑巾で植物油を付けて鉄鍋を拭く。植物油は龍井茶茶葉を炒める時の潤滑油である。炒める途中で潤滑力が効かなくなった場合も、植物油付けの油雑巾で鉄鍋を拭く。

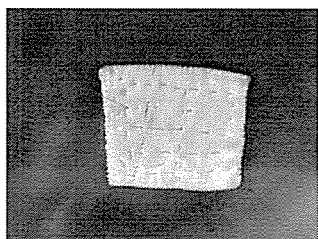


写真3-12 油雑巾

（2021年1月22日 筆者撮影）

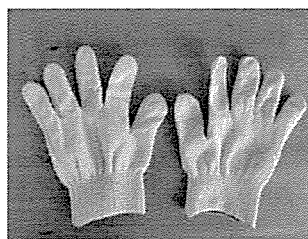


写真3-13 綿手袋

（2021年1月22日 筆者撮影）

### ④ 綿手袋

龍井茶茶葉を炒る時に使う手袋である（写真3-13）。昔の炒茶技師は使わない場合が多かった。なぜなら、直接手で茶葉を炒る場合はいち早く鉄鍋内部の温度を感知でき、早めにそれなりの対応を調整できるからである。しかし、直接手で茶葉を炒る技師はよく鉄鍋内部の熱に傷つけられ、手のひらに多くの水疱が残る。このようなことを避けるために、現在は多くの炒茶技師が綿手袋を付けて茶葉を炒る。

## 4 補助用の茶具

### ① 籐バスケット（「茶青」を置く）

薄く削った細長い竹を使って編んだ円形のバスケットである（写真3-14）。サイズは大と小があり、大サイズの直径は100cm、小サイズの直径は83cmである。竹扁、鋼糸扁や篋墊に敷いて干した茶葉を「茶青」といい、「茶青」を集めて入れる道具が籐バスケットである。

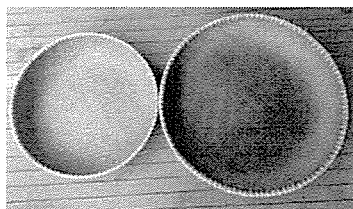


写真3-14 「茶青」置く用の籐バスケット

（2021年1月22日 筆者撮影）

### ② 籐バスケット（「干茶」を置く）

薄く削った細長い竹を使って編んだ、「干茶」を置くための円形のバスケットである（写真

3-15)。サイズは大と小があり、大サイズの直径は60cm、小サイズの直径は45cmである。炒る作業の終わった茶葉を「干茶」という。大サイズの箬バスケットは5kgの「干茶」、小サイズの箬バスケットは約2kgの「干茶」を入れることができる。

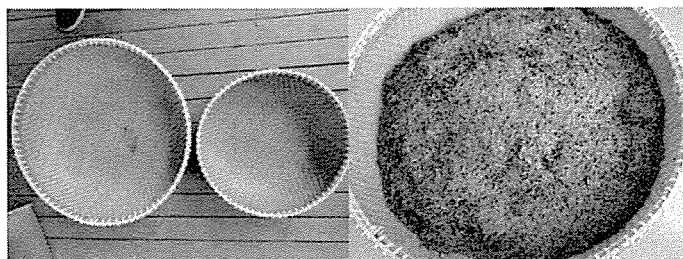


写真3-15 「干茶」置く用の箬バスケット

(2021年1月22日 筆者撮影)

### ③ 小箬箕

竹を使って編んだ小さな手箕である(写真3-16)。口部分の幅は40cm、高さは23cmで、奥行きが36cmある。小箬箕は二つの場合に使われる。茶葉を炒る時に、炒茶技師が先ず少量の「茶青」を取って小箬箕に入れる。後は炒茶技師が自分の手で250g-350g程度の「茶青」を小箬箕から取り鉄鍋に入れて炒る。炒る作業が終わると、できた「干茶」を取る時も、小箬箕を使う。(写真3-17)のように、炒茶技師が小箬箕を持ち、片方の手で「干茶」を取って小箬箕に入れる。

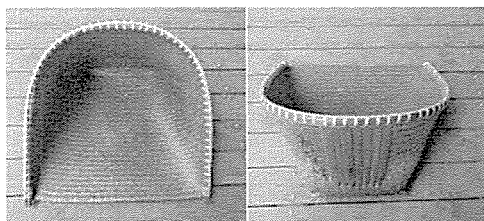


写真3-16 小箬箕

(2021年1月22日 筆者撮影)



写真3-17 小箬箕へ「干茶」を取る炒茶技師

(2021年1月22日 筆者撮影)

### ④ 大箬箕

竹で編んだ大き目の手箕である(写真3-18)。口部分の幅は60cm、高さは36cmで、奥行きが52cmである。小箬箕と比べ、大箬箕のほうが柔らかい。小箬箕を使って取った少量の「干茶」を集めて入れるのが大箬箕である。炒茶技師が「干茶」を入れた大箬箕を上下に繰り返してふるって、「黄片」などを除く(写真3-19)。「黄片」とは、茶葉を摘採する際に茶筴に落ちた老いた茶葉のことである。

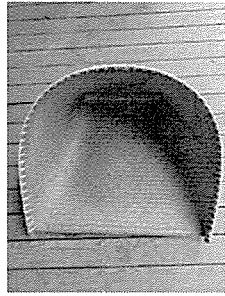


写真3-18 大箆箕  
(2021年1月22日 筆者撮影)



写真3-19 大箆箕を使用して「黄茶」を除く  
(2021年1月22日 筆者撮影)

### ⑥ 茶篩

竹で編んだ円形の篩である(写真3-20)。茶篩は「茶青篩」「中篩」「末末篩」がある。「茶青篩」のサイズが最も大きい。網目が大きいため、いい品質の「茶青」を選別するために使うが、現在はあまり使わない。「中篩」の直径は57cmで、網目は0.8cmである。中篩を使って大き目の茶葉を選別することができ、茶の高級品が作れる。中篩の使用は大体谷雨節(4月20日前後)以降のことになる。それ以前の茶葉はサイズが小さく品質が高いため、「中篩」を使う必要がない。

### ⑦ 末末篩

「末末篩」の直径は54cmで、網目が0.25cmである。(写真3-21)のように、網の下は多数の箆のような竹で固定されている。末末篩を使って、粉状態になった茶葉を除くことができる。これは茶葉製造に欠かせない作業である。

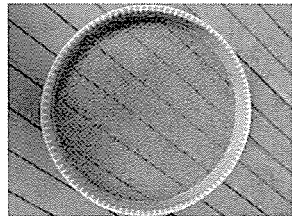


写真3-20 中篩  
(2021年1月22日 筆者撮影)

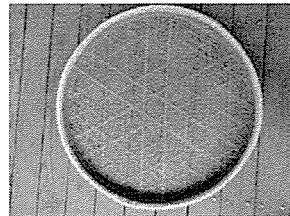


写真3-21 末末篩  
(2021年1月22日 筆者撮影)

## 5 茶製品を保存する茶具

茶葉を炒る作業を終えると、「干茶」を冷やして保存しなければならない。福建福鼎の白茶、湖南安化の黒茶など、中国における多くの茶葉種類の製作には、保存作業も大切な部分である。保存しているうちに、茶葉にある物質成分が変わり、茶葉の風味もさらに良くなる。龍井茶は緑茶として、その保存する最も重要な目的は茶葉の鮮度を保つことである。実は出来上がったばかりの龍井茶「干茶」を直接飲むと、体に炎症を引き起こしやすい。そのため、「灰かん」に保存しなければならない。

### ① 綿布袋

「灰かん」に入れる前に、まずは「干茶」を綿布袋（写真3-22）に入れる。綿布袋はY字の形になっており、結びやすい。一つの袋に約5kgの「干茶」をを入れることができる。

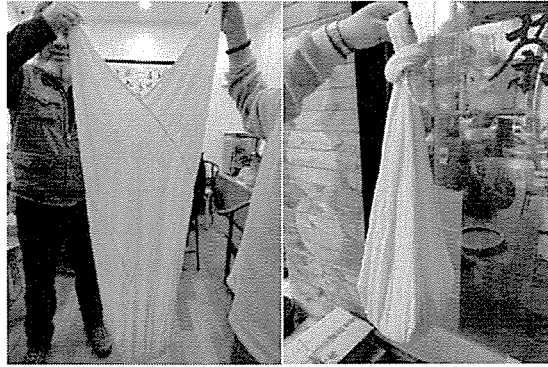


写真3-22 綿布袋

（2021年1月22日 筆者撮影）

### ② 灰かん

茶葉保存用の電気冷蔵庫が出現する前に、龍井茶「干茶」は全て「灰かん」で保存されていた。現代でも、「灰かん」が茶農・茶商たちに愛用されている。「灰かん」の形は陶器製の甕のような形で、その口部分を閉める蓋は稲葉と綿布でできている（写真3-23）。現代の「灰かん」は陶器製ではなく、鉄製の円筒となっている（写真3-24）。鉄製円筒の量産化が進んで購入しやすく、陶器製の甕と比べて軽くて持ちやすいからである。しかし、内部構造は陶器製の甕と変わらず、その底部に一つの生石灰（せいせっかい）が置かれている（写真3-25）。生石灰と綿布袋の間に、昔は「桃花紙」という材料を入れていたが、現在はほぼ「牛皮紙」を使用している（写真3-26）。こうすれば、茶葉と生石灰を隔離ことができ、生石灰の匂いも茶葉に移らない。一つの鉄製の「灰かん」には25kgほどの「干茶」が入る。「干茶」の重量に応じて、「灰かん」の底部には35kgほどの生石灰を置かなければならない。



写真3-23 民国時代の灰かん

（杭州西湖龍井茶博物館蔵 2021年1月22日 筆者撮影）

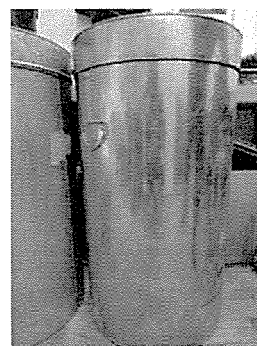


写真3-24 現代の灰かん

（2021年1月22日 筆者撮影）





写真3-25 底部の生石灰

(2021年1月22日 筆者撮影)



写真3-26 生石灰と綿布袋の間の「牛皮紙」

(2021年1月22日 筆者撮影)

このように、龍井茶の製造には様々な茶具が使われている。幾つかの茶具には変遷が見られ、例えば昔は木造であった攤青架が、現在では鉄・ステンレス鋼となっている。しかし、その棚の構造や茶葉を干すスペースを増やすという目的は昔と共通しており、これは龍井茶製造の伝統を守りながらの茶具の変遷である。ほかの種類の茶と比べ、灰かんは龍井茶の製造だけで使用される特殊な茶具である。写真3-23、24、25、26のように、灰かんは陶器製の甕から鉄製の円筒となったが、生石灰や「牛皮紙」を設置して龍井茶を保存する方法はずっと傳承されている。

また、土竈と鉄鍋のセットから電気フライパンに変わったことで「炒茶」の効率もよくなった。電気フライパンは、1960年代に周恩来総理の許可により、初めて梅家塢村で龍井茶を炒るのに使われ、その後、次第に杭州全域で普及したものであり、土竈と鉄鍋から電気フライパンへの変遷には、国家の「権力」の影響も指摘できるであろう。

### 第3項 龍井茶製造の傳承

龍井茶の摘採には、幾つかの品級がある。時間的に言うと、春茶は「社前茶」「明前茶」「雨前茶」に分かれる。「社前茶」は土神を祭祀する「春社日」、いわゆる「立春節」以降の五回目の戌の日の前に摘採した茶葉のことである。時期が早いので、「社前茶」の産量が少なく、味も薄い。「明前茶」は「清明節」の前に摘採した茶葉のことである。「明前茶」は茶農・茶商に最も重視される品級である。「雨前茶」は「谷雨節」の前に摘採した茶葉のことである。「雨前茶」の品級は「明前茶」に及ばないが、その品質が良く、茶の味も濃厚である。「谷雨節」以降に摘採した茶葉は、その品質が「社前茶」「明前茶」「雨前茶」と比べものにならない。

また、摘採した茶葉の老若によって、龍井茶は「精品」「特級」「一級」「二級」「三級」「四級」「五級」の七つの品級に分かれる。国営時期においては、龍井茶の「精品」「特級」「一級」は全て中央政府に提供され、「権力」の大小によって、獲得する龍井茶の品級も異なっていた。普通の民衆たちは人間関係を利用して、「高末」しかもらえない。「高末」とは龍井茶を最後に「末末節」で選別して残った粉に近い茶葉のことである。そのため、龍井茶の生産にも「権力」の影響が見られる。

元杭州茶場工場長である王卓再氏は西湖龍井茶の品質を「色」「香」「味」「形」「光」「扁」「平」「直」という8方面にまとめた。高い品質の西湖龍井茶をつくる鍵は茶を炒る技術にある。現在の龍井茶は機械で炒たものと人の手で炒たものがある。そして、高い品質の西湖龍井茶は大体電気鍋を使って炒たものである。

1950年代に、袁長洪氏が杭州茶場に来て茶を炒る技術を教えた際、製茶技術を幾つかの単文字にまとめた。それは「抖」「搭」「拓」「甩」「捺」「抓」「推」「扣」「扎」「磨」「压」「蕩」の十二手法である。全ての手法は西湖龍井茶の品質の形成に関わっている。例えば、「甩」という手法は、鍋の外側にある茶葉を鍋底に落とすことを繰り返すのであり、柔らかくなった茶葉が自然と巻き包むようになり、「葉包芽」という状態になる。また、十二手法は順次に使われるものではなく、同時に実施される作業である。ベテランの「炒茶師」は茶葉の鮮度、大きさや摘採する時期によって、それに合わせた手法を実施することができる。1985年に、王卓再氏は西湖龍井茶の摘採、製造する作業をまとめて『龍井茶炒制』を著した。彼がまとめた手法は「十大手法」と呼ばれ、2007年に「西湖龍井茶の摘採と制作する芸術」（写真3-27）は、中国国家レベル非物質文化遺産保護名録に登録された。



写真3-27 「西湖龍井茶の摘採と制作する芸術」国家非物質文化遺産伝承者戚国偉氏（右）と浙江省非物質文化遺産伝承者樊生華氏（左）が龍井茶を炒める技術を演じる画面

（2018年4月 戚英傑撮影）

### 第3節 龍井茶の伝承から見る茶文化と権力との関わり

#### 第1項 龍井茶と古代中国の貢茶文化

「貢茶」文化は茶文化史にある特定の歴史現象で、中国封建王朝制度の一部でもある。貢茶は当時最高レベルの生産技術を利用してつくった品質が最も良いものである〔于1994：239-247〕。晋代の常璩の『華陽国誌・巴誌』に以下の記載がある。

武王既克殷，以其宗姫于巴，爵之以子。古者，遠国虽大，爵不過子。故吳楚及巴皆曰子。其地，東至魚复，西至犍道，北接漢中，南極黔涪。土植五谷，牲具六畜。桑、蚕、苧、魚、塩、銅、鉄、丹、漆、茶、蜜、靈龜、巨犀、山鷄、白雉、黄潤、鮮粉，皆納貢之。

周武王が殷商を滅ぼすと、姫姓王族の人を「巴」（現四川省地域）に遣わし、「子」爵を任命した。昔の中原に遠い国は面積が大きいとしても、そのトップ管理者の職は「子」爵以上に

なれない。そのため、呉、楚や巴のトップ管理者はすべて「子」爵であった。「巴」の東は魚復（現重慶市にある）、西は樊道（現湖北省宜賓市）に至る。北は漢中（現陝西省地域）、南は黔涪（現貴州省と重慶市地域）と接している。そこでは農牧業が発達しており、桑、蚕、苧、魚、塩、銅、鉄、丹、漆、茶、蜜、靈亀、巨犀、山鶏、白雉、黄潤、鮮粉を常に中原王朝に納貢していた。これは貢茶について記載される最古の史料である。一方で、漢景帝の墓で茶葉が発掘されており、貢茶文化の歴史が前漢時代に遡る可能性もある。

浙江省地域の貢茶文化は南朝宋孝武帝孝建年間（454-456）に始まった。山謙之が撰した『呉興記』に「烏程県、つまり現湖州市の西北にある温山は、貢茶の産地である。」<sup>57</sup>とある。唐代では、浙江省地域の貢茶は概ね長興の紫笋茶と淳安の鴻坑茶であった。特に湖州長興の場合、唐大歴五年（770）に顧渚山で貢茶院が建立され、貢茶の製造だけに力が注がれていた。貢茶院の労働者は3万人もおり、年18408斤（9204kg）の貢茶を製造していた。製造される貢茶は5つのレベルに分けられる。清明節時期（4月5日前後）に最初につくった貢茶は「急程茶」と呼ばれ、直接都である長安に送られる。地方最高行政官吏である長興太守は貢茶製造の監督者であった[錢時霖 1995: 59-61]。

宋代になると、中国大陸の気温が唐代より下がった。この影響を受け、貢茶院は浙江から福建に移され、宋代の一時だけ湖州の紫笋茶は貢茶に選ばれた。明清時代では、貢茶制度がまた大きく変わった。貢茶院という貢茶製造の専門機関が無くなり、「四方貢」と呼ばれる制度が確立された。いわゆる中国各茶産地の品質の良い茶を選び、中央王朝政府に納貢する。この時期の浙江地域には貢茶に定められた名目が多数あったが、最も有名なのは西湖龍井茶であった。（表3-2）のように、浙江においては、杭州地域にある貢茶の数はそれほど多くはなかったが、それらは杭州の各地域に分布している。

貢茶制度は周の時代から、中央権力によって千年以上続けられていた。龍井茶は明代から既に貢茶に定められた。しかし、清代の最高権力者である乾隆皇帝の影響力があったからこそ、龍井茶の名が中国全国に広がった。

表3-2 清代浙江地域にあった貢茶名目リスト

【枣林杂俎】						【清会典】					
县名	茶类	数量斤	县名	茶类	数量斤	府名	茶类	数量斤	府名	茶类	数量斤
长兴	芽茶	35	龙游等	芽茶	20	杭州	茶芽	40	衢州	茶芽	20
嵊县	芽茶	18	临海等	芽茶	15	湖州	茶芽	32	严州	茶芽	18
会稽	芽茶	30	建德	芽茶	5						
永嘉	芽茶	10	淳安	茶	5	宁波	茶芽	260	温州	茶芽	25
临安	茶	20	遂昌	茶	5						
乐清	茶	10	寿昌	茶	5	绍兴	茶芽	40	处州	茶芽	33
富阳	茶	20	桐庐	茶	5						
慈溪	茶	260	分水	茶	1	台州	茶芽	15			
丽水	芽茶	20									
金华	茶	22	合计		506	金华	茶芽	22	合计		505

（出典：錢時霖 1995: 59-61）

<sup>57</sup> 原文は「烏程温山，県西北二十里，出御笋」である。

## 第2項 乾隆皇帝と龍井茶

清代には貢茶を通じて、中央権力と地方が結び付いていた。康熙皇帝は蘇州の碧螺春茶を選んだ。民間伝説では、「碧螺春」という茶名は康熙皇帝が付けたと言われる。そして、乾隆皇帝は龍井茶を選んだ。

乾隆皇帝が最初に中国江南地域を視察したのは1751年のことである。当時、彼は杭州で龍井茶生産の風景を見て、龍井茶を讚える詩を詠んだ[汪孟錡『龍井見聞録』錢塘丁氏嘉惠堂刊本]。乾隆皇帝のこの行為には、政治的な意味合いがあったと推測される。これより少し前の1748年に、四川金川土司叛乱があったため、江南を視察した時の乾隆皇帝の気持ちは穏やかではなかったはずであるが、外面的にはそう見えず、逆に異様な雰囲気を感じるほどであった[P・A・K 2014:113]。乾隆皇帝が詠んだ詩は「觀採茶作歌」であり、その内容は以下の通りである。

火前嫩，火後老，惟有騎火品最好。  
西湖龍井旧擅名，適來試一觀其道。  
村男接踵下層椒，傾筐雀舌還鷹爪。  
地炉文火繞繞添，干釜柔風旋旋炒。  
漫炒細焙有次第，辛苦工夫殊不少。  
王肅酪奴惜不知，陸羽茶經太精討。  
我雖貢茗未求佳，防微猶恐開奇巧。  
防微猶恐開奇巧，採茶竭覽民艱曉。

さらに乾隆皇帝は、1757年に中国江南地域を視察した際、新たに「觀採茶作歌」という詩を詠んでいる。その内容は以下の通りである。

前日採茶我不喜，率緣供覽官經理。  
今日採茶我愛觀，吳民生計勤自然。  
雲栖取近跋山路，都非吏備清蹕處。  
無事回避出採茶，相將男婦實勞劬。  
嫩莢新芽細撥挑，趁忙谷雨臨明朝。  
雨前價貴雨後賤，民間觸目陳鳴鑪。  
由來貴誠不貴偽，嗟哉老幼赴時意。  
弊衣糲食曾不敷，龍團鳳餅真無味。

2つの詩を見ると、乾隆帝が繰り返し褒め讚えたのは、龍井茶そのものというよりも、茶農の勤労の様子であり、これは皇帝の国民を愛する気持ちを良く表現している。そして、「派手な龍井茶製作方法を恐れ、それは絶えてほしい」<sup>58</sup>「誠実な気持ちこそが最も貴重なものだ」<sup>59</sup>

<sup>58</sup> 原文は「防微猶恐開奇巧」である。

<sup>59</sup> 原文は「由來貴誠不貴偽」である。

「龍団と鳳餅は全く美味しくない」<sup>60</sup>という詩句には、乾隆皇帝の政治的な意図も隠れている。龍団と鳳餅は宋徽宗時代の食べ物であって、良く北宋の滅亡と結びつけられる。乾隆皇帝はこういう詩句を使って、地方政府に茶農の労働に勤しむようにというメッセージを伝えたのである。

1762年、乾隆皇帝が三度目に中国江南地域を視察した時に、18株の茶樹を「御茶」として冊封した。清代人である程涇の『龍井訪茶記』に「王氏茶園には、皇帝に「御茶」と冊封された18株の茶樹がある」<sup>61</sup>とある。さらに1765年、1780年、1784年を加えて、乾隆皇帝は計6回中国江南地域を視察しており、そのすべての機会に龍井で龍井茶を飲み、龍井茶を褒め讃える詩を詠んでいる。

こうして、中央政府と地方の結び付きが強固なものとなっていくが、乾隆皇帝が度々「下江南」（江南地域へ視察）する目的もここにあった。「中国は国家社会の国であるため、中国式の社会は国家権力によって組織的な管理を行わなければならない。中国式の政治の形態も上から下をコントロールする一元化の権力構造である。中国においては、政治の多元化は「乱」と言い換えられるのである」[P・D 2010: 135]。

乾隆皇帝が龍井茶にこれほど注目することに、地方政府は喜びはしながらも恐縮するばかりであった。対策として、地方政府は汪孟錫を編集担当者として、知識人らに『御覽龍井見聞録』をまとめさせた。この本には陸羽の『茶経』を含めて、晋代から清代までの総計153部の古代資料が収録されている。そして、その巻頭には乾隆皇帝による龍井茶を褒め讃える二つの「観採茶作歌」の詩を載せている。これはまさに乾隆皇帝の目を意識して編集したものであった。

龍井茶は中国江南地域で最も有名な物産であるからこそ、乾隆皇帝は龍井茶に注目した。一方でこのことは、彼が中国江南地域に対する恐怖や不信な気持ちを感じていたからだとも考えられる。清の都である北京の食料は、その多くが京杭大運河を通して運んできた江南地域の物であった。清の統治者にとって、江南地域の文人も重視せざるを得ない存在であった。乾隆皇帝にとっては中国江南地域は漢民族社会の中心であって、満洲族の統治地位を脅かさないようにしっかりと管理しなければならない。一方、漢民族社会が主体である中国を統治するためには、柔軟に対応する必要がある。乾隆皇帝が龍井茶を褒め讃え、18株の茶樹を「御茶」として冊封した行為もその現れであろう。

清の中央政府にとって、西湖龍井茶のような貢茶を得ることは重要である。しかし、より大事なことは中国の安定統治である。乾隆皇帝は西湖龍井茶を通じて、長年にわたり中央政府と江南地方との間に強い結び付きをもたらした。そして、現在の中国江南地域においても、いまだに乾隆皇帝の影響がみられる。

杭州地域では乾隆皇帝と西湖龍井茶に関わる様々な伝説も伝承されている。例えば、乾隆皇帝が摘採した西湖龍井茶の茶葉を本に挟んで北京に持ち帰り、病気の太后（皇帝の母親）に龍井茶を飲ませると完全に治ったという伝説がある。このような伝説はまさに地方が中央王権を利用して作られたものであり、こうした伝説は地方官員、文人、茶商や地方住民の叙述、口頭伝承によって広がっていった。つまり、中央と地方はともに権力を利用したということである。

<sup>60</sup> 原文は「龍団鳳餅真無味」である。

<sup>61</sup> 原文は「王氏方園里十八株，荷褒封焉」である。

また、杭州地域には、乾隆皇帝とは関係のない西湖龍井茶に関する伝説も多くある。例えば、こんな話がある。

杭州のある貧しい老婆の家に一つの重い石臼がある。ある人はその石臼を大金で買いたいと老婆に話した。しかし、石臼が重くて持ち帰れないため、翌日に人を呼んできて運ぶと約束した。石臼には汚い泥がついていた。醜いと思った老婆は石臼を洗って、洗った汚い泥水を茶畑に流した。翌日にその人が来てきれいに洗った石臼を見ると、がっかりして買うことを辞めた。彼は『僕が買いたかったのは石臼にあった泥であった。それこそが宝物である。残念だが、あなたはそれを茶畑に流した。現在は泥水が既に茶樹に吸収された。この茶畑にある茶樹を大事にしてください』と言いながら姿を消した。その人は仙人であった。泥水を吸収した茶樹は龍井茶茶樹と成長した[潘・姚 2017: 135]。

こうした伝説の知名度は、乾隆皇帝に関わる西湖龍井茶の伝説とは比べ物にならないほど低いが、龍井茶の優位性を物語る伝説としては興味深いものである。やはり、多数の民衆たちに伝承されてきたのは、「権力」を持つ乾隆皇帝に関わる伝説である。

現在、龍井村の龍井茶販売者は、乾隆皇帝と龍井茶の伝説などを使って観光客たちに話しかけ、良い効果をもたらしている。観光客はこのような伝説を聞きたいのであり、さらにこうした伝説は、彼らに「乾隆皇帝が好きな茶なら自分も嫌いなはずはない」「自分も乾隆皇帝が飲んだことがある茶を飲める」などといった購買意欲をそそることが期待できる。こうした乾隆皇帝に関わる伝説の効果により、龍井茶の販売数と売り上げは確実に増えたのである。

### 第3項 中央政府によって確立された龍井茶の「優位性」

中華人民共和国建国以来、歴代の国家指導者は龍井茶の生産と龍井茶産業の発展を重視してきた。例えば、毛沢東は何回も杭州を訪れて、龍井茶の生産状況を視察した（写真3-28）。彼は虎跑泉の水を使って煎じた龍井茶を「天下一絶」と褒め讃えた。周恩来国家総理は梅家塢村を彼の仕事連絡先にして、茶農の生活や龍井茶の生産に関心を寄せていた（写真3-29）。劉少奇国家主席も数回杭州を訪れて、龍井茶産地を視察した（写真3-30）。朱徳委員長は龍井村、梅家塢村、外桐塢村を視察した経歴が多くあり、外桐塢村の茶園には「元帥亭」がある。改革開放以降、鄧小平などの国家指導者が度々西湖龍井茶産地を視察し、龍井茶に注目したのである。

（表3-3）のように、1951年から1995年までに西湖龍井茶産区を訪れた中国や外国の国家指導者は数多くいた。龍井茶産地を訪れることは、中国の国家指導者にとっては伝統のようになっている。そしてまた彼らは、中国を訪れた外国の国家指導者を西湖龍井茶産区に案内している。訪問した回数については、中国にあるほかの名茶産区とは比べ物にならないほど多く、これは西湖龍井茶の「優位性」である。その「優位性」を具体的に示すものが「国礼茶」と「中国十大名茶」である。



写真3-28 毛沢東は杭州西湖の劉庄で龍井茶を視察する風景  
(出典：戚・趙 2020：18)



写真3-29 周恩来は梅家塢村で茶農と龍井茶の話をする風景  
(出典：戚・趙 2020：18)



写真3-30 龍井に来た劉少奇国家主席  
(出典：戚・趙 2020：18)

表3-3 1951年から1995年までに西湖龍井茶産区を訪れた国家指導者の情報一覧表

西湖龍井茶産区に 来た日時	西湖龍井茶産区に来た中国の 国指導者	西湖龍井茶産区に来た外国の 国指導者
1951年12月18日	劉少奇（国家副主席）	
1957年4月26日	周恩来（国家総理）、賀龍（国家副総理）、彭真（中国全国人大常務委員会副委員長）	クリメント・エフレモヴィチ・ブォロシーロフ（ソ連邦元帥・ソ連国防大臣・ソ連最高会議幹部会議長）
1958年1月3、4日	周恩来（国家総理）	
1960年6月22日	朱徳（中国全国人大常務委員会委員長）	
1960年12月23日	周恩来（国家総理）、陳毅（国家副総理）	ノロドム・シハヌーク（カンボジア国王）夫婦
1961年1月26日	朱徳（中国全国人大常務委員会委員長）	
1961年8月19日	陳毅（国家副総理）	ジョオ・ベルシオ・グラット（ブラジル国副大統領）
1961年10月14日	習仲勲（国家副総理）	マヘンドラ（ネパール国国王）夫婦
1962年2月26日	朱徳（中国全国人大常務委員会委員長）	
1963年1月6日	周恩来（国家総理）、陳毅（国家副総理）	ダラネック（スリランカ国の前身であるシラン国総理）
1963年4月28日	毛沢東（国家主席）	
1972年2月25日	周恩来（国家総理）	リチャード・ニクソン（アメリカ国大統領）夫婦、キッシンジャー（アメリカ国国務長官）
1978年6月20日	ウランフ（中国全国人大常務委員会副委員長）	ファン・カルロス（スペイン国国王）夫婦
1978年6月28日	譚震林（中国全国人大常務委員会副委員長）	ウィリアム・リチャード・トルバート（リビア国大統領）
1983年2月	鄧小平（中国中央軍事委員会主席）	
1983年6月6日	喬石（中国共産党中央办公厅主任）	金正日（朝鮮労働党総書記）
20世紀80年代	李先念（国家主席）	
1992年5月		ラフスワミ・ベンカタラマン（インド国大統領）
1995年11月		ファルク・レガリ（パキスタン国大統領）

（『浙江通誌・茶葉專誌』をもとに作成）



## 1 「国礼茶」

「国礼茶」の役割は3種類に分けられる。一つ目は中国中央政府に提供するというのである。「国酒」である茅台酒と同じように、外国の来賓や政治家を招待するときや、贈答用として使われる。例えば、1949年12月、スターリンの70才の誕生日に毛沢東がお祝いのためにモスクワを訪れた際、「国礼」として贈ったのが西湖龍井茶があった。ソ連邦元帥・ソ連国防大臣・ソ連最高会議幹部会議長であるクリメント・エフレモヴィチ・ブオロシエフ（1881-1969）が1957年に北京を訪問した際には、わざわざ杭州西湖龍井茶の産地を視察している。案内した周恩来国家総理は、彼を誘って一緒に西湖龍井茶を飲んでいる。米国第37代大統領であるリチャード・ニクソンが1972年に中国を訪問したときにも杭州を訪れており、周恩来国家総理は西湖龍井茶で彼を歓待した。ニクソン大統領は龍井茶を気に入り、100gの龍井茶をアメリカに持ち帰りたいと希望したが、周恩来国家総理は「国礼」として、1000gの龍井茶を贈った。ほかには、北朝鮮の国家指導者である金正日、カンボジア国王であるノロドム・シハヌークなども杭州西湖龍井茶産地を視察したことがある。

二つ目は外国在中国大使館に提供するものである。国营企業時期（1949-1984）における杭州茶場の「国礼茶」製造は相当厳しいものであった。その生産に参加した者は全員共産党党员、あるいは共青团团员であった。その上に、中央政府から派遣された幹部は「国礼茶」製造の監督者を担当していた。「国礼茶」の包装作業は非常に複雑であった。包装は外箱と内箱があって、外箱は木造の箱であり、内箱は「馬口鉄」という良い材料でつくった鉄箱であった。鉄箱の口部分を溶接し、木造の箱の四周もアルミホイルでしっかりと包まなければならなかった。そして、「国礼茶」の内箱には乾燥用の石灰パックを入れなければならなかった。一箱の龍井茶の重量は20kgである。普段は50箱、つまり1000kgの龍井茶を製造し、中国在外国大使館や「友誼商店」に提供する。こういう流れに何かの問題が発生した場合は、大変なことになる。当時の担当者であった張一民氏から、このような話を聞いた。ある時期に作られた「国礼茶」は、その内箱に置かれた乾燥用の石灰パックがきちんと閉まらなかったため、石灰が茶葉の中に散らばってしまった。後で監督者が調べて、その乾燥用の石灰パックを閉めた人を見つけだした。結果はそのミスをした人が「労働教養」<sup>62</sup>という罰に処された。その人は後わずかで退職という時になり、ようやく当時の処分が不適切だという判決を得ることができた。60年代、「国礼茶」は中国国家商業部に直接分配し、まずは上海市茶葉進出口公司に送って包装作業を行う。そして、その一部が外交部に提供され、残った分が中国駐外使館に送られた。

三つ目は「友誼商店」<sup>63</sup>に提供するものである。1973年から中国国家商業部の規定によって、毎年2トンの高級龍井茶が北京、上海、広州などの都市の「友誼商店」に提供されている。1982年からは、浙江省茶葉公司が龍井茶を直接輸出することになった。神奈川大学教授である小熊誠氏は80年代に、中国の「友誼商店」で龍井茶を買った経験があるという。このように、計画経済時期においては、龍井茶が外国為替を得るための重要な商品として輸出されていた。茅台酒、中華タバコと並び、龍井茶は中国における最も有名なブランド名の一つになった。そし

<sup>62</sup> 4年以下の人身自由を制限され、労働させ、あるいは思想教育を受ける制度である。

<sup>63</sup> 外国来賓は兌換券を使って、「友誼商店」にある国礼商品を買うことができるのである。

て、外国為替を得ること以上に、龍井茶は中国の外交領域における価値がもっと重要である。例えば、1972年にニクソン大統領が中国から龍井茶を贈られると、米国国務長官補佐官はわざわざ杭州の「友誼商店」に行き、4缶（250g）の龍井茶を購入した。これはまさに中国に与える積極的な対応であり、これこそ周恩来総理が龍井茶に注目した重要な理由である。

1984年に杭州西湖龍井茶葉有限公司が成立した。1985年に、国が直接管理する「国礼茶」の製造と販売が終了し、杭州西湖龍井茶葉有限公司による「国礼茶」の製造と販売が始まった。当時の社長、龍井茶ナンバーワンの「炒茶師」である戚国偉は、最初に「貢」という西湖龍井茶の商標を登録した。2012年、ロシア連邦大統領であるウラジーミル・プーチンの60才の誕生日の際、中国の「国礼」として西湖龍井茶「貢」が贈られた（写真3-31）。西湖龍井茶の「国礼茶」の地位は、現在でも変わりが無い。

1949年以降、「国礼茶」となった茶は、龍井茶のほかには安徽の「祁門紅茶」や雲南のプーアル茶などがある。しかし、龍井茶の「国礼茶」としての役割が最も印象的である。龍井茶にとって、「毛沢東がスターリンの誕生日祝いに龍井茶を贈った」「ニクソン大統領が中国を訪問した際に龍井茶を贈られた」などといった歴史的事実もたらした「象徴性」は重要であり、さらに地方政府や民衆たちが築き上げた龍井茶の地位も無視できない。

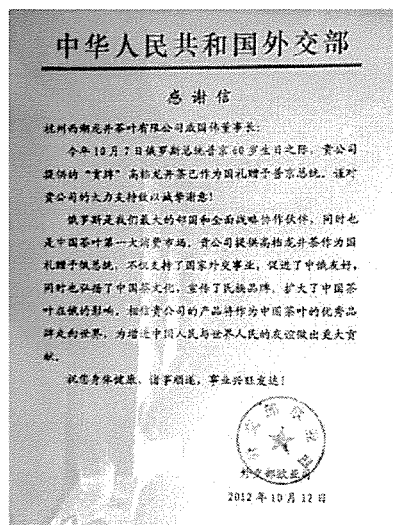


写真3-30 プーチン大統領60才誕生日祝いに「貢」西湖龍井茶が中国の「国礼」として贈られた後、中国外交部から戚国偉に送った感謝する手紙

（杭州西湖龍井茶博物館蔵 2021年1月22日 筆者撮影）

## 2 「中国十大名茶」

現在知られている「中国十大名茶」には幾つかの版があるが、どの版でも西湖龍井はその中のナンバーワンである。1982年6月に、中国商業部が湖南省長沙市で開催した「全国名茶評選会」には30種の名茶が選出された。その中には西湖龍井、江山緑牡丹、顧渚紫笋、金賞恵明の4種の浙江省地域名茶があった。そして、30種の名茶のトップ10は「中国十大名茶」と呼ばれるようになった。それは西湖龍井（浙江）、碧螺春（江蘇）、黄山毛峰（安徽）、君山

銀針（湖南）、白毫銀針（福建）、六安瓜片（安徽）、信陽毛尖（河南）、都匀毛尖（貴州）、武夷肉桂（福建）、鉄観音（福建）であった（写真3-32）。

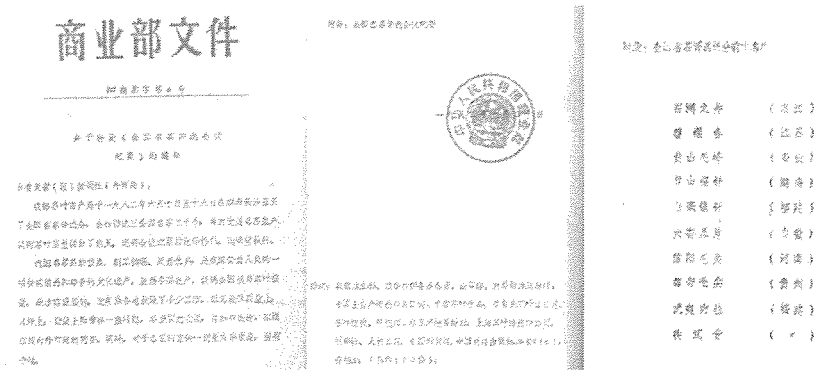


写真3-32 中国商業部「全国名茶評選会議紀要」を配布する通知  
 （添付される中国名茶トップ10リスト 出典：杭州西湖風景区管理委員会 1982年）

2017年5月に開催された第一回中国国際茶葉博覽会において、中国農業部の官員が選出された「中国十大茶葉区域公共品牌（ブランド）」の結果を発表した。それは西湖龍井、信陽毛尖、安化茶、蒙頂山茶、大文片、安溪鉄観音、普洱茶、黄山毛峰、武夷岩茶、都匀毛尖であった。西湖龍井はまたナンバーワンに選ばれた。

これはまさに中国中央政府によってつくられた西湖龍井茶の「優位性」である。ただし、「中国十大名茶」と異なって、「十大茶葉区域公共品牌（ブランド）」の概念は大きく変わっている。「中国十大名茶」は主に各茶種類の歴史文化に求めている。一方、「茶葉区域公共品牌（ブランド）」は茶産地、茶に関する政治、経済、文化の総合力や茶ブランドの価値などの様々な方面に触れている。そのため、事実上の「茶葉区域公共品牌（ブランド）」は地方政府によって主導するものとなった。つまり、2017年の「十大茶葉区域公共品牌（ブランド）」の本質は茶種類間の競争ではなく、地方政府間の競争であった。これは現代中国で起きた新しい事情である。

地方政府が「権力」を運用して「茶葉区域公共品牌（ブランド）」を構築する動きで前に走ったのは浙江省である。浙江省には杭州の「西湖龍井」や湖州の「安吉白茶」という二つの有名な「茶葉区域公共品牌（ブランド）」がある。そして、浙江省政府や杭州市政府が共に「西湖龍井」の「茶葉区域公共品牌（ブランド）」化に力を注いでいる。「西湖龍井」を通じて、地方政府は杭州を「茶都」として構築したいと考えた。もし実現すれば、「茶界」（茶の領域）から更なる「権力」をもらえるのである。

#### 第4項 地方政府による杭州を「茶都」とする茶文化の構築

##### 1 「杭為茶都」の確立

2004年に杭州市は「茶为国飲 杭為茶都」というスローガンを提出した。2005年4月15日に、中国工程院院士である陳宗懋氏は8つの国家級茶葉機構が「中国茶都」を杭州とする決定を発表した。8つの国家級茶葉機構とは、中国国際茶文化研究会、中国農業科学院茶葉研究所、

中国茶葉学会、中華全国供銷合作總社杭州茶葉研究院、国家茶葉質量監督檢驗中心、中国農業部茶葉質量監督檢驗測試中心、中国茶葉博物館、浙江大学茶学系であった。この中には、50年代に成立した機構があり、21世紀初期にできた機構もあった。注意したいことは8つの国家級茶葉機構が北京ではなく、全て杭州に設置されたということである。

ということで、元中共中央政治局委員・全国政協副主席である楊汝岱が杭州市に「中国茶都」の牌を授与した。その後、議論が行われ、五十数人の茶葉と茶文化の専門知識人たちが杭州は「中国茶都」になる要件、つまり茶産業の規模、茶経済の質量、茶産業の構造と競争力、茶文化の長い歴史を全て備えていると認めたのである。そして、彼らは「杭州宣言」にサインした。2006年4月に、元全国人大委員会委員長である喬石が書いた「茶為国飲 杭為茶都」の字が刻まれた石碑が中国茶葉博物館の門前に置かれた。

「杭州宣言」では、杭州が「中国茶都」になる要件をこう書いている。「第一、杭州には茶文化の歴史が長く、18株の「御茶」がそれを証明している。第二、杭州西湖龍井茶は「中国十大名茶」ナンバーワンであり、「国礼茶」でもある。ほかには、杭州には径山茶、天目青茶、雪水雲緑、千島銀針など有名な茶がある。第三、杭州は中国茶文化研究と茶文化国際交流の中心である。第四、杭州は中国茶葉の科学研究、質検と茶文化教育および人材育成の中心地である。第五、杭州における茶生産、茶産業、茶貿易や茶に関する観光産業が盛んである」[鮑志成 2014: 991]。

このように、地方政策など「権力」による直接的なコントロールの下で、茶ブランドの価値を利用し、民衆を地方政府の目標の方向に導いている。「杭州宣言」には、「龍井」という茶の符号が「杭州」と緊密に繋がっている。こうして、「中国名茶ナンバーワン」の龍井茶の産地である杭州＝「茶の都市ナンバーワン」、いわゆる杭州は「中国茶都」であるという茶文化の構築を実現させたのである。

## 2 「全民飲茶日」から「世界飲茶日」へ

2005年に発表された「杭州宣言」に、毎年4月20日、つまり「谷雨節」の日を「全民飲茶日（全国民飲茶の日）」にするという提唱が書かれている。2009年に、第一回「全民飲茶日」が杭州西湖の近くに開催された。筆者は一人のスタッフとして、このイベントの準備と実施に参加していた。この動きは北京、上海、青島などの都市や台湾地域で大きな反響をもたらした。2012年3月に開催された杭州市人民代表大会に、毎年「谷雨節」の日を杭州市「全民飲茶日」とする法案が通された。この「全民飲茶日」は世界最初に法律で決まった茶に関する節である[方・潘 2012: 198-204]。

実は「全民飲茶日」は地方政府と各社会領域と共につくり出したイベントである。その目的は杭州の「中国茶都」の地位をより一層強固にし、中国、さらに世界からの注目を集めようとするところである。「全民飲茶日」を立法する動きも同様である。その後、「世界飲茶日」を設立する提案も国連に提出された。そして、2019年に開催された第74回国連大会で、毎年5月21日を「国際茶日」とする法案が通された。2020年5月21日第一会「国際茶日」の際、習近平国家主席は「国際茶日」の設立に努力した方々に、祝いの言葉を伝えた。「国際茶日」シリーズのイベントは概ね杭州市で行われている。

龍井茶文化や龍井茶産業化の成功は、杭州が「中国茶都」になる重要な要素である。杭州地方政府が「全民飲茶日」をつくる行為は、龍井茶の産業化をさらに推進させる。「国際茶日」の設立は地方政府のほか、中国中央政府も重視している。

しかし、龍井茶産業化の推進につれて、中国各地が茶葉を龍井茶の形に加工し「西湖龍井茶」として販売するようになってきた。これは龍井茶の原産地や龍井茶ブランドの価値に大きな損害をもたらした。それで中央政府や地方政府は「権力」を使い、龍井茶ブランドを再構築した。これを知らなければ、龍井茶ブランドの価値や龍井茶伝承にあった変化を知ることはできない。

「権力」というものは複雑な概念である。早期の研究では、「権力」は「公的強制力と社会的な支配力」と強調されていた。その後はミシェル・フーコーが新しい「権力」観を提出した。つまり「権力関係からある知識システムを生み出した。この知識システムの影響を受け、権力の効能がより一層強化された」[M・F 2012: 32]）ということである。本論で使う「権力」は能動的なもので、主体性を持っている。杭州西湖龍井茶伝承において、「権力」主体が中央政府である時は、龍井茶産区にある地方政府は客体である。「権力」主体が龍井茶産区にある地方政府である場合において、茶農・茶商は客体である。「権力」主体が茶農・茶商である時は、龍井茶消費者は客体である。客体のほか、主体が「権力」を運用する際、主体自身や主体があるシステムにも影響を与える。中央政府—地方政府—茶農・茶商—消費者というシステムに利用される「権力」は、龍井茶文化の伝承・変遷にある重要な力となって、巨大な市場価値を創出した。

## 第4節 龍井茶の市場価値と龍井茶伝承にあった変化

### 第1項 龍井茶産地の範囲と「経済・権力圏」

龍井茶産地の範囲は時間の流れにつれて、次第に広がっていった。元々の龍井茶産地の範囲は杭州人の間で「本山龍井」と呼ばれている。その範囲は極めて狭く、獅峰山、龍井村や翁家山辺りに限られていた。「西湖龍井」と呼ばれるようになってから、西湖周りの虎跑、雲栖、靈隱、梅家塢も龍井茶産地となった。杭州本地の居民たちは西湖周り地域から産出した茶こそ本当の龍井茶であり、その他の地域から産出した茶を「四郷龍井」と呼ぶ。しかし、西湖周り地域から産出した龍井茶では全く足りない。そのため、政府は2004年に杭州市龍塢鎮にある幾つかの茶園を龍井茶産地に入れた。

1996年3月、国家副総理を担当していた朱鎔基氏は山東省を視察した際、「中国にある世界的な有名ブランドは二つだけある。それは青島ビールと龍井茶である。誰かがこのブランドをなくそうとすれば、その人を処分する」と話した。中央権力の影響を受け、地方政府はより一層龍井茶ブランドの保護と発展を重視してきた。

浙江省農業農村庁茶研究専門家である羅列万氏に筆者はインタビューを行った。彼の話によると、国家質量技術監督檢驗檢疫総局は1999年8月に「原産地産品保護規定」を公表した。龍井茶産地はその保護リストにあった。原産地産品保護制度は産品の質を保証するために産品の産地を保護する、国際でも普通に認められる政策である。フランスはこの制度の発祥国であり、主に葡萄酒保護に使われていた。中国国家質量技術監督檢驗檢疫総局は2008年に龍井茶の「地理標識」(GB/T18650-2008) (写真3-33)を公表した。これで、龍井茶生産の標識、

等級や龍井茶産地が法律に保護されるようになった。龍井茶は中国で最初に「地理標識」で保護された茶である。〔図3-1〕のように、杭州西湖区（西湖を含む）行政区域は「西湖産区」、西湖区以外の杭州市行政区域は「錢塘産区」、杭州市以外の浙江省行政区域は「越州産区」と呼ばれる。それ以外の地域では「龍井」ロゴを使ってはいけない。しかし、実は貴州省、四川省や広西省など浙江省以外の地域産の茶葉を、龍井茶を製造する技術を使って生産すれば、浙江省龍井茶とほぼ同じものが作れる。これらの地域産の茶葉は概ね浙江省龍井茶販売の原料と取り扱われている。



写真3-33 国家「地理標識」の龍井茶ロゴマーク

（出典：浙江省農業農村庁「龍井茶原産地域産品公告」）

筆者は〔図3-1〕に基づいて、龍井茶の「経済・権力圏」図を作成した〔図3-2〕。核心区域に近くなればなるほど、そこから産出する龍井茶が少なくなり、その値段もだんだんと高くなる。最も外にある圏、いわゆる浙江省以外の地域から輸入された茶葉原料を浙江省以内で龍井茶に加工して販売すれば、その値段が元々の価値より何十倍も高くなる。だからこそ、内圏にある多くの龍井茶を製造・販売する企業は、外圏で多くの茶樹栽培基地を作っている。

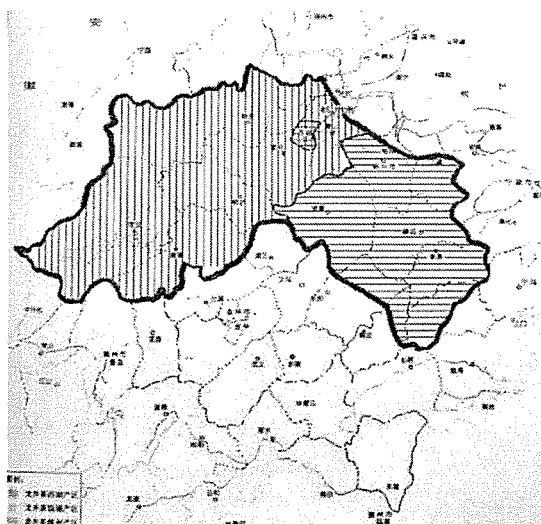


図3-1 「地理標識」で規定された龍井茶産地の範囲

（出典：浙江省農業農村庁「龍井茶原産地域産品公告」）

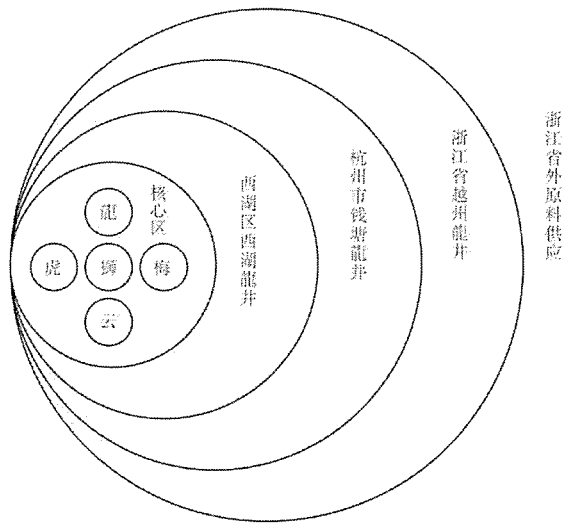


図3-2 筆者がつくった龍井茶の「経済・権力圏」図  
(筆者作成)

## 第2項 茶商・茶農による龍井茶のブランド化とその市場価値

1949年以前の龍井茶は「四大茶屋」などによって製造・販売されていた。茶屋の名号は龍井茶のブランド名でもあった。例えば、「汪裕泰」「方正大」(写真3-34)などである。1949—1985年の間、龍井茶の製造・販売が国に管理されていた。1985年から集団経営や個人経営が始まると、多くの現代的な龍井茶ブランド名が出てきた。戚国偉氏が登録した「貢」の商標は、その一番目であった。「御牌」「廬正浩」「龍冠」なども新しく出た有名なブランド名である。「汪裕泰」「方正大」のように、清末民国時代の龍井茶ブランド名の多くで家族の姓名が使われている。その一方、1985年以降に出た龍井茶ブランド名には、権力的な字やキーワードが多く使われている。「貢」、「御」や「冠」は乾隆皇帝権力を商業価値として付加したものである。



写真3-34 1915年産の「方正大」龍井茶  
(杭州西湖龍井茶博物館蔵 2021年1月22日筆者撮影)

「廬正浩」ブランド企業の所在地は梅家塢村である。梅家塢村は龍井茶「西湖産区」にある最も大きな村落である。筆者はここで5年以上に渡って調査した。龍井茶のおかげで、梅家塢村は中国最も富裕な村落となった。龍井茶販売の収入はもちろん、民宿や飲食店などの観光産業の収入も無視できない。梅家塢村の茶園は広くて綺麗であるために、「十里梅塢」とも呼ばれる。梅家塢村にある大規模な龍井茶ブランド企業は「廬正浩」と「龍冠」である。他にあるのは概ね村民個人で経営する小さな商家である。ここでは「廬正浩」、「龍冠」や茶農・茶商である来氏を通じて、それぞれの「権力」利用を分析していきたい。

### 1 「廬正浩」：伝統的な中央権力の利用

前述の通り、梅家塢書記の名前は廬鎮豪<sup>64</sup>であった。周恩来氏が梅家塢村に来た時、いつも廬鎮豪氏が接待の仕事をやっていた（写真3-35）。90年代に「廬正浩」という龍井茶ブランドがつくられ、梅家塢村最大の龍井茶企業となった。現在、廬鎮豪の娘がその企業を運営している。会社に所属するある茶店には展示館（写真3-36）が設置され、その中には周恩来氏と廬鎮豪氏と一緒に収まる写真や「廬正浩」龍井茶を生産する場面の写真が展示されている。展示館の隣にあるのは、杭州市文物保護單位に登録された「周恩来農村工作聯繫点」である。その中には「梅家塢周總理記念室」（写真3-37）がある。これは廬鎮豪と梅家塢村の村民たちが自発的に建てた建築物であり、中には周恩来氏が梅家塢村にいた時に撮った写真と具体的な説明文が展示されている。村は50年代の周恩来国家総理の仕事連結先であった。その期間の梅家塢村の村委員会「廬正浩」龍井茶の原料は梅家塢村茶農から購入した茶葉である。21世紀に入ると、「廬正浩」龍井茶は最初にネットワークからの通販を始めた。2011-2018年、「廬正浩」龍井茶の売り上げは180万元（3060万円）から1億2000万元（20億4009万円以上）に増加した。これはまさに伝統的な中央権力を利用して達成した龍井茶企業のブランド化である。



写真3-35 1958年に周恩来と廬鎮豪  
（梅家塢周總理記念室蔵 2021年3月3日 筆者撮影）

<sup>64</sup> 杭州方言では、「廬鎮豪」と「廬正浩」の発音が同じである。



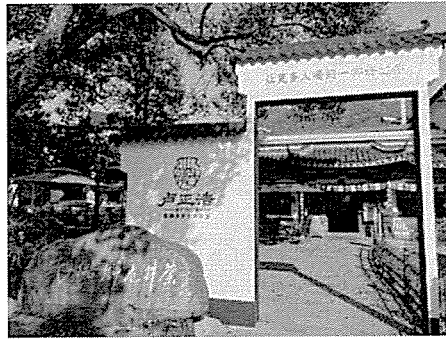


写真 3 - 36 「廬正浩」茶店

(2021年3月3日 筆者撮影)



写真 3 - 37 梅家塢周總理記念室

(2021年3月3日 筆者撮影)

## 2 「龍冠」：外来資本による新しい権力づくり

中国農業科学院茶葉研究所は中国最権威の茶科学研究機構である。この機構の所在地は梅家塢村である。研究所の中には実験用の茶園や研究所が経営する茶葉企業の「龍冠」がある。2016年にレノボ(Lenovo)グループからの融資を受け、「龍冠」企業の新しい運営方式が始まった。前述の通り、「龍井 43 号」は中国農業科学院茶葉研究所によって育成されたものである。「龍冠」企業は積極的にこの研究所の強みを宣伝している。習近平氏は浙江省省委員会書記であった時に、中国農業科学院茶葉研究所を視察したことがある。その際彼は「龍冠」龍井茶も飲んでいる。「龍冠」企業では展示室をつくり、習近平氏が研究所を視察した当時の写真や、彼が使用した机と椅子を展示している。これは中国農業科学院茶葉研究所が現代中国の中央権力を利用してつくった新しいシステムである。

## 3 来氏：龍井茶の商法から見る茶農・茶商の政策利用

梅家塢村に居住している村民は 2400 人ほどある。彼らは「經濟農民」と呼ばれる。普通の農民とは異なり、梅家塢村の村民は茶畑を持ちながら都市住民だけが保有する社会保険などの経済的な優遇を受けている。そして、多くの茶農は小さな茶店を持っている。1983年に梅家塢村の茶畑は各家に分けられた。一人分の茶畑から収穫された茶葉で製造できる茶製品は 20 kg に満たない。2021年の状況によれば、自分で販売する場合は 1 kg の龍井茶を売ると 2000-2400 元 (3.3-4 万円ぐらい) の収入になる。茶葉をそのまま茶商に提供した場合は、1 kg 1400-1600 元 (2.3-2.7 万円ぐらい) の収入になる。このように計算してみると、一人の梅家塢村村民の年収は大体 2 万元 (34 万円ぐらい) である。しかし、これは梅家塢村村民の実際の年収と比べれば、相当少ない。

80 年代末に梅家塢村における龍井茶の村グループによる製造・販売が終了した。それからは各家による龍井茶の製造・販売が始まった。最初の頃はそれぞれの収入が大体同じであった。その後、ある茶農は違法に茶畑を開墾して、茶葉の産量を増加させた。ある茶農はその他地域産の茶葉を購入し、龍井茶に作って販売した。その結果、彼らの収入は大きく増えた。来氏も違法に茶畑を開墾した一人であった。彼が開墾した茶畑と家族が所有する茶畑から、年間 160 kg の龍井茶を収穫できる。人件費、茶畑管理費などを引くと、その年収は約 25 万元 (約 425

万円)である。そのほか地域産の茶葉を購入して作った龍井茶の収入を加えれば、その年収は50万円(約850万円)を超える。これほどの収入がある人は、間違いなく中国の富裕層である。梅家塢村だけではなく、「西湖産区」においても、来氏のような茶農・茶商が多数いるのが実態である。

梅家塢村来氏の事例では、違法に茶畑を開墾することを述べたが、それは未解決の問題となっている。2002年前後の時期、梅家塢村村民のほぼ全員が山地に行って茶畑を開墾していた。これに対して、地方政府はそのまま放置していた。2004年からは山地を開墾して茶樹を植えることが法律に禁じられた。しかし、2004年以前に開墾された茶畑については、地方政府は村民の手から没収しなかったが、村民が合法的に所有する畑とも認めなかった。これからはどうなるか、現時点では分からない。

龍井茶の「地理標識」が公表されてから、龍井茶の包装も政府に厳しく管理されている。原産地の標識は「茶農標識」や「企業標識」があるが、龍井茶の包装は所有する茶畑の規模によってそれぞれに配られた。龍井茶包装にあるQRコード(写真3-38)をスキャンしてパスワードを入力すると、産地名や生産者の情報が出てくる(写真3-39)。政府の政策はほぼ完璧だが、それでも茶農はこれに対抗する方法を考えた。茶農は自分が生産した本物の龍井茶を優先的に親友などの知り合いに販売する。知り合いだから、彼らに渡す龍井茶商品には原産地の標識を貼らない。その代わりに、その他の地域産の茶葉を購入してつくった龍井茶に原産地の標識を貼って、外部の消費者やここに来た観光客に販売するという販売方法である。



写真3-38 龍井茶の真偽を調べる方法の説明

(2021年3月3日 筆者撮影)



写真3-39 龍井茶原産地標識の様子

(2021年3月3日 筆者撮影)

梅家塢村産の龍井茶(写真3-40)であれば、その1kgの値段は6000-7000元(10-11.6万円ぐらい)がある。それに対して、「西湖産区」以外の地域、例えば杭州富陽産の龍井茶であれば、その1kgの値段は1000元(1万6千円ぐらい)にもならない。しかし、ある程度の消費者は龍井茶産区の真偽ではなく、その原産地標識を求めている。このように消費者と販売者の利害が一致した場合は、杭州富陽などの「西湖産区」以外の地域産の龍井茶に原産地標識を貼り、1kg 1600-2400元(2.6-4万円ぐらい)で売り出すケースも多くある。さらに、こうした品物を「西湖産区」龍井茶の値段で不正に販売する商家もいる。このように、茶農・茶商たちが龍井茶の「経済・権力圏」を利用して、消費者に「便利さ」を提供している。名茶の味

より、多くの消費者は名茶として証明される「正統性」を求めている[張 2016: 22-33]。そして、この「正統性」の裏には、「権力的」な要素が隠れている。

### 第3項 龍井茶の現代伝承にあった表現

#### 1 世界文化遺産に登録された西湖龍井茶産地

2011年6月24日に、「西湖龍井」と「茶文化」を含む「杭州西湖文化景観」が世界文化遺産に登録された。実は世界遺産を申請する際、テーマを「西湖・龍井茶園」にする意見もあった。国際古跡遺址理事会（ICOMOS）に所属する韓国人専門家である朴素賢は、当時わざわざ満覚隴村「馬児山」という西湖龍井茶原生茶樹保護区を視察した。そして、龍井茶園の自然景観と歴史文化を高く評価した。その後は政府も力を入れ、「浙江杭州西湖龍井茶文化系統」碑や「西湖龍井茶基地一級保護区」碑を設置した。



写真3-40 梅家塢村と村中の茶園

(2021年1月22日 筆者撮影)

#### 2 西湖龍井茶と観光産業の結び付き

世界文化遺産に登録されてからの龍井茶伝承の大きな変化は、観光産業との結び付きがますます深まったことである。地方政府は3区域の龍井茶観光を優先的に推進していきたいと考えた。一番目は中国茶葉博物館や18株の「御茶」がある「龍井村区域」である。二番目は「周總理記念室」や中国農業科学院茶葉研究所がある「梅家塢区域」である。三番目は龍塢茶鎮を中心とする「龍塢区域」である。3区域においては、毎年「中国国際茶葉博覧会」や「中華茶奧林匹克(オリンピック)会」を開催する。そして、お湯で煎したすぐに飲むことのできる茶のほか、地方政府は「飲茶」(茶飲料)、「吃茶」(茶食品)、「用茶」(茶日用品)、玩茶(茶観光)、事茶(茶文化産業)などの産業形態を提出した[政協杭州市西湖区委員会 2006: 332]が、これからは全面的な展開が期待される。

2010年以降、「西湖龍井」ブランドの価値は年2億元(34億円以上)程度に増加している。2016年の「西湖龍井」ブランドの価値は603億元(1兆250億円以上)であった。

## 小結

本論で取り上げた杭州西湖龍井茶の茶文化伝承の事例のように、「権力」は政治、経済、文化に限らず、あらゆる分野で存在しているのである。古代の乾隆皇帝は龍井茶を通じて、杭州などの江南地域に対する柔軟なコントロールを実現させた。中華人民共和国の歴代国家指導者の龍井茶に対する重視は、龍井茶産業が急速に発展する大きなきっかけとなった。龍井茶は「国礼茶」として、中華人民共和国の外交に大きな役割を果たしている。国営時期の龍井茶は中華人民共和国が外国為替を獲得する重要な商品であった。その後、杭州地方政府が中央政府の「権力」を利用して、龍井茶文化の影響力をさらに拡大させた。現在、龍井茶は既に中国・杭州の文化的象徴となった。そして、地方政府は「権力」を通じて、杭州を「茶都」として構築した。龍井茶製造用の道具の変遷にも、「権力」の影響が存在している。

龍井茶の「経済・権力圏」(図3-2)の通り、空間的な差異によって、龍井茶の「正統性」「権威性」も異なる。これは政治権力、技術、歴史、観念、実践、認識、利益などの要素が互いに融合された結果である[肖 2020: 53]。前述のように、各種の「権力」が龍井茶を製造・販売する民衆に利用されてきた。結果として、茶農・茶商の収入が確実に増えた。一方、地方政府が「権力」を利用して、龍井茶文化の構築や龍井茶産業の発展を積極的に推進してきた。「権力」の影響を受け、龍井茶の茶文化伝承には多くの変化がおきている。そして、現在でも未解決の問題が残っている。

本論で取り上げた杭州西湖龍井茶は一つの代表的な事例であり、他の茶類・茶文化においても、地方政府的な「権力」の影響が存在していると考えられる。

## 第4章 嘉興章氏古茶園をめぐる茶文化伝承の性格

### はじめに

嘉興市は中国浙江省東北部に位置して、北は上海市や江蘇省の蘇州市、南は杭州市、西は湖州市と接する。嘉興市内は大部分が平地であり、茶樹生育の気候的、土壌的、地形的な条件に適さないため、茶の栽培や生産はほとんど行われてない。しかし、嘉興市の南湖区にある「塘匯（とうかい）」という町には、300年以上の歴史を持つ章氏古茶園がある。その茶園は、年間約20kgの茶を産出するが、章氏古茶園の面積と茶産量があまりにも少ないため、ほぼ無視されている。中国の茶文化に関する研究は概ね杭州西湖、福建武夷山、雲南普洱などの有名な茶産地に集中される。しかし、嘉興章氏古茶園は「非茶産地」（伝統的な茶産地ではない地域）の特異な事例として、その歴史と民俗的な意義は非常に興味深いものがある。

筆者は章氏古茶園及びそれを経営する章氏という名門一族について、嘉興市南湖区の塘匯茶園村において現地調査を行った。2019年1月に、章氏古茶園及びその周辺の環境を現地調査し、茶園最後の園主であった章永観氏や茶園管理員を務めた夏海栄氏に聞き取り調査を行った。本章は章氏古茶園や章氏一族に関する歴史的文献を収集し、現地調査で集めた資料と合わせて分析し、嘉興茶文化伝承の性格を解明していく。

### 第1節 章氏古茶園の伝統と現状

#### 第1項 茶園村の現状

章氏古茶園はかつて浙江省嘉興市の塘匯郷茶園村にあった（写真4-1）。2011年に、塘匯郷は嘉興市政府の経済開発区になったため、塘匯街道と改名された。それと同時に、当地の農民家屋が取り壊され、都市化が急速に進展しているのである。そのなかで、茶園村も社区<sup>65</sup>＝コミュニティに変わった。章氏古茶園は顔馬浜の南西方向で約200メートルの、離れた畑地に位置し、総面積は2.7畝<sup>66</sup>である（図4-1）。章永観氏と夏海栄氏の話では、昔、茶園内の南西方向に古墳があり、「状元墳」と言われているが、文化大革命の際に、農村の「大搞衛生」<sup>67</sup>という運動で壊され、墓碑を建てる事が出来ず、今は何も残っていない（写真4-2）。

以前は茶園の南側に川が流れ、他の三方向には竹や棟<sup>68</sup>のフェンスが作られ、入り口は一本の道だけであった。現在では、茶園のフェンスは鉄網に変わっている。1982年頃、「土壌調査」の際、調査に来た専門家は茶畑の土壌が周辺地域と異なることに気づいた。

<sup>65</sup> 社区とは、もともとは英語の「コミュニティ」の中国語訳であり、社会学における学術用語であったが、近年では中華人民共和国における都市部の基礎的な行政区画の単位を表す語彙として用いられる。

<sup>66</sup> 土地面積の単位であって、「ムー」と読む。1ムーは6.667アールである。

<sup>67</sup> 「大搞衛生」は文化大革命中に実施された四害を除く運動である。最初の「四害」はネズミ、スズメ、ハエ、蚊のことであった。動物学者が一致反対する反論を出すと、1960年に改めて「四害」をネズミ、ゴキブリ、ハエ、蚊と定義された。

<sup>68</sup> 落葉高木の植物であって、日本では「センダン」と言う。



写真 4 - 1 章氏古茶園の俯瞰図  
 (2018 年 塘匯街道撮影)

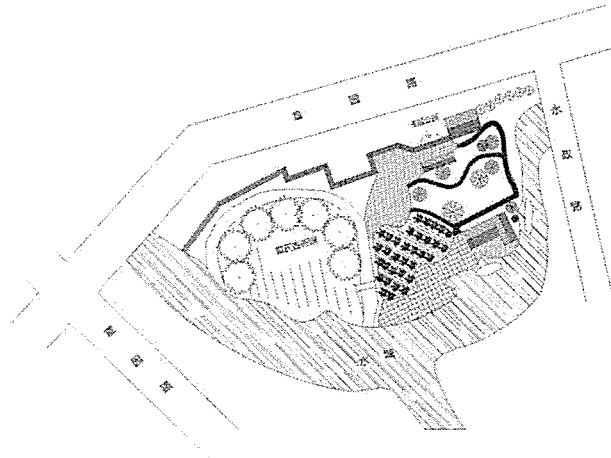


図 4 - 1 章氏古茶園の区画図  
 (筆者作成)



写真 4 - 2 章氏古茶園  
 (2019 年 1 月 20 日 筆者撮影)

## 第2項 「茶園村」から「茶香坊社区」

塘匯街道は総面積が 12.85 平方キロメートルであり、そのうち、土地面積は 12.03 平方キロメートル、水域面積は 0.82 平方キロメートルである。2018 年までの、全街道の総戸籍数は 5220 戸であり、総人口数は 13008 人である。外来の人口<sup>69</sup>数は 32728 人である。塘匯街道は 5 つの社区を管轄している。2018 年の総生産は 91.23 億元に達しており、そのうち第二次産業は 681.9 万元、第三次産業は 23.5 万元である。財政の総収入は 5.49 億元、固定資産の投資額は 18.8 億元である。

章氏古茶園は茶園村に属している。茶園村は 1950 年代に名づけられ、塘匯鎮の南、杭申道路の両側に位置している。西に徐王村、東に周安浜、南に滬杭鉄路、北に三店塘と近接し、水陸両方の交通の便がいい。当時、茶園村には陶沙浜、徐家浜、顔馬浜、横埭、天井湾、陶家浜、樓頭台など 11 の生産大隊<sup>70</sup>があり、全村では、水田が 954 畝、世帯数が 278 戸、総人口数が 885 人であった。

茶園村の元書記<sup>71</sup>章永林氏によると、茶園村は新中国成立前には「顔馬浜」と呼ばれていた。茶園側の川沿いの道と土地の形が馬に似ているからであるという。新中国成立後に「茶園村」と呼ばれ、章氏古茶園は村の象徴的な景観となった。文革時代、他の村の名前は全部「八一」「紅旗」「向陽」「紅衛」などに変更された。しかし、茶園村だけは名前が変わっておらず、村民はそれを誇りに思っていた。

新中国成立初期に、茶園村は塘匯の発展に大きな貢献をしている。茶園村には三つの生産大隊があり、嘉興市の農業生産先進村となり、初めて食糧生産の「双杠」を突破した（「ムー」当たりの生産量が 1600 斤を超えた）<sup>72</sup>。改革開放後、茶園村は真っ先に農業から工業に転換し、1990 年代初期、年に 160 万元以上の税金を納めた。2000 年以降、再び産業の転換を行い、工業関連の企業を移転させ、不動産開発を推進し、高層ビルが立ち並ぶ都市へと変貌した。茶園村では 2003 年に開発業者による立ち退きが実施され、2007 年に終わった。村民は茶香坊社区と新禾家苑社区に移転した。

茶園村は章氏古茶園が存在したため、新中国成立後に村は「茶園村」と呼ばれるようになった。茶園は村の文化資源と意識されるようになったのである。2000 年以降、茶園村は経済開発区の一部となり、「茶園路」、「章園路」などの地名が次々と誕生し、立ち退き後に社区も「茶香坊社区」と呼ばれるようになっていく。

<sup>69</sup> 当地の戸籍に登録されていない居住者のことである。

<sup>70</sup> 中国では、1950 年代に「人民公社」という財産の公有制が実施されていた。「生産大隊」は人民公社時期にできた、農民を直接に管理するグループ単位である。

<sup>71</sup> 中国政党史・労働組合などの書記局の構成員である。

<sup>72</sup> 『農業発展綱要 40 条』（『1956—1967 年全国農業発展綱要』とも言う）は、中国における 1956 年—1967 年間全国の農業発展を指導する綱領的文書である。『綱要』では「淮河、秦嶺、白龍江以南地域は 1955 年の「ムー」当たりの穀物産量が 400 斤から 800 斤に増加した」と指摘している。嘉興は昔から中国の「穀倉」で、全国の農業生産をリードしている。茶園村民の言った「双杠」とは、『綱要』目標の二倍に達成し、「ムー」当たりの穀物産量を 1600 斤に増産したことである。

表 4 - 1 塘匯街道社区の基本情況

社区の名称	総面積（平方キロメートル）	戸籍数	戸籍人口数	居民委員会 <sup>73</sup> の住所	管轄区域の主な住民団地
茶香坊	2	1067	2664	嘉興市章園路 559 号	茶香坊南北団地、御華名都団地、育龍湾団地
新禾家苑	3.4	1528	3911	嘉興市和風路 1159 号	新禾家苑団地、新禾家苑団地の南区（経済適用住宅 <sup>74</sup> ）、経房浅水湾団地
錦繡	3.32	1097	2842	東方路と塘匯路の交差点の東 100M	東方新家園、楓華園
永政	2.08	615	1435	嘉興市平安路 10 号	南湖星辰湾、和風麗園及び平安家園
華玉	2	913	2156	周安路と鳴羊路の交差点の南 150M の西側	茶香坊西区、華玉佳苑、尚東名邸、永匯邸
総計	12.8	5220	13008		

（塘匯街道 2018 年作成）

社区には茶室があり、村民たちが毎日茶室に集まって茶を喫し談笑する。現在、政府が建設した新しい小学校は「茶園小学校」と呼ばれる。塘匯街道の書記胡衛東氏の話では、茶園小学校の工事を入札する際、政府側が建築家に章氏古茶園の文化要素を茶園小学校の設計に取り入れるように命じたという。完工後の小学校には、章氏古茶園の歴史を教育内容の一部として導入したとアピールしている。

### 第 3 項 章氏古茶園の伝統

#### 1 地方文献に見る章氏古茶園

光緒四（1878）年の『嘉興府志』によると、「地元には山はなく、茶葉も珍しい」<sup>75</sup>[許 2016: 536]、また『強恕齋詩鈔』では「禾城北にある徐偃王祠の後ろに茶園があり、面積が小さくて産量も少ない」<sup>76</sup>と記載されている。

「禾城北」は今の塘匯という町である。現在、塘匯の徐偃王祠<sup>77</sup>がなくなったにもかかわらず

<sup>73</sup> 居民委員会とは、現代中国都市地域社会に設置された住民組織のことである。

<sup>74</sup> 「経済適用住宅」とは、政府が低所得者向けに販売する住宅のことである。台湾地区では「國民住宅」と呼ばれている。

<sup>75</sup> 原文は「吾地無山鮮業茶者」である。

<sup>76</sup> 原文は「禾城北徐偃王祠後産茶，地小不多得」である。

<sup>77</sup> 徐偃王祠で祀られた徐偃王は、西周徐国の王様とされている。徐国の国土は今の淮、泗のあたりであり、下邳が徐国の都



ず、その後ろにある茶園はよく保存されている。それが章氏古茶園である。清の乾隆時代<sup>78</sup>、秀水詩派<sup>79</sup>の代表的詩人である王曇の『寓齋飲茶』では、「徐王廟後三弓地、羅嶺山頭一品春」という賛美の詩もある。

清代の『鏡窓瑣話』に、章氏園茶の説明があった。『鏡窓瑣話』は清代嘉興出身の文人である于源が編纂した、同時代の詩人の随筆集である。その中に収録される内容は主に浙江出身の人物たちが書いた随筆である。それらの人物の中で、嘉興籍の詩人が最も多い。章氏園茶に関する記載は以下のようである。

禾地卑下舊不産茶，近塘匯章園有種茶樹者。穀雨未過，嫩芽初摘，亦堪人賞。然知者尚鮮。往年王詩石姊婿招同人小集，試章園茶，未及作詩。後詩石以『梅溪館圖』屬唐爰伯題詞。爰伯詩補及之，誇為此題始倡，詩雲：一粟廬中識君始，古人與鶴君舅弟。今年來訪湖上春，清明穀雨流光新。綠楊深處叩君宅，乃與傾衿通款洽。隔牆春酒沽梨花，沾醉瀾我章園茶。章園茶樹産郷里，灌以鴛鴦之湖水。靈芽漾漾開翠旗，顧渚雙井不足奇。清芬襲人沁肌骨，頓慰文園消渴疾。忻然示我梅溪圖，圖中咫尺君旧庐。百年花木有遷徙，枝葉扶疏一木繁。矧君學術深五行，方輿圖緯指掌擎。京房郭璞不掛齒，對客觥觥論文史。題君是圖意鄭重，更乞園茶作清供。但餘舅弟勿餉人，瓦爐活火招嘉賓。昨夜辛伯招同餘三重試佳茗[項・于 2016: 102]。

この文には清朝における地方文人の茶会、章氏茶園の様子が記録され、章氏茶園産の茶を褒めている。「沾醉瀾我章園茶」にある「瀾」とは、明代の茶の点て方である。「章園茶樹産郷里，灌以鴛鴦之湖水」という文には、嘉興文人からの、章氏園産茶への誇りを表している。「鴛鴦之湖水」とは嘉興の代表的な風景である南湖を指し、南湖が鴛鴦湖と呼ばれた由来がこの文から伺える。しかし、章氏古茶園を灌漑されたのは南湖の水ではなく、南湖とつながる茶園周辺の水系であった。「靈芽漾漾開翠旗」という文は、摘採された章氏茶園茶葉の美しい形態を描写している。「翠旗」とは、当時茶を摘採基準である「一芽一葉」の「旗銃」<sup>80</sup>のことである。

## 2 章氏古茶園の誕生と発展

章氏古茶園は一族相伝のものであり、300年以上の歴史を持つ。章永観氏の話では、章氏は昔から塘匯鎮の茶園村に住んでおり、その先祖は清朝初期の私塾<sup>81</sup>の教師であり、「上八府」<sup>82</sup>へも教えに行ったという。その先祖は名前が確認できていない。紹興で何十年も教えていたが、

であった。周穆王時代に、徐君偃は隣国に友好な政策をとったため、40余国が徐国の附属になったという。

<sup>78</sup> 清乾隆皇帝が在位していた時期とされている。

<sup>79</sup> 「秀水」は浙江省嘉興市の旧称である。秀水詩派とは、浙江省嘉興市の詩派の一種である。

<sup>80</sup> 「葉」は旗、「芽」は銃を替えるので、「旗銃」と言う。緑茶を摘採する基準に応じて、「一芽一葉」と「一芽二葉」に分ける。

<sup>81</sup> 中国古代社会に、家庭や村などの内部に設けられた私設の塾である。塾生に教わったのは、儒家思想を中心とする知識である。

<sup>82</sup> 「上八府」は浙江地域の方言のことである。錢塘江を境にして、昔から物産が豊かな地域である杭州、嘉興、湖州は「下三府」と呼ばれた。錢塘江以北の紹興、金華、麗水、台州、温州、寧波、舟山などの地域は「上八府」と呼ばれた。その特徴は山が多く、水田が少ない。

先祖は故郷へ帰ろうとする際、生徒たちからお土産に何がいいかと聞かれた。紹興で茶を飲み慣れたため、茶苗を持ち帰り故郷でも茶を飲み続けたいと答えた。しかし、嘉興平原の土質は茶樹の成長には適していないのである。当地では、茶の栽培に「上品なものは腐った石、中品なものは礫質土壌、下品なものは黄土である」[呉 2005: 23]という諺がある。生徒たちは京杭大運河を利用して、紹興から嘉興に土を運んだ。当時、葬儀に必要な紙銭などを運ぶ農船の下部に土を入れて運んできたのである。このような方法を使って3年間搬送続けた結果、合計2畝7分<sup>83</sup>の茶園の土地が整備された。土と一緒に、紹興の茶苗も運んできた。この茶畑起源の物語は民間に「運ばれた茶の木は三本半しかない」というように伝承され、物語の筋が省略されてしまった。

章氏古茶園は章氏家族の努力を通じて、現在の規模となっている。茶園周囲の土質に制限されるため、その面積を拡大することができなかった。嘉興人は茶の盆栽を試みたが、生えられなかった。茶園周辺の街道にも茶の木を栽培してみたが、同じく生育しなかった。

1949年の新中国成立後も、章氏古茶園は章氏によって経営されていた。章正観氏、章巧観氏、夏海栄氏の話では、人民公社運動<sup>84</sup>後の1962年ごろに、嘉興税務局、塘匯税務所は何回も「農業特産税」<sup>85</sup>の課税に来たという。その税率が60%を上回ったため、章家は茶樹を取り除き、桑の木を植えようとした。章永観氏は章家の長男として、中央政府に免税の手紙を書いた。その手紙が役立ったかどうかは分からなかったが、課税の話はそれ以降なくなったという。章正観の話では、文化大革命の際、中国共産党中央副主席、中央政治局常務委員を務めた康生は章園茶を飲んだことがあるそうだ。当時の嘉興県が購入して康生に進呈したものとされる。

1963年に古茶園は政府のものとなった。春の時期、ちょうど農繁期に当たったが、茶園の従業員は茶摘みをしなければならない。人民公社も茶園も労働力を求めた結果、茶園は人民公社のものとなり、人民公社管理下に置かれた。当時、政治のスローガンは「割資本主義の尾巴（資本主義の弊害を取り除く）」である。村には「二条尾巴（二つの弊害）」があった。一つは章氏古茶園であり、もう一つは個人経営の渡し舟である。当初、人民公社は章家に「家賃」を支払ったが、その後は払わなくなった。元々茶園は生産大隊に置かれたが、茶摘みがうまく行われておらず、その後、生産大隊に返却されたのである。1963年から2007年までの45年間、茶園はその管理に深刻な問題があり、後期にはほとんど荒廃状態となっていた。章永観氏は次のような諧謔詩を作っている。

重農軽茶無人管、外来挖掘受破壊。

採茶只管講畝産、支高茶樹採下踏。

野藤什草超茶樹、毎年死茶木老老。

什樹遍園地、影響茶葉質。

<sup>83</sup> 2畝7分は約0.0018平方kmに相当する。

<sup>84</sup> 人民公社はかつて中国農村地域にあった、一郷一社の規模を基本単位とする末端行政機関である。集団所有制の下に、工業、農業、商業等の経済活動のみならず、教育、文化、さらに軍事の機能を含んでいた。すなわち、従来の権力機構（郷人民政府と郷人民代表大会）と「合作社」を一体化した「政社合一」の組織であった。

<sup>85</sup> 農業特産税の全称は「農業特産農業税」であって、農業に従事する個人或いはグループに徴収する税金のことである。

2008年の初春、成海良氏は偶然に塘匯を通りかかった。彼の話では320国道のそばに立ち眺めたら、立ち退き後の村は至るところ草で覆われ荒れ果てており、茶園だけが残っていた。宏達焼鳥工場の東側から南への小道に沿って行くと、茶園には人跡もなく雑草が生いっていた。その後、『南湖晩報』の記者朱梁峰に茶園を視察してもらい、近くの茶香坊委員会を訪ね、茶園の状況を聞いた。当時の社区書記章学文氏は章永観氏の息子である。朱梁峰氏は2008年3月18日の『南湖晩報』で「嘉興唯一の茶園の行き先は？」<sup>86</sup>という記事を発表した。当時、嘉興市書記を務めていた陳徳栄氏はこの記事を見て、塘匯街道に茶園を保護するようにと指示を下した。塘匯街道は28万元で茶園の経営権を買い取った。陳徳栄氏も茶園を視察し、政府の各部門に嘉興唯一の茶園を保護するようにと再び指示を下した。2013年に、嘉興市開発区は5500万元を投資し、章氏古茶園を礎に茶文化テーマパークを建設した（写真4-3）。章永観氏はこれまでの章氏古茶園の歴史について、次のような諧謔詩を作った。

章園茗茶歴史悠、至今已存三百多。  
永久自産自販売、直至六三年公有。  
觀看街道來經營、精心栽培超原有。  
提高品質好加工、文化遺產永保留。



写真4-3 章氏古茶園のテーマパーク

（2018年 塘匯街道撮影）

### 3 章氏家族

#### ①章氏家族の族譜

章氏家族に族譜はないが、章永観氏（死去）、章正観氏（82歳、章永観の弟）、章巧観氏（83歳、章正観氏のいとこ）からの聞き取り調査により、次のように章氏の族譜をまとめた（図4-2）。

章巧観氏は子供の時、僧侶の「送素頭」という儀礼をよく目にしたという。それは、僧侶が家族の祖先を済度する儀式である。毎年、僧侶は儀式を行い、その報酬として金と米を受け取る。「送素頭」の際に、僧侶が手に持つ章家の位牌には「墩本堂章」と書かれていた。祖父章順泉氏の世代から、茶園は3人の息子に渡された。茶園の茶樹も息子たちに細かく分けられている。茶園の管理権を握る息子は章茂弟で、章永観氏の父である。3人の息子のうち、1人は氏名が不詳で、その孫の章金観氏は新中国成立前に亡くなった。曾孫の章寿根氏は遺産を継ぎ、若い茶園継承者の1人として活躍している。

<sup>86</sup> 題名原文は「嘉興唯一の茶園何去何从？」である。

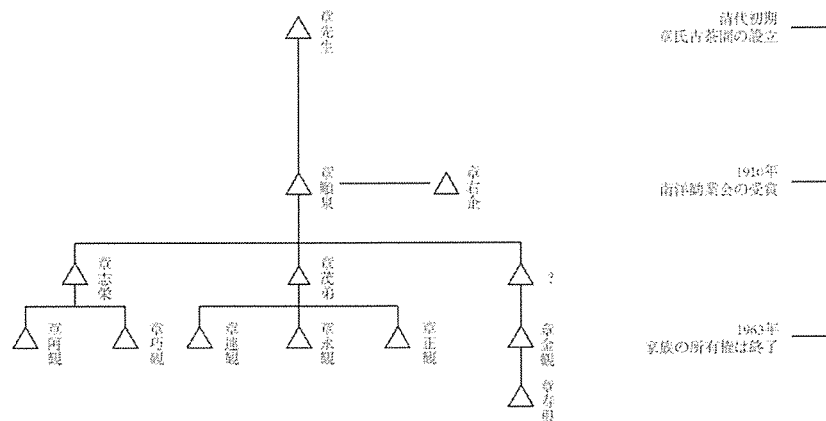


図 4 - 2 章氏の族譜  
(2019 年 筆者作成)

## ② 章永覲

章永覲は 1932 年の生まれで、茶園村の農民である（写真 4 - 4）。祖父の章順泉、父親の章茂弟はともに教育レベルが低いため、茶園の文字記録ができず、ずっと家族間で口頭伝承してきた。章茂弟には 3 人の息子がいる。章氏古茶園が引き継がれてから 3 つに分けられ、3 人の息子に共同管理されている。生産された茶も均等に分けられている。1963 年に人民公社所有のものになり、家族経営の時代が終わった。

章永覲は小学校に通ったことがあるが、4 年生までで退学せざるを得なかったという。16 歳から農業の生産労働に従事し、働きながら勉強を続けていたので、上手な字が書ける。新中国成立後、村は彼を事務、会計、技術者として育てた。彼は正直な人間であり、村人に信頼され、その後生産大隊の経済管理員を務めていた（写真 4 - 5）。晩年になってから、茶園について思い出したことを文字に残した。現在、マスメディアによる章氏古茶園の報道は全て章永覲と彼の息子である章学文の話に基づくものであった。筆者は章永覲に家伝の印鑑、原稿（写真 4 - 7）、茶の包装紙、茶園の報道及び彼本人の写真を見せてもらったが、写真には茶園が写されていないかった。

章永覲の弟である章連覲は、16 歳のときに農業局に入って勤務し始めたという。章永覲は「弟は国が育ててくださった人材だ。新中国成立初期、技術者はブルジョア的なものとされたので、プロレタリアの中から人材を育てなければならないのだ」と言っている。当時、章永覲は大学に行く予定だったが、村の中心的存在であるため、村から離れられない。そこで、彼の弟が代わりに大学に行った。章連覲は南京の大学で勉強し、高級農芸師となり、浙江省の労働模範<sup>87</sup>にもなった。定年後に顧問として外資の農薬製造企業に雇われた。1990 年に、嘉興市の元書記である杜雲昌は章連覲に「章氏古茶園を章家に戻し、章家が管理してください」と言った。しかし、章連覲は茶園を受け取っていないかった。理由は茶園の復帰手続きが複雑過ぎ、す

<sup>87</sup> 労働模範とは、中国の政府、地方行政区、国有企業が人民並びに国内で功績を挙げた外国人労働者に授与する荣誉称号。模範称号の一つ。略称は劳模。別称は模範労働者。関連する称号として先進工作者がある。

で茶園の家族運営も中断されたからである。章永観の息子である章学文は現在、塘匯街道の管理職を務めている。章家と章氏古茶園との繋がりは現在でも続いている。

章永観は長きにわたり章氏古茶園に深い思いを抱いている。茶園が塘匯街道に管理されるようになってから、毎年春の茶摘みの際に、必ず章氏古茶園茶葉の見本を彼に送る。彼はマスメディアの取材を受け、章氏古茶園で数多くの写真を撮ったが、まだそれを見ていない。章永観にとって、茶園は故郷と同様なものである。彼は伝統的な章氏古茶園茶生産、生活様式を保つ最後の人間であった。



写真 4-4 青年の章永観  
(出典：1955年 章永観)

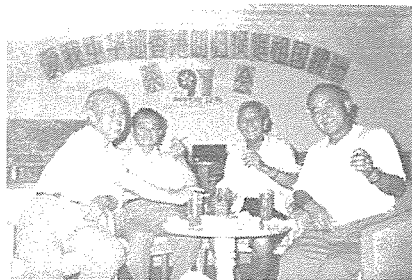


写真 4-5 章永観（右1）が友人と茶を飲む  
(出典：1997年 章永観)



写真 4-6 筆者と章永観  
(2019年1月24日 姚小雷撮影)

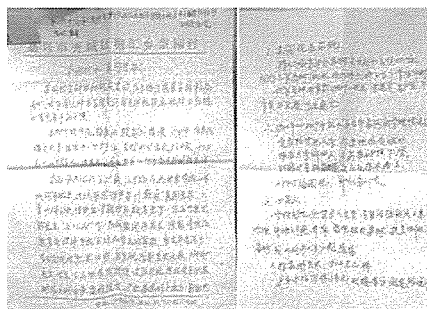


写真 4-7 章永観の手稿  
(2019年1月24日 筆者撮影)

#### 4 塘匯の「喝早茶（朝茶を飲む）」習俗

嘉興市には「喝早茶（朝茶を飲む）」という習俗がある。これは江南地域の水郷によく見られる。川沿いに林立した数多くの安茶屋に、農村の老年男性が通常、夜明けの3、4時頃にそこに集まって茶を飲みながら世間話をしていたのである。現在、嘉興市の桐郷などでは、このような風習がまだ残っているが、塘匯では、「喝早茶」の茶屋は2009年以降無くなっている。経済開発のため、元々塘匯にあった建築物を別の場所に移動しなければならない。（写真4-8）は塘西街にあった茶館を取り壊される前の、客様たちが館内で飲茶する風景である。

嘉興市民朱錦昌（100歳）の話では、昔塘匯の農民はいつも舟を漕いで茶屋に来るといふ。一番早い者は夜明けの1、2時に来ただそうだ。その時、塘匯は東塘匯、西塘匯に分かれており、川沿いに茶屋が林立し、非常ににぎやかであった。左岸に「清和軒」という茶屋があり、右岸に「得月楼」、「共和春」、「一品元」、「同豊元」などがあったそうだ（写真4-9）。

当地では喫茶の習慣があるため、地元の住民たちは茶のことをよく知っており、地元で生産された茶に特別な愛着を持っている。ただし、上述した茶屋では貴重な章氏古茶園産出の茶を飲むことはできず、それに関する伝説だけが広がっているのである。



写真 4-8 塘匯の茶館

(2009年2月7日 汪榮華撮影)



写真 4-9 塘匯長織塘文化館に再現した茶館の様子

(2019年1月20日 筆者撮影)

## 第2節 章氏古茶園の生産について

### 第1項 「家園茗茶」の栽培、採取、製造、販売、飲用

#### 1 章氏古茶園の土壤検査と分析

章永林は章永観の婿で、かつて茶園村の書記を務めた。彼は若い頃に茶園で茶の種を拾い、「茶の卵」と呼んで遊んでいた茶の種は茶園の中に落ちると、小さな茶の芽が出るが、茶園の外に落ちると出てこないと言う。

筆者は章氏家族に協力して、茶園の土壤サンプルを採集し、嘉興市の環境保護局に送って土壤検査を依頼した(写真4-10)。土壤検査の結果と茶学専門家による分析は次のようである。茶樹は通常、酸性土壌の中低山地で成長する。茶の生長に適する土壌は、通気性と保水性に優れた砂土壌である。適する土壌のPH値は4.0-6.5の間で、7以上になると茶の成長に向かない。章氏古茶園土壌のPH値は5.43-6.37の間であり、茶樹の生育に適している。しかし、嘉興市土壌のPH値は全体的に高く、中性または弱アルカリ性のものが多く、茶樹の成長に不利である(『嘉興市の土壤検査データ』嘉興市環境保護局)。また、酸性が強く、土の粘りが強い土壌も、茶樹の生育に適していない。嘉興市の土壌も粘土質なものも多く、通気性が足りず、茶の生産に適さない。章氏古茶園の土壌だけは砂土壌であるため、空気が通り、保水性もあるので、茶の生産に適する。しかし、専門家の指導により、現在茶園の土壌にある有機質が少ないため、肥料を増やすことが提案されている。



写真4-10 嘉興市章氏古茶園土壤檢查報告書  
(2019年10月18日 嘉興市環境保護局作成)

## 2 栽培

「家園茗茶」の栽培と管理は特殊なものである。土壌が限定されているため、茶園の面積を拡大することは難しい。茶樹は群れで植えられ、長い年月をかけて自然に成長し、農薬や化学肥料は使われず、台刈り<sup>88</sup>も行われていない。そのため、挿し木や無性生殖の必要もないのである。したがって、茶樹は大人ほどの樹高になっており、亜高木の様相を呈している。このような茶樹の生長に最も適する環境は、章家一族が数百年をかけて創ったものである。

昔の章氏古茶園は現在の様子と異なっている。新中国成立前に、茶園に植えられた木は主にビワ、梅、柿、李などの果樹であった。章永観は「幼い頃、ビワの木に登って実を取ったことがある」と言った。他には、漢方の薬草も植えられた。例えば、一葉一枝花、半边蓮、生南星、節骨草、娘魚藤などある。現在では、茶園にある樹木は全て雑木である。果物狩りの客が茶樹を荒らす恐れがあるため、果樹が取り除かれたのである。しかし、果樹は茶葉の香りに影響を与えることに対して、雑木は何もしない。そのため、章永観は2005年に茶園の雑木を除いて果樹を植えようとした。このことは池匯派出所（交番）に発見されたため、彼に「樹木を伐採してはいけない」と警告された。章永観は昔の茶園の様子を回想しながら、次のような諧謔詩に書いた。

茶樹栽成円宝形，多種果樹滿園林。  
春季採茶一片青，夏季枝葉向上昇。  
秋季茶花白似銀，冬季茶樹須更生。  
茶園雖小茶樹高，不施農薬質量好。  
精心採芽好加工，質厚芳香好味道。  
玻璃杯子冲旋轉，偷吃一口便知道。

## 3 採取

茶園の茶の年間生産量は20-25キロになっている。昔は3回に分けて茶葉を摘み取っていた。春に摘み取る茶葉は頭茶あるいは春茶という。頭茶を摘んでから再び茶の芽を摘み取る時はも

<sup>88</sup> 地上茎を地際部より切り取って、地上部や地下部の芽の生育を促すことである。

う夏になる。これは二茶あるいは夏茶いい、秋に再度に摘み取るのは秋茶という。茶葉の品質をみれば、春茶が最もよく、次に秋茶、最後に夏茶となる。章氏経営時代の茶生産量はやや高く、春・夏・秋の茶葉が収穫されていたが、人民公社になってからは、春茶だけを摘採するようになった。

茶園の私有時代に、章永観は毎年摘採する仕事をやっていた。時には隣に住む村民を雇って摘採する仕事を手伝うこともあった。摘採する標準は一芽一葉であり、葉が巻いてはいけない。葉が巻いたら摘採しない、芽が伸び過ぎたら、摘採する価値が無くなる。摘採する際は必ずこの基準に従わなければならない（写真4-11）。



写真4-11 春茶の茶摘み

（2019年3月30日 筆者撮影）

#### 4 加工

摘み取った生茶葉は屋台で干し、当日の夜に炒める（写真4-12）。生茶葉と仕上げた「家園茗茶」の割合は7：1になる。普通の茶は4：1になっている。茶を炒めるには拘りがある。章家の祖先代々が自らの手で茶葉を炒めてきたのである。章永観も弟子を育てた。自宅の炊飯用かまどで稲わらを燃やし、手で茶葉を炒めた。火加減を調節するため、火を焚く人と茶を炒める人が協力し、茶を炒める人の指示に従う。熱く感じたら、茶を炒める人が「ゆっくりしろ」と言って、火を焚く人が火を抑える。火が足りないなら、茶を炒める人が「強くしろ」と言って、火を焚く人が稲わらを入れて火を強くする。

茶葉を2回炒める必要がある。1回目に火を強くして、炒める際に手で揉みながら、茶葉の縮み具合を感じ、乾燥しすぎないように注意する。そうしないと茶葉が壊れやすい。1回目の炒めが終わった後、竹の箆に茶葉を広げて干す。茶葉が冷めたら、2回目の炒めを始める。2回目の炒めはとろ火を使う。1回目に炒めた際に出た「チーチー」という音がしてはいけない。もし茶葉からわずかでも音が出たら、失敗することになる。火が強すぎるとは、茶葉に焦げが出る。街道は茶園を経営するようになってから、毎年春に湖州、安吉から茶職人を呼んで、電気フライパンで茶葉を炒めるのである。





写真 4 - 12 章園茗茶の摘み取り、屋台干しとかまど炒め  
 (2017年4月 塘匯街道撮影)

## 5 販売

茶の加工が終わった後、章氏一族の人は自分たちは飲まず、小売もせず、予約購入してもらう。取引先は嘉興市の富裕層が多く、上海からの予約者もある。当時、章永観の父親は自ら予約した取引先に茶葉を配達していたため、章永観はこのことをあまり知らない。張惠英（85歳）の話では、彼女は新中国成立前に塘匯銀行で働いていたことがあり、当時の銀行頭取も章氏古茶園の茶を飲んでいたと言う。章永観の話でも、嘉興図書館の館長がよく彼の父親のもとに茶を買い求めにきたそうだ。また、銭維岳という長年に茶を予約購入する上海の客がいた。彼は計器工場の技術者であって、毎年10キロ以上の章氏古茶園の茶を購入していた。自分で飲むだけでなく、カナダにいる妹の夫にも送ったと言う。銭維岳氏は中国各地の名茶を飲んだが、章氏の茶が最も好みだと言う。茶園が人民公社の管理になってから、彼らは章氏古茶園の茶を購入することがなくなり、交際も途絶えてしまった。

茶の値段について、章永観は覚えていないようである。各時代における物価の差が大きいからであろう。茶の生産高は少ないが、値段はそんなに高くない。章氏古茶園の茶は嘉興ひいては上海の周辺でかなり有名なものである。新中国成立前に、茶館や茶屋で働いた人が皆、池匯産の茶を覚えている。その茶はとても美味しいが、なかなか手に入らないものだと言っている。

昔、章氏古茶園の茶は2枚の紙で包まれていた。中は礬砂紙で、外は包装紙であった。包装紙の正面に宣伝文句が彫られた印が捺されており、裏には私印が捺される。章永観は祖父が包装紙の裏面に私印を捺していたことを今でも覚えていると言う。彼の祖父の名前は章友順であるため、私印の丸い形の中には「順」という字があった。

宣伝文にある印鑑は家伝のものであり、章永観に大切に保管されている。木製の印鑑には四角い穴が開けられており、そこには茶の価格を書き入れるのである（写真4-13）。内容は次のようになる。

家園茗茶  
本園住秀洲北門塘匯鎮南首便是  
每兩定價口元口  
凡士商賜顧為記印



写真 4 - 13 「家園茗茶」の宣伝文の印鑑  
(2019年1月20日 筆者撮影)

その後、茶園が塘匯街道に管理するようになって、茶葉の生産・販売を行っていた。茶は主に街道主催のイベントでの鑑賞や贈呈に使われる。章永観は2008年以降の「家園茗茶」の包装ケースを収集している。その包装には、「家園茗茶」から「章園茗茶」へと改名されている（写真4-14）。



写真 4 - 14 改名された「章園茗茶」の包装  
(2019年1月20日 筆者撮影)

## 6 飲用

筆者は2018年の春に生産された「章園茗茶」の試飲（またはテイスティング）を行った。茶葉は他の品種に比べて均整がとれていないが、独特の味と香りがある（写真4-15）。章永観が言った通りに、「色が青々としており、茶の質がまろやかで美味しい」と高い品質を保っている（写真4-16）。



写真4-15 乾燥した茶

（2019年8月30日 筆者撮影）



写真4-16 茶の湯

（2019年8月30日 筆者撮影）

## 第2項 南洋勸業会の受賞

章永観や章正観からの聞き取り調査によれば、章氏古茶園で生産された「家園茗茶」は宣統二（1910）年に南京で開かれた南洋勸業会で金賞を受賞したと言う。

南洋勸業会は、中国で初めて開催された公認の国際博覧会のことである。当時、两江総督<sup>89</sup>の端方氏によって1910年6月5日に南京で開催され、半年間にわたり、国内外の約30万人以上が来場したといわれる。中国洋務運動の代表的な事例と言っても過言ではない。

南洋勸業会の受賞については、端方と江蘇省巡撫<sup>90</sup>の陳啓泰氏の連名による『奏為江寧省城擬設南洋第一次勸業會、官商合資試辦、以開風氣而勸農工折』という上奏文に「榮譽所在、人人鼓舞、現擬定獎分為六等」[鮑・蘇吳 2010: 14]と書かれており、具体的には、下記のようになる。

奏賞（一等賞）66名；  
超等賞（二等賞）214名；  
優等賞（三等賞）426名；  
金牌賞（四等賞）1218名；  
銀牌賞（五等賞）3345名；  
合計5269名。

<sup>89</sup> 两江総督は、中国清朝の地方長官の官職である。江蘇省・安徽省・江西省の総督として管轄地域の軍政・民政の両方を統括した。

<sup>90</sup> 中国明・清時代の地方長官の官職である。巡行撫民の略で、その名は明の洪武・永楽時代からあり、初めは中央から派遣される臨時の職であった。その地位は2、3省を管轄する総督より少し低い、資格は同等で皇帝に直属された。



写真4-17 南洋勸業会のメダル

(出典：蘇克勤・余潔宇 2010年『南洋勸業会図説』上海交通大学出版社)

茶は南洋勸業会農業部門の出展品として、四等賞すなわち金牌賞をを獲得した(写真4-17)。受賞名簿には全部で50種類の茶があり、それぞれ安徽、江蘇、浙江、江西、福建、湖北、広東、広西、貴州、上海の生産となっている。筆者はその受賞名簿から面白いことを見つけた。嘉興市は茶産地として全国的には有名ではないものの、3種類の嘉興の章氏古茶園が生産した「家園茗茶」は受賞名簿にあった[『南洋勸業会審査入賞名簿』1910]。その記載は以下のようである。

家園緑茶、婺源毛峰、黄山珠蘭(上海、瑞興泰茶莊)四等

浙江張園芽茶(浙江秀水県、張右企)四等

秀水張園頭茶(浙江、出品協會)四等

ここに記載されている「張園」という文字は、間違いではないかと思われる。「張」と「章」は中国語の発音が同じである。「張園」は「章園」、つまり章氏古茶園のことであると考えられる。したがって、上述した資料の2行目に「浙江秀水県、張右企」とあるが、「秀水」は当時の嘉興であり、「張右企」は茶葉の選送人で、実際は「章右企」である可能性が高く、すなわち章氏古茶園の持ち主である。3行目には「秀水張園頭茶(浙江、出品協會)」と書かれていることから、章園茶は秀水県に選出・推薦してもらい、南洋勸業会に出展したほか、浙江省の「出品協會」<sup>91</sup>にも選出・推薦してもらったことが分かる。1行目に「家園緑茶、婺源毛峰、黄山珠蘭(上海、瑞興泰茶莊)」<sup>92</sup>と書いてあり、婺源毛峰と黄山珠蘭は茶の品種として現在でも有名である。上海は茶の産地ではないため、上海の瑞興泰茶莊が他の産地から3種の茶を選出・推薦したのだと考えられる。恐らく上述した3品は茶莊自慢の製品であろう。そのうち、「家園緑茶」という品種は聞いたことのない品種であり、章氏古茶園が生産した「家園茗茶」を指すのかもしれない。なお、「家園緑茶」が「婺源毛峰」、「黄山珠蘭」の前に記された理由は、章園茶が上海周辺にある唯一の平原茶として、業界内で認められており、誇りに思われていたからであろう。

嘉興市章氏古茶園が生産した「家園茗茶」は1910年前後に既にブランド意識を持っており、秀水県の個人名義、浙江の協会名義、上海の茶莊名義という3つのルートで南洋勸業会に推薦

<sup>91</sup> 中国民国時代に茶などの農産品を選び出して、勸業会へ推薦する機関である。

<sup>92</sup> 「茶莊」は「茶屋」とも言う。茶を売る店である。

されたのである。このように、章氏古茶園の茶が3つの金賞を同時に獲得したのである。

### 第3節 章氏古茶園をめぐる茶文化祭の役割

#### 第1項 徐王廟とその廟会

清朝秀水詩派の詩人王曇は塘匯の出身である。彼は『寓齋飲茶』という詩に「徐王廟後三弓地、羅嶺山頭一品春」という詩句を残し、章氏古茶園産の茶を褒め讃えた。「三弓地」とは弓を3回引いて矢を射る距離のことである。徐王廟はすでに取り壊されたが、その跡が茶園から約500メートル離れ所にある（写真4-18）。光緒四（1878）年の『嘉興府志』には、「吾地無山鮮業茶者」と書いてある。なお、『強恕齋詩鈔』の引用によると、「禾城北徐偃王祠後産茶、地小不多得」とある。上述した歴史文献から分かるように、章氏古茶園は常に徐王廟とともに言及されているのである。

廟に祀られた徐偃王は、西周時期徐国の君主と思われることが多い。徐国は現在の淮水、泗水の一部を統治し、下邳に都を作った。周穆王の末年、徐偃王は仁義を行い、東方の諸侯40余国が徐国に朝見するようになった。穆王は徐国の勢いを恐れ、楚国に徐国を攻撃させた。その後の徐偃王の行方については諸説がある。光緒四（1878）年の『嘉興府志・卷10 壇廟、国朝・范長髮記略』に、以下のように記載されている。

徐王、浙人也。廟在禾城東北思賢郷。自宋迄今五百餘年矣。舊壁繪王出征始末功績丕著。當徽欽北狩、王忠義不屈歿於江右、隨即成神、今巢湖鴛鴦殿即王顯聖處也。歲之八月王之誕辰、仲春二月夫人誕辰、故老相傳每歲八月前紅光燭天、徐王歸裏、是年五穀豐登、曆有明驗。明末王常顯靈、使此地免於兵刃、是以合郡士民無不感戴酬賽、為一方盛會。

この記載によって、徐王は北宋末期の将校であり、その忠義により民間祭祀の信仰対象となったことが分かる。塘匯の徐王廟は既に現存しないと思われたが、実際には塘匯の円通古寺に移されたのである。円通古寺は元朝順帝正元（1341）年に建てられており、元々は観音庵であった。清朝康熙二十八（1690）年に増築され、円通庵という名称を与えられた。この円通古寺に移されたのは徐王廟だけではなく、嘉興市郷鎮の様々な神殿もあった。例えば、鎮守殿、施王殿、七殿、楊殿などである。都市化の推進につれて、農民の家屋だけでなく、寺院も取り壊されて移転させられたのである。

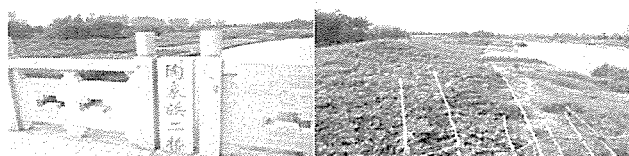


写真4-18 徐王廟の跡

（2019年8月30日 筆者撮影）



写真4-19 徐王の像

（2019年8月30日 筆者撮影）

徐王廟の外にある木札に説明文字がある。その内容は『嘉興府志』に記載された徐王の説明と大きく違い、次のようになっている。「徐王は巢湖福主と呼ばれ、浙江の出身であり、本姓は余である。徐員外の女婿になったため、徐と改姓した。徐王は嘉興の地域振興のために蚕桑、絹織物、流通販売などに貢献し、富をもたらした。それ故に徐王は財神としても祀られ、元宝を手を持つ徐王が財神の姿になっている（写真4-19）」。

1950年代以前、毎年旧暦の正月初八に徐王廟会が行われていた。『嘉興府志』巻34「風俗」には、「八日郷人蟻舟集徐王廟，為賽神之會」と書かれている。『古禾雜識』には、「初八日燒八寺香、北郊外徐王廟最鬧。市井人叢集、有換元寶還元寶等名」とある。また、『嘉興府典故纂要』には、「徐偃王逃之會稽、其宗族有散在邑者、後世思王功德、立廟以祀焉」と記載されている。清朝朱彝尊氏の『鴛鴦湖櫂歌』に、「不待上元燈火夜、徐王廟下鼓冬冬」という詩句がある。旧暦の正月初八は「谷日」とも言われ、民国時代には「仏の誕生日」であった。村人たちは「徐王」を「谷神」と見なしているのである。しかし、徐王廟会は1950年代に無くなった[陸 2002: 99]。

グローバル化と都市化を特徴とした現代生活の急速な発展に伴い、郷土民俗の連続性は著しく失われている。郷土の村落社会は中国の経済発展とともに激変しつつあるが、しかし、郷土文化は依然として中国伝統文化の最も重要な伝承者であると考えられる。

## 第2項 現代章氏古茶園の茶文化祭

2013年に嘉興市政府が章氏古茶園の茶文化テーマパークを建設した。2014年に塘匯街道で第1回茶文化祭のイベントが始まり、毎年3、4月に開催され、現在まで6回行われた。

2014年3月19日に、第1回の「章氏古茶園円通禅茶文化祭」が開催された。当日は観音菩薩の誕生日に当たり、宗教行事も取り込むことになった。章氏古茶園は円通古寺の「禅茶」文化と結合し、茶聖の祭祀、嘉興茶史の講演、茶芸の公演、書道、茶摘みの踊り、観音歌などで賑わった（写真4-20）。

2015年4月18日に、第2回の「『印象塘匯・古茶迎春』章氏古茶園茶文化祭」が開催された。茶文化祭は「印象塘匯」<sup>93</sup>から始まった（写真4-21）。その後、開会式が行われ、茶摘み踊り、茶芸ショー、詩歌の朗読、かまど炒めの展示、盆栽の展示、茶の試飲など活動で賑わった。そして、章氏古茶園は時間限定で開放され、塘匯地域の影響力と知名度を高めた。



写真4-20 第1回茶文化祭

(2014年塘匯街道撮影)



写真4-21 第2回茶文化祭

(2015年塘匯街道撮影)

<sup>93</sup> 「印象塘匯」は塘匯をイメージアップする為に、嘉興市の塘匯街道が主催したイベントである。



写真4-22 第3回茶文化祭における「最美塘匯人」の授賞式

(2016年塘匯街道撮影)



写真4-23 第4回茶文化祭

(2017年塘匯街道撮影)

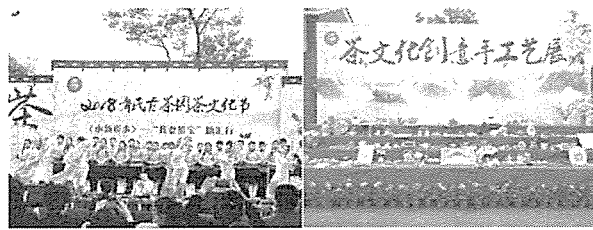


写真4-24 第5回茶文化祭と手芸品展

(2018年塘匯街道撮影)

2016年4月17日、第3回の「『印象塘匯・樂活鄉里』章氏古茶園茶文化祭」が開催された。主催者には、これまでの政府部門の他に、不動産企業も参加した。文化祭では、「最美塘匯人（最も美しい塘匯人）」の授賞式が行われた（写真4-22）。受賞者には、親孝行の嫁、母親、共産党員、隣人、教師、警察、地域の書記、企業の従業員などがいる。開会式では、茶の歌、チャイナドレスショー、民謡の演奏などが披露された。また、古茶園の見学、茶摘みショー、茶炒めの道具、園芸、書画や写真の展示などがあった。

2017年4月15日、第4回「章氏古茶園茶文化祭」が開催された（写真4-23）。政府部門と不動産企業の共催によるものである。開幕式に獅子舞ショーがあった。「最美志願者（最も美しいボランティア）」の授賞式には、地域の幹部、仲裁人、仲人、職員、労働模範者などがいた。また、茶歌と茶踊り、民族音、詩歌の朗読、塘匯実験小学校の生徒36人による『長織塘茶賦』の朗読で賑わった。

2018年4月14日、第5回「章氏古茶園茶文化祭」が開催された（写真4-24）。茶園見学、文芸公演、手芸品と絵画の展示、手芸ショーと嘉興テレビの番組など5つのイベントが行われた。開幕式に舞龍ショーが披露された後、「最美家庭」の授賞式が行われた。文芸公演では、「章園茶歌」というオリジナル曲や「茶園探根」という劇が披露された。今回のイベントでは、マスメディアが参加し、章氏古茶園をテーマにした地域のオリジナル文芸作品も登場した。

### 第3項 茶文化祭の役割

#### 1 地域シンボルとしての章氏古茶園

章氏古茶園は民衆によって自発的に創られたものである。文字の伝承は少数の文人たちに重んじられる特別な知識に過ぎず、人の叡智のすべてとは言えない。識字率の低い農村社会では

特にそうである。章氏古茶園に残された文字は極僅かである。茶園の主な伝承形態は茶園起源の口頭伝承や、茶摘み、茶炒めのような身体伝承である。

章氏古茶園で生産された茶は清朝の文人に称賛されており、また南洋勸業会の金賞を受けたのである。この歴史的経緯はやがて人々に忘れられてしまうかもしれないが、当時の茶園村や嘉興にとって大きな栄誉であり、地方民衆の記憶に深く根ざしているのである。

都市化に伴い、章氏古茶園の民俗が地方の知識階級によって掘り起こされ、改めて意味付けされたのである。例えば、文人が創作した次のような伝説がある。清朝の乾隆帝が茶樹の根で作った湯飲みで茶園の茶を飲んだという。それが「茶里茶」<sup>94</sup>であるという伝説である。同様の伝説に、前述した茶園の移転に伴う「三本半の茶樹」というものもある。地方の知識階級は歴史の知識を利用し、想像を加えて、民間伝承を綴り合わせ、地域における文化資源を「合理的」に説明している。

章氏古茶園は塘匯街道ひいては嘉興地域の茶文化のシンボル・記号として、歴史的影響力と豊かな民俗を通じて、地域社会を構成しているのだと考えられる。

## 2 非茶産地における茶園民俗の希少性

浙江省統計局のデータによると、2017年までの浙江省における茶園の総面積は198524ヘクタールであり、茶の生産総量は178308トンである[浙江統計年鑑2018]。浙江省では、区県レベルの茶の主要産地は25箇所あり、その生産量は全省の83%以上を占めている。上述した25箇所の主要産地に嘉興地域は含まれておらず、残りの17%の産地にも嘉興地域が見られないのである。したがって、茶、茶俗と茶文化の研究分野においては、嘉興地域に関する研究はほとんど見られない。章氏古茶園は、嘉興地域の茶文化研究において極めて貴重な資料を提供している。特に茶の栽培、採取、加工における茶俗の研究に独自性を持つのである。

章氏古茶園は珍しい平地の茶園である。茶樹の品種、土壌分析、茶園の生態システム、環境変化による茶の品質への影響など、様々な方面からさらに研究が進む可能性がある。また、嘉興地域は昔から著名人や文人など、人的文化資源の豊かな地域であるが、庶民生活史の研究はあまり見られない。章氏古茶園は章氏一族に経営・管理されたが、章氏の族譜や関連資料がまだ発見されていない。茶園と章氏一族に関する300年の歴史を整理することにより、嘉興地域における庶民の茶文化の歴史も明らかになると考える。さらに、茶園は嘉興地域の社会文化、経済及び歴史研究においても貴重な資料になると言えよう。

## 3 茶文化の「飛地」<sup>95</sup>

嘉興は京杭大運河が流れる重要な都市である。大運河は嘉興から杭州にかけて钱塘江を経由し、浙東運河に入り紹興に流れ出る。浙東運河はその終点が寧波であり、甬江とつながっている。京杭大運河の世界遺産申請には浙東運河が含まれる。浙東運河があったからこそ、300年前に紹興地域の土壌と茶樹が、船で嘉興塘匯に運ぶことが可能になったのである。

嘉興は昔から呉国と越国の境を跨っている。北宋と南宋の間にあつて、北方からの移民を大

<sup>94</sup> 「茶里茶」という伝説は塘匯街道長織塘文化館の展示室に展示されている。

<sup>95</sup> 飛地（とびち）とは、1つの国の領土や行政区画、町会等の内、地理的に分離している一部分である。土地の一部が「他所に飛んでいる」と見られることから「飛地」と呼ばれるのである。



量に受け入れたのである。このことが章氏古茶園の「徐王信仰」にも反映されている。清朝末期、太平天国の乱後、嘉興の人口は激減した。その後、紹興からの移民が大量に流入し、さらに1990年代には三峡<sup>96</sup>地域の人々も嘉興に移住した。このように、嘉興は人々を受け入れる素地と包容力を持つ地域となっている。章氏古茶園は紹興茶文化の「飛地」として、嘉興の都市文化と記憶にも深くつながっているのである。

#### 4 血縁から地縁へ

章永観と彼の兄弟が章氏古茶園を所有した時代は、中国社会の変革時期であった。茶園の所属関係は時代と共に変わり、「家族所有→集団所有→街道所有」というようになっている。このような変化は、血縁関係から地縁関係への再構築だと理解してもよからう。

章氏古茶園は1963年まで家族内部で血縁的に受け継がれていた。茶摘みの際、章氏家族だけで仕事が終わらない場合、親戚や近隣を雇って仕事を完成させ、雇った人に報酬を与えていた。これは親縁関係とも言えるだろう。血縁、親縁関係があるからこそ、章氏古茶園は終始、心を込めて管理されていたのである。その後、社会構造の変化に伴い血縁継承が断絶し、茶園は約50年荒廃されていた。

2008年に嘉興政府の介入により、長年に眠っていた古茶園は新たな段階に入った。グローバル化、工業化、都市化が進む中、古茶園はその文化的意味、民俗的意味を検討し再現したのである。章氏古茶園が存在したからこそ、塘匯街道に数多くの新しい地名が生まれた。例えば、茶園路、章園路、茶園村、茶香坊など。これは茶園から命名しているのではないかと考えられる。

2014年に、嘉興政府は章氏古茶園を民俗資源として利用して公園を建設し、そこで「章氏古茶園茶文化祭」を開催した。それを通じて、塘匯街道を地縁的示標にした。「章氏古茶園茶文化祭」では、様々なイベントが行われる。筆者の観察によって、第3回から、茶文化祭の開幕式に必ず重要な授賞式が行われるようになった。例えば、「最美塘匯人」、「最美志願者」、「最美家庭」など。このように、章氏古茶園は血縁関係にある「家園」文化から、現在の地縁関係にある「社区」文化に置き換えられたと考えられる。

#### 5 茶文化の民俗主義

筆者はいつも「故郷は伝統的な茶産地ではないため、茶文化研究の縁にある」という「郷愁」を持っている。章氏古茶園の調査研究を通じて、筆者の「郷愁」が満足された。しかし、残念ながら、章氏古茶園を経営した最後の世代が亡くなった。300余年にわたる郷土の文化・民俗を包摂する存在としての章氏古茶園は、現代の社会経済を取り込まれ、観光資源化されてきた。この茶園をめぐる生産、生活の民俗も政府の介入により、「民俗主義」の素材になるだろう。

民俗主義とは、「原初の環境と異なる環境において民俗の素材と要素を使用する」[H・B 2018:112]ことである。「章氏古茶園茶文化祭」は政府の主導と企業の協力に基づき、観光産業の影響を受け、マスメディアの需要に対応して形成・発展されたものである。現在、章氏古茶園や「家園」という観念は新時代の民俗素材となり、都市発展と農村振興の貴重な資源とな

<sup>96</sup> 中国の長江本流にある3つの峡谷の総称。

り、新たな文脈において地域文化のシンボルとして再構築され、意図的に運用されている。

## 小結

本章では、歴史文献と聞き取り調査の資料を利用して、中国嘉興における章氏古茶園の歴史と現状を明らかにした。茶園村の村民、特に章氏家族にとっては、章氏古茶園の起源、発展と興廃が重要な生活の記憶である。農村社会が激変している今、章氏古茶園の研究を通じて、人間の最も基本的な生活共同体としての村落の変遷を改めて観察・考察することができたのである。章氏古茶園は 300 年にわたる嘉興地域の社会変化と庶民生活を目撃してきた。現在も消費生活によって主導された社会経済の問題に直面し、地域民衆文化の変遷を見つめている。

## 第5章 シェ族における茶文化伝承の性格と変容

### —景寧シェ族自治県の「金賞恵明茶」を中心に—

#### はじめに

景寧県は、中国における唯一のシェ族（畬族）自治県である。同時、浙江省に一つだけの少数民族自治県である。茶葉は景寧の名産の中に重要な位置を占めている。この当地にある有名な茶葉の中に「金賞恵明茶」は悠久なる歴史を誇り、シェ族の産業・日常生活・風習などに緊密な関係がある。そのため、本稿は、景寧県におけるシェ族と「金賞恵明茶」に関係する茶の栽培、製茶、飲用習慣および、人生儀礼や先祖祭祀に使われた茶の種々行為や目的、あるいは民俗的な役割と文化の価値について明らかにしていきたい。

#### 第1節 景寧シェ族自治県の概況

##### 第1項 景寧地域の概況

景寧シェ族自治県は浙江省麗水市にあり、浙江省南西部の中山区に位置する自治県。南西から北東へと走る地勢である。亜熱帯モンスーン気候に属し、温暖湿潤で降水量が多い。総面積は1950平方キロで、15郷・4鎮・2街道を管轄する。明景泰三年（1452）に設置された景寧県は現在で中国唯一のシェ族自治県であり、浙江省に一つだけの少数民族自治県でもある。唐永泰三年から、シェ族の人が移ってきており、そこが浙江省シェ族の発祥地となった。1984年、国務院の批准により、景寧シェ族自治県が設置された。



地図5-1 恵明茶の区域保護範囲と景寧県

(出典:景寧県農業局 2020年)

1989年5月、景寧県民族事務委員会は県の農村人口3398世帯、都市人口316人を対象に、人口統計調査を行った。調査結果によると、調査の対象に入っていなかったシエ族人口83人を除いて、男性8820人、女性7836人、合計16656人。16656人のうち、シエ族の4種類の苗字は藍が6639人、雷が8480人、鐘が11537人、盤が0人。2000年第5回国勢調査では、景寧のシエ族常住人口は16144人で、県総人口の約10%を占める。

(地図5-1)は恵明茶農産品地理標識区域の保護範囲である。この範囲は景寧シエ族自治県の管理範囲と同じである。

## 第2項 景寧のシエ族

1956年12月、国務院はシエ族が単一民族であると公式発表した。2000年第5回国勢調査では、シエ族人口は709592人で、主に福建省、浙江省、江西省、広東省、貴州省などに分布するという。数代にわたり移動を続けてきたシエ族は、広東省潮州市にある鳳凰山をシエ族の発祥地と認識している。唐の時期に入り、シエ族の人は「徙内地民住之、本土之苗乃雜処其間」から、「左衽居椎髻之半、可耕乃火田之余」に変わった。つまり、シエ族の先祖達の人口移動は現住の区域内に限って、山区へ移動し始め、畑耕作をしいた意味である。宋の時期に入り、多数のシエ族の人が福建省の中部、北部へ移動した。元、明、清の時期は主に、政府によって移動を強制されており、そこで、大散居・小集居（小さな集団が広く分布する）という住居形態になった。南宋の末期になり、政府は、元に抵抗するため、軍隊を組むと民衆に呼びかけていた。それに応じて、「シエ軍」ができた。元十五年(1279年)、南宋が滅亡し、「シエ軍」も失敗に終わった。その影響を受けて、シエ族は移住を命じられた。明の初期、シエ族は再び大規模な移動をした。明政府は元に抵抗する中で功を奏した非正系民族に対し、奨励する一方、警戒をも緩めなかった。彼らは客として扱われており、漢族から「シエ客」と呼ばれた。シエ族「山哈」と自称し、「山の上に住む客」という意味である。実際、シエ族語で音訳すれば「山哈」でなく、「生客」と書くべきである。それは「生まれての客」という意味で、客と呼ばれるならば、客と自認することである。『処州府誌』では、清の時期のシエ族大移動が記載されている。明、清の時期を経て、シエ族の人は福建省東部、浙江省南部の山地へ移動し、一部は安徽省へ居を移した(図5-1)。

シエ族が景寧県へ移動を始めたのは766年だとされる。鶴溪鎮勅木山村と恵明寺村に保管された手書きの小冊子『唐元皇南泉山遷居建造恵明寺報税開墾』はシエ族の景寧県への移動を記録した民間史料となった。この小冊子は1825年前後に書き写されたものだと考えられる。そこには、歴代にわたり、恵明寺を建立・修繕するための寄進が記録されている。小冊子の先頭にはこのような記録がある。唐元皇三年、僧昌森は江西広信府鉛山県に住み、唐永泰二年(766)、福建福州府羅源県十八都蘇坑境高南坑坝へ移住し、雷太祖・進裕公と知り合った。そして、息子の清華、雷太祖父子と男女五人は浙江道処州府青田県鶴溪村大赤寺(現景寧シエ族自治県澄照郷大赤洋村にある)に着いた。僧太祖父子二人は大赤寺に住み、雷太祖は葉山頭村に住んだ。その後、大赤寺の僧侶は雷進裕氏の孫の雷明玉氏と一緒に南泉山へ恵明寺の建立に取り掛かった。小冊子によると、雷進裕一家は766年、現在から千二百年余り前に、羅源から景寧県に居

を移してきており、最初に景寧県へ移住したシェ族の人であると一般的に認められる。

景寧シェ族の族譜を見れば、明の時期に福建省からここに移住してきたのは多数である。シェ族の宗譜に関する民間資料が多い。乾隆四十八年（1783）に修訂された『雷氏宗譜』には、「シェ族が広東省から福建省南部、浙江省南部に移してきたのは一族にとどまらないし、一世にもとどまらない」という記載がある。民国八年（1919）に修訂された澄照郷四格村の『汝南郡藍氏宗譜』によると、藍敬泉公は宋淳佑年間（1241-1252）、羅源黄庄から雲和小窟へ左遷され、その後、景寧金丘大磨庵に転任した。六代目藍隆貴氏は明弘治十五年（1502）に、四格村に移した。筆者は藍氏宗祠で、明の時期から現在まで受け継がれてきた位牌を見かけた[中2009：95]。

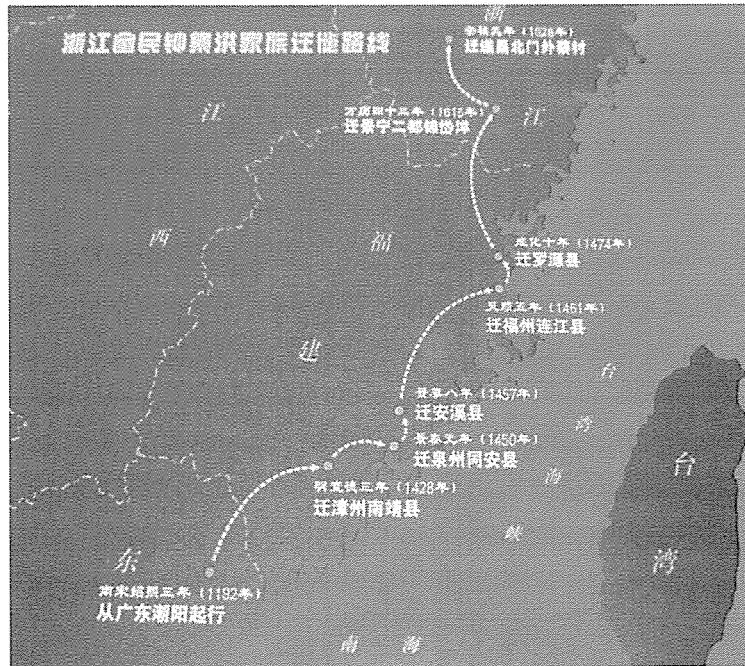


図 5 - 1 景寧県へのシェ族の移動経路

（出典：景寧シェ族自治県博物館）



写真 5 - 1 1949 年以前の景寧シェ族の家族

（出典：景寧シェ族自治県博物館）



写真5-2 20世紀90年代の景寧シエ族の家族

(出典：景寧シエ族自治県博物館)

## 第2節 景寧シエ族の茶俗

### 第1項 茶歌

シエ族の民謡は豊富で、特に茶に関するものが多い。景寧シエ族の民謡は浙江省、福建省など他のシエ族と異なり、「景寧調」という一つの音調しかないが、その歌詞は場合、場所、対象などによって変化に富んでいる。

#### 1 茶摘歌

シエ族の茶摘歌には、「四季摘み」、正月から十二月の「正摘み」、十二月から正月の「逆摘み」、そして、閏年の「十三摘み」がある。春に茶を摘み採る際に、茶摘歌を歌う。茶摘歌といえば、夫妻対歌(歌を掛け合う)、恋人对歌、義姉対歌、茶摘女と通行人の対歌などがある。

① 夫妻対歌「茶摘歌」:

茶樹生在対面山、清明時節葉青青。  
郎提籃来娘提籃、提籃提籃摘茶青。

② 義姉対歌「茶摘問答歌」:

夫の妹：山坂栽茶長又長、姑嫂二人上山崗。你鄉有無茶米樹、茶米泡茶有無嘗。  
義姉：從小來到你這鄉、我鄉也是出茶鄉。我鄉也有茶米樹、茶米泡茶清又香。

③ 茶を選別する時に歌う「揀茶<sup>97</sup>歌」

正月揀茶正月時、蘇州茶客還未來。  
今年作茶蝕了本、明年伊沒敢來。  
三月揀茶三月三、揀茶阿妹好後生。  
面打江南蘇州粉、好像日頭正上山。

<sup>97</sup> 「揀茶」は加工後の茶葉を選別し、そのレベルを判定することである。

④ 野山で歌う「恋愛歌」

女：清明時節百花香、望見茶山綠茫茫。妹妹上山摘茶葉、哥哥田間去插秧。  
男：哥在田里手插秧、時刻抬頭望山崗。哥心有意望我妹、我妹無心望哥郎？  
女：妹非無心望哥郎、手拉茶枝采茶忙。哥勤插秧妹勤摘、勤勞節儉好家堂。  
男：妹采茶來哥插秧、你我都是為社忙。插秧田間近風笑、茶樹園坪情意長。  
女：枝樹茶葉情意深、葉葉好像阿哥心。茶心生在茶葉內、妹心挂在郎心邊。  
合：蜜蜂雙雙采花心、情人一對在茶林。合作茶園常來收、情哥情妹情更深。

⑤ 余暇な時に歌う「抒情茶歌」

晚飯吃飽進家來、手提燈籠采花栽(茶)。  
手扛籠燈采花鳥(花枝)、花鳥雙枝葉相對。  
晚飯吃飽過家走、手提籠燈看花青(茶)。  
手扛籠燈看花鳥、花鳥雙枝葉相對。

⑥ 2020年5月、筆者は恵明寺村でシエ族の藍圓聰が即興で歌った「茶摘歌」を採録した。

正月の春に茶摘みに行くと、茶の芽が伸び出す。  
高い値段で売れるように、小さな生葉を摘み採る<sup>98</sup>。

茶歌の歌詞は即興で作られるものである。現在まで伝えられてきた歌詞を振り返ってみれば、茶歌は労働をする時に、男女が交流し合うための架け橋というような役割を果たしている。コミュニケーション手段の発達した現代では、歌の掛け合いを通じて気持ちを伝えることは既に行わないようになった。藍圓聰氏が即興で歌った歌詞から、景寧県の茶の商業化による影響がシエ族の人の心情を変化させてしまうことが伝わっている(写真5-3)。



写真 5-3 藍圓聰は茶を摘み採り  
ながら茶摘歌を歌っている  
(2020年5月6日 筆者撮影)



写真 5-4 藍圓聰は茶を捧げて  
敬茶歌を歌っている  
(2020年5月6日 毛麗穎撮影)

<sup>98</sup> 原文は「正月春天去採茶、眼看茶葉就長芽。要採茗茶要採小、茗茶才會亮高價」である。

## 2 敬茶歌

景寧シエ族では、客は旧識か顔見知りかに関わらず、いずれも貴賓として招待される。村人達は皆立ち上がって、客を上座にすえる。主人は炒めのスイカの種や塩漬野菜を出し、熱湯の入った急須の中に茶葉を放り込む。山歌を歌いながら、温かい茶を淹れて客を招待する。茶は茶碗の10分の1のところまで淹れればいい。失礼のないように、客は二煎目以上飲まなければ、帰らない。三煎目以上飲んでくれれば、主人は何より喜ぶであろう[姚 2019: 594]。

客に茶を捧げる「敬茶歌」の他、食事後、気持ちを表したりするための「対歌」（歌の掛け合いをする）がある。対歌を始める前に、歌を披露する人はまず客に茶を差し出す。「白碗泡茶清又清、食了清茶歌有情」と歌いだすと、対歌の幕が開く。

上海同済大学で教員を務めながら、民俗学研究を兼ねていたドイツ出身のステューベル氏は1929年の夏、李化民氏と一緒に浙江省南部と福建省北部へ浙江景寧県勅木山などのシエ族の人を対象に聞き取り調査を行った。そして、茶の栽培・摘採・飲用などシエ族の農作生活を本にまとめた。『喝茶時唱的歌（茶を飲む時に歌う歌）』[H・S『浙江景寧勅木山畚民調査記』1984]は「敬茶歌」に属しており、茶を淹れてもてなしをするというシエ族の風習を語っている。

人客落寮就面坐、一碗濃茶無需討。  
路里煩燥村茶食、心里想来食幾多？  
茶米吃了心頭涼、一碗濃茶毋須討。  
茶米吃了帶你眠、身蓋金被花里臨。

2020年5月、筆者が恵明寺村へ藍圓聰氏の家を訪問する時、彼女は茶を差し出して、「敬茶歌」を歌ってくれた。

仙水流下到畚家、畚家好民来泡茶。  
泡碗清茶老師喝、敬您一杯恵明茶。

「敬茶歌」は即興で作られたものだが、その内容はほぼ変わらず、客によって呼称を変えるだけであると藍圓聰氏は説明した。彼女は「敬茶歌」を披露する前に、シエ族の民族衣装を着替えた（写真 5-4）。シエ族の人は普段、その衣装を着用しないが、政府は景寧シエ族自治県のシエ歌無形文化遺産の伝承人と認定されたに、2着の民族衣装を提供した。シエ歌を披露する場合に限り、それを着用する。実際、藍圓聰氏の自家で代々から受け継がれたシエ族衣装は精巧な刺繍と煌びやかな銀製の装飾品が施されており、極めて美しいものである。残念なことに、貧乏な生活に迫られて母親はそれを換金してしまった。こうした状況は現在の景寧シエ族でよくあるようである。

## 3 茶女歌

茶女歌は叙事的なものが多い。特に、1984年、景寧恵明寺村の周辺で採録した『恵明茶女



歌』は西洋の「金賞」を獲得したことを題材にしたもので、研究する価値がある<sup>99</sup>。これについて、次の章で検討してみたい。『恵明茶女歌』は次のようになる[毛 2015: 77]。

#### 恵明茶女歌

三月天氣暖洋洋、照得恵明金亮亮。  
照得恵明人歛喜、照得恵明茶飄香。  
恵明茶名天下揚、恵明茶女采茶忙。  
采來茶葉一張張、張張茶葉一個樣。  
采來茶葉用籃裝、籃籃茶葉嫩又香。  
采了茶葉心歛喜、心里歛喜就要唱。  
茶女開口唱家鄉、家鄉今昔不一樣。  
今日都講家鄉好、往年討飯離家鄉。  
過去有個雷八娘、破衣爛衫穿身上。  
八娘生來手靈巧、半夜炒茶滿寮香。  
財主曉得就來搶、搶去茶葉出西洋。  
洋人曉得茶葉好、財主冒名得金賞。  
財主冒名得金賞、氣煞茶女雷八娘。  
從此茶樹就枯黃、恵明茶葉就不香。  
如今恵明茶有獎、獎章送到我家鄉。  
現在恵明茶名好、滿山茶樹行打行。  
再唱茶女雷八娘、今日炒茶機器響。  
炒起茶葉快又便、炒出名茶一箱箱。  
想起今日名茶香、八娘快活把歌唱。  
也會看報看文章、會寫字來會算帳。  
畚鄉茶女苦甜嘗、黃連蜂蜜味兩樣。  
茶女采茶日夜忙、名茶揚名遍世界。  
夏日茶娘樹下涼、路里碰着砍柴郎。  
問郎砍柴做什麼、砍柴買餅敬爺娘。  
十二月茶郎轉回鄉、路里遇着砍柴郎。  
窮人過年三升米、富家過年殺豬羊。

## 第2項 婚姻儀礼における茶俗

### 1 浮屠茶

シェ族では、婚約式にあたり、「茶礼」（ティーセレモニー）が行われ、結婚式にあたり、新婦側の親族に「九節茶」（未詳）を捧げる。結婚式を行う前に、「浮屠茶」または「宝塔茶」を飲むという習慣があり、新郎側の親族から器用な男性を「親家伯」あるいは「迎親伯」に選ぶ。「親家伯」は新郎側の代表として豚肉や卵などの贈り物を肩に担いで新婦の実家へ新婦を

<sup>99</sup> 景寧恵明寺周辺のシェ族村落で歌い伝えられた山歌である。

迎えに行く。「親家伯」が「花轎」と呼ばれる花飾りの付けられた輿とともに新婦の実家に到着すると、新婦側の親族は門を開いて、大量の爆竹を鳴らして迎える。そして、新婦側の親族から選ばれた器用な女性は「親家嫂」として、「親家伯」を正室の左側に置いてある腰掛けへ迎える。ここで、「親家伯」は腰掛けを右側に移して腰を掛けて謙譲の意を表す。そして、「親家嫂」は「親家伯」に「浮屠茶」を差し出す。八角型の赤系の皿の上に茶碗5枚を3層に重ねる。下は茶碗1枚を置いて、その上に赤い木片をのせる。木片の上に茶碗3枚を梅の花という形に並べる。そして、その上にもう一枚の木片をのせる。最後、その木片の上に茶碗1枚を置く。皿の上に重ねる5枚の茶碗は宝塔のような形になる。

茶を飲む前に、歌の掛け合いをする。「親家嫂」は「浮屠茶」を出すと、「良い茶だよ。娘が摘み採ったのよ。こんな日に客を招待するのをずっと待つ。茶碗を一枚一枚重ねるように、この日を一日一日待つ。時間が宝塔のように積まれた。なかなか素敵な娘だよ。娘が嫁に行く日に、どうぞ、茶を召し上がれ」<sup>100</sup>と歌いだす。これに応じて、「親家伯」は「良い茶だね。弟が手伝って作ったのよ。茶の中には、思いが込められているよ。なかなか素敵な男だよ。弟が嫁を迎えに来る日に。重ねられた茶碗を一枚一枚飲み干すと、幸せな生活を一から始めるよ。」<sup>101</sup>と歌う。「親家嫂」はまた「迎新花轎進娘家、大男細女笑哈哈。樹梢橄欖果未黃、先敬一盤浮屠茶」と歌った後、「親家伯」に茶を差し出す。「親家伯」は茶を取る前に、「端凳郎坐真謙譲、又来泡茶更細膩。清水泡茶甜如蜜、浮屠濃茶長心意。」と歌う。対歌が終わったら、「親家伯」は一番上の茶碗を歯で銜え、そして中間の三枚の茶碗と下の茶碗を両手で挟んで、新婦を迎えに来た「轎頭」<sup>102</sup>四人に差し上げる。歯で銜えたその茶碗をみんなが見守る中で一気に飲み干す。茶の湯が1滴も零れなければ、「親家伯」に腕があると認められるし、嵐のような喝采を浴びることができる。さもなければ、鼻で笑われてしまう[鍾2015: 112]<sup>103</sup>。

こうした「浮屠茶」という風習は、鍾氏によって翻訳されたものである。それは祖父が生前口述したものであるという。しかし、筆者は10数名のシェ族のお年寄りに聞き取り調査をしたところ、そんな風習を見たこと、聞いたこともないと答えられていた。その意味で、「浮屠茶」の風習は遙か昔のものであり、あるいは文人たちが想像して作ったものであろうと推測できる。

## 2 茶を飲む時の対歌

筆者は坑頭村で藍GY(65歳)に聞き取り取材を行った。藍GY氏は若い頃、自分が行ったシェ族の結婚式を思い返した。媒酌人は男子側に依頼されて、まず、麵1袋、黒砂糖500グラムを持って、女子側の家へ結婚の相談を持ちかける。女子側の家を3回訪問する。1回目、2回目訪問する時、女子側は贈り物を受けとらない。3回目になり、贈り物を受け取ると、その縁談がまとまる。そして、結婚式の日を決める。先に新婦の実家、それから新郎の実家で2日間結婚式を挙げる。まずは新郎が新婦を迎えに行く。新婦の実家で結婚式を終えた後、テーブルを正室の中心に並べて、新郎側と新婦側はテーブルを挟んで腰をかけて、夜が明けるまで茶を

<sup>100</sup> 中国語歌詞は「茶是好茶，我说您老呀，茶是小姑子親手採的，就等這一天降臨好敬客。一碗一碗垒起，一天一天盼啊，日子都已垒成塔。人是佳人，小姑子要出閣，就請您老喝下这一碗碗茶」である。

<sup>101</sup> 中国語歌詞は「茶是好茶，我说大嫂呀，這茶是我家小弟親手帮着做，正配大嫂的好手工。这一碗碗呀，情濃于茶。人是俊郎，小弟今日迎娶佳人，我说大嫂呀，一碗一碗拆下喝了，好日子还得从頭來」である。

<sup>102</sup> 「轎頭」とは、花轎を乗せる人のことである。

<sup>103</sup> 鍾思嬌が祖父の口述により『景寧畲族茶俗』に記録したものである。

飲みながら歌を掛け合う。夜はお菓子でも食べたりする。2夜連続で歌の掛け合いをする場合もある。歌を掛け合うのは新郎新婦でなく、伴郎と伴娘（介添人）である。伴郎は「次郎」とも呼ばれる。その対歌は「度親歌」で、茶とは関係がない（写真 5-5）。

現地調査を行う際に、多数の村民はこういう風習をよく知っていると言った。さらに、この風習を題材に、景寧県テレビ局によって制作されたドキュメンタリー映画がある。



写真 5-5 度親歌

（出典：景寧シエ族自治県博物館）

### 3 出入りの茶

新郎が新婦の実家へ新婦を迎えに行く時、そして新婦が新郎の家に来る時、家を出入りする際に、茶を飲み、お菓子を食べるという風習がある。それは出入りの茶という。通常は砂糖ゆで卵を食べるが、塩ゆで卵もある。卵2個を用意する。失礼のないように、新郎新婦は1個を食べて1個を残さなければならない。

### 4 新郎の両親に捧げる「糖茶」

新婦を自宅に迎えに来た後、新郎の家で結婚式が行われる。結婚式が終わった当日の夜、新婦は新郎の両親に、砂糖と茶葉で淹れた「糖茶」を捧げる。

現在の結婚儀礼は漢族への同化が進み、従来とは異なるようになったと藍GY氏は話した。

### 5 妯娌茶

結婚後、「妯娌茶」という風習がある。毎年の清明時節にあたり、シエ族の嫁たちは上質な茶を摘み採って、それを密封して貯蔵する。春節になると、嫁たちは早速、義理の両親や親族達などを自宅に招き、茶を楽しんでもらう。そうすることで、親孝行をしたり、親族と仲良くしたりする狙いがある。

更に、「阿婆茶」はシエ族の女性たちの日常として、塩漬野菜をおかず茶を飲みながら麻繩を織う（写真 5-6）。



写真 5-6 阿婆茶

(出典：景寧シエ族自治県博物館)

### 第3項 先祖祭りにおける茶俗

先祖祭りは景寧シエ族にとって重要な伝統行事である。家の2階にある正室の中央に置かれた神棚には、茶3杯とお酒3杯が供えられている。ティーカップとして陶製の小さなカップや使い捨ての紙カップがよく使われる。普段はその中に何も入れていないが、先祖祭りの際に茶葉を入れる。位牌の代わりに、先祖に対する抽象的な呼称が書かれた一枚の赤い紙を貼る。調査先の坑頭村と金丘村の藍氏が祀っている先祖達の呼称はいずれも「汝南郡」で始まる。汝南郡が河南省に位置することから、先祖の源が中原地域にあると藍氏シエ族は認める、ということが推測できる

藍GY氏の紹介によると、家の中で先祖祭りを年に4回行う。それは春節、清明節、端午節、中秋節である(写真5-7)。旧暦8月15日か2月15日になると、祠堂で先祖祭りを年に1回行う。祭儀に用いる供え物として、茶とお酒それぞれ3杯を用意する。カップの中にお湯を入れずに茶葉だけを入れる。葬式の時も茶3杯とお酒3杯を供える。一方、藍氏宗祠の祭主の一人である藍JF氏(70歳)は「葬式で出棺する際に、茶は必要だ。茶3杯とお酒3杯を供え、箸を逆さまに置く。家の中では先祖祭りをを行う際に、茶は必要だが、祠堂では、茶が要らない」と説明した。



写真 5 - 7 藍GYと藍JFの家で先祖の霊を祀る神棚

(2020年5月14日 筆者撮影)

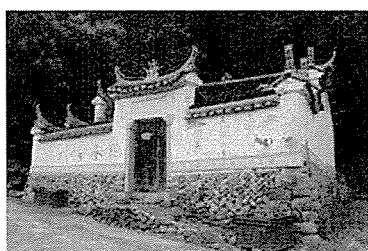


写真 5 - 8 藍氏宗祠

(2020年5月14日 筆者撮影)

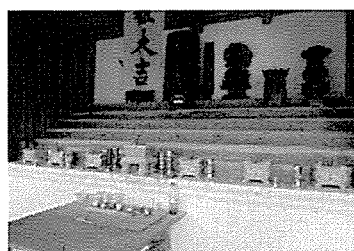


写真 5 - 9 藍氏宗祠の神棚

(2020年5月14日 筆者撮影)



写真 5 - 10 先祖の位牌

(2020年5月14日 筆者撮影)

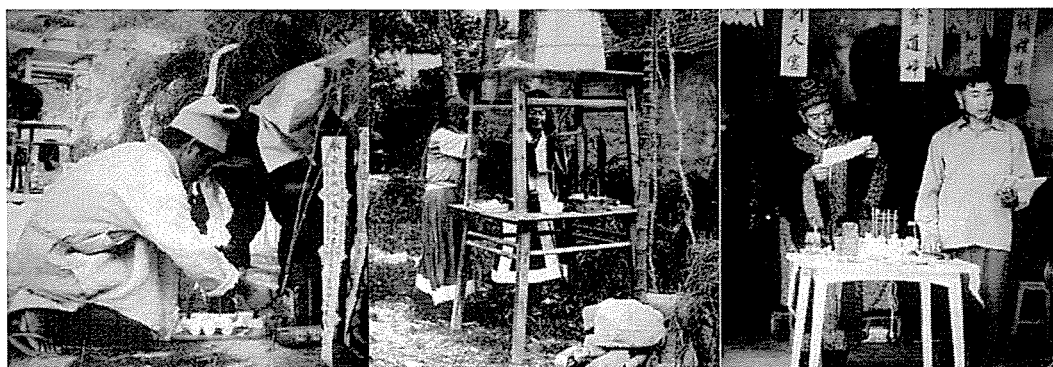


写真 5 - 11 シェ族の葬式の際に行う祭儀

(出典：景寧シェ族自治県博物館)

坑頭村と金丘村には二つの藍氏宗祠がある（写真 5-8）。藍氏祠堂は元々、内祠と外祠に分かれていた。内祠は今から 400 年余り前、最初ここに移住したシェ族の人によって建てられており、文革時期に取り壊されてしまった。現在まで保存してきたのは外祠であり、約 300 年余り前、ここに移住したシェ族の人によって建てられたものである。祠堂の中で、「藍光輝」の位牌と 1 個の石香炉だけが昔のまま保存されている（写真 5-9）。地元のシェ族の言い伝えにより、その位牌は景寧に居を移した先祖の藍敬泉が持ってきたものだという。位牌の中央に、「皇清勅封汝南郡廬一世太祖藍光輝歴代光祖考之神位」が書かれており、左下側に「奉祀支下子孫全敬立」という落款がある。その位牌はシェ族が潮州鳳凰山からここに移住してきた重要な遺物となった。1966 年の文革で、藍 JF 氏の父親の藍周琴氏が人目を忍んで祠堂からそれを持ち出して自家に保存したおかげで、その位牌は紅衛兵から破壊を免れた。それから約 50 年後、ようやく祠堂に戻した（写真 5-10）。

シェ族文化をアピールし、観光業を促進するために、村の入口のところに立派な藍氏宗祠が新たに建てられた。祠堂で先祖祭を行うのは一般的に毎年の旧暦 2 月 15 日だったが、シェ族の「三月三」という祭日を活発化させようと政府の呼びかけに応じて、毎年の 3 月 3 日前後に延ばされた。現在、先祖祭りはシェ族文化シリーズイベントの一環となる（写真 5-11）。

#### 第 4 項 民間行事における茶俗

シェ族の雷霆慶氏は漢族の張星真道士を招き、法事を行って厄除けを頼んだ。法事儀式は町にある「大仙宮」で行われていた。「大仙宮」はシェ族・漢族の人々が共用する民間信仰の会場となる（写真 5-12）。筆者はその儀式を記録した。儀式の中で、一つ一つの位牌の前に茶が供えられていた（写真 5-13）。大仙宮の正堂にある祭壇（写真 5-14）の上には、茶葉と米が入った赤いビニール袋が置かれていた（写真 5-15）。張星真道士によると、法事を一日中行い続けるという。法事を終えた後、7 つの油皿を主人のベッドの下に 7 日 7 晩灯し続ける。そして、赤いビニール袋の中の茶葉と米と一緒に包んで 7 日 7 晩離さずに主人の身に付ける。7 日間後、茶葉と米を捨てることで、災難を払いよけることができるという。このような儀式は日本、そして中国の各地に見られる。茶葉、米、塩などの日常必需品は「切断物」として使用されている[福田 2009: 23]。「七（中国語発音：チ）」と「切（中国語発音：チェ）」は語呂合わせになっているから、「7 日 7 晩」になるのであろう。



写真 5-12 大仙宮

（2020 年 5 月 15 日 筆者撮影）

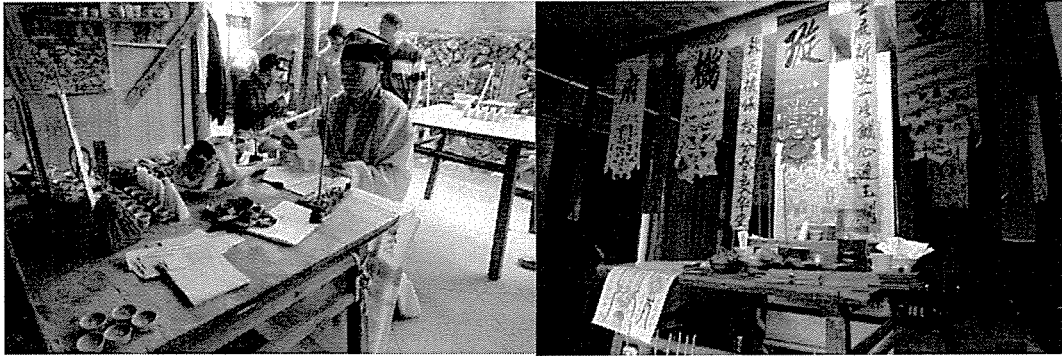


写真 5 - 13 道士が法事を行っている

(2020年5月15日 筆者撮影)

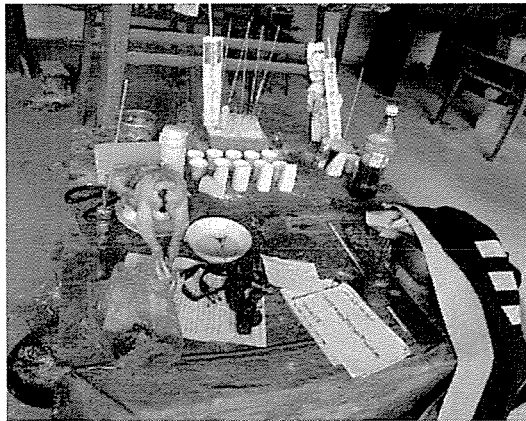


写真 5 - 14 大仙宮内の祭壇

(2020年5月15日 筆者撮影)



写真 5 - 15 祭壇の上にある茶葉と米

(2020年5月15日 筆者撮影)

## 第5項 年中行事「三月三」と茶

「三月三」はシェ族の伝統祭日であり、「烏飯節」とも呼ばれる。毎年の旧暦3月3日を「三月三」と称して祝う。この日は、シェ族の男女たちは「踏青」（ハイキング）に出かけ、踏青帰りに「烏飯」<sup>104</sup>を食べる。各地のシェ族では、対歌会、烏飯、先祖祭り、伝統舞踊、武術競技など様々なイベントが行われる。シェ族の「三月三」祭日は中国の無形文化財にリストされた。

旧暦3月3日は茶の摘採と制作の時期に当たるため、「踏青」、「対歌」などの伝統的なイベントは田んぼや茶畑の農作業と関係するものが多いのである。ここ数年、景寧県政府は茶文化を「三月三」祭日と結びつけることで、地元の茶のブランド力を高め、茶産業の発展を促すことに力を入れている。旧暦3月3日前後には、「金賞恵明茶」の開茶節（茶シーズンを告げるイベント）、闘茶節、茶祖祭り、茶藝大会などのイベントが開催される。例えば、2015年に、金賞恵明茶のパナマ万博金賞受賞100周年を記念するため、景寧県政府の主催により、「千年恵明・百年金賞」というシリーズイベントが開かれた。シリーズイベントの一環である「第

<sup>104</sup> 「烏飯」は特別な木の葉の汁を出して、米をその汁で黒く染めることによって出来上がる飯である。

一回中国少数民族茶藝大会」では、四川省、雲南省、福建省、浙江省など中国各地から少数民族の茶藝が景寧に集まってきた。また、「五州茶親」というイベントでは、アメリカ、フランス、ロシア、セルビア、日本、韓国など中華世界語連盟のメンバー国の来賓は地元の茶農家に寝泊りしながら、シエ族の茶文化を楽しんでいた。それに、外国の来賓は地元の茶農家と「茶親」を結び、証書を授与された（写真 5-16）。こうした地元の茶をPRするための一連のイベントは「三月三」の主な内容となった。政府、学者、メディア、地元の茶企業、シエ族の茶農家の共同協力により、こうしたイベントが素晴らしい成果を収め、全国及び全世界へ影響を広めた。これは元来の「三月三」という伝統祭日を含む意義を遥かに超えるのである。



写真 5-16 2015 年の「三月三」祭と「五州茶親」というイベント  
 （出典：張平 2018『Teo kaj Amo: Rakonto pri Teo (茶と愛: お茶の話)』外文語出版社)

表 5-1 景寧シエ族の茶風習の内容と分類

番号	内容	種類	役割	備考
1	茶摘歌	茶歌	茶を摘み採る時に歌う歌で、人間関係を維持する。	無形文化財
2	敬茶歌		客に茶を捧げる時に歌う歌	
3	茶女歌		歴史事実を語り伝える	
4	浮屠茶	人生儀礼	婚約を祝う儀礼	本当にあるかどうかまだ判明できない
5	結婚式で茶を飲む時の対歌		新郎が新婦を迎えに行く当日の夜に新婦の実家で夜が明けるまで歌の掛け合いをする。2晩続ける場合もある。	



6	出入りの茶		新婦の家と新郎の家を出入りする時に、茶を飲み、ゆで卵を食べる。	
7	敬糖茶		新郎の家に来る当日の夜、新婦は新郎の両親に砂糖で淹れる「糖茶」を捧げる。	
8	妯娍茶	日常行事	親孝行をし、隣人と仲良くする。	
9	家で先祖祭りを 行う際の茶	年中行事	春節、清明節、端午節、中秋節になると、茶3杯と酒3杯で先祖祭りを 行う。	
10	祠堂で先祖祭 りを行う際の 茶		茶3杯と酒3杯で先祖祭りを年に1 回行う。	茶が要らない という説もあ る
11	三月三		茶文化と結びつける	無形文化財
12	春節茶		春節を過ごす時に飲む茶	
13	出行茶		旧暦の新年は出かける時、「出行茶」 を飲む。	本当にあるか どうかまだ判 明できない
14	神送りの茶		旧暦12月24日に竈の神を祭る際 に、「神送りの茶」を飲む。	本当にあるか どうかまだ判 明できない
15	茶と米による 厄除け	民間信仰	道士に法事を頼んで、茶葉と米の混 ぜ物を「切断物」として厄除けを 図る。	
16	阿婆茶	日常	シェ族の女性たちの日常として、塩 漬野菜をおかずに茶を飲みなが ら麻縄を綯う。	

(筆者作成)

### 第3節 金賞恵明茶のブランド化と変化

#### 第1項 恵明茶の発展について

##### 1 恵明茶の三つの発展段階

恵明茶の発展について、寺院茶段階、寺院茶・菜園茶の同時発展段階、商品茶段階という三つの段階に分けている[陳 2015: 48]。恵明茶が恵明寺から生まれ、景寧へ行脚しに来た僧侶がその栽培を始めたと考えられる。これは寺院茶時期である。恵明寺村の創立(1650)から恵明寺の衰退(20世紀50年代)までおよそ300年間は寺院茶と菜園茶の同時発展時期である。恵明寺村が雷氏シェ族によって造られた時から、シェ族の村民たちは寺へ農作業をしながら、茶の栽培と製造を学んでいた。そのうちに、寺院茶を自家の菜園で栽培するようになり、シェ族の「菜園茶」となった。その後、恵明茶は寺を出てゆき、寺院茶と菜園茶が同時に発展する時期を迎えた。後期となる民国四年(1915)に入り、恵明茶の発展にとって意義深い大事件が発生した。それは、「パナマ万博」で金賞を受賞したことである。そのことから、恵明茶が「金賞恵明茶」と呼ばれるようになったのである。1972年、漢族とシェ族の農民たち100人余りが恵明寺村で197畝の集団茶畑を開拓したことにより、恵明茶の生産方法が菜園茶から商品茶へと転じるようになった。2000年以降、恵明茶が完全に商品茶となり、「企業+農家」、専門合作社が生産経営の主体となった。そこで、「恵明」、「奇爾」、「六江源」などの名ブランドが次々と現れてきた。

##### 2 菜園茶：シェ族の伝統的な茶栽培方法

寺院茶と菜園茶は茶の生産方法が同じ農耕時代におけるものだと筆者は考えている(写真5-17)。菜園茶以外に、シェ族の茶栽培方法と日常生活との関わりを物語れるものはないと思う。茶生産をする代表的なシェ族村落—恵明寺村と勅木山村を対象に、全面的な調査を行ったところ、菜園茶は今も多く存在していることがわかった(写真5-18)。菜園茶の特徴は次のようになる。

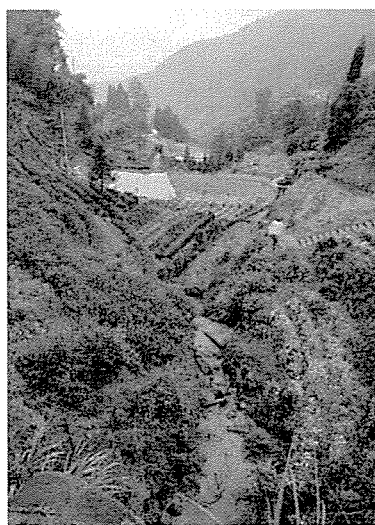


写真 5 - 18 勅木山村の野菜畑、商品茶、菜園茶の分布

(2020年5月14日 筆者撮影)



写真 5-17 恵明寺内の菜園に自生している茶木  
(2020年5月14日 筆者撮影)



写真 5-19 菜園茶  
(2020年5月14日 筆者撮影)



写真 5-20 勅木山村で菜園茶と商品茶  
(2020年5月14日 筆者撮影)



写真 5-21 商品茶の茶園に覆われた  
(2020年5月14日 筆者撮影)

① 住宅の周り、土や石を盛り上げて作った畦の上に菜園茶の栽培をするため、食糧と野菜を植える耕地を使わない(写真 5-19)。

② 菜園茶は一般的に種子から育てるが、商品茶は挿し木で栽培を始める場合が多い。

③ 菜園茶が幅広く存在することは、シェ族の茶の栽培方法と飲用習慣を証明できる。

④ 菜園茶の生産量が少なく、自家で生産してまかなう。

⑤ 福建省などの茶生産地では、菜園茶とほぼ同じ育て方で栽培する茶を「菜茶」と呼ぶ。「菜園茶」という呼び方は景寧シェ族しか使わない。

シェ族村民の住宅の周辺に自生している菜園茶である。シェ族村落のあちこちにも見える石のすき間からうえる菜園茶樹である。石垣のすき間に茶の種をまき、菜園茶がうえる。今は勅木山村と恵明寺村で菜園茶と商品茶が共存する(写真 5-20)。商品茶の茶園に覆われたシェ族村落の通路側にある(写真 5-21)。

### 3 恵明茶樹王

景寧県には、樹齢千年以上の茶樹王が2本あるそうである。それは勅木山村の「恵明茶王」(写真 5-22)と恵明寺村の「白茶祖」(写真 5-23)である。「樹齢千年以上」は宣伝のために大げさで言うものであろう。この茶樹王は野生の茶樹というより、むしろ人工で栽培され

た可能性が大きい。



写真 5 - 22 勅木山村の恵明茶王

(2020年5月14日 筆者撮影)



写真 5 - 23 恵明寺村の白茶祖

(2020年5月14日 筆者撮影)

シェ族の雷石才氏が恵明白茶祖を探した。旧暦 1965 年 1 月 1 日の朝、雷石才氏、雷木興氏、雷成慶氏三人は恵明茶樹王を恵明寺村の隅々まで探したが、恵山頭自然村にある雷雲申氏の菜園にたどり着いた。シェ族の慣例では、野菜の不作を招かないように、春節は人の菜園に踏み入れてはいけないという。菜園の持ち主から菜園に踏み入れる理由を聞かれると、恵明寺の茶樹王を探して、最高の茶を毛沢東主席にささげようと答えた。持ち主は三人を菜園へ案内して、高くそびえた茶樹を指差して、「それは茶樹王だ」と紹介した。この茶樹は茶葉が普通の茶樹より白くて、茶も美味しく作られるという。その樹冠から見れば、樹齢は数百年もあるであろう。1976 年の春、雨が数日続いて、土砂崩れが起きた。雷雲申氏の菜園にあるその恵明白茶樹が通路側の溝に流されてしまった。雷石才氏は恵山頭村の雷清高氏と協力してそれを恵明寺の茶園に植え替えた。それは今の「白茶祖」となった[王 2010: 149]。

## 第 2 項 恵明茶の製造方法

### 1 生葉摘採

20 世紀 60 年代から 80 年代の初期まで、茶の購買・販売が国によって行われていた。景寧県の茶は春茶（三月、四月、五月）、夏茶（六月）、秋茶（九月、十月）という三つのシーズンに分けて収穫する。春茶は品質が最も良い。20 世紀 80 年代後期に入り、主に春茶、適当に夏茶を収穫するようになった。茶摘みを手作業で行う中、「単芽」と「一心二葉」という二つの摘み方ができた。「単芽」は芯のみ摘み採る方法である。「単芽」で摘み採られる茶葉は長さは 25-30 ミニセンチ、幅は 3-4 ミニセンチ、茎は 2-3 ミニセンチで、恵明茶の原材料に使われる。爪で摘むのではなく、親指と人差し指で新芽の茎を挟んで均一に折る。「一心二葉」は茎の一番先端にある芽の部分とすぐ下にある 2 枚の若葉を長さとおおきさを均一にするように摘み採る方法を指す。雨の日は摘まない。

### 2 加工技術

菜園茶時期は恵明茶の加工は主にシェ族の村民自家のかまどの上で行われていた（写真 5

- 24)。雷氏は子供の頃、父親が茶葉を炒っているのを取材で思い返した。大きな釜に茶葉を炒ってから、竹ざるの上に茶葉を手で揉む。それから、茶葉を竹かごに入れて、かまどの上に置き、弱火で熱を加える。数日後、茶葉を釜に入れて乾燥させる。最後、水分を取り除いた茶葉を鉄箱や陶器の中に密封して貯蔵する。容器の上に川芎（センキュウ）で覆う農家もいる。



写真 5-24 雷氏が自家のかまどで茶葉炒りを行ってみせる

(2020年5月14日 筆者撮影)

葉桐が残した資料では、1915年に受賞した茶の製造方法が記録された。生葉を釜の中に、かき回しながら炒る。茶葉が焦げないように、火の通り具合を適当にする。熱を加え、水蒸気が発散しやすくするように、茶葉を平に広げてかき回す。釜を適当に振ってから、炭火と竹かごを使った焙籠（ベイロン）で乾燥させる。このような製造方法で出来上がった茶葉は緑色をしており、白毫が全く発生しないことから、「白毛尖」と名付けられた[葉 2015: 28]。

1972年以降、歴史名茶を発掘するため、麗水地域農業局、麗水茶場、県農業局、供销社から、趙鳴氏、揚星海氏、鄧洪范氏、羅建標氏、呉錫氏など茶の科学技術に詳しい専門家の方々は恵明茶生産区へ現地調査を行い、釜炒り茶という伝統製茶法の修復に取り組んでいた。釜炒り茶は攤青、殺青、揉捻、理条、提毫整形、攤涼、炒りという7つの製作工程がある。

① 攤青（たんせい）：収穫した生葉を風通しの良い、きれいな、乾燥した室内に置き、広げ散らすのを繰り返すことで水分を追い出す。茶葉が生葉の艶を失い、香りが漂い始めると、殺青の工程に入る。

② 殺青（さっせい）：釜をきれいに洗ってから熱を加えて、その中に専用油を少し塗る。油煙が完全になくなり、温度が130-150度になると、攤青後の茶葉を250-400グラム入れる。茶葉を振ったり揉み込んだりしながら、両手で速く炒る。茶葉を最大限に振り散らしたり、反転させるのを繰り返したりして、水分の均一化を図る。

③ 揉捻（じゅうねん）：きれいに洗った竹ざるの上に殺青後の茶葉を広げ散らす。茶葉を両手の掌にかき集めて、同じ方向に沿い回転させる。ここで、力の強さの把握が大切である。手で揉みながら、茶葉の塊を潰す。茶汁が少し出て90%の茶葉が条状に整えそうになるまで揉み続ける。

④ 理条（りじょう）：熱を 65-70 度まで加えた釜の中に、手で茶葉を軽くつかんで同じ方向に沿い、振りながら押し付けることで水分を飛ばす。茶葉が条状に整い、手につかないようになるまで押し付け続ける。

⑤ 提毫整形：80 度まで加熱した釜の中に、両手の指を少し曲げて茶葉を押し付けるのを繰り返す。茶葉は水分を 70%まで落としたあと、釜の温度を 60 度以下に下げる。片手で茶葉を握り、釜の内側に沿い回転させながら、掌の力を借りて条状になった茶葉を擦り合わせる。白毫が現れ、茶葉が条状に丸めて少し縮れるようになると、次の製造工程に入る。

⑥ 攤涼：提毫整形した後の茶葉を釜から取り出して、それを広げ散らして 30 分間くらい冷却することにより、水分を均一にする。

⑦ 炒り：50-60 度まで加熱した釜に攤涼した後の茶葉を入れて炒る。繰り返して軽くかき混ぜることで、茶葉を明るい緑に色付け、香りを引き出せるとともに、茶葉を完全に乾燥させるようにできる。最後、選別、分類、攤涼を仕上げてからそれを保存して出荷を待つ。

### 第 3 項 恵明茶という名称と金賞獲得の理由

#### 1 金賞獲得の恵明茶の出どころについて

中華民国四年（1915）、パナマ運河の開通を記念するため、米国でパナマ万博が開催された。浙江省政府は各地から地方名産を募集して大会に参加した。そこで、景寧の恵明茶は一等賞証明書と金製の褒章を獲得した。応募用の恵明茶が誰によって、どこで生産されたかについて、三つの説がある。

① 葉桐氏著の『恵明茶葉史』原稿に、このような記載がある。茶の募集を担当する人物の中に洪子生という人がいる。彼は収穫した生葉を、滌頭村出身で茶の製造がうまいという義理の母に製茶を頼んだ。

② 応募用の茶は恵明寺村シエ族農家の雷成女夫婦によって栽培・製造されたものだと 1995 年版の『景寧シエ族自治県誌』で描かれていた。

③ 応募用の茶は葉桐の妻の潘氏によって作られたものだと陳暁南氏は『恵明茶文化』で紹介していた。

この三つの説について結論がまだまとまっていないが、シエ族の雷成女氏によって作られたという説が最も広く知られている。その出どころを巡り、諸説紛々となることから、シエ族と漢族がこの榮譽を奪い合おうとする決意が見えるのであろう。シエ族自治県が政治的同一性を獲得することにより、雷成女氏という説は政府側から大いに宣伝されるようになる。

#### 2 パナマ金賞受賞の実証

パナマ万博で獲得した証明書と金製褒章が紛失してしまったし、それを目撃した先輩たちもなくなった。1918 年に出された 2 つの文書はその存在を証明できるものとして、今も麗水市

档案馆に保存されている（写真 5-25）（写真 5-26）。

民国六年（1917）、浙江省から惠明茶受賞の朗報が届くと、景寧県政府は金賞を受け取りに省政府へ代表を派遣した。急ぎ過ぎる故に、受取手続きを整えていなかったため、金賞を受け取るのを拒否された。そして、省政府はその代表に公文書を持って帰らせた。内容は次のようになる。

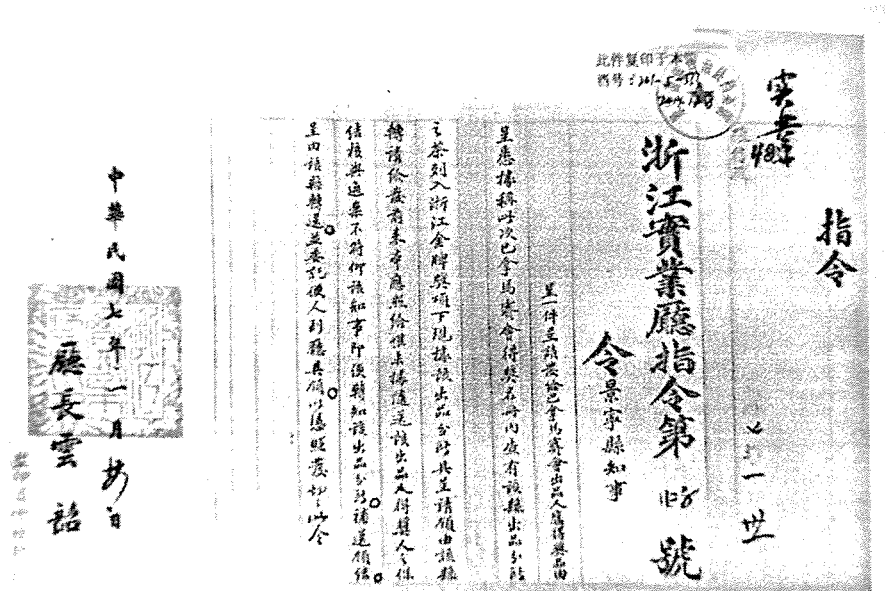


写真 5-25 浙江省実業庁指令

（出典：麗水市档案馆）

浙江省実業庁指令

第 225 号令

今景寧県知事

呈一件、呈請発給巴奈馬賽出品人応得奖品。

由呈悉、抛称此次巴奈馬賽会得獎名册内、查有該県出品分所之茶葉列入浙江金牌項下。現抛該出品分所具呈請領、由該県轉請發給。前來本应照給、唯未抛随送該出品得獎人之保結、核与通案不符、仰該知事即便轉知該出品分所、補送領結、呈由該県轉送、併委託便人到庁具領、以凭照發。切切此令。

庁長雲詔

中華民國七年一月廿四日

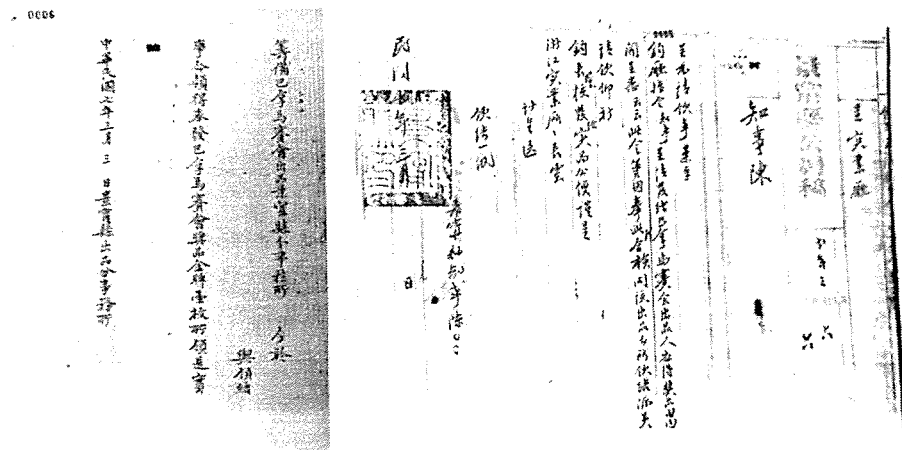


写真 5 - 26 受領書

(出典：麗水市档案馆)

もう一つの文書は民国七年（1918）3月3日、県政府が金賞を受け取る際に書いた受領書である。

籌備巴奈馬賽会出品景寧県分事務所今為領結事  
今領得奉發巴奈馬賽会獎品金牌一枚所領事實。

景寧県出品分所事務所（印）

中華民國七年三月三日

### 3 「大褒章」と「金賞」

『パナマ万博展覧会準備展示品審査規則』、『パナマ太平洋万国博覧会規則』、そして『パナマ太平洋万国博覧会審査規則』によれば、表彰項目として金メダル、銀メダル、銅メダル以上に「大褒章」が設けられた[王 2010: 51]。中国が獲得した「大褒章」は合計 62 枚もある。そのうち、茶類が浙江省の 1 枚を含めて 8 枚ある。また、茶類は金メダル 21 枚を獲得したが、浙江省は 0 枚である。「金賞恵明茶」の「金賞」は金メダルに思われがちだろうが、実際、恵明茶が浙江省を代表して獲得した大褒章は金メダル以上の意味を持っている。

### 4 名称の決定

景寧シエ族自治県の恵明茶の完全な名称「金賞恵明茶」は民間から呼ばれるものでなく、真剣な研究検討を経て決定した商標名称である。1978年10月7日から9日まで、宗少祥氏が取りまとめた浙江省の茶葉企業による第一回全浙江省名茶フォーラムが徳清莫干山 88 号楼で開かれていた。茶専門家の唐力新氏は 1915 年に受賞した山東省の「金賞ブランド」が金賞で名付けられたから、茶もそうしたらどうかと提案した。景寧の専門家の方々は「金賞恵明茶」という提案に一致した。1979年3月から、「金賞恵明茶」という名前で景寧で生産を始めた。



1979年10月31日から11月2日まで、会議では「金賞恵明茶」の商名称、摘採・製造基準、加工茶の形態、買付け価格、パッケージ等について規則が定められた。これにより、「金賞恵明茶」という名前が正式に決定されており、市場に出回るようになったのである[呉 2015:75]。

## 第4節 景寧シエ族茶文化の性格と変容

### 第1項 景寧シエ族と恵明茶の由来・発展との関係

景寧シエ族の茶文化は悠久なる歴史を誇っている。景寧シエ族と茶文化とは、一体どういう関係にあるのであろう。地方史の視点では、恵明茶の起源は唐代だと考えられる。恵明茶は最初から僧侶によって栽培・制作されており、その後、景寧県に移住してきたシエ族の人へ受け継がれたという。実際、フィールド調査の結果からみれば、景寧シエ族と恵明茶の関係はそれほど簡単なものではない。恵明茶が商品化・規模化する前に、シエ族の家々の周辺に「菜園茶」を栽培するのは主な生産方法である（写真5-27）。1000年の樹齢を持つ「茶樹王」を含めて、樹齢100年以上の茶の多くはいずれも菜園茶である。山地民族に属するシエ族は「山哈」と自称し、山の中に住む客という意味である。漢族と比べれば、ここに移住した山地民族のシエ族は耕地が少なく生活しやすいとは言えない。そのため、シエ族は従来から狩猟にも出かけるし、狩猟の神を祭る。そして、山地植物の栽培と利用をも相当重視しており、その中で茶が最も重要な嗜好品と商品作物として栽培されている。

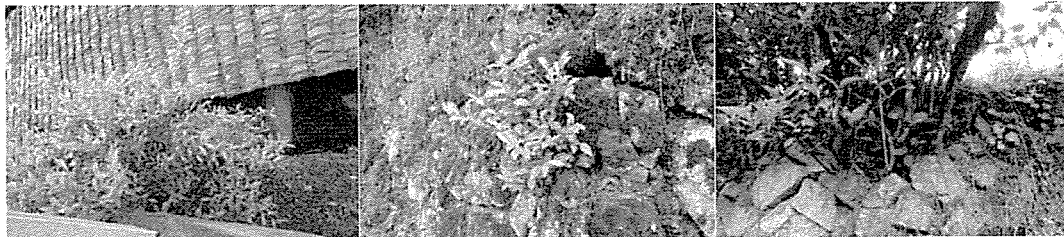


写真 5-27 シエ族の家々の周辺にある「菜園茶」

（2020年5月14日 筆者撮影）

シエ族の移動経路からみると、シエ族の発祥地——潮州鳳凰山は中国名茶の烏龍茶「鳳凰単穰」の産地である。福建省におけるシエ族と「武夷岩茶」との間も縁が深い。シエ族が浙江省景寧県に移した後、「金賞恵明」は代表的な緑茶として誕生した（図5-2）。

シエ族と茶のかかわりについて、『畚族簡史』には、シエ族地域では茶の栽培はごく普通なことである。広東省や浙江省南部の地方誌には、「シエ族に茶栽培をしない園が一つもない」、「福州、漳州、泉州、建州、汀州のどこにでもある」<sup>105</sup>という記載がある。広東省におけるシエ族の人が栽培する「洪峯茶」は品種優良なものである。福建省北部産の武夷茶は良質な茶としてよく売れており、国内外でも広く知られている。こうした商品作物からの収入はシエ族の経済収入の中で大きな割合を占めている。

こうしたシエ族の分布をみると、その源は、広東省東部の潮州市北部の郊外にある名山「鳳凰山」だと考えられる。この山地を故郷として、早くは唐代、宋代、元代、そして明清時代と

<sup>105</sup> 原文は「福、漳、泉、建、汀在在有之」である。

長期にわたって福建省山地を東へ前進し、さらに、福建省から山を沿って浙江省に入り、一部は安徽省、江西省へと進んでいた。

唐、宋、元の時代を経て、シェ族と漢族は長期にわたり付き合いをする中で、産業が大きく発展しており、生活もより改善された。福建省北部の山区へと移動したシェ族はすでに住み着くようになったが、一部はまだ移動し続けており、その中の多くは浙江省南部の山区へと移動していた。

福建省南部へ移動したシェ族の一部には、浙江省へと移動した人もいたようである。福建省南部へ移動したシェ族の大部分は前述したように、茶産地で茶栽培に従事している。これは、福建省東部の大部分の地域が山地で、茶の生産に適した条件に恵まれており、収益の大宗を成すことになるからであろう。

シェ族が景寧県に移住したのは明の時代に集中すると思われる。地方の文献で恵明茶が唐の僧侶によって発明されたと記されたことから、それは唐の時期の標準に従う茶製法であろう。しかし、100年前に金賞を受賞した当時の恵明茶は「散茶」<sup>106</sup>、緑茶である。このような「散茶」の作り方はシェ族の生活習慣に合致するだけでなく、明の時代における中国茶製法全面改革に一致するものである。明洪武二十四年（1391）、明皇帝・朱元璋が唐、宋の時代から伝わってきた「団茶」の製法を廃止し、「散茶」を生産することを命じた、いわゆる「茶製法変革」は明の時代に景寧に移住したシェ族の人が「散茶」の生産を始めた後押しとなった。そのため、茶栽培のみならず、散茶の加工技術の面でも、シェ族は漢族に敵わないとは言えないのであろう。つまり、シェ族も漢族もいずれも恵明茶の加工技術の発展に大きく寄与していた。

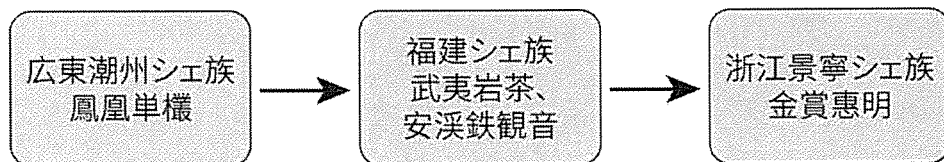


図5-2 シェ族と名茶の移動経路

(2020年 筆者作成)

## 第2項 シェ族における自己価値への認識と帰属意識

「茶」はシェ族の生活必需品として、人付き合い、先祖祭り、鬼神祭りなどといった儀礼や文化、そして、民族間の凝集力など様々な文化要素を含んでいる。

100年以上前に米・パナマ万博で受賞した茶について、三つの説がある。その茶が「雷成女」というシェ族の女性によってつくられた説が最も広く知られている。雷成女という女性には実際にはいなくて、滌頭村の潘氏によって作られたとする説、そして、滌頭村の潘氏が製法を雷成女に伝えたとする説もある。物語や言い伝えが伴うため、前の2説はいずれも合理的に見える(前文で詳しく述べられた)。どちらによって作られたかはともかく、どうせ景寧県の茶だから、

<sup>106</sup> 「餅茶」のような固形茶と違って、「散茶」は茶葉そのまま干した物を指す。

争う必要がないという意見もある。実際、こうした結論がまとまらない争論の背後から、景寧シエ族の自己価値への認識と帰属意識が見られると思う。

既存の史料を見ると、金賞を受賞した恵明茶が滌頭村の潘氏によって作られたという可能性が最も大きいようだが、滌頭村はシエ族と漢族が雑居する村であり、潘氏は漢族出身である。シエ族と漢族は皆、恵明茶がこの上ない栄誉を獲得する上で自分なりの価値を発揮していた。宣伝広報するために、金賞受賞のことをシエ族の『茶女歌』（本論の第1節にある）に入れた。それに、「雷成女」も、シエ族の人が経営している恵明茶ブランドの一つとなった。

1957年、金丘村の藍JFの義父はシエ族の代表として、北京へ毛沢東主席を始めとする国家指導部の接見を受けた。その記念写真は今でも藍JFの客間の壁の上にかかっている（写真5-28）。当時、景寧シエ族から代表が二人選ばれており、もう一人の女性は今も元気で生きている。この記念写真の中で、毛沢東氏と朱徳氏の後ろに立っている人は藍JFの義父である。景寧シエ族と藍氏はいつまでもこれを誇りに思っている。



写真 5-28 藍 JF の義父と毛沢東の記念写真

（2020年5月14日 筆者撮影）

フィールド調査により、シエ族村落の長者たちは景寧シエ族の先祖が景寧に移住したのは明の時代だと固く信じ込むことが判明できる。例えば、金丘村にある藍氏宗祠と「藍光輝」の先祖位牌は遺物としてそれを証拠づけた。しかし、景寧地方誌や博物館の資料では、シエ族の雷太祖が最初に景寧に移住したのは唐の時代だと記載されている。こうした説はシエ族自身が発言権を勝ち取るため、作り出したものではないかと考えられる。唐の時代に建てられた恵明寺の付近に雷太祖を祭る祠堂があった。その祠堂は1949年までに学堂として優れたシエ族の人材を輩出したと、恵明寺村の雷順平への聞き取り調査で分かった。1915年、恵明茶をアメリカの大会に送り出した重要人物の一人もその学堂で学んだことがあるという。これらの諸説から、シエ族における自己価値への認識と帰属意識が明らかに見られるのであろう。

### 第3項 恵明茶の発展と漢・シエ族の共存共栄

宋、元時代の福建地域の人口数は著しく増加し、開発も顕著なものがみられ、北苑の茶を始めとして、各地に茶業開発が始められている。その茶業開発はシエ族と深くかかわつて、シエ族の茶業開発も大きく進展したと考えられる。筆者はこのあたりに、シエ族と漢族とのあいだ

に共存共栄の策が、自然に成立したのではないかと推測する。

明、清の時代におけるシェ族の移動は、福建省南部から浙江省、さらに安徽省へと進んでおり、シェ族にとっては最も発展した時期となる。その共存共栄の策が実施された結果、山地に良質な茶ができることに着目し、福建省内の各地に茶産地ができて、それぞれの地域に特有な茶の生産が始まった。福建省各地の茶産地をみると、北苑の団茶以外はその大部分が明代から清代に始まったものである。最も遅い地域は新中国が成立し、少数民族の解放政策が実効をあげるようになってからのことである。1980年代ころからの産地化もかなり進めていた。このようなシェ族と漢族との共存共栄の実態は各地に見ることができる。

景寧県の「恵明茶制作技法」無形文化遺産伝承人には、省級1人（漢族）、市級1人（シェ族）、県級4人（漢族2人、シェ族2人）と合わせて6人いる。伝承人の一人である雷順平氏はシェ族出身であり、弟子の毛楊鑫氏は漢族出身である。恵明茶の栽培と生産についてシェ族と漢族は同じ方法を共有しており、両民族の茶企業の間は競争より協力ウィンウィンを実現する機会が多い。唐代の恵明和尚が雷太祖に茶栽培を教えた時から、景寧シェ族と漢族はずっと仲良く付き合ってきており、金賞恵明茶が両民族の共存共栄の結晶となる。

#### 第4項 政府権力と商業開発の影響

政府権力が景寧シェ族の恵明茶文化の中で大きな役割を果たすのは、最近の20年間のことである。浙江省における代表的な茶である杭州の「西湖龍井」、安吉の「安吉白茶」を例に見ると、政府の役割が非常に大きい。景寧政府はシェ族とパナマ万博金賞という二つの特徴に着目し、恵明茶ブランドの構築と宣伝に大いに力を入れている。農業局と農業農村弁公室という主な権力を握る機関に加えて、人大副主任が会長を務める「景寧シェ族自治県茶文化研究会」が設置された。政府は毎年、茶栽培や生産に関する政策を制定するほか、恵明茶を宣伝するために、開茶節、闘茶会、茶商会など「三月三」茶文化イベントの開催にも大量の経費を支出する。また、政府は「金賞恵明」の地域公共ブランドの課題解決にも積極的に取り組んでいる。政府権力が茶文化を後押ししていると言えよう。企業、メディア、専門家など多方面から速やかに力を合わせて、恵明茶ブランドのイメージアップと価値向上を促進することができるのがその利点である。欠点としては、任期満了に伴う政府職能部門指導部の改選により、今までの方向を変えたりする可能性が大きいことである。例えば、景寧県は2019年までにずっと「金賞」という歴史文化資源の発掘と発展に重点を置き、「金賞恵明」というブランドの復興を図ってきたが、2019年、景寧政府指導部の改選後、高山に良質な茶ができるという概念をPRしようとするため、「景寧600」<sup>107</sup>へとブランド名を変えた。

商業化による景寧の茶文化への影響はどこにでも見られる。人、情報、資金、商品がかつてないほどのスピードで動く今、食文化のグローバル化が進み、景寧シェ族の生活がより豊かになり、漢族への同化がさらに進むなど、衣食住や交通の面でグローバル化のもたらす成果を共有している。一方で、民族特色や地方特色が地元でより重要視されるようになる。シェ族の民俗は家庭と小地域共同体の枠を抜けて、広範囲へと進み、より大きな舞台に登場し、より多くの消費者の目に届くようになった。特に、シェ族というイメージを利用して恵明茶を宣伝する

<sup>107</sup> 「景寧600」は標高600メートルの景寧高山地区産の農産品であって、恵明茶も含まれる。

のは主な手段となった。恵明茶のプロモーションビデオ、写真、茶藝ショーの中でシェ族の服を着ている茶女の多くは漢族の女性である（写真 5-29）。

恵明寺村の人々は恵明茶市場の波に乗った。1999年、景寧県政府が恵明茶を復興するため実施した「双万工程」<sup>108</sup>で、シェ族村落に属する恵明寺村は核心産地に選定されており、村民たちはみんな情熱を傾けていた。それから、家庭を生産単位としての大面積の恵明茶栽培が始めた。菜園茶は商品茶へと飛躍的な転換を迎えており、茶の市場経済の波に乗った。恵明寺村は1972年から1976年まで、茶園197畝を開拓し、1998までに茶園の総面積は505畝に上った。1999年、「企業＋農家」という方法の導入により、茶園の総面積は853畝に増加し、年に新たに開拓した茶園の面積は今までの22年間の増加総数を上回った。1998年から2008年までの10年間、恵明寺村の茶園面積は505畝から1849.4畝に増加し、春茶の生産量は1000キロから17トンに増加した。恵明茶は今までの菜園茶という脇役から今の主役に成長するようになって、村人の主な経済収入となった。



写真 5-29 2010年ごろ漢民族がシェ族の服装景

（出典：景寧シェ族自治県博物館）

## 小結

景寧シェ族は恵明茶の由来・発展と緊密な関係を持っている。恵明茶が金賞を受賞した歴史栄誉と、「金賞恵明茶」の発展史は、景寧シェ族と漢族が共存共栄を続けてきた結晶である。そして、景寧シェ族は茶文化伝承を通じて、自民族価値への認識と帰属意識を確認し続けている。現在、政府権力と商業化はシェ族と恵明茶文化の変革を後押しする重要な力となっている。これらは全て景寧シェ族の茶文化を性格づけていると言えよう。

<sup>108</sup> 一万人のシェ族人、一万畝の恵明茶のことである。

## 終章 結論と今後の課題

本論では、湖州市・磐安县・杭州市・嘉興市・景寧シエ族自治県を中心に、浙江省における茶文化の伝承と変遷を論じてきた。ここからは最後の結論及び今後の課題を述べたい。

### 第1節 浙江省における茶文化伝承の性格

同じく浙江省に属するが、実は省内各地における茶文化伝承の状況がそれぞれ異なる。筆者は5つの調査地における茶文化の研究を通じて、浙江省各地における茶文化伝承の性格を明らかにした。表(6-1)のように、本論で取り上げる5か所の調査事例は、浙江地域における茶と歴史文化、茶と民間信仰、茶と国家権力、茶と家族社会や茶と民族という5つの方面の茶文化伝承の性格を明確に反映している。

湖州の茶文化伝承は、陸羽と唐王朝と緊密に繋がる。陸羽の推薦で、顧渚山の紫笋茶が唐王朝の「貢茶」に入選された。唐王朝政府はさらに湖州長興で貢茶院を建てた。唐代以降、湖州の茶文化はだんだんと衰退した。しかし改革開放以来、地域民衆の努力を通じて、陸羽文化の復興が実現した。そして、現代湖州で行われる陸羽文化の活用は、湖州の「郷村振興」運動(中国の地方で行われる地域創生運動)に大きな役割を果たした。特に「茶聖」としての陸羽の存在が、国の主導によって強化されてきたことが分かった。

磐安における茶文化伝承の歴史は長い。宋代に玉山で古茶場ができてから、茶神許遜信仰と結び現代まで続いた。長い間に、玉山古茶場は様々な変遷があったが、磐安の茶神信仰における茶神許遜祭祀が中心的な地位にあることは変わらなかった。これこそが磐安の茶文化が復興できる根本的な力である。しかし、地方政府と商社の観光開発や非物質文化遺産に登録された影響を受け、磐安の茶神信仰も変わりつつある。特に「趕茶場」などの茶神祭祀活動は、次々と商品化・観光資源化されてきたことが分かった。

清代の乾隆皇帝によって、龍井茶の名を天下に広めた。現代では、杭州地方政府などの権力者が中央政府の「権力」を利用して、龍井茶文化の影響力をさらに拡大させた。現在、龍井茶は既に中国・杭州の象徴的文化となった。地方政府が「権力」の行使を通じて、杭州を「茶都」として構成し発達させた。そして、各種の「権力」の優位性が龍井茶を製造・販売する民衆に利用されてきた。結果として、茶農・茶商の収入が確実に増えた。乾隆皇帝と龍井茶の伝説なども龍井村の龍井茶販売者に、販促対策として利用されている。

嘉興の茶文化は章氏一族と緊密な関係がある。嘉興市は伝統的な茶産地ではない地区、いわゆる「非茶産地」に属する。しかし、章氏一族という地域の名門は嘉興で章氏茶園をつくって、それを300年以上経営してきた。章氏茶園の茶文化研究を通じて、「非茶産地」における庶民の茶栽培・摘採・製作・販売の歴史を明確に呈した。章氏茶園のほか、嘉興徐王廟も嘉興茶文化の重要部分である。嘉興徐王廟の所在地が変わって、徐王廟会も1950年代から断絶した。一方、章氏茶園では2014年から毎年「章氏古茶園茶文化祭」を開催している。都市化の進展につれて、章氏茶園が「民俗主義」の素材として政府に利用され、地域文化のシンボルとなっている。

茶は景寧シエ族の歌、婚姻儀礼、祖先祭祀、民間行事などの日常生活に浸透した。そして、「パナマ万博」で金賞を受賞したことを契機に、景寧シエ族の恵明茶は国際的な名茶となった。現在、政府主導による商業化は、シエ族と恵明茶文化の変革を後押しする主な力となっている。一方、景寧県の茶文化伝承には、畚族の民族アイデンティティを強く感じる。シエ族における茶文化伝承の性格は、いわゆるブランド化や商品化を通じて、漢民族との共存共栄を実現するということに特徴がある。

表 6 - 1 各章の研究のポイント

目次	調査地にある研究対象の代表	研究のポイント
第 1 章	湖州杼山の陸羽墓 長興県水口郷の大唐貢茶院	歴史文化
第 2 章	磐安県玉山鎮の玉山古茶場	民間信仰
第 3 章	杭州の西湖龍井茶	国家権力
第 4 章	嘉興塘匯の章氏古茶園	家族社会
第 5 章	景寧畚族自治県の金賞恵明茶	民族

(筆者作成)

## 第 2 節 浙江省における茶のブランド化と茶文化の観光資源化

浙江省は現代中国における経済が最も進んだ地域の 1 つである。そこでは、茶のブランド化と茶文化の資源化も確実に進められている。

### 第 1 項 浙江省における茶のブランド化

表 (6 - 2) のように、浙江地域産の茶類は全て緑茶である。そして、浙江地域は中国における最大かつ最重要の緑茶産地である。浙江省各地域に、伝承されている地域名茶は多くある。例えば、杭州西湖龍井茶、湖州長興の紫笋茶、磐安の云峰茶、嘉興の家園茗茶、景寧の金賞恵明茶などである。地域の影響力を高めるために、浙江省各地の地方政府は地産茶をブランド化することに力を入れる。中国国家質量技術監督検査検疫総局は 2008 年に龍井茶の「地理標識」を公表すると、杭州西湖龍井茶の商業価値がさらに高まった。その影響を受け、浙江省各地方は龍井茶の「茶葉区域公共品牌 (ブランド)」管理方式を模倣するようになった。こうした結果として、浙江各地域名茶の地域性が失われてしまった。

他の浙江茶類と比べて、非常に大きな影響力を持つ龍井茶はより販売し易いため、他の茶産地の茶農がだいたいの地産の茶を龍井茶に加工して販売している。龍井茶以外の地域名茶のブランド化が進んだとしても、その生産・販売量が急速に減っている。これで、唐代から有名な顧渚

紫笋茶や宋代から有名な磐安云峰茶などの地域名茶は、各自の歴史性を失ってしまった。嘉興章氏茶園の家園茗茶も、存続できない状況に陥っている。一方、杭州西湖龍井茶の販売量が大幅に増えた。その販売量は杭州限界の茶産量の何十倍も超えた。展開しすぎた龍井茶のブランド化は、他の浙江名茶発展のバランスを崩した。また、龍井茶の「地理標識」が公表されてから、茶農は杭州地産の龍井茶を優先的に親友などに販売し、その他地域産の茶を加工して、龍井茶原産地の標識を貼って販売する投機的な行為もあった。茶文化伝統を守ることと、経済利益を最大限に受けとることとのバランスをどうとるべきかはこれからの大きな課題である。

表 6 - 2 2018 年浙江省各調査地の地域住民数、茶産量や茶の売上高

調査地	茶類	地域住民数（万人）	茶産量（トン）	茶の売上高（万元）
浙江省	緑茶（以下は全て緑茶）	6540	175170	1736329
呉興区	温山御筴、白葉、龍井茶	71.2595	319	8177
長興県	紫笋茶、龍井茶	67.38	5044	52968
磐安県	磐安云峰茶、龍井茶	17.7161	2219	25721
西湖区	西湖龍井茶	108.9229	582	23480
南湖区	家園茗茶	50.88	ほぼゼロ	ほぼゼロ
景寧県	金賞恵明茶、龍井茶	11.1011	2179	17920

（データは浙江省農業庁茶葉科が提供 筆者作成）

## 第 2 項 浙江省における茶文化の観光資源化

地方政府の主導で、史料の記載に基づいて新しく建てた長興大唐貢茶院は既に有名な観光地となっている。茶文化研究者の小泊重洋は、中国で「以茶聖帶動茶産地活態化的嘗試（茶聖陸羽による茶産地活性化の試み）」というテーマの講演をする際に、静岡県牧之原市が、栄西を利用して観光産業を推進した事例は、湖州長興にも影響があったと指摘している。しかし 1984 年に観光開発が始まってから、民宿を経営する村民が急速に増えた。2019 年現在、顧渚村内には 500 軒以上の民宿があって、年間 300 万人以上の観光客を収容することができる。そして、特に若者たちが茶に関する農作業に従事しないため、顧渚山にある多くの茶園が荒廃した。茶の生産・販売と比べて、様々な観光産業がもたらした利益はもっと多い。一方、再建した大唐貢茶院には昔の古物や遺跡が無く、歴史的な体験が薄い。顧渚山の陸羽祭祀も観光資源として利用されている。湖州政府の主導で、妙峰山の陸羽墓で行われる陸羽祭祀が大勢の観光客の目を引いた。一方、杼山の陸羽墓で行われる陸羽祭祀は、観光客があまり来ない。しかし、妙峰山の陸羽墓と比べて、杼山の陸羽墓は史料記載の陸羽埋葬地にもっと近い。茶文化の観光資源化の推進によって、陸羽埋葬地の真実性が無くなった。

毎年杭州で行われる「全民飲茶日」から、嘉興市南湖区「塘匯」という町で行われる「章氏



古茶園茶文化祭」まで、浙江の各茶産地では類似的なイベント活動が展開されている。磐安玉山古茶場「廟会（趕茶場）」が非物質文化遺産に登録されてから、古茶場に来る観光客数は大幅に増えた。一方、その途中で問題も多く出た。例えば、玉山古茶場にある多くの古茶樹は、浙江以外の地域から移した物であった。茶神許遜祭祀にある「迎大旗」イベントも磐安県政府に、中薬材（草薬）販売宣伝などに利用されている。観光開発の影響を受け、景寧シエ族自治県では「浮屠茶」「妯娌（兄弟の妻）茶」「阿婆茶」など自民族の儀礼茶が、外部の人間にも提供されるようになった。そして、観光客の目を引くために、茶芸と「敬茶歌」、茶を摘採するパフォーマンス（茶摘歌）も上演されている。しかし、このようなパフォーマンスに参加するシエ族の民族衣装をきている出演者の多くは漢民族であった。景寧県の「恵明茶制作技法」という無形文化遺産の伝承人にも、漢民族の人が半分の割合を占めている。

このように、浙江茶文化本来の姿と異なる「民俗主義」化の茶文化発展の過程に、様々な問題が出てきた。「民俗主義」は観光資源化の重要手段であって、貶す意味を持つ用語ではない。中国で行われる都市化と「郷村振興」運動の推進に伴って、新しい地域文化も創り出している。これは決して悪い事ではない。しかし、浙江茶文化の「民俗主義」化が進む過程に、様々な問題が出ている。浙江地域における茶のブランド化と茶文化の資源化が如何に進んでいくべきか。その過程に、地域民衆が何を得たか。そして、何を失ったか。これを考えなければ、上手く進むことができない。

### 第3節 浙江省の茶文化伝承にある政治「権力」の影響

浙江省の茶文化伝承に、政治「権力」の影響は古来からあった。顧渚紫笋茶は唐王朝の「貢茶」制度にある最重要な「貢茶」である。そのため、顧渚紫笋茶の栽培・摘採・生産が唐王朝政府に強く監視されていた。宋代から政府が磐安の玉山に古茶場を建てた。それから清代まで、玉山に古茶場は政府に茶貿易の専用場所として厳しく管理されていた。杭州西湖龍井茶は清代「貢茶」にある最も有名なものであった。そして、乾隆皇帝は龍井茶を通じて、杭州などの江南地域に対する柔軟なコントロールを実現させた。

現代浙江省の茶文化伝承にも、政治「権力」の影響がある。特に杭州西湖龍井茶の伝承において、国家「権力」の影響が極めて強い。毛沢東、朱徳、周恩来、劉少奇、鄧小平、喬石、習近平などの中華人民共和国の歴代国家指導者の龍井茶に対する重視は、龍井茶産業が急速に発展する大きなきっかけとなった。龍井茶は「国礼茶」として、中華人民共和国の外交に大きな役割を果たしている。「廬正浩」「龍冠」という龍井茶商品は国家「権力」を利用して、ブランド化を達成した。湖州の茶文化も国に重視され、大唐貢茶院で行われた「海峡兩岸禅茶大会」のように、中国の「茶聖」としての陸羽が強調されるようになってきたのである。

現代浙江省の茶文化伝承にある地方政府「権力」の影響はより大きい。そして、その地方政府の「権力」は国家「権力」の方針に沿って実施されている。例えば、歴代国家指導者は龍井茶を重視するため、杭州地方政府も「権力」を利用して龍井茶文化の影響力をさらに拡大させた。その結果として、龍井茶は既に中国・杭州の文化的象徴となった。そして、地方政府は「権力」を通じて、杭州を「茶都」として構築した。他には、地方政府による「権力」活用は、「郷村振興」の実現にも貢献した。西湖龍井茶産地が世界文化遺産に登録されてから、地方政府は

「飲茶」（茶飲料）、「吃茶」（茶食品）、「用茶」（茶日用品）、玩茶（茶観光）、事茶（茶文化産業）などの産業形態を作り出し、地域住民に多くの就業の機会を提供した。地方政府の主導で建てた大唐貢茶院が完成すると、湖州では様々な観光産業が盛んになって、それに従事する地域住民数も増えた。地方政府と商社の観光開発によって、玉山古茶場に来る観光客数が増加し、玉山地域住民の収入も確実に増加した。景寧シエ族自治州では、地方政府の後押しで開茶節、闘茶会、茶商会など茶文化イベントが開催され、「金賞恵明茶」の影響を中国全土にとどまらず、さらにアメリカ、フランス、ロシア、セルビア、日本、韓国など海外の国々へ広めた。

#### 第4節 浙江省の茶文化伝承にあった変化と変遷

現代社会において、浙江省の茶文化伝承には多くの変遷がおきている。例えば、昔の土竈と鉄鍋は概ね放置され、電気フライパンを使用するようになった。龍井茶保存用の「灰かん」は、陶器製の甕から鉄製の円筒となった。しかし、鉄製の円筒の内部構造は昔と大体変わらない。玉山古茶場は茶貿易などを行う場所から、観光施設となった。昔の茶神許遜祭祀活動に参加した人は概ね地域住民だったが、現在は観光客も重要な参加者となった。だが、磐安の茶文化伝承にある茶神許遜の地位は変わらない。昔の章氏古茶園は章氏一族によって経営されていたが、現在は地方政府指定の文物保護単位となった。地方政府から管理する人員を配置しなかったため、章氏古茶園はいつも閉める状態となっている。地方政府の主導で、毎年「章氏古茶園茶文化祭」を開催しているが、章氏古茶園実体は生氣と活力を失ってしまった。景寧県の茶文化伝承は景寧シエ族の日常生活だけと関わるが、現在は観光客の目を引くために多くの演芸パフォーマンスを創り出した。それにもかかわらず、景寧県茶文化にあるシエ族の自己価値への認識と帰属意識が現在でも強く感じられる。

また、政府は「非物質文化遺産」推進運動にも積極的に参入した。西湖龍井茶の摘採と制作する芸術、磐安玉山古茶場「廟会（趕茶場）」などが国非物質文化遺産に登録された。これらの非物質文化遺産を中心に、様々な事業が展開されている。しかし、政府は茶産業に使われる物質文化の保存にあまり関心がなかった。多くの茶産業に関する民具が、伝承の危機に瀕している。例えば、昔の龍井茶を炒める時に使う「梅花竈」は概ね消えた。玉山古茶場の茶神許遜祭祀活動に使われる古い「大旗」も1つしか残らなかった。これらの民具は重要な物質文化であって、大切に取り扱いなければならない。

無論、本論で述べる結論は浙江省における茶文化伝承だけに対するものではない。浙江地域は中国における最も代表的な茶産地である。浙江地域の茶文化研究を通じて、中国における茶文化伝承の状況を把握することができる。中国では、90年代から現在まで、茶文化ブームが盛んでいる。政府や商業関係者はもちろん、民衆も自分の生活レベルを高めるために、国の政策、地方政府的な権力や地域の茶文化の歴史資源などをうまく利用してきた。民衆の参与こそは、中国の茶文化発展にある最も大切な力である。

日本の茶文化思想について、會澤行洋は「西洋の人間本位・人間中心の立場に対して、自然本位の立場、人を含めた自然万物が1つの息を息づいている、1つの生を生きている、そういうふうな意味での生きた自然を本位とする立場、それを自然主義・ナチュラリズムということ

にしますと、東洋的な立場は自然主義・ナチュラルイズムだということが出来ます」[會澤 2005: 218]と指摘している。この自然主義・ナチュラルイズムの思想は中国の茶文化思想にも適する。茶を含めて、佐野賢治は「「草木国土、悉皆成仏」と述べている。この言葉は読めば読むほど味わいのある句である。草木とは主に、植林した杉や檜などの用材になる樹木を対象にしているが、この文字が示すように、野山に自生している草木の類にまで、人々の気持ちが及んでいる」[佐野 2016: 71]と述べている。確かに経済利益の他、民衆は茶文化発展に「草木」的なものを反省すべきだと思う。

## 第5節 今後の課題

本論で取り上げる5つの調査地の他、浙江省にある寧波市四明山茶産区、台州市天台山茶産区、杭州市余杭区径山茶産区にも調査しに行くつもりだった。しかし、時間や経費問題、特にコロナ事情の影響を受け、上手く進めることができなかった。この3つの茶産区は日中茶文化交流史における非常に大切な場所である。必ずこの3つの茶産区に行って現地調査を行いたい。次の研究を通じて、日中韓の茶文化交流史、さらに東アジア茶文化交流史にある浙江茶文化の役割をはっきりにしたい。

日本の茶文化伝承にも、浙江茶文化の影響が多くあることを確認できた。「煎じ茶」は唐代「貢茶」制度の産物である。唐と同時期の奈良時代の日本には既に「煎じ茶」があった。唐朝廷は浙江湖州で建てた貢茶院は、当時最大の「貢茶」製作所であった。だから、日本の茶文化伝承にある浙江茶文化の影響は唐代に遡ることができる。鎌倉時代の仁安三年(1168)に、栄西禪師は博多から中国明州(現在の浙江寧波)に渡って、明州阿育王寺、浙江天台山などで仏教知識を勉強していた。その後、栄西禪師は一度日本に戻ったが、文治三年(1168)に再び中国臨安(現在の浙江杭州)に渡って、浙江天台山万年禪寺、大慈寺、天童寺などで修行していた。仏教知識を習得した彼はまた日本に戻って、臨濟宗を開いた。彼は浙江で学んだ抹茶製茶法などの茶文化を日本に伝えて、次第に日本列島各地に広めた。栄西は茶樹を日本に持ち帰り茶栽培を始め、『喫茶養生記』を書いた。よって、浙江地域は日本茶文化の基礎を成した地とも言えるのである。浙江地域と日本の東北以南の地域と環境が良く似て、両地の主な茶産地も概ね稲作地帯の山間地にある。茶栽培においても、日本と浙江の交流があったのではないかと推測される。

浙江省の茶文化研究を行った上で、日中茶文化の比較研究も行いたい。例えば、浙江省杭州市と静岡県牧之原市の茶文化の比較研究。両地区はまさに日中両国における最重要な緑茶産地である。そして、両市には共に茶の博物館があって、毎年国際的な茶文化祭が開催されている。両地区の茶文化は、歴史的な繋がりがあるのだろうか。その茶文化伝承に、どのような異同があるか。これらの疑問を調査研究を通じて解明したい。他には、浙江省天台山と京都府宇治地区の抹茶文化の比較研究及び浙江舟山群島、宮城県気仙沼市大島、琉球諸島などの島茶文化の比較研究も行いたい。中国における緑茶産地の分布状態を比較研究学の視角から、東南アジア諸国との関連を探る研究も進めていきたいと考えている。

今後の課題を挙げたところで本論文の結びとしたい。

## 謝 辞

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程に入学してから、小熊誠先生の下でご指導を受けさせていただいた。この数年間は、小熊誠先生から多くの民俗知識や現地調査の方法を学んだ。論文指導においても、貴重な意見を多くいただいた。佐野賢治先生、松下智先生、中村羊一郎先生、周星先生、中国国際茶文化研究会の姚国坤先生、作家兼茶文化研究者である王旭烽先生とも面談するチャンスを得て、親切で的確なアドバイスをいただいた。合わせて感謝の気持ちを申し上げる。

現地調査の際は、「杼山茶文化資料展示室」の徐根法氏、長興寿聖寺・吉祥寺の住職界隆僧、再建された大唐貢茶院の初代総経理を務めていた張松林氏、現職の総経理林瑞煬氏、紫笋茶製作技術非物質文化遺産伝承人である鄭福年氏、玉山出身の周秉忠氏、梅家塢村の茶農来栄華氏、章氏古茶園最後の園主であった章永観氏、同茶園管理員を務めた夏海栄氏、景寧シエ族自治州茶文化研究会の葉玉琪氏と毛麗穎氏、シエ族民藍圓聰氏、雷靈慶氏、「恵明茶制作技法」無形文化遺産伝承人雷順平氏と毛楊鑫氏などから、多くの支援・協力をいただいた。残念だが、章永観氏は2019年9月に他界した。ここで深く御礼を申し上げる。

日本語は上手ではないが、おかげさまで、根敦阿斯尔氏、張曉琳氏、程亮氏、蒋明超氏、陳華澤氏、佐藤健太氏、内藤久義氏、菅原佑香氏など同研究科の非常勤、先輩、友人たちが多忙の中で時間をかけて、自分が書いた論文をチェックしていただいた。ここで名を記して感謝する。

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士 潘城

## 参考文献

### 日本語文献

- ・青木正児（編訳） 1962『中華茶書』春秋社
- ・井坂錦江 1943『支那民族生活史』日本評論社
- ・石毛直道 2011『石毛直道自選著作集（第2巻）食文化研究の視野』ドメス出版
- ・上山春平（編） 1969『照葉樹林文化 日本文化の深層』中央公論社
- ・上山春平・佐々木高明・中尾佐助 1976『続・照葉樹林文化』東アジアの源流
- ・内山清 1914『支那風俗之研究』上海日々新聞社
- ・王旭烽（著） 三瓶はるみ（訳） 2017『茶の物語』大樟樹出版社
- ・岡倉天心 1988『茶の本』創作豆本工房
- ・小野玄妙ら（編） 1934「仏祖歴代通載」『大正藏』第49冊第2036部
- ・小熊誠 2005「自省の学としての中国人類学—費孝通と柳田国男の学問的方法」『文明21』第15号 愛知大学国際コミュニケーション学会
- ・小熊誠（編） 2016『「境界」を越える沖縄：人・文化・民俗』森話社
- ・熊倉功夫 1980『近代茶道史の研究』日本放送出版協会
- ・熊倉功夫 2007『日本料理の歴史』吉川弘文館
- ・熊倉功夫・姚国坤（編） 2014『栄西「喫茶養生記」の研究』宮帯出版社
- ・倉澤行洋 2005「茶の湯の思想」小泊重洋編『茶学の会シンポジウム「茶業と茶の湯」発表論文集』茶学の会シンポジウム実行委員会
- ・小葉田淳 1942『史説「日本と南支那」』野田書房
- ・齋田茶文化振興財団（編） 1996『齋田茶文化振興財団紀要 第一集』齋田茶文化振興財団
- ・佐々木高明 1982『照葉樹林の来た道』日本放送出版協会
- ・佐々木高明 2007『照葉樹林文化とは何か—東アジアの森が生み出した文明』中公新書
- ・佐野賢治 2016『宝は田から：しあわせの農村民俗誌山形県米沢』春風社
- ・篠田統 1974『中国食物史』柴田書店
- ・高橋忠彦 1997「「茶具図賛」に就きて—研究と訳注（上）」『東京学芸大学紀要』第48号 東京学芸大学
- ・高橋忠彦 1998「「茶具図賛」に就きて—研究と訳注（下）」『東京学芸大学紀要』第49号 東京学芸大学
- ・高橋忠彦（編） 2000『東洋の茶（茶道学大系第7巻）』淡交社
- ・茶学の会シンポジウム実行委員会（編） 2005『茶業と茶の湯—21世紀の茶を考える』茶学の会シンポジウム実行委員会
- ・中田勇次郎 1943『考槃餘事』弘文堂書房
- ・中村俊介 2012「阿蘇の歴史・民俗・文化的景観と世界遺産」九州民俗学会編『阿蘇と草原』鉾脈社
- ・中村羊一郎 1992『茶の民俗学』名著出版

- ・中村羊一郎 1996「ミャンマーにおける茶の起源伝承と食べる茶ラベソーについて」『比較民俗研究』筑波大学比較民俗研究会 一二号
- ・中村羊一郎 1998『番茶と日本人』吉川弘文館
- ・中村羊一郎 2000「東南アジアの茶」『茶道学体系七—東洋の茶』淡交社
- ・中村羊一郎 2001「ミャンマーにおける茶の生産と民俗」『茶の文化』創刊号
- ・中村羊一郎 2006「東南アジアにおける庶民の茶文化—番茶・食茶文化論」『アジア遊学』第88号 勉誠出版
- ・中村羊一郎 2015『番茶と庶民喫茶史』吉川弘文館
- ・西村昌也（編） 2011『東アジアの飲茶文化と茶業』関西大学文化交渉学教育研究拠点
- ・布目潮瀧 1998『中国喫茶文化史』汲古書院
- ・布目潮瀧 2001『「茶経」詳解：原文・校異・訳文・注解』淡交社
- ・林左馬衛・安居香山 1974『茶経：付喫茶養生記』明德出版社
- ・福田アジオら（編） 2009『図説日本民俗学』吉川弘文館
- ・福田アジオ（編） 2015『知って役立つ民俗学—現代社会への40の扉』ミネルヴァ書房
- ・松下智 1971「北部インドの茶業技術について」『熱帯農業』第15号 日本熱帯農業学会
- ・松下智 1986『中国の茶—その種類と特性』河原書店
- ・松下智 1988『中国名茶的旅』淡交社
- ・松下智 1991『日本名茶紀行』雄山閣出版
- ・松下智 1993『ティーロード・日本茶の来た道』雄山閣出版
- ・松下智 1998『茶の民族誌：製茶文化の源流』雄山閣
- ・守屋毅 1981『茶のきた道』日本放送出版協会
- ・柳宗悦 1942『茶と美』牧野書店

## 中国語文献

- ・鮑永安（主編） 蘇克勤（訳校） 2010『中国第一回博覧会南洋勸業会百年回望—南洋勸業会文匯』上海交通大学出版社
- ・鮑志成（編） 2014『杭州茶文化發展史』杭州出版社
- ・畢雪飛 2017『日本近代以来城市化進程中的年中行事伝承与変遷—以東京地区為中心』中国社会科学出版社
- ・陳椽（編） 1982『茶葉通史』農業出版社
- ・陳舜臣 2012『茶事遍路』広西師範大学出版社
- ・陳舒・雷光振 2015『景寧金獎（賞）惠明茶』浙江省古籍出版社
- ・陳文華 2006『中国茶文化学』中国農業出版社
- ・陳曉南 2015「惠明寺と惠明茶若干問題之探討」『金賞惠明茶』中国文史出版社
- ・陳曉南・陳凌 2019『惠明茶文化』浙江大学出版社
- ・陳祖燦・朱自振（編） 1981『中国茶葉歴史資料選輯』農業出版社
- ・程啓坤・姚国坤 2008『西湖龍井茶』上海文化出版社
- ・大茶 2009「大唐杼山，仙郷何処」『陸羽茶文化研究』第19期 湖州陸羽茶文化研究会

- 丁克行·朱雯 2009「論杼山的歷史地位」『陸羽茶文化研究』第19期 湖州陸羽茶文化研究会
- 杜使恩·謝文柏 2005「再談重建大唐貢茶院的必要性」『陸羽茶文化研究』第15期 湖州陸羽茶文化研究会
- 杜文玉·周加勝 2006「五代十國時期商業貿易的特点及其局限性」『中國歷史地理論叢』2006年第3期 陝西師範大學
- 方雯嵐·潘城 2012「大型茶文化公益活動品牌「全民飲茶日」總述」『首屆東亞茶經濟、茶文化論壇「明州茶論」文集』中國文化出版社
- 費孝通 1998『鄉土中國 生育制度』北京大學出版社
- 閔劍平 2014「陸羽の身分認同—隱逸」『中國農史』2014年第3期 中華人民共和國教育部
- 閔劍平·中村修也（編） 2014『陸羽「茶經」研究』中國農業出版社
- 閔劍平·中村修也（編） 2020『榮西「喫茶養生記」研究』中國農業出版社
- （獨）Hermann Bausinger（著）王霄冰（訳） 2018「民俗主義」周星·王霄冰編『現代民俗學的視野與方向』商務印書館
- （獨）H. sfübel（ステューベル） 1984『浙江景寧勸木山畬民調查記』中南民族學院民族研究所
- 杭州日報記者 2011年6月30日「「杭州西湖文化景觀」が世界文化遺産に登録された際、「龍井」「茶文化」もICOMOS報告書に記載されている」『杭州日報』杭州日報社
- 杭州文協文化文史和學習委員會·杭州市茶文化研究会 2021『龍井尋踪—西湖龍井茶人口述史料』杭州出版社
- 寇丹·樓名初 1997「顧渚茶事別記」『農業考古·茶文化專号』第2期 江西省社會科學院
- 陸明 2002『嘉興記憶』上海辭書出版社
- 李弘德（編） 2013『湖州茶文化』中國文史出版社
- 麗水市民間文學集成事務所（編） 1989『中國民間文學集成·麗水市卷』
- 雷先根 2011「景寧畬族溯源」『畬鄉景寧實錄』中國文史出版社
- 厲仲雲 2004「磐安玉山古茶場」『東方博物』第3期 浙江省金華市文化局文物處
- 厲仲雲 2014「玉山古茶場茶文化略探」陳新森編『雲峰茶韻』中國農業出版社
- 劉楓（編） 2009『歷代茶詩選注』中央文獻出版社
- 劉宏偉·嵇堯根（編） 2020『杼山集』團結出版社
- 毛榮耀 2015「畬鄉茶歌」『景寧金賞惠明茶』浙江省古籍出版社
- Michel Foucault（著）劉北成·楊遠嬰（訳） 2012『規訓與懲罰』（第四版）三聯書店
- 潘城 2013「茶文化國際傳播新模式：品飲中國·五洲茶親」『農業考古』第129期 江西省社會科學院
- 潘城·姚國坤 2017『一千零一葉—故事里的茶文化』上海文化出版社
- Philip Alden Kuhn（著）陳謙·劉昶（訳） 2014『叫魂—1768年中國妖述大恐慌』三聯書店
- Prasenjit Duara（著）王福明（訳） 2010『文化、權力與國家—1900-1942年的華北農

村』江蘇人民出版社

- 戚英傑·趙大川(編) 2020『龍井茶圖考』西泠印社
- 錢時霖 1995「浙江古代的貢茶」『茶葉』1995年第4期 浙江省茶葉協會
- 『畚族簡史』編集委員會(編) 2008『畚族簡史』民族出版社
- Sidney W. Mintz(著) 王超·朱健剛(譯) 2010『甜与權力—糖在近代歷史上的地位』商務印書館
- 蘇克勤·余潔宇 2010年『南洋勸業會圖說』上海交通大學出版社
- 唐重興 2005「顧渚山的唐貢茶俗及其沿襲」『陸羽茶文化研究』第15期 湖州陸羽茶文化研究会
- 王笛 2003『街頭文化—成都公共空間、下層民衆与地方政治(1870—1930)』商務印書館
- 王笛 2010『茶館—成都的公共生活和微觀世界(1900—1950)』社會科學文獻出版社
- 王逍 2010『走向市場：一個浙南畚族村落的經濟變遷圖像』中國社會科學出版社
- 王旭烽 2008『玉山古茶場』浙江攝影出版社
- 王勇則 2010『圖說1925巴拿馬賽會—光耀世博史的中国篇章』上海遠東出版社
- 王卓再 1985『龍井茶炒制』中國農業科學院茶研究所茶葉試驗場
- William F. Ukers(著) 吳覺農(譯) 1949『茶葉全書(All about tea)』中國茶葉研究社
- 吳覺農(編) 2005『茶經述評』中國農業出版社
- 吳錫金 2015「「金賞惠明茶」定名全過程」『金賞惠明茶』中國文史出版社
- (宋)吳自牧 1984『夢梁錄』浙江人民出版社
- 項映薇·于源(著) 範笑我(注釋) 2016『古禾雜識·鐙窓瑣話』文物出版社
- 肖坤冰 2009「帝國、晉商与茶葉—十九世紀中葉前武夷茶葉在俄傳播過程」『福建師範大學學報』2009年第2期 福建師範大學
- 肖坤冰 2013『茶葉的流動：閩北山区的物質、空間与歷史敘事(1644—1949)』北京大學出版社
- 肖坤冰 2020『人類學觀茶』民族出版社
- 姚國坤·王存禮·程啓坤 1992『中國茶文化』上海文化出版社
- 姚國坤 2014「陸羽其人、其事与其績」姚國坤·熊倉功夫編『陸羽「茶經」研究』中國農業出版社
- 姚國坤 2019『中國茶文化學』中國農業出版社
- 于良子 1994「貢茶平議」『農業考古·茶文化專号』第2期 江西省社會科學院
- 余悅 2008『事茶淳俗』上海人民出版社
- 葉桐 2015『惠明寺茶葉史』浙江古籍出版社
- 俞壽康·王家斌·唐力新(編) 1985『浙江茶葉』浙江省茶葉學會
- 俞永明 2006「龍井43茶樹良種創新」『龍井問茶—西湖龍井茶事錄』杭州出版社
- 余悅 2014「唐代陸羽「茶經」的經典化歷程—以學術傳播和接受為視野」姚國坤·熊倉功夫編『陸羽「茶經」研究』中國農業出版社
- 張靜紅 2013「本真性的多元化視角：普洱茶在雲南和其他地方的消費研究」『內モンゴル大學藝術學院學報』2013年第1期 內モンゴル大學



- 張靜紅 2016「流動、聚合与区隔：台湾茶芸發展中的矛盾和動力」『台湾人類學刊』2016年第1期 台湾中央研究院民族學研究所
- 張靜紅 2016「重構的「正統性」：雲南普洱茶跨時空的「風土」」『廣西民族大學學報』第38卷第5期 廣西民族大學
- 張靈 1990「顧渚紫笋茶名称考略」『浙江學刊』1990年第1期 浙江省社會科學會
- 浙江省統計局（編） 2018『浙江統計年鑑2018』
- 政協杭州市西湖區委員會（編） 2006『龍井問茶—西湖龍井茶事錄』杭州出版社
- 中村羊一郎 2014「陸羽「茶經」所見地方上的茶与現代東亞的茶葉生產」姚國坤·熊倉功夫編『陸羽「茶經」研究』中國農業出版社
- 中國少數民族社會歷史調查資料叢刊修訂編集委員會（編） 2009『畚族社會歷史調查』民族出版社
- 朱梁峰 2008年3月18日「嘉興唯一的茶園何去何从」『南湖晚報』嘉興日報社
- 鍾思嬌 2015「景寧畚族茶俗」『景寧金賞惠明茶』浙江省古籍出版社
- 鐘偉今（編） 1991『浙江省民間文學集成·湖州市故事卷』浙江文藝出版社
- 周星（編） 2008『民俗學的歷史、理論与方法』商務印書館
- 朱彝尊（著） 方田（注釋） 2012『鴛鴦湖權歌』浙江古籍出版社

## 古籍

- （南朝宋）山謙之 『吳興記』
- （南朝宋）鄭緝之 『東陽記』
- （唐）陸羽 『茶經』（四庫全書本）
- （唐）毛文錫 『茶譜』
- （唐）李肇 『唐國史補』
- （唐）趙璘 『因話錄』
- （后晉）劉昫ら 『旧唐書·隱逸·陸羽傳』
- （宋）李昉ら 『太平廣記』
- （宋）宋祁·歐陽修ら 『新唐書』
- （宋）耐得翁 『都城紀勝』
- （元）周密 『武林旧事』
- （元）辛文房 『唐才子傳』
- （明）宋濂·王禕 『元史』
- （明）許次紓 『茶疏』
- （明）田芸衡 『煮茶小品』
- （明）高濂 『遵生八箋』
- （明）馮夢禎 『快雪堂漫錄』
- （清）程滄 『龍井訪茶記』
- （清）汪孟錫 『龍井見聞錄』（錢塘丁氏嘉惠堂刊本）
- （清）王惟梅 『嘉興府典故纂要』

## 地方誌

- (晋) 常璩 2010『華陽国誌』齊魯書社
- (南宋) 谈钥 1914『(嘉泰) 吳興誌』南浔劉氏嘉业堂
- (明) 王珣 『弘治湖州府誌』
- (明) 顾応祥(編) 1559『嘉靖長興県誌』
- (明) 胡宗宪(編) 1561『嘉靖浙江通誌』
- (明) 聂心汤・虞淳熙(編) 1893『萬歴錢塘県誌』錢塘丁氏
- (明) 劉伯縉・陳善(編) 2005『萬歴杭州府誌』中華書局
- (清) 劉廷玑(編) 1690『処州府志』浙江麗水市図書館古文書蔵本
- (清) 党金衡(編) 1832『道光東陽県誌』台北市東陽同郷会
- (清) 許瑶光・吳仰賢ら(編) 嘉興市図書館(整理) 2016『光緒嘉興府誌』国家図書館出版社
- 吳覚農(編) 1990『中国地方誌茶葉歴史資料選輯』中国農業出版社
- 謝文柏(編) 1992『長興県誌』上海人民出版社
- 磐安県誌編纂委員会(編) 1993『磐安県誌』浙江人民出版社
- 景寧畚族自治県志編纂委員会(編) 1995『景寧畚族自治県志』浙江人民出版社
- 阮浩耕(編) 2005『浙江省茶葉誌』浙江人民出版社
- 謝文柏(編) 2007『顧渚山誌』浙江古籍出版社
- 阮浩耕(編) 2020『浙江通誌・茶葉專誌』浙江人民出版社

## 古文書・宗譜

- 1918『浙江省実業庁指令(第225号令)』
- 1825年前後『唐元皇南泉山遷居建造惠明寺報税開墾』
- 1918『景寧県政府金賞受領書』
- 1910『南洋勸業会審査入賞名簿』商務印書館
- (清)『東陽玉山周氏宗譜』
- 1919年修訂『汝南郡藍氏宗譜』

## 政府内部資料

- 1982『「全国名茶評選会議紀要」を配布する通知』中国商業部
- 1999『原産地産品保護規定』中国国家質量技術監督檢驗檢疫総局
- 2008『龍井茶原産地域産品公告』浙江省農業農村庁
- 2019『嘉興市章氏古茶園2019年土壤検査報告書』嘉興市環境保護局
- 『嘉興市の土壤検査データ』嘉興市環境保護局
- 『景寧県茶葉産業十年规划(2001-2010)』景寧畚族自治県農業農村局
- 2006『景寧県惠明茶産業発展報告』景寧畚族自治県農業農村局
- 『惠明商標使用管理辦法』景寧畚族自治県農業農村局

- ・『景寧県茶葉産業発展规划（2008-2010）』景寧畚族自治県農業農村局
- ・『郷（鎮）統計年報過録表（1998-2008）』景寧鶴溪鎮政府

## 各章の初出及び発表状況

第1章 陸羽と浙江との関連—杼山、顧渚山の事例から—

『地元の伝説と江南茶の生態文明』雲南民族出版社 2023年3月（予定）

第2章 磐安の茶神信仰—玉山古茶場廟の事例から

「茶神信仰の歷程—浙江磐安玉山古茶場の許遜信仰の事例から」東洋学及び地域国別研究国際学術シンポジウム口頭発表 2022年7月2日

「磐安県玉山古茶場とその茶神信仰について」『比較民俗研究』第37号 2023年3月（予定）

第3章 茶文化伝承に及ぼす政治的影響—杭州西湖龍井茶の伝承事例から—

『西湖龍井全書』第23章 中国農業出版社 2023年10月（予定）

第4章 嘉興章氏古茶園をめぐる茶文化伝承の性格

「中国嘉興市章氏古茶園の歴史と現状」『比較民俗研究』第34号 2020年3月

「嘉興章氏古茶園をめぐる茶文化伝承の性格」『民俗文化と郷村振興 2019年嘉興端午全国学術大会論文集』北京連合出版公司 2020年6月

第5章 シェ族における茶文化伝承の性格と変容—景寧シェ族自治県の「金賞恵明茶」を中心に—

「地域民俗視角下的景寧畚族茶俗」『知性と創造』第12号 2021年6月

「景寧畚族自治県における茶俗事象と変容—「金賞恵明茶」のブランド化と関連事例として」『歴史民俗資料学研究』第26号 2021年3月